針葉樹

第三號



冬の男性味

俊峰處女の氷雪を
踏破する……防寒御用
品の各種、氣の利いた
新型豐富に荷揃ひ……

銀座▽上野

松坂屋

針　葉　樹



（第三號）

1927

「針葉樹」第三號目次

表紙針葉樹……（如水會員）……江口定條

寫眞

一ノ越より大日及び室堂附近……五十嵐數馬
下流より見たる黒部川十字峽……（顧問）……田中薫
三月の鉢ヘ木谷溜澤附近……五十嵐數馬
一月の横手山澁峠道……矢作太郎

本欄

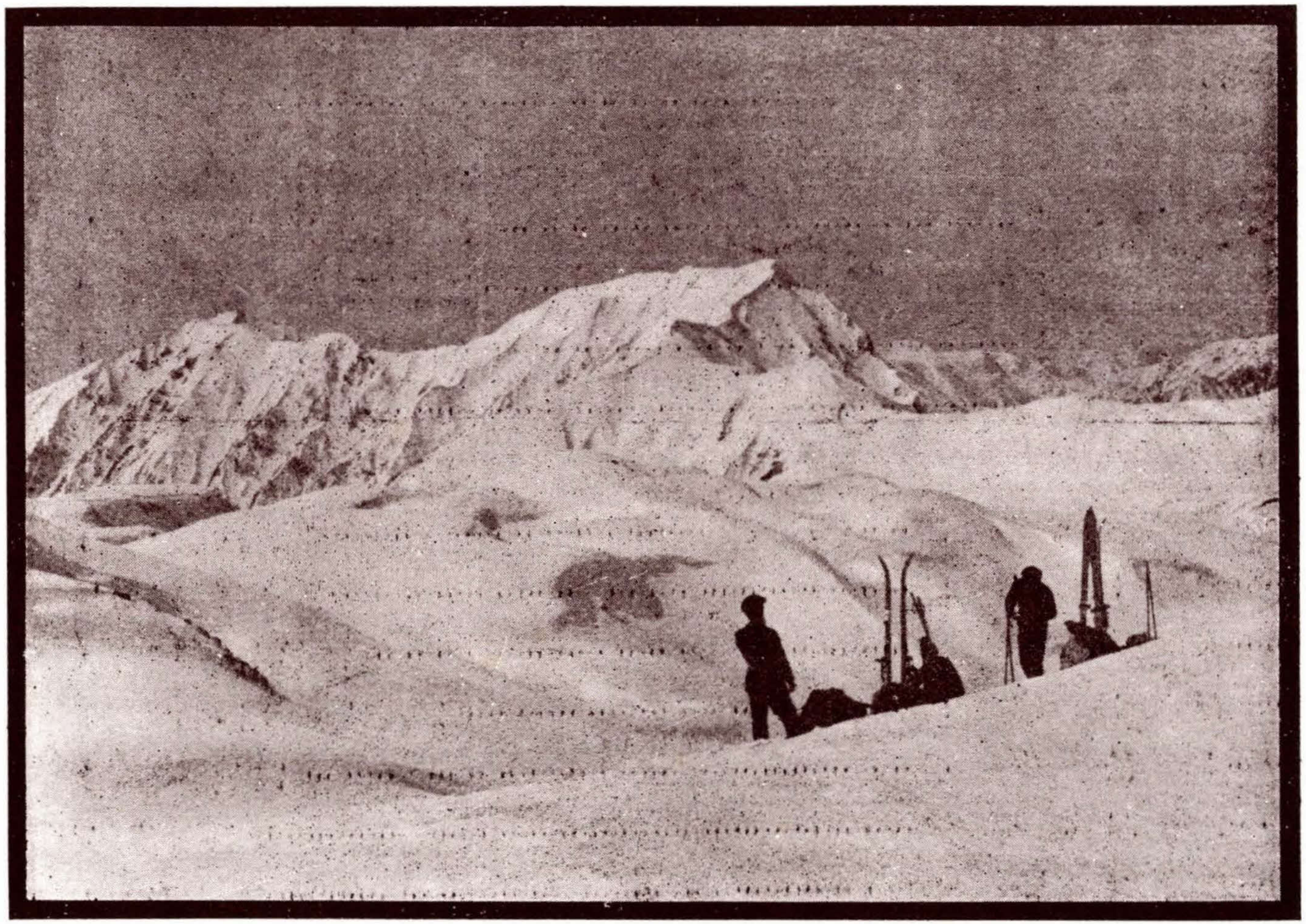
黒部下廊下を觀る……（顧問）……田中薫……一
一月の熊野湯附近……吉澤一郎……一六
澁峠白根越え（承前）……矢作太郎……二六
三月の針ノ木谷と立山越え……吉澤一郎……三五
鹽見より赤石へ……芋川稔一……五九
北海道の旅……近藤恒雄……七七
霧ケ峯立科山……手塚晴雄……九一
横岳（承前）……金田一郎……九九
別れに送る言葉……高木英二……一〇四
上高地の一夜、强力塚田の夢……（如水會員）……隨宜園主人……一二五

雜錄

針ノ木を越えて藥師岳へ……中島嘉一郎……一二四
此んな山登りも好きである……（顧問）……田中薫……一三〇
二月の乘鞍岳失敗記……吉澤一郎……一三三
河口湖の黒岳……吉澤一郎……一三六
愛鷹山……吉澤一郎……一三七
晩夏の八ケ岳……矢作太郎……一三八
大和連峯へ……中森長太郎……一四〇
清津峽……松木謙三……一四五
詩—感想……高木英二……一四八

山小屋欄……一四九

年報……（自大正十五年十一月　至昭和二年十月）……一七一



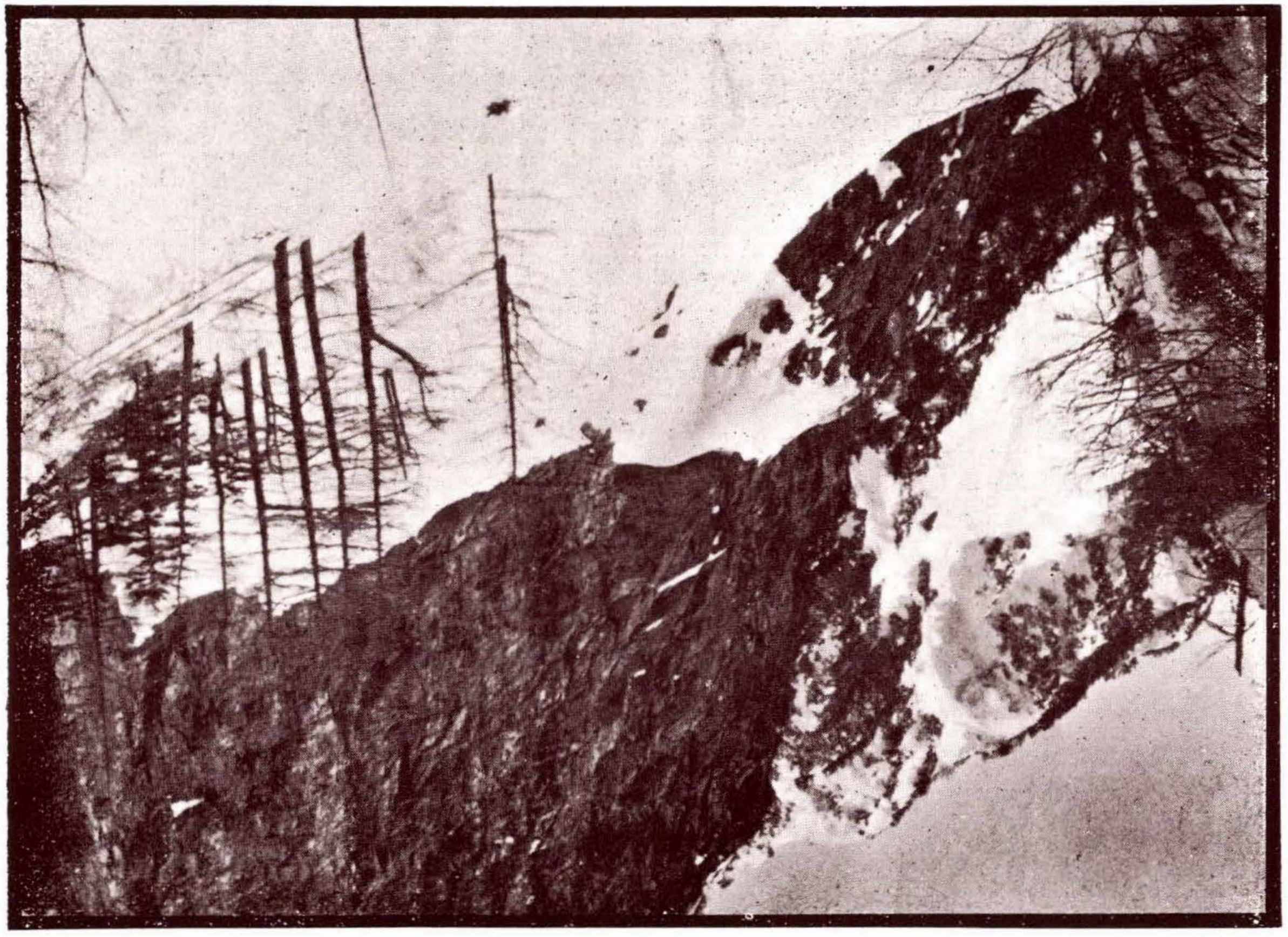
三月の一ノ越より見たる室堂附近及び大日岳

五十嵐數馬



下流より見たる黒部川十字峡

田　中　　薫



三月の針ノ木谷源澤附近

五十嵐數馬



一月の横手山滋峠道(横ツリ)

矢作太郎

黒部下廊下を觀る

田中薫

まへをき

私は科學畫報七月號に黒部の事を少しばかり書いた。未だ觀てない處を書いたので氣がさしてゐた。が、まァ近い中に觀て置けばいゝ、觀る機會もあるだらう位で一時のところを紛らせて置いた。

で、今夏は山行は一つだけと定めてゐたからその一を黒部にする事にした。下廊下は一寸難儀らしいが上廊下なら一人で入れぬ事もあるまいと考へた。其處へ「山岳」の「黒部號」が出た。冠さんの紀文に依つて私の日程も出來た。處が相憎妻が重患を得て私も山どころでない事になつた。そしてもつと先の重大な豫定にまで狂ひを生じさうになつて悲觀してしまつた。其の後、幸、病勢は挫けたが腰を折られたので黒部は諦めてしまつた。

七月末の或る晩、神田に散歩に出てブラリと文房堂に入ると其處に石井鶴三さんがスケッチブックを山程仕入れてゐるのに出會つた。東日の依頼で狩勝峠に出掛けるが歸つたら冠さんと黒部に入ると云ふ話である。此を聞くと一旦收まつてゐた希望が又油然として頭を擡げて來てもうどうする事も出來なくなつてしまつた。こんな事で八月十七日の夜行に石井さんと二人で乘り込む運命となつた。偶然に矢張り東日の畫の用で立山に登る小杉未

醒さんや輕井澤の別莊に行かれる細川護立侯と同車である。そしてツェの話など聞きながら走つてゐる、愈々妙に因縁と云ふものに持つて行きたい様な具合で旅が始まつた。

一　平小屋まで

翌日の正午近く千垣で先着の冠さんに出迎へられた。此から三人になつて常願寺川を立ち温泉へと登る。道は荒れ、殘暑は酷しく昨夜の眠不足も手傳つて道連れになつた郵便屋さんに漸く追從して行く。道の曲り角等に薄は穗に出で、萩は亂れ咲いて暑い中にも何處か秋の氣配がする。此から先の山の中の淋しさが何となく身に泌みて哀れである。

翌日は正午過ぎザラ峠を越え、一寸五色に寄り道する。勝れた秋空に霧が來て夢の様な景色になる。それが愈々深くなつて軈て雨となる。小屋で久々に平藏に會ふ。一度切りだから向ふでは忘れてゐるが劍へ一緒に行つた事がある。板倉君の形見の品だと云ふ銀側の時計を持つてゐて見せてくれた。こんな淋しい日にこんなものを見せられて一寸亡友の顔が眼に浮ぶ。小屋番の老夫婦は今春平小屋で商大の皆と世話になつた志鷹彌十太郎の兩親だと云ふので此も不思議な緣である。それから猛烈な夕立の中を刈安屋根から平小屋に降る。途中で矢張り今春の剛染佐伯伊太郎青年に出遭ふ。日電事務所での宮本さんとの事は書けば長くなるから止めにする。只宮本さんが良い氣持に醉つて頻りに石井さんの長閑な顔立を褒め、其の餘裕のある生活振りにあやかる樣小屋の若い者の誰彼に一々參詣を强要してゐた事と、私達が出發の御馳走で飽食した事位にして置く。數日前友人黑田君夫妻が大

町の林藏を連れて下廊下に向つたと云ふことである。後の話では西岸を『大へづり』まで降り内藏助澤を立山に登つたといふ事で婦人としては成功であつたと冠さん始め感心した事であつた。

二　御山澤日電小屋まで

孟蘭盆で二日遅れた人夫を御山澤で待ち合せる約束となつてゐた。今日はその御山澤まで極く近いから晝すぎに登つて東岸の小徑をブラ〳〵行く。モトザクボ澤を經て小スバリ澤に近づくと赤澤の西屋根の上にある猫の耳に似た奇巖が見えるので本流の河原まで降つて見る。小スバリ澤を渡つて直ぐ吊橋で西岸に移る。そして御山澤の落口となる。此の澤には川柳が繁り合つて奔流を暗く蔽ひ、その綠門から覗くと立山の殘雪が見える。大スバリ澤を對岸に見て數町降ると日電の小屋がある。丁度東岸に花崗岩の一枚岩があつて美しい景色である。平林敎授が鑑定に來られて首をひねられたと云ふそれを利用して貯水池の大堰堤が作られる事になつてゐる。平林敎授が鑑定に來られて首をひねられたと云ふそれらしい斷層線が右から左へ袈裟懸けに此の岩壁の腰部を切つてゐるのが見える。黒部溪の水に溺れる事は困るが此處から平まで行くなら我慢出來ると思ふ。もう河原はなくなつて川下は殊に谷壁が迫つてゐる。そして有名な黒部別山の大タテガビンが夕靄の中に中空から切り落してゐるのが見える事である。

三　新越澤の泊り場まで

翌朝は野口松五郎と云ふ好爺を戴く人夫衆と共に稍早發ちに發つ。工事用の船と籠渡しとがあつて之れで東岸

の東信道に移る。

御前澤を對岸に見る邊から急に赤澤の西尾根を捲く、樣に登り、赤澤の水を可成り上流で渡る。此の邊から五萬分の一圖がそろ〳〵頼りにならなくなる。赤澤は圖中の位置よりもずつと落口が下手でなくては實に好望の地である。脚下には赤澤岳から北西に派出する痩尾根が其の裾を切り揃へて百米程の垂直の壁を作る。そして西岸の丸山の大壁に對して溪水を狹めてゐる。下廊下の入口を扼すといふ形である。

眼を擧げると赤澤岳西尾根の猫の耳が其の北面を見せてゐる。惡魔の亂杭齒の樣な形、妙に魔的の物凄い氣魄を漂はせて壓倒しかゝると丸山の三つに分れた岩塊は稍低くなつて大タテガビンが目八分に正面を切る。寫眞に撮つたのを見ても判るが大タテガビンの岩面は本當に不思議な程近く眼前に立ちはだかつてゐる。其の肌に幾條となく切れ込んだ斷層線と裂線とが岩塊を破壞しやうとしてゐる樣には見えず、却つて寄り集つて一つの大きな櫓を築き上げてゐる樣に私には見えた。此の邊の東信道は廢道であるから隨分ひどくなつてゐる、野口も一二度迷つた位であるが最近國民新聞の一隊が入つてゐるので何處か人跡が感ぜられる。夕刻新越澤の二股の少し下の泊り場に着く、景色は谷の口を一杯に塞ぐ別山である。其の尨大な山體が何時ともなく黝んで行つてやがて其の上に橙色の夕映えの雲が浮ぶ。それが又ドン〳〵北に走つて新しいのが南からいくらでも起る。それを眺めてゐると少しも飽くことがない。上流に土砂の押出しがあるので水が濁つてゐるから北岸の泉の水を飲む。谷の奥で風の當てぬ暖かな泊り場である。國民の一行が未踏の地を開いたといふのは此の澤の落口にある新越の瀧の上まで

の間ださうである。

四　棒小屋澤の泊り場まで

泊り場の朝は別山の壁にさす朝日の明い反射に闇を拂ふ。七時三十分出發。北岸の小流から草の斜面、それから岩屑の急な堆積も暫くは可成り悪い。それを登り切つて岩小屋澤岳から西北に出る支脈の中腹に出る。そして二〇六七米標高點の西方の肩へ捲き氣味に上る。尾根が二筋に岐れるから其處を追分と云ふ。東信道第一景の地である。別山はもう眞西に來て大タテガビンの嶮は見えないが、此に代つて黒部別山澤が夥しい殘雪を懸け、目の下に大きな口を開く、下から上まで何の蔽ふものもない。開け放された澤であるが劍澤と共に人跡未踏の境である。連日餘りはつきりせぬ空模樣であつたのが此の時急にカツと日が照り、それをしほに雲は一枚一枚皮を脱ぐ樣に取れて行つた。忽ち雄山、眞砂あたりの峯が菫花色に高く現れる。退かんとする亂雲が次第に層雲に統一されて山頂を島の樣に浮べてその下を帶に捲く、そして其の胸高の帶の下から猿股の雪と通稱される大雪溪を覗かせてゐる。どうも「猿股とはきたない」と萬事綺麗好きの石井さんが嘆げかれる。北の空も明くなつた。北方は谷の出口である。東側は奥鐘山、百貫山と次第々々に人里近い山の姿の深い切れ込みを隔て、仙人山である。重りである。

此處から北々西に向ふ長尾根は棒小屋澤の南側をなして十字峽まで落ちて行く。道は暫く其の上部を降るが東信道唯一の樂な尾根道で、サルオガセのからんだネズや、ツガの喬木の根を行くのである。樹間に絶えず雄山が

隠顯する。やがて十町も降りて此の道が尾根に別れて、棒小屋澤に降らうとする最後の地點は好望の絶頂である雄山は大タテガビンの東北面の柱狀に亂立する赤黒い岩の上に一寸顔を出す。月が黒い屋根の棟に覗いた形である。谷の景色はどうも物惜みして物の全容を見せぬ處に味があるなと思ふ。山頂からの眺めは餘り何もかも見え過ぎる。すつかり見えるのもい、、すつかり見えないのも亦い、。

此處から棒小屋澤への降りで熊の通つたばかりの跡を見る。降り着いた處は持小屋澤と西澤小澤との落合の直ぐ下で、此處にも良い泊り場がある。十二時なので中食に三十分ばかり費す、それから先を急ぐ、登り口がガレで暫く惡く、それから尾根横を通じて森林帶の涼しい道になる。ネズが相變らず多くその間をアサギマダラが悠々と翔んでゐる。幅廣い尾根を乘り切つて一寸惡い草道が續く、其の間に小澤があつて小さな瀧をなし瀧の下が平な棚になつてゐて又下が瀧になつてゐる。その棚の上を道が通る、そこの花崗岩は角閃石が綺麗な斑紋になつてゐて人造石の樣だ。其の先二つばかり小谷を横ぎつて或山の出鼻を曲ると突然ギヤ〳〵と言ふ強猛な野性を帶びた聲を耳にした。續いて數聲、どうも仔を連れた熊らしいと云つてゐる中に、猿群である事が分つた。此の邊では皆「エン」と云ふ。双眼鏡の圓い中に映る姿は動物園の猿よりは色が赭く毛が深く、新鮮な艶や艶やしたものだつた。併し動作はお馴染のものと少しも變らず此方へお尻を向けてそれを掻いて見せたりして愛嬌がある。大猿が一匹高い木の上で見張りをしてゐて時々警戒の叫びを發するので他に十數匹の同類が近所の籔や灌木に降りてゴソ〳〵と秋の木の實でも捜してゐるものらしい。大分此れで手間取る。最後の尾根筋にかゝる邊りで對岸の劍澤が正面を切る。雪渓に埋められて緩かに北々東に流れて來た劍澤は奥仙人山に當つて眞東に折れ、一六〇

○米邊りから飛沫を擧げて一氣に黑部川に懸る。此の急雪溪の上から半頃までは先年冠さんの一行が降つてゐるその下が高い瀧になつてゐるので下の樣子は丸きり判つてゐないない。今冠さんも我々と共に此處から眺めると、降れなかつた瀧は成程非常に高いものである。そしてその下に大分離れて又瀧が見える。此の二瀑は同一垂線上にあつて全く一續きのものが岩壁に遮られて二つに見えてゐる樣に思はれる。幸にして然らば日本一の高瀑は此處に隱れてゐたのである。これを突き止める事が冠さんや今日下から來て棒小屋で待つてゐる筈の別宮、岩永兩氏等の願望なのである。私は問題の瀧を望遠レンズに收めてからおもむろに眼を擧げて壯大に黝んだ大岩壁と糸の樣に懸つて而も非常な大さを想像せしめる不思議な瀧とを見た。そして其の二つのもの、質量の比較にすつかり頭を混亂させてしまつた。やかて我に歸つて又先を急ぐ。最後に尾根から本流に降るところは一番の惡場で、土砂の緩んだ桶狀の窄谷なので、足場が惡く良い心地はしなかつた。やがて下流から來る作郎越えの道と合し、六時棒小屋泊り場に着く。河岸に高さ十米程の花崗岩の大きなテレスがあり、其の上にゆつくりと二張りの天幕が張られる。

五　十字峽を經て神潭の泊り場まで

明くれば八月二十四日、今朝は別宮、岩永兩氏を加へて五人運れである。七時三十分出發、東岸に斷續する岩のテレスや、巨石の間を數町進んで二度程稍高い崖を上下すると始めて惡場にかゝる。岩はさほど高くはないが下が奔流であるのと、岩面が水蝕を受けて琢磨されてゐるのとでロープを用ひる。國民の打つたピトンが利いて

るるので張り繩も時間はかゝらない。こんな風な悪場が三つあり中間のが最も悪くて長い。な瀞をなすところに出る、未だ朝のことで此の深い谷には朝日が直射してゐない、棒小屋澤ので此の裂線に入り込んだ光が對岸の大きな岩を照し四圍の暗い中に白く浮き立たせてゐる。の向つて左側にある岩壁でその手前から白く湍つてゐるのが劒の水である。此から一寸岸を登ると、峽見ケ丘と云はれる河中に乘り出した高樓の上に出る。冠さんが自負されるのも尤で十字峽と云ふ名は最もよく此の峽見ケ丘上の眺めを表現してゐる。眺めと云つてもそれはビルデイングに挾まれた露路の中の樣な眺めである。只その狹い處は最も新鮮な水によつて掻き廻され空氣までが湧き返り繁り合つた木々の小枝まで絕えず震えてゐる樣な處である。

上流に向つて左手が棒小屋澤の瀧、右手が劒澤の瀧、二つながら瀧壺を持ち、水は瀧壺を溢れて淺い桶口から本流へ注ぐ。此の全く同じ形式の二つの瀧が向合つて本流に直角に交つてゐるのが奇觀である。併し斷層で說明すれば不思議はない。五萬分ノ一圖は此の特異な地形を全然誤記してゐる。此の丘からロープによつて下段に降ると本流の水面上五米位の處まで近づける。

兩側の瀧は目八分にせり上げて瀧しぶきが衣を潤ほす。未だ本當に溪水の耽美家になり切れぬ私も、どうも此の景色だけは飽きることを知らない、少し氣を呑まれた形で何もせずに忙然と暫く其處に佇ち盡す。

丘を去つて棒小屋澤に出ると中段の瀧の下が淺くなつてゐて渡れる。此處からカメラを西に向けると、此の澤を本流と劒澤と三つの水を一枚に收める事が出來る。澤を渡つて斜左に急坂を登る。瀧しぶきを一杯に浴びてゐ

るのでロープを用ひても可成り登りづらい。登り切つて谷に臨んだ三本の枯木の間から劍の全に現す、此から非常に急な崖を登つて下る此所が長次郎越えである。降つたところは冠さ處で十字峽より直徑で晴れた空からは數十間を隔つるに過ぎぬ。丁度晝なので降つて來る强をすます。それからは何もなす事はない。あちこちの岩の上に立つて位置を變へては溪流の有樣を眺める。此處の少し上流に河中の巨岩が瀬を二つに分けてゐる處がある。其處は明日劍澤へ行く連中が架橋する處だといふので一寸見に行つたりする。一時半頃から急に夕立になつてそのまゝ日暮まで續く。溪水は忽ち濁つて水量は物凄く增して來た。

雨後は木々の綠が美しく空氣も澄み夜の星も綺麗だつた。

六　東谷まで

旅も半を過ぎて愈々上下に袂を分つ日である。冠、別宮、岩永の三氏は長次郎と松五郎、それに良い人夫全部を連れて未踏の地劍澤に足を入れられる。下流を見なければならない初旅の石井さんと私とは、四人の人夫を連れて下へと降る。朝夕立の中ではあつたが、昨日の惡場に馴れた故か思ひの外早く過ぎ、昨日掛けたロープを外して道を急ぐ。棒小屋の小屋場から少し登つて作、、郎越の道に入つてからは手入れが屆いてゐて惡場は一つもない

雨は時々晴れては降る。晴れた時には、仙人山のガンドウ尾根を霧が逼ひ上つてゐるのが見える。上流には別山の側面に突き出した鎗の鋒先の樣な岩が立派な景色を作つてゐる。その他は只雨に濡れた普通の山道である。

三時半頃東谷の落口に降る。昨日來たといふ日電の人夫が五六人天幕を張つてゐる。今度はこゝに出來てゐる丁度體を横へる程のポットホールに湯を導いて自然の浴槽が出來てゐる。岩のテレースの下段の本流が踊り流れてゐる。そして浴槽の縁へは黒部東谷温泉と云ふ宿屋が建てられるに定つてゐる。未だ四圍は清潔で心持が良い。下手に降つてゐる。此を前景にして下流の眺めが良い。石井さんが水彩を始めると相憎又小雨が降り出した。天氣さへ良ければ一日滞在して行きたい場所である。

七樽平まで

今朝は初めて朗らかな空である。七時三十分出發。新しい吊橋で西岸に移り初めて道らしい道になる。仙人澤を渡つてアゾ原の日電小屋の邊まで來ると西岸の高い山腹で空に響く様な音を立てゝ人夫が道を開いてゐるのが見える。來年中には下から此處まで一尺幅の道か全通すると云ふ。併しそれは水路測量用のものだと云ふから十字峽邊りにコンクリートが塗られるのは實際何時の事か判らない。

アゾ原の事務所で御茶を貰ひ來年になると山も樂になるでせうといふ様な話を繰り返し聞かされる。此の邊の山は未だ中々高く谷も深いが岩石が露出して物凄いと云ふ風は何處にもなくて、一面に黒々と樹林が蔽つてゐるその上に晝近かの强い日が當つて葉末の光るのが美しい。此からの道は棧道と梯子とで漸くデッチあげたと云ふ様に右の脚下にあつて白い泡を湧かせてゐるが、それが常に小さな吊橋になつてゐる。溪水は

緑樹の交錯した間に見えるので興趣は依然としてつきない。オリオ谷、シアヒ谷、はやがて過ぎて奥鐘山の大絶壁が現れる。美事な岩壁で處々オーバーハングとなつて眼の上に押し上つて居る。シバミ坂の邊りは油斷をすると身を誤りさうな處、やがて夕刻に欅平に着く。此處に日電の稍大きな小舍があり、下流に於ける根據地といふ形である。もう大分下つてゐるので中々暑く、黒部西爪の御馳走が何よりうれしかつた。

八　祖母谷温泉、猿飛を經て新鐘釣まで

翌朝は四人の人夫を歸宅させ、初めて、二人切りになつて開放された様な心地である。從つて一歩一歩が氣樂でつい祖母谷へと曲つてしまつた。祖母谷温泉には營林署で小舍を新設し番人の老人が居て御茶の接待までする湯の手前で吊橋を對岸に渡ると清水平を經て白馬に通ずる立派な林道がある、秋白馬から降つて此の邊の溪の紅葉を見たいなと思ふ。歸り道に夕立に出會つて衣を濡したが、空から線を引いた様な長い雨はこんな深い谷の底に來て初めて見られるもの、甚だ美景であつた。猿飛は、猿橋等の想像で行くと大間違ひする程立派なものである。併し此の夏は婦人アルカウ會の人達も見に來た位で下流から此處までの道は何でもない、只今日は雨の中なので蒸し暑くて苦しむ。

欅平の下手から安山岩の峽となるが氣に止めて見ると浸蝕の跡が纖細で幾分軟みがあるかと思ふ。上流の花崗岩の峽の様に豪放たる味がない。その中に忽如として美しい石灰岩が路傍に姿を現す。隨分硬質のもので色が美しい。それから間もなく鐘釣温泉である。山の湯らしいゴチ〳〵した感の處へ工事の人夫がたくさん入り込んで

るるので少し薄穢い。素通りして新鐘釣まで來る、釣鐘山を伏せた様な東鐘釣の大岩塊の下に小さく温泉宿が建つてるるのを河の手前から眺めて此處なら泊つても良いと思つた。

離れ座敷は渓水を一眼に見渡す。窓を開いて欄に據れば、正面は吊橋で仕事を仕舞つた人夫達が馴れ切つた足取りで手放しで走つて來る。中に足許の少し心許ないのがあると思へばそれは大抵朝鮮人だつた。見渡す限りの山々は、美しい濶葉樹の密林に蔽はれ斧の入つた模様がない。秋の黒部は此の邊で既に人の足を止めしめるであらうと思はれる。

湯に行く。川に面した側は一面に開け放たれそれが五本の柱で縦四つに仕切られてるる。その中を左から右に黒部川が流れる。丸で秋の渓流等を描いた屏風を見てるる様である。どうも渓水は油繪向ぢやないなと思ふ。

今頻りに對岸の西釣鐘山に隧道を穿つてるる。ハッパの音が夜もすがら聞え、カンテラの赤い灯が遠く怪しくゆれてるた。此の山は堅い石灰岩なので中々の難工事であるらしい。

翌日は十數町徒歩。猫又谷の落合に日電軌道の終點猫又驛があり、其處から車上の人となつて一走りに山を出て行く。途中の隧道の故障で思掛ない徒歩連絡があり前日まで四人の人夫が分けてるた荷を我々二人で十數町ひきずる様にして運んだ。其の他は極く平凡で眼に入る程の眺めもなくドン〳〵と山を出て行つた。

宇名月から電車三日市から本線上野行きの列車の窓に依つて働き出すまで靜かな氣持でるる。黒部西爪の出盛りで歩廊には大きなのがゴロ〳〵してるる。夕立のあとで出て來た山には眞白い雲がネットリとかゝつてるる蟋蟀が啼き雞頭の花が紅く夕日に照されてるる。早い乘物で山を出て來ると餘り四圍の變化が激しくて夢の様だ。

一

溪歩きは私には始めての經驗であつた。矢張り峯歩きよりは幾分飽き氣味になる。それにこんな美景の長い間連續してゐる溪は類例がないだらうからそれを想ふと隨分限られた好みといふ氣がする。景色の傾向が隨分忙しい。併し日本趣味で比類なく佳いとも思ふ。これは附け足りの美點なのだが水で炊くので三度の御飯が甘い。土地が低いので野營が樂である。水浴が自由に出來る、鮎が食べられる。萬事衛生的で氣持が良い。冠さんの云はれる樣に春秋は峯、夏は溪に限るかも知れない。

それにアルプス形の山では日本は餘り自慢の出來る方ではないが溪水の美なら隨分誇つて良い樣である。谷壁の林相の美しい事は世界にそう類例はあるまいかと思ふ。

二

「廊下」と云ふ地形は谷壁の裾にある岩石段丘 Felsterasse の連續を想像せしむるに充分である。併し事實は此と甚だ異り谷壁 Talgehaenge を土壁と見て河床全體の感を廊下と呼んだものである。谷壁が殆んど垂直なのでそんな感を生じたものと見える。此は越中山民の間に行はれる地形方言で黒部特有のものであるらしい。

併し事實岩石段丘は河身の曲り角や支流の合流點等に可成りよく發達してゐる。棒小屋泊り場もその一つであるし其處から十字峽に行く間の東岸や、東谷落口の東岸等著しいものである。私にはそういふ處が却つて「廊下」

の感を起させた。

三

黒部の案内は宇治長次郎を以つて權威とする。彼は慥に氣持の良い穩かな性質を持つてゐて、彼に對すると同じで靜かな氣分を受ける。今年五十六で大分弱つたと云ふが盛には八十貫を肩にしたと云ふ元氣は殘つてゐて、惡場に來ると彼の動作は驚くばかり光つてゐる。黒部へ來たい人があつたら誰でも案内して上げるが自分の本當の仕事である事を信じてゐる人の言である。——と別れる時云つてゐた。本當に山を愛し、山案内

一つ年下の野口松五郎も良案内である。「行かざァ」（行かねば話にならぬ）と云つてはどんな嶮所へも先に立ち我々も連れて行かねば承知せぬ豪氣の男である。野口物一と云ふ若者は今が盛である。つい先頃も文部省の重い活動寫眞機を肩にして十字峽邊りを元氣で渡り歩いたさうである。

何れも上新川郡大山村の人達で今の黒部は此等の人達の厄介にならなければ安全に通過することは無ケ敷しいロープは渡渉にも岩岸のヘツりにも必要のものである。アルペンストツクもあつた方が良い。ネールドブーツはどんなものだらうか、あゝいふ水蝕の研磨に委せた花崗岩の岸にどうも靴は馴染みが惡い樣に思はれる。ロツククライミングの熟達者はどうか知らぬが私共には溪は日本式に限る氣がする。殊に度々の渡渉あるに於てをやである。

四

秋になつて色々な場所で此の夏の山の樣子を聞いて見ると初め想像した程黒部へ人が入つてゐなかつた。尤も

上廊下は比較的容易だと見えて數組の人が晩夏から初秋にかけて入つた樣である。或者は双谷から入つて黒部の源流に出たと云ひ或者は上廊下の立石から平小舍まで一日行程であつたと云ふ。又上廊下へは國民新聞社の探險隊が入り此に前後して文部省の映畫營林署で活動寫眞機を携へて入つたとも云ふ。下廊下へは撮影隊が冠氏を指導者とし黒部保勝會の吉澤庄作氏等と共に大部分を踏破した。續いて我々の一行それから別宮岩永兩氏の一行が冠氏を加へて劒澤に未踏の地を探り大瀧を見て黒部別山に登られた。婦人では黒田君の一行が大へツリまで入つた。

今年の收獲は二種の映畫である。文部省のは四千餘呎中より二卷二千呎を纏めたといふので精粹のみである。極めて明快な氣持の良いもので殊に水の撮影法の技巧は申分がない。國民のは四卷に亘る長尺で下流に精しい。寫眞そのもの、出來は前者に劣るが部分的に精しく抄略が少いから登山家には映畫美を離れて評判が良い。

五

種々な意味に於て今年は黒部が世に出た年。明年は人々が黒部に入る年。そして三年の後は電力事業が黒部の核心に觸れ、完全に山を征服するか又は春の大雪崩でも起つて大慘事が發生しさうな年である。終りに此の行は冠氏に負ふ處の多い事を記して感謝の意を表する。

（昭和二年十月四日）

熊野湯を中心としてのスキーツアー

吉澤一郎

最初から知つたか振りをして大きな口をたゝく様ではあるが、日本内地には最早人跡未踏のピークなんていふもののないのは事實だろう。自分を未知の谷へ未知の谷へと誘惑する心も、やはり此の邊に原因があるんではないかと思ふ。日本山岳會の木暮老もいつか「今は如何にして容易に登り得るかは問題でなしに如何にせば最も困難にして頂に達し得るかを研究する時代となつた。」とラジオで放送された事があるが、全く自分にもそんな氣持ちのある事を否定する事は出來ない。

ともあれ狹い日本の内地にも多くの未知の谿谷の殘されてあるといふ事は自分にとつて一つの滿足であらねばならぬ。然し又冬期といふ事を考への内に入れてくると問題は全然氣分を新にする。スキーを用ひての登高、或は又コンビネーションによる登山法、此の時自分等の前には一度行詰つた前途にも豁然として光明が開けて來るのである。然し之もやがては盡きる時も來るであろう。段々と範圍をせばめられて行くのだ。三月に登られた山も未だ一月には登られてない。二月は更に面白いだろう。こんな風にしてスキー登山家は自分等の新天地を開拓して行く。自分も亦さうだつたのだ。

× × ×

嘗つてこんな心持ちで初登山を岩菅山に試みた自分であ
等の山々を望み見てどうして此等へのスキー登攀を思はず
アーは部員矢作氏と共に此の一月に行はれたのであつた。
十二月の合宿。そして一月に入つてから如水會の人々と
キーを運んだ。七日は熊野湯の主人山本順次郎氏の家に移
平へ滑りに行つて一度鉢ノ木澤と角間川の合流點の東上にある安南
た。沓野から此處までは一寸あるので雪でもも、ろにいゝのであつたが、雪が惡かつた爲愉快な滑走感は味はれなかつ
るる。ではなければ來る氣にはなれない。然し道は良く付いて

一月八日　熊野湯へ

此の日はいよ〳〵熊野湯へ登るので朝も可なり早くから仕度をしてるたのであるが主人のスキーが中々間に合はなかつたので出發は遂に十時過ぎになつてしまつた。

岩菅に登つた當時から見ると此の邊も隨分變つたものだ。波坂には物すごい水力の鐵管が眞直に立てかけられてある。十二澤の曲り角には會社の事務所まで出來てしまつたので、二時間ばかりも要してしまつた。沓打の茶屋まで休み乍ら來た前の時に比べると、今日は亦とんでもない惡雪だ。てんで遊ぶ氣にもなれない。後立山の連

峯の後に白銀の劒を見たのも其の時であつたが、今は何といふ事だ。近くの山さへも怪げない。一寸の間天氣が
でも熊野湯主人の歩き振りと食料運びの人夫の輪鍵の爲に暫くは此處で待たなければならな
良くなつたのでなつかしい寺小屋や燒額の方が見えて來た。朝日山の西から北へ溜池の上を
水力の水番小屋に着いたのは一時二十分であつた。珍しくも僕を名指して來る人が居た。誰
菅登山の際發哺まで一緒に行つて炊事の方をやつてくれた佐藤千歳君であつた。水番の暇々
見え顏は例により自分等以上の黑さである。自分等と共に來た人と千歳君とをとりかへて熊
た。大部腹も減つて居るので持つて來た餅をやいてたらふく食ふ。食つてしまへば最早用はない。すぐ出かける
のも惜しいのですぐ近くの急斜面で大いに二、三日たまつてゐた氣分をさらけ出す。此の斜面は丁度朝日山の東
北に面してゐるものでやがてはシャンツエをつくり度いと云つてた位面白い所である。すつぺんから眞直に飛
び出すと途中では何が何だかわからなくなつてしまふ。可なりな速力だ。下へをりて得意になつてストップしや
うと思つた時木株に引つかゝつて見事に棄身をやつたのは實に癪に觸つたが一寸も一度登りなほしてやる元氣は
なかつた。雪質は相變はらず惡い。

三時廿五分小屋を出て琵琶池に降る。池は凍つて居るが水の取入口の近くに氷が壞してあるので一寸した所を
旨く湖上に出なければならなかつた。下手すると一あび洗禮される恐れがある。湖上を眞直に南へと進む、どう
も餘り氣持ちのいゝものではない。それにスキーで湖上を渡るのは自分にとつてはじめての經驗であるから尙更
であつた。

一沼の東に出て暫く休む。順次郎はスキーの方は餘り達者でない上に可なり荷をよくばつてゐる時は必ず一度はひつくりかへらなければ氣が濟まない樣な樣子であつた。此の邊を池の平とずつと前橋街道を辿るわけだ。天狗岩（幕岩の對岸附近の曲り角）の附近には嫌な箇所が二、三度あつた。雪崩の危險も可なり多いしおまけに道がカンカンでスキーの幅だけもない樣な忽斜面を横切る所が多分坊平三角點事な太い氷柱が幾筋となくかゝつて居た。幕岩の頭といふのを順次郎は指差しで教えてくれたの南の岩峯の事であらうと思ふ。澤尻（岩倉澤の落ちる附近）に來た時は一面に濃霧につゝまれてしまつた。最早四時半であるから四邊は相當暗い。

橋を渡つて二度キシキシいふ音をさせながら先頭の者はもう姿は見えなくなるので僅かたら此の邊はスケーチングの享樂にはもつて來いのゲレンデである。ついて來た犬は嬉しげにの中を馳けめぐつてゐる。

濃霧を徹して朧ガスの中に消えて行く。實際一寸離れるともう姿は見えなくなるので僅かみ得る樣になつて居た。やがて右へと降る、角間川を渡ればすぐ前に圖體は可なり大きな湯の時に五時十七分。

入口は例により持つて來たシャベルで雪を除かなければならない。二、三十分後中へ入る事が出來たが一時は

眞暗で何もわからなかつた。何はともあれ欲しいものは火と水だ。濡物をとつて自分等はどん〳〵荷物の整理にかゝる。約一週間は滞在する積りであるから安心なもの。

客室に炬燵の用意も出來たので臺所の圍爐裏を引上げて同じ所に集りスキーの話、岩菅に登つた時の話等それからそれへと盡きず遂に床に入つたのは十二時近かつた。海拔千六百八十米突の一月はやはり温い布團にも泌み込んで來るのであつた。

附記――天狗岩通過は一月、二月は大概大丈夫であるが三月頃は危險性が多くなるので一尾根東の窪を南に登る相である。次に前橋街道から別れて熊野湯へ降る附近は横笹といふ小字がついてゐる。

一月九日

夜中に可なり寒い樣な氣がしたがやはり吹雪であつた。眼が覺めてみると目張りのした戸の隙間から細い粉雪が舞ひ込んで居て小さな土手をつくつてあつた。八時頃起きた事は起きたがどうも面倒なので顔は昨日宿を出る時に洗つたから今日は休業とする。矢作が炬燵の中で安曇ぶしをはじめ出した。得意になつてやつてる内が可愛い〳〵。外は風が馬鹿にひど相なので漸く十時頃にスキーをつけて出かけて見た。完全なスキー場の樣な乾燥場のない悲しさにはスキーのビンドウングも靴も何もかも皆カチン〳〵に凍つてゐる。

横笹の棒杭の所へ登つて見たが此處は風當りの强過ぎる爲か所々に粉雪が吹きたまつてゐるので具合が悪いから止めて裏の赤樺の斜面に行つて見る。中々ゲレンデとしては面白い所だけれどまだほんの降りたての爲雪がしま

つてないので下のクラストに觸り餘り氣持ちよくなかつたが昨日よりは遙にいゝ。笠の頭が覗へる。

午後は再び此處へ來て遲くまで滑つてゐた。例により無鐵砲をしてスキーを木にはさんでしまひ足の關節を挫いてしまつた。少しずきん〳〵痛んだけれども翌日には大した事もなくなつた。

寢る時にふと臨時便所から空を見上げると山の端に三日月がかゝつてゐた。然し少し曇り具つた。

一緒に來た犬はエスといふので中々可愛い。障子を閉めて中でガヤ〳〵馬鹿話をしてゐるとこすつてあけ皆の間に割込んで來て手をなめたりしてお世辭を使つてゐる。身體こそ大きいが少の藝も出來る。ゲレンデへもよく一緒に來て一緒に轉び乍ら遊んだ。

附記——今度の滯在中に知り得た附近の地名に就いて一言しやう。

●センの澤（熊野湯の湯の記號のある所へ南から來る小澤を云ひ、赤樺のゲレンデは此の左岸の斜面である）。

●湯　澤（其の東の澤で湯澤と合して角間川に注ぐ）

●河原澤（又其の東の澤）

●松尾根（横手山と笠岳とを結ぶ尾根）

●四ツ角（前橋街道が硯川を過ぎると新舊兩道に別れる、次に又兩道が合した所）

●手マヘカラホリ（岩菅圖幅で角間川とある角と間の字の間に入る澤）

●向カラホリ（其の南の澤）

●湯　坂（向カラホリの澤に架る橋から上、松尾根分岐點までの間）

●硯　川（草津街道の北側にある澤）

●鉢ノ池（草津峠の西北にある二千四十米突の圈の山は即ち鉢ノ山であるが此の頂上にとても大きな池がある。水はどの位あるか雪の爲にわからなかつたが地圖には矢印を入れてもいゝと思ふ）。

●澁　池（地圖に硯川とある川の字の五分ばかり北に千八百米突の等高線によつてはさまれた鞍部があるが此の邊にある一寸した池である）。

●モングチの澤（志賀山と鉢の間にあり西に向ふ澤）

●ガランの谷（草津峠の東で東流する大きな澤に草—臭—澤と聞いたが草津大坂屋の主人はガランの谷と云つてゐた）。

●横手の横ツリ（松尾根分岐點と澁峠との間の難所なり）

一月十日　赤石山へ

此の日最初の計劃では草津峠から鉢山の東面を捲いて屋根傳ひに赤石に至り歸りに向志賀メーデ志賀の三角點から西へ降つて屋根は中々むづかしい相である。

床の大地藏邊に降る積りであつたが時間の都合上志賀だけを殘してしまつた。無理に行けば目的は完全に達せられた事と思ふ。然しメーデ志

矢作氏は一晩中蚤にせめられて四時頃まで寝られなかつたらしい。一日中眠てゐてもいつも寝呆けた様な顔をしてゐる彼であるから現場を見ない人でも思ひ半ばに過ぐるものがあろう。かく云う自分も昨日の亂暴がたゝつて足がもろに痛む。案内者は千歳君だがいつも大概後からついて來た様だつた。

時を過ぎてしまつたでも歩いてる内にはどうにかなるだろうと思つて出發の仕度にとりかゝる。いつの間にか十

十時廿五分湯を出て硯川の茶屋跡に登り舊道を通つて四ッ角から前橋街道を辿る。然し道通りに行く必要はない。氣持ちのいゝ廣い所をえりながら進む、約五十分で鉢山と草津峠の北の突起との間に來てしまつた。この道も滑降して行つたら面白いターンの痛快さを味へる事だろう。

鉢山の東斜面で一度御腰をすえて煙草を吸ふ。梅の大木の疎林だ。緩い大きな雪の斜面に濃い綠の梅の枝、東西は深く遠くいつか北大のスキーマンを呑んだ薄氣味悪いガランの谷へ向つて落ちてゐる。目指す赤石の山頂には一つの岩壁をこつちに向けて指まねくの様子、ふと眼を落着ければ曾遊の岩嘗が樹林の間に白銀の頭を輝かしてゐる。白砂も遠く上州の雄を以て誇つてゐた。さすがに其の頂は他の群山を歷するが如くスキーマンテニヤーである。

小憩の後尾根筋通りに東北に向ふ、痛快とまでは行かないけれどもまあ愉快位の程度の直滑降をブーンと味ふ。いつか志賀への分岐點も通り越してしまふ。志賀山もこの方面から見るとベットリとした雪の壁を大きく見せるので立派なものである。これから先は只尾根筋さへはづさなければいゝのであるが思ふ様な斜面もない。地圖の上では簡單であるが實際はあんなものではなかつた。登つたり降つたり、ひつくりかへつたり、轉んだり、

頭をぶつけたり、ガリ〳〵で手から血を出したり實に大騒ぎであつた。

それでも一時間半ばかりで赤石山の西直下の岩の根本へ來てしまつた。こゝでスキーを脱いもち梅の倭樹をくゞりガレの様な所を登つて山頂に達したのは十二時四十五分であつた。

大沼池がすつかり雪に覆はれて眼下に横はる。志賀は近く坊平は其の尾根を遠く澁温泉の方菅から裏岩菅笠帽子に續く屏風の如き尾根は眞白であつて此處からもの、二時間もか、らずに場は何處までも廣く雄大な感じを與へる山である。奥上州の山々が其の右に連らなる。尨大な士が霞み、赤城榛名は兄弟の様に立ならぶ。白根は煙のみ見せ萬座には雲がからんでゐた。日は之また實に言語絶して素晴しく from end to end と云へば充分であろう。

少し風が出て寒くもなつたので岩陰にひそみ腹の虫を買收してから最後に寫眞をとり、一時展望を殘してスキーデポーに戻り往路とする。自分等の轉んだ舊跡にぶつかると皆は人事の様にワハ、、と笑つてよろこんでゐる。頗る呑氣だ。湯を出るのが遲かつた爲志賀廻りは斷念して千歳君は途中で凍傷を起したので矢作氏が自分の靴下を貸してやつた。

鉢の山頂？に着いたのは二時卅五分、前にも一寸述べた様に中央に餘り大きなくぼみがあるしまつた。こゝで又食糧を平らげ池の圍りの尾根を半周して眼前に控へる笠の尖峯を目標としボーゲンをやる。またゝく間に澁池に出てしまつた。時に三時五分、此處で二人を一寸待ち一の急斜面を横滑りで降り熊野湯へ着いたのは三時十五分であつた。エスが嬉し相に尾を振つてでびつくりしてどん〳〵ステム緒に横笹のガリガ迎へてくれた。約

五時間で往復した事になる。赤石の頂へ出るにはやはり地圖を見ればわかる様に南面から東部へ出て行けばスキーは拔がずに濟む事と思ふ。此の日歸つてから直に慶應の人が二人熊野湯へやつて來た。山岳部の人ではないらしい。

一月十一日　笠ケ岳へ

普通の笠への登路は北面からするものらしいが自分はこれを避けて南壁を登つて見た。北面はスキーの登降には少し無理な程度に木が立込めてゐる。何しろ岳は二千米突を出てゐるけれども根據地たる熊野湯が近いのと村界尾根から見た所では大した事もないらしいのでゆつくり出かける事にした。

山頂で晝飯をたべる積りにして出發は十一時であつた。例に依り温泉を出て赤樺の斜面に一寸した崖を登り村界尾根に出てから松尾根の方へ針の木澤の面を捲いて笠の東鞍部の小舍場と稱する所に出る。

此の鞍部の附近も可なり愉快なゲレンデを提供してくれる。殊に急斜面をおそれるアンフアンゲルにとつては適當の斜面及び木立を有つてゐる。はじめは夏道に從つて頂にとりつかふと思つたけれども鞍部から四五十米突も小さなキックターンを續けて登つた時に右側即ち北面に比べて南面即ち左側は明るく非常に愉快相に見える。此處で自分は斷然南面よりの新路を選んだ。山頂はもう自分等には見えない。約百米突下部の所に丁度屋根のない門の如く岩塊がつゝ、立つてゐる。右側の岩は笠岳の根の露れであるが左側のは一本獨立してゐるたと記憶してゐる。自分はこれを兩方合して、窓岩と假稱して置く。

こゝから上は全體に於いて比較的急傾斜であつて幅もせまく從つて自由にキックターンによる高度を増す事は困難である事を感じる。二、三十米突登つた時に栂の頭部の出てゐる下に一寸した窪があつて人を待つてゐた。その内に千歳君がやつて來て、矢作さんはスキーの前がねが折れたので歸つたので二人して山頂を目指す事にした。之からまだ五十米突ほどの下に來た時いよ〳〵スキーは取はずさなければならなかつた、との事であつた。

かくして何も外に用意をして來なかつた自分等は表面のクラストになつてゐる所をストックの金具で足場をつくり乍らアイゼンなしに登るより外なかつた。十二時四十五分遂に山頂に達する事を得た。夏ならない乍れども今は大半雪に覆はれてしまつてゐる。大きな岩塊があつて其の南下に何かゞ祠も尚い、といつても差支へあるまひ。殊にいゝのは其の山頂が赤石の谷は深く〳〵横手山の腰に喰ひ込んでゐた。日本アルプスの眺めに比して高山氣分のする點である。南面松川は赤石とほゞ同じ程度であつたが松川の谷を辿ると幾つかの起伏の後やがて横手の腹にせり上つて行く。そこは湯坂の頂上である。夏道に樹林が帶の樣に見えるないので明瞭にわかる。横手の所謂横ツッリはすご相に見える。然し本當のすごい場所は尾根の向側の見えないにあるのである。風の關係で木が斜面全體に一本もなく眞冬といふに雪さへまばらで赤褐けた地肌を露はしてゐた。澁峠は此處からは見えぬ、山田峠との間にある無名の黒い山、そして眞白な尾根の前山との間に松川の上流とも云ふべき所に一つの面白い天狗の臍の樣な突起がある。何とか名前が

あるらしいが順次郎も知らなかつた。白根の噴煙が風になびいて盛んに左の方に吹いてゐる、尚右に眼を移して行くと萬座山、黒湯山は黒い。御飯岳のすぐ後にこれに殆どくつゝいてすぐ右に吾妻山が特徴ある頭を並べる。一度それがくびれて再び持上つたのは猫岳である。いつもスキー場に向ふ時豊野附近で五色ケ原の様だとあこがれてゐる廣い斜面は猫岳のすぐ右にあり。その左手は宛も苗場山の如くに削ぎとつた様である。淺間は黒湯山の丁度後ろに大きくそして煙はかすかにのぼる。眼を北に轉ずるとまづ心を惹くものは岩菅の二峯である。志賀山は其のすぐ右下に之も二つのこぶを並べる。赤石には例の岩がしよんぼり見えた。東館と燒額との間の高天原の上には鳥甲が行儀よく鎭座してゐる。懐しい發哺温泉が右下にチヨコンと二個上下に建つてゐるのを發見した。全く發見の程度だ。知らない人には一寸わからないと思ふ。白砂方面の見えた事は云ふまでもない。わづらはしい展望の説明はこれで終つて置かふ。

岩蔭でつめたい晝飯も終えたので正一時頂を辭する事にした。登りにはスキーのカンテンが頗る利かぬ程固かつたが歸りにはボコ〳〵一尺位もぐるので具合がよかつた。これがもし往きの様に固かつたら全くスキー靴では餘程危險性が多いわけだ。スキーデポーに忽ちついてしまひスキーを肩にして尚暫くは注意しながらも愉快にどん〳〵窓岩の所まで降つてしまつた。落ちれば松川までは行かぬまでも可なりとまるまでの間の距離が長くて急だから要心は必要であろう。

窓岩からはスキーをつけて一目散に小舍場まで直降滑、小舍場から村界尾根に捲く時に一寸迷つたが暫くでそれも見當がつき往路とは違つた谷間を滑つて湯ノ澤との間の小尾根を滑つて湯に着いたのは一時五十分

であつた。休みも迷ひもしなければ三十分で充分笠から降りてこゝまで來られる事と思ふ。茲に注意し度い事は三月頃には頂上は可なり固く凍結してゐるかも知れないからアイゼンとピッケルは必品だと思ふ。ザイルの携帶は要しないだろう。全く窓岩から上は一寸面白いと思つた。少しばかり冬の山へ來たといふ感じが出る所である。

夕方になつてから澁池に登りそれから平床原へ出て歸つて來た。こゝにも一寸面白い所があつた。

附記——外にもまだ色々と考へれば一日半日のコースはあるかも知れないが湯坂を登つて澁峠に出でそれから横手山に登り天下の眺望を擅にして長い尾根を注意して草津峠に降りそれから西に愉快なボーゲンを味ひ乍ら湯に歸へるのは殊にいゝと思ふ。殘念乍らこんどはやらなかつたがいづれ機會があつたら試み樣と思つてゐる。

それから熊野湯は本當は湯澤温泉關の湯といふ方が正しいとの事、こゝの湯には實にすごい湯の花が出來る。暫ぐ待つてゐると一分位の厚さに湯の表面を覆つてしまひ、其の上には字が書ける程である。參考までに一寸。

（以上　吉澤）

一月十二日　吹雪

目が覺めると、雪の細かな結晶が吾等の小屋の裡にも舞ふてゐた。戸や障子は完全までに目貼りしてあるのにそれでも尚部屋の中に舞ひ込んで來る。外は案の通り降りしきつてゐる。今日は澁峠から横手山を極め草津峠に降り、一昨日登つたあの愉快なスラロームを思はせた道を一氣に小屋まで飛ばす豫定であつたが、此の分では斷

念せねばなるまい。それでも行ける所まででもと、防寒具に身をつゝんで、丁度十時小屋を出た。窪みになつてゐる爲か風は大してない。緩らかな湯坂を空想にふけりながら進んで行く裡に何時となく高度は増して來る。ふりかへると角間川を挟んだ兩側の尾根がかすかに隱見する。三人は一語をも發しない。音もなく降りしきる雪の中を唯默々と登つて行く。一歩を踏む毎にアザラシの皮の裏にきしむ雪の響きが脚を傳ふて感じる許りだ。約一時間で松尾根に出た。前面は松川の深い谷になつてゐる。此處から澁峠までの間が横手の横つゝりと謂はれて、最も險阻な處とされてゐる。アザラシをはづして小憩する。眺望は全く駄目だ。殘念だが今日は此處から引返すことにした。一平氏先づスタートを切るや、その姿は忽然として消えてしまふ。千歳君も之に續く。殘るは唯數條の條痕のみ。樹木は疾風の如く後へ退く。アッと云ふ間にもんどり打つて十間程先に投げ飛ばされた。殘念と思うてふり返ると、明かに讀まれる前走者の作つた大きな穴。又かつと思ふ。立上つて武者振ひすると、速製の雪遮磨は忽ち元の人間に早變りした。借り者のガタ〳〵なり、エンフエルトスキーは足にあはないい。危ふく大木の幹を避け得ても、どつしりと雪を戴いたその枝に見舞はれなければならない。此の辛闘のうちにも直滑降の快味は充分味はへて、約十五分許りで小屋に戻り着いた。

毎日の見參に恐れ入つた蛸の醬油漬(?)が、やがて炬燵の上に運ばれた。例の如く蛸の切身は凍りついて、はがれゝばこそだ。これは十分位炬燵の中に入れて暖めてから味ふことになつてゐるのだ。

午後は例のゲレンデへ出掛ける。西向きの廣いスロープ、疎林、それに雪がよいので、思ふ儘にスキーが勵く。ジャンピングストップにも倦きて、今度はあやしけなジャンプに氣焰を擧げる。夕闇が迫るまで疲勞を忘れて走

り廻つた。歸りはわざ〳〵遠廻りをして、谷を渡り尾根を横切つて、ランプの光りが僅かにガラス戸から洩れ初める頃暖かい我等の小屋に辿りついたのであつた。

一月十三日　快晴、澁峠白根越え

いよ〳〵最後の日だ。今日は横手、白根を極めて草津に出なければならない。明方の寒さに幾度となく目を覺ます。星が二三、遠くに輝いてゐるのがガラス越しに見透かせた。占めたつ。何時になく早く起き出で、荷物を整理し、リュックをこしらへる。

七時二十分、千歳君順次郎さん六三さんの健康を祝して懐しの湯の宿を出た。慶應の二人も同じコースだ。小屋の前を峠道へかけあがると、昨日は一度も顔を見せなかつた笠ケ岳が朝日に輝いて美しい莊厳な風景畵となつて現れた。快い青空、フレッシュな空氣、そして朝の冷氣は吾等の身體を引締めて、元氣溢れる様に感じた。新舊兩道の分岐點近くまで來ると、僕のスキーの金具が再び折れてしまつた。六三さんが一昨日澁まで降つて直して來て呉れたのが無駄になつて仕舞つたのだ。殘念だが仕方がない。熊の湯まで引返して、例のガタ〳〵スキーを借りた。一平氏は先に往つてゐるので、不休で湯坂を登り後を追ひかけた。昨日の道を辿つて松尾根に出る。流石の笠ケ岳も此處まで來ると既に下になつてしまつた。一望千里、北アルプス連嶺の美事さは筆舌に絶する。松川谷の深さ、横手の横ッつりの急斜面、白根の噴烟、澁間の遠望、四阿山、御飯岳の連峯、雪の輝き、樹水の美觀、幻惑を感ぜずには居られない。し細に觀れば、慶應の二人のスキーヤーが今やスキーを脱いで鏡の様な絶

壁をヘッてゐる處だ。カメラをリュックに仕舞つて直ぐに横つつりの險にかゝつた。急斜面は横手の頂きから初まつて直下してゐる。多分松川谷の底まで續いてゐることだらう。

松尾根から見えた絶壁までは四五丁はあつたらう。雪面はカン〳〵に凍つてゐてエッヂが効かず、度々の横滑りに膽を冷す。半ば無意識のうちに難所は無事に越えた。進むにつれて谷は次第に深さを減じて來る。追々傾斜が緩くなつて漸く歩きよくなつた頃澁峠に着いた。十時三十五分だつた。先着した一平氏は横手を往復して僕を待つてゐて呉れた。

横手の頂上までは此處から十五分たらずで行けた。疎林を縫ふて殆んど眞直に登へた。頂上は西と南が闊けてゐて、その眺望は先づ無類と稱すれば足るだらう。白根の複雑した群峯は、宛然飛行機の上から眺める樣だ。此處に見た樹氷の美しさは終生忘れることの出來ないもの、一つであらう。峠に一平氏を待たせてあるので、半分雪に埋れた小祠を一拜して直ちに踵を廻らして降る。樹間を縫ふ快いスラローム、半分程降ると、一氣に峠まで降りて仕舞ふのが惜しくなつたので一休する。ふと樹の間から遙か下を見ると雪の上に黒いものが動いてゐる。ハテ熊ではなからうか？次の瞬間スキーは其處へ目掛けて一氣に飛んだ。黒いものは振向いてニッと笑つた。『スケーティングを完全にマスターしたよ』と云ふ。成程幾つかのあざやかな條痕がそれを如實に說明してゐた。

四本のスキーを並べてその上に腰を下し、輕い食事をとつた。漫談に大分時を過したので、めたのは十一時半になつてゐた。尾根傳ひであるが樹で蔽はれてゐるので雪質はよい。樹木が絶えると視界が開けて、山田峠への降りとなる。山田溫泉から此の峠に通ずる徑は一條の白い線となつて明かに認めることが出來

た。

十二時十五分、山田峠を通過した。石の地藏も半ば氷に蔽はれてゐた。此處から滿座山への尾根が分岐してゐるのであるが、その最初の無名の一峯の東をカランで白根の本岳である地藏岳へ登つた。立木が林立してゐて、郡界線に從つて十二時四十五分地藏岳の蕭條の感に滿ちた山相となる。は脚下に物凄い口を開いて、絕え間なく白烟を噴き上げてゐる。流石に噴口の周圍には雪はは風が可成强く當るらしく、雪は一帶に少なく、處々にシャ岩を露出してゐた。

獨立標高點附近から弓池の東側の窪まで斜滑降でブッ飛した。硫黄採取小屋が二三あつた。

豫定よりも大分時間が遲れて仕舞つたので本白根山は割愛を餘儀なくされた。仙人巖の怪奇な岩群に別れを告げて、正一時歸路を採り初めた。噴口の外廓を半週する間は殆んど平地と云ふて差支ない。雪はカン〳〵に凍つてゐる。追風が强く擧げてゐると、スキーはその儘靜かに滑つて行く。

芳ケ平に出るつもりで呑氣に滑走して行くと、突然絕壁の上に出て仕舞つた。大澤川の本流と毒水澤とに挾まれた二三十米の小屋——香草ノ湯——が見え、その向ふには草津へ通じてゐる廣い道が明瞭に確められる。目の下には草萇の新しい小屋——香草ノ湯——が見え、そに足場の雪がズリ落ち初め同時に身體がズル〳〵〳〵と滑り徐々に降り初めた。引返すのも面倒と思つたのでスキーを擔ぎ急な斜面を出した。枯葉の生えた急斜面にザラメ雪と來てゐるのだからたまらない。やがて七八間落ちに手が觸れて一命を取止めることが出來た。下までは百米以上もあつて行つまる處はどんなになつて居るのか見

えないのだ。一時は驚いて呼吸が止つた程だつた。到々斷念すだに冷汗をかく。どうしてあの時降る氣になつたか、今考へると不思議でならない。氣を落付けるべく、殘りの飯を食ふ。

小憩の後、往路を五六町戻る。此の邊が亦難儀だつた。可成な急斜である上に雪はカン〳〵であるから頗る上り難かつた。地圖に入れてある小徑の東隣りの窪を降つて無事に往還に出た。此の間約一時間半を空費して仕舞つた。弓池を立つてから草津に入るまで雪は全く何處もカン〳〵に氷つてゐて、豫想してゐた愉快な長い滑走は全然味ふことが出來なかつた。

毒水澤の橋に出る迄の斜面は、强風が當る爲か雪面にシャベルで取つた樣な大きな穴が連續してゐて危險なことおびたゞしい。兩脚とスティックとで頑張り通しなので疲勞が身にこたへて來る。カヤ落しの雪崩跡を通過して五六町行くと蟻ノ戸渡りに出た。大澤川と谷澤とが兩方から迫つて尾根は帶の樣にせばめられ、遂にはそれが崩潰して尾根は木橋でつながれてゐるのである。この橋を恐る〳〵渡つた時は既に時計は四時を示してゐた。これから滑り難い凹んだ道を行く。疲れてゐるので轉んでばかりゐる。谷澤原に出た。幾日か前につけられたスプールが其後の晴天續きでスッカリ其の儘固くなつてゐて、それにスキーを入れると緩やかな斜面を自ら滑走して行く。地圖をポケットから出して見てゐる間も走つてゐる。汚ない話だが小水を出しながら走る。十町餘も斯樣にして下つたらう。道は急に谷澤に向つて降つた。橋を渡ると少しく上りとなる。道は急に廣くなつた。此の邊からスキーのスプールが無數に走つてゐる。薄暮はいよ〳〵迫つた。草津の町は近かつた。五時に間もない頃大

阪屋旅館にたどり着いた。

足底には豆が無數に出來てゐた。今日こそは流石の二人もすつかり消耗してしまつた。

湯から上ると、若い主人が挨拶に來た、まるで女の樣な人である。それでも新設草津スキー倶樂部の會員とかで、同倶樂部の強者（つはもの）二三名を呼寄せて紹介して呉れた。例によつて吾等は替る〳〵遺憾なく吹きまくつた。途中で泣面をしたのも忘れて。強者共のお蔭で白根附近の地圖には大分加筆することが出來たので有難かつた。

一同が辭去する頃、前にある大湯の内から奇妙な音頭と共に木を打つ音が一種のリズムを作つて聞えて來た。湯をねつてゐる音なのだそうだ。

× ×

翌日正午、草津發の高原電車で歸京の途についた。白銀の兜を戴いた淺間の山を、文字通り前に後に右に左に眺めながら半日の間走り續ける此の高原鐵道は、都會人にとつては、それだけで冬の山の氣分に充分涵ることが出來る。（以上　矢作）

二月の針ノ木谷と立山越え

吉澤一郎

前書

針葉樹第二號に於て自分は五月の立山及び針木峠越えを皆さんに發表して置きました。其の時平屋に居られた宮本氏より三月には是非遊びに來る樣にと云はれ、自分も亦此のコースの可能性を確信する事を得たので歸校早々此の計劃を部員諸氏に持ち出した。所が皆は直ちに賛成して、もう大きな山登りも終る頃か學出來ない自分等には此れが最後ともなるのであるから此の機會を逃しては、といふ譯で夏季の登山も終る頃から寄々準備を進めて行つた。此の間三富、小栗、矢作といふ壯々たる連中も行く筈になつてゐたが家の都合で不參加となつたのは返すがへすも殘念である。

自分等としては總て先生にお委せし、自分等は寫眞の方と雜用の方を受持つ事にした。食料——

初めは芦峅より入る豫定であつたが自分は針ノ木谷の雪崩を心配して反對のコースをとる事にしたので萬事好都合に運んだのであつた。學問的な事

平の小屋に於ける

出る時には單に嗜好品と畠山小屋、大澤小屋の分だけを買つたに過ぎない。大澤小屋には一月に早大の人々が殘して行つた米がまだ一斗ばかりありそれに味噌もあるといふので可なり安心もし助かりもした譯である。防寒具——シユラーフザックや毛布とかいふものは一切持つて行かなかつた。これは大澤には布團が十枚もあるし、平他と手袋、靴下を用意したゞけである。器具——スキー修繕具、スコップ、ザイル、ピッケル、アイゼン、寒暖計位のものだけであつてスキーが全く使用出來ない程度に破壞した場合には人夫の持つて來た輪カンジキで歩く事にして置いた。一行は田中薫氏、村尾氏、五十嵐氏、松木氏、とそれに僕の外に人夫二人である。一人は龜之助で去年自分が行つた時室堂まで連れて行つた者、劍に一緒に登つた時の感じが良かつたので傭つたわけだ。他の一人は佐伯伊太郎でこれも元氣者であつた。はじめは宗作を連れて行く豫定であつたが後から賴んで來た三高の人々の藥師行きについて行つてしまつたのでやめにした。考へれば別に案内を要するコースでもないのであつたから結局自分等の採つた手段は惡くなかつた樣に思つてゐる。野澤に於ける春の合宿を途中でやめて皆に當分の別れを告げて懷しい上境の驛を出たのは三月廿日の午前八時頃であつたらう。ボタ〳〵の雪が降りしきる。近ちやん、英ちやん等の見送りの人々の影が雪のホームに消えて行く。汽車がカーブするまで見送る人と見送られる人との間には友情の微笑が交はされてゐた。松本に入る頃には雪はますます降つて來てゐた。皆は一足先に對山館へ行く。自分一人殘つて六區町の穗刈氏の所へ行つて暫く話し四時頃辭して雪の中を大町へと向つた。三月のそれも日暮頃の大町にはやはり冬の風が吹いてゐた。二臺のスキーを一人でもつてゐる手にはチリ〳〵と寒さが

針の様にさした。

× × × × × ×

畠山小屋まて

三月二十一日　晴

今日はなるべく大澤小屋まで我張らうといふので六時頃起きて仕度をやり出したが對山館の方では明日出發と思つて居たとかで自分等の起きた時にはまだ家中皆寢て居た。あはてゝ朝飯をつくらせ、例により記念撮影を愼太郎氏に頼み、對山館を出たのは九時に近かつた。田中氏は都合上一日遲れるので大町で待つても面白くないとして出發し、大澤小屋でスキーを味ひ乍ら待つ事にしたのである。

昨日降つた大雪は大町からでもスキーがはける程であつたが道もよく踏んであるので大出までは擔ぐ事にする。大町を出るともう周圍は一面の雪原となつてゐる。陽は野に高く、反射光線は遠慮もなく雪眼鏡を透して苦しませる。相當に重いリュックサックの上にスキーを擔いでゐるのであるから、一町も行かぬ内に全身汗だくになつてしまふ。約一時間の後久保の手前のお宮の附近に來て一休みする。忽ちの内に咽喉がかはいてしまふがサウ〳〵雪をたべる事も出來ない。村人は時節はずれの登山者の異樣な風體を怪み、又眩し相に見送つて居た。久保に至つて軌道に合する。行手には蓮華の尖峯が雪煙をあげつゝあるのが見える。祖父岳の左手の籠川谷は存外せまい感じを抱かせる。間もなく鹿島の橋に來る。夏ならば四五人は並んで通れるのが今は二尺以上も新雪が積

つて居て中央に一本道が踏んであるだけなので一列になつて渡るより仕方がない。右籠川谷左のは大出の入口の老人夫婦が居る茶屋の前である。此處へ來れば休むのが當然の權利の樣にユックを下ろして茶屋の中に入り込んでしまつた。色氣なから出るのは山の話ではなく、「まあ、だんなさん方、驚くぢやありませんか、こんなつまらないお茶のお代りを何度となくやるつて細々と伊那谷で捕つた殺人鬼の事件をそつぽを向き乍らクシャ〳〵の眼をし出した。自分達にはそんな事は差しづめ用がないので籠川谷の事を聞いたが近頃人がちつとふものが降らないので雪崩の方は割からぬといふだけ、要領を得ぬ事頗しい、然し最近雨といけはわかつた。十時十分此處を出て、いよ〳〵籠川谷に這入つて行く。百瀬氏の話では畠山まで人が入つて居るかも知れないといふのでラッセルも無しで濟むかと多少頼みにして居たのが、内に足跡もなくなつてしまつたので仕方なしにスキーをつけ戰鬪準備にとりかゝつた。標高の高瀬の標木のある處にさはる。途中一回休み、晝飯をとつたのは籠川から分出發。籠川谷の奥に連らなる後立山々脈の峯は谷に入るに從つて順次其の姿を左手にあらはして來る。中食の先頭が嫌になつて了ふ。隨分勝手だ所で一度スキーを拔ぎ小さな徒渉地點より黑澤の出合までは一時間半を要した。出合のすぐ北側一〇二〇とある低いのとカン〳〵が天氣のいゝのが一町も來ないのゝ、一町も來ないのゝ、一時十分でであつたのでもう大澤小屋までは五十分。概して右岸を歩いた。白澤を出たのが三時五十分でであつたのでもう大澤小屋までは一人もなぬ。畠山小屋までとしても其の位置を知るものは一人もないのであるからこれからは鵜の目鷹の目で行かねばな

らぬのであつた。約五十分の後、それでも自分は雜木林の中に屋根らしい雪の塊を發見して其處へ行つて見ると矢張りそれは今日の泊り場たる畠山の小屋であつた。小屋の東側が一寸出て居たが入口は雪に埋れてゐるのでスコップを使はなければならなかつた。内部は實に殺風景なもので、夜の宿と思へば我慢も出來るし、山へ來てサウ贅澤を云へた義理でもない。裏表のない疊が四五枚あつたがこれだけでも可なり暖い。人夫が豆腐の樣だと形容したのは旨いと思つた。小屋の位置としては夏季は別に心配もないが冬期に於て最もいゝ、目標と思へるものは左岸の可なり急傾斜の末廣形の澤であらう。白澤及び扇澤の間にあの位のベットリ白くなつてゐる澤はない。此の澤の下で水の流れの附近を探せばわけなく發見出來ると思ふ。夜は紅茶にコンアにジョニーウオーカーで山の話に花が散る。夜も更けた山の小屋で皆が嬉しがつたり、笑つたりするのは例によりアルファベットの終りに近い話である。山ではゾルレンやザインの話は禁物である。こんな氣持ちでゐるのかどうかは知らないが吾々のグルッペでは誰が何がゝりと頭から命令的に決めてかゝらない。自然に誰かゞ會計をやり、記錄をやり寫眞をやる。何もしないのも出てくるがそれでも故障なしに圓滿に面白く旅が續けられて行く。畠山小屋（四時半）

大澤小屋まで

三月二十二日　晴後曇

持つて來た僅かばかりの防寒具では皆つけても高が知れてゐるので、夜中の一時頃二時頃は非常に寒かつた。

然し時々人夫が薪をたいてくれるので自分達は割に良くねむつた方であろう。いつも山へ來ると夜明けから一時間ばかりの間が一番良く眠れる様な氣がする。外へ登つて見ると陽は今蓮華の尾根から正に籠川谷を覗はふとしてゐる所であつた。今日も亦晴天であるのだ。大澤小屋までは約三時間と聞いたのですつかり落着いてしまつて出發は九時頃になつてしまつた。雜木林を透して鳴澤岳から岩小屋澤岳へ續く山稜に雪煙のあがるのが見える。此の林を出て小さな尾根を越すと一面に廣い雪原に出る。此處から扇澤まではすぐ達する事が出來る。扇山小屋より一時間二十分、五月に來た時は中央に流れが出てゐてスキーを拔いだのであつたが今は一面に雪は埋れて丸木橋を渡る世話もない。扇澤を過ぎるともうぐん〳〵と高度は增す一方である、そして谷は益々狹くなる。丸石澤の口までは約廿分、暫く休憩の後、一寸大きな雪崩のあつたらしい岩小屋澤を過ぎる頃はいつの間にか籠川谷はすつかり埋つてゐるのに氣がつく。右岸の尾根を一週りすると行手に當り、マヤクボがあらはれて來た。最早大澤も近いのである。大澤小屋の位置を明に知つてゐるものも一人もないがまだ右岸に大澤の出て來ないので安心である。小屋のあるらしい毛の生えた臺地が人待ち顏に右手に見える樣になれば暫くして谷は急に左折し、蓮華からの大澤を發見する事が出來る。大澤は圖の感じよりは餘程大きなものでゐる。小屋は此の大澤の出口の丁度對岸の臺地にあつた所の一部は風當りの具合で一寸あらはれてゐた。丸石澤の出合より約一時間半小屋の上には待徹ある岳樺らしい木の枝に色あせた布切がしばりつけてあつたのは一時十五分前であつたので皆相當腹がへつてゐる。まづ胃の腑を滿足させてから人夫と共に堀出しにかゝる。はじめは北側をほる。約三十分位で「日本アルプス大澤小屋」と書いた標札が出て來た。此處で板を三枚ば

かりはがして小屋の内部に飛び込んだ。比較的雪は入つてゐない。東側のガラス窓の所の見當を大體つけてから再び外に出て又堀出作業を續ける。約一時間位で完全に入れる樣になつたので今度は荷物の整理と小屋内部の點檢をはじめる。米は約一斗位、天井に箱入で吊してあり、味噌も充分、そして薪は三日や四日分位は積み上げてあつた。一通りの仕事が終ると皆は除ろにストーブの周圍に集つて懷しい火を享樂する。冬山に來て小屋を堀出して窓口から飛び込むといふ事は全く樂しい仕事である。ほんとに日本アルプスへやつて來たのだといふ事が泌々味はれる樣な氣がする。フト天井を見上げると丁度ストーブの上に煙出しの穴らしいものがあつたので早速屋根に登つてほり下げて見た。約一時間位堀つた時に下から煙の出て來るのに會つた。ストーブでは飯がたけないので燈の方に火を起しはじめたが忽ちの内に小屋中煙で一杯になつてしまつたので、どうにも我慢がし切れず、これ幸ひと後を人夫に託して自分達はスキーをつけて小屋の臺地を降り大澤の方へ這入つて見た。二日間の晴天の爲、雪質は非常に惡くなり谷がそろ〳〵冷えて來るに從つて芦峅でいふ所謂カンバリとなつて不愉快極まる。表面だけ五分か一寸位固いクラストになつて中はサラサラである。深く期待して來た滑走の快味も遂に行はれなかつた、然し大澤の出口の所を足で耕して小さい乍らもゲレンデをつくり畠スキー術を練習する。一度小屋に戻り、夕めしを濟ましてから日の暮れる七時頃まで腹こなしの運動を續けてゐた。明日はどうせ滯在なので呑氣であ る。ストーブにあたり乍ら思ふともなしに大澤のパイオニアである早大の人々の生活を考へてゐた。あの人達も同じ此のストーブをかこんで吹雪に明け、吹雪に暮れる此の山小屋の中で針ノ木岳やスバリ岳へのスキー登攀に胸を躍かして居たのだらう。あの人達が送つたであらう樂しいヒユッテレーベンの事などを追想して行つた。今

自分の手許には「リュックサックク」第五號がランプの光にてらされてゐるのだ。

田中氏を待つ

三月二十三日　晴後曇

晝頃に田中先生は直吉を連れて小屋に到着した。祖父にも岩小屋澤の山稜にも一日雪煙の亂舞が續けられてゐた。赤澤は雪さへ良ければ實に素晴しいゲレンデであらう。中央に島の様な突起が出てゐる。あの谷から鳴澤岳へ赤澤岳へと登攀を試みたらどんなに面白いだろうなどとは考へるが自分には登つて見度いといふ氣はテンデ起きて來なかつた。近頃めつきり山に對する氣持ちが變つて來た様である。只漂然とさまよひ歩く、こんな氣分で自分は滿足する様になつてしまつた。大澤を登つて左俣から尾根傳ひに蓮華の頂に出るのも面白く又可能らしく見えた。夕方になり霧がだん〳〵と濃くなりゲレンデも面白くないので早く小屋に戻り翌朝の仕度をする。直吉が盛に山の話をしてくれたものであつた。去年針ノ木谷で死んだ人や喜作の話、要するに今日は呑氣な一日であつた。

平ノ小屋まで

三月二十四日　晴後曇

ふと何かの音に眼を覺ますと四邊はまだ闇であつたが人夫は既に起きてゐて、爐には味噌汁の鍋がかゝつてゐる

た。直吉が隣りの布團の中で「今日は平へ行くといふ日ぢやねえ、布團の中でゆつくり寝てゐろといふのが自分の耳に聞えて來た時、一時に嫌な氣持ちになつて、又重い布團にもぐり込んでしまつた。出て『雪だ、雪だ』とつぶやくのが又聞える。次から次へと頭の中を通過するものは成功の喜びではなくて悲慨の涙を呑んで大澤を後に大町へ引上げて行く一行の淋しい姿である。皆も同じ思ひと見えて頭から夜具を被つて何も知らない振りをして狸寢をやつてゐる。然しまだ三時である。夜明けまでにどう天候が變るものでもないと其れから暫くの後に一同は起きあがつて朝飯を濟ましてしまつた。七時頃であつたらう、外へ出た直吉が小屋へ飛び込んで來て『段々良くなる樣ですよ、此の分ぢや事によると越せるかも知れない。まあ峠まで荷を擔ぎあげるだけの積りで出かけて御覽なさい。後は俺が引受けるから』といふので皆はさうかとばかりに窓から飛び出ると蓮華の方からの雲脚は非常に速いが、黒部側は何となく晴れてゐる樣な氣がする。結果はどうであらうとも兎に角峠までは出かけやうと衆議一決して小屋に戻り、あはてゝ身の道具を整理して出發の用意をする。都に便りを待つ友を喜ばせる爲に昨晩書いた外に二三枚走り書をして直吉に托す。彼が居るので小屋の跡片づけは全部頼む事が出來たため割合に早く出る事が出來た。時に八時。大町に獨り歸へる直吉に別れを告げ、懐しい大澤小屋にも再會を胸に約し、今朝降つたばかりの新雪を踏んで峠の雪庇へと向つた。

小屋の臺地より其のまゝ疎林をわけて暫くして自分等は谷の中央を登る事になる。直登行もすぐ無理となつてからは谷一面に大きなヂグザグを描いて行く。まだ雪崩の心配も無さゝうである。所々左右から小さいものは出てゐるが雪崩でひどい目にあつてゐない自分達は何とか譬へにある樣に少しも恐ろしいと思はない。地圖にあ

る右側の岩壁の記號の附近に來ると多小傾斜が增して
見た内で一番大きいと思はれる雪崩の跡があつた。ふ
大きく影を落して自分達を待つもの、樣である。峠も
見えない。人夫の龜之助はアザラシの不完全な爲中々
を待ち乍ら休憩する事にした。雪崩の落ちた傍は流石
雪である。此の雪をみす〳〵アザラシにばかり引かけ
ない勞苦なんかは全然忘れてしまつて思ひ〳〵にター
をして會心の微笑を洩らす。同僚思ひの伊太郎は身輕
烈しく、又雪庇から捲き上る雪煙も壯觀である。斯く
再び續けられて行く。本谷とマヤクボとの出合まで〻
と本谷との間には岳樺の少しある小尾根がある。五月
ボとの出合よりは急に傾斜が度を增して來た。近い樣で遠いのはいつも峠の頂である。時々の立休みに來し方を
瞰る。あゝ針ノ木へ來たんだといふ何とも云へない感傷的な思ひが胸に迫つて來る。すぐ眼の前に横はる岩小屋
澤岳、祖父岳そして其の間に悠々雲の上に聳える白き双峯の鹿島槍、籠川谷は一面にベットリと雪に埋つてゐる
のだ。自分を煩はす何物もなき感謝の念が泌み出るのを意識する。未だ見ぬスキスの谷々も丁度
こんな風景なんだらうと友に問ふても、友は只、あゝとだけでやはり喜びの情をかくす事が出來ない樣に思へ

た。登るに従つて益々急傾斜となる。ヂグザグはなるべく大きくするが、それでもキックターンは其の度に深き注意を必要とした。一度落ちれば一時間位は登り直さなければならない。蓮華側にもマヤクボ側にも丁度い、加減の所に岳樺の一群があるので少憩するには都合がい、。段々と雪庇は眼前に迫る。後四つ、後三つと次第に減つて行くターンを蓮華側でやつた時は傾斜が可なりなものであつた。最後から二番目のターンは其の數は樂しみなものであつた。最後から二のであるから、何といつても峠の上に出るには針ノ木側の方をとるのが普通であろう。とかく足許も危險で又新雪も崩れ易い。何最後のターンも無事終つた。峠の頂へ。只それのみ。十一時二十分自分は再び雪の針ノ木峠に立つ事を得たヤツホホーの歡聲は只無限の電波となつて何處(いづこ)ともなく消えて行く。田中氏を最後として七人は無事に包み切れぬ喜びを見交す事が出來たのである。廻轉寫眞のそれの如く峠よりの南望は實に雄大であつた。槍の黒い尖峯は飽くまで四方を壓してゐる。今し前穗高一帶には眞綿をちぎつた様な雲がからみついてゐる。鹿島槍はと見れば正に雪雲?に姿を消さうとしてゐる。赤牛へかけては素晴らしく眞白である。此の八千尺の峠に立つ所であつた。友はあはて、カメラに入れる。自分達は何と幸ひに惠まれてゐる事だろう。呑氣に晝飯をたべて少しの寒さも感ぜず宛然夏山と同じ安氣さに涵る事の出來るのは何といふ幸運兒だろう。丁度一時間の後に籠川谷に別れを告げやうとふと今來た所を見ると自分達のつけた美しいシュプールが此の頂まで續いてゐた。サラバと問題の未知の谷、少くとも積雪期に於ける未知の谷である針ノ木谷に滑りはじた。豫定では十分か廿分で牛小屋まで達する事が出來る積りであつたが、最初の斜滑降を蓮華側にやつて見て驚いた。それは他でもない。典型的のカンバリであつたからである。北側と南側の雪質の相違、これ程明瞭に區別出來る所

は又とあるまひ。案に相違の此の悪雪に皆呆然たらざるを得なかつた。ガリガリバサバサといふ音ではスキーに乗つてゐる氣持ちは更に起りやうはない。それでも降りであるので、右手に小尾根を越して針ノ木側の急斜面を斜降滑とキックターンで滑つて行く。上を見れば後發の豆粒位にしか認められない。やはり苦んでゐるらしい。誰でもあんなカンバリでターンを鮮やかにやつて退ける人があり得やうか。シュナイダーはこんな雪の時どんな廻り方をするか、なぞと考へ乍ら一生懸命半制動の樣なものをやつて行く。時々少し赤味を帶びた雪の所へ來る。粉雪に似たものであつてステムターンが氣持ちよく味へるがそれも直ぐ終つて忽ちカンバリに入つてしまふ。チヨイ〳〵見える赤雪がどんなに待たれた事だつたらう。如何なる故に陽當らないわけでもない所に所々あゝいふ雪質が殘るかは自分には不可解であつた。岳樺の一むれを過ぎるとも水が一ヶ所も見えずに峠より丁度一時間の後に針ノ木の本谷に出てやつと開放された樣な氣分になつた。流石此の谷は陽當りも悪いと見えて雪質は良好でも着いては居なかつた。

夏期でも登山者が往々にして迷ふ此の牛小屋も積雪季に於いては尙其の可能性はある樣である。幾度かの轉倒のが出たので、再びスキーに蠟を塗つて約五十分の休憩の後出發する事にした。最も危險性の多いのは何と云つても牛小屋に至る所に底雪崩の凄いのが出て居て生々しい大木の折れたのが數多く倒れてゐるのを見た。去年の六月四日自分が此處を通過したときには大部腹の滅つたもの跡と大南澤の間である。去年の六

然し今はまだ底崩雪の時期ではない。

新雪表層雪崩の方も夜明けに降つたゞけのものではたとへ落ちても命には別状なさ相だ。一番心配なのは時間の關係上濕潤新雪表層雪崩である。地圖の上から見ても針ノ木岳南面直下のカラ澤から出てるのを恐れたわけであつた。然し幸ひは何處までも自分等に惠まれて居たのである。大町に來た時降つたあの大雪以來岳は一帶に晴天續きであつたので今は全く落ちるべきものは總て落ちた後であるのだ。

始めの內はステムボーゲンをする程の事もなくどん〳〵直滑降で滑りくだる。舟窪澤もすぐ越してしまひ忽ちの內にあの大きな岩のあるカラ澤までやつて來てしまつた。然し此の澤の出合は想像に反して平穩且つ無事と云はなければならなかつた。

雪崩らしいものは大概上の方で停まつてゐる。然し此の邊から又例のカンバリが始まつて來たには閉口したが峠の南面程ぎごちないものではなかつた。カラ澤の一つ西の大きな澤にも雪崩はあつたが谷までは延びて居なかつた。二時十分に牛小屋跡を出て丁度又一時間にして大南澤の出合に着く事が出來た。此の間谷は一面に埋まつて居たのであるから粉雪のみであつたら三十分もかゝらずに氣持ちよく滑つて來る事が出來やう。自分等は今度の旅行に於いて天氣運の良かつた代りには全コースを通じて思ひきり滿足の粉雪に遇はなかつたのは殘念であつた。要するに牛小屋跡と大南澤の間は思つたよりも雪崩の危險性の少ない所である。谷の狹い所は危險性がなく、其のある所は概して避難の餘地が充分あると云へやう。

大南澤に着いた時は一時に重荷がけし飛んだ樣な氣がした。然し實際に於ては此處から平までゞも可なり氣も

ちの悪い所があるのであつたが。

大南澤から立山方面の眺めも可なり立派である。直白な五色、イタドリ尾根（御山谷と中ノ谷との間のもの、そして中ノ谷から御山谷に越える所をイタヤ峠といふ。志鷹彌三太郎の話であつが芦峅の人はイタドリと云へず、にイタロレと云ふ）龍王、そして少し西側によれば一ノ越と雄山を見る事も出來た。

廿分も休んでからいよ〳〵平に向ふ、もう一時間もすれば宮本さんにも一年振りで會へるし里の話も出來ると思ふと何だか胸の中がわく〳〵して來る。大南澤から黒部までは雪崩の方の危險性は少いが其の代り谷が大部あいて居るので前と比較して時間は隨分餘計にかゝる。幾度かスキーも脫いだ。右岸の岩の記號の附近は淵の樣な瀧の樣になつて居るので左岸の急斜面をへつる時は餘り氣持ちのいゝものではなかつた。スキーを脫げば尚仕末が惡い所である。左岸の岩の記號邊りでは龜之助が重い荷を擔いだまゝ幸ひ流のすぐ上の所で停りはしたがづり落ちたには驚いた。最早平も近くなつた。黒部の本流も遂目と鼻になつてゐる。最後に右岸に移らうとした時に伊太郎は丸木橋を横に渡らうとしてスキーをはいた儘ザブンと川へ落ちてしまつた。怪我は無つたが全身びしよ濡れとなつたのだからさぞ辛かつただろうと思ふ。自分等は其の少し上で徒渉をして最後の谷渡りを終る。ヤッホーを連呼しながら龜之助と伊太郎の二人は自分の古巢へでも歸る樣に元氣にスキーを滑らして行つた。對岸には人が三人と犬が二匹ぢつとこつちを見つめてゐる。今は平にも釣橋が出來てゐるので籠渡の世話もなく又徒渉の必要もなくスキーをはいたまゝ一人〳〵いゝ、按排にゆられ乍ら懷しい黒部の左岸に移る事が出來た。三人の人達は去年も平で越年した重吉と光次郎の兄の彌三太郎と光次郎であつた。去

年雪の劔、立山、針ノ木と引張つて歩いて呉れた光次郎の陽やけした顔には再會の喜びが滿面に表はれてゐる。まづ〳〵と日本電力の小屋に案内される。宮本さんは相變らずの元氣で挨拶もさう〳〵にして例の晴れやかな『アッハヽヽ』を投げ出される。

斯くして四時二十分一行は無事にコースの半ばを完成して平の小屋に落ちつく事を得たのであつた。

平の小屋附近と其の生活

平の小屋附近と云つても自分はたゞヌクイ谷の一部を歩いただけであるから黒部の上流に就いては知る所が無い。先づ順序として廿四日より三十一日に至る小屋生活の大樣を語らうと思ふ。

着いた最初の日は非常な豪遊であつた。こんな山奥殊に冬季來て山海の珍味に打突かろうとは實に意外な事である。小屋の主人の宮本氏は自分等は遲くも廿六日頃には來るだろうと毎日心待ちに待つて居られて旨い物を澤山用意して置いて下さつた。松木、村尾の兩氏は里から持つて來てあつたものすごい酒を可なり呑んで醉ひつぶれてしまふ。最初の夜は同行の人夫二人も客人となつて宮本氏や光次郎彌三さん達に歡迎されていゝ氣持ちになつてオワラオワラと唄つて居た。飯も濟んで暫くすると花がルタをやり出す。薪ストーブのある食堂を出て宮本氏の部屋の隣りにある僕等の部屋で十二時近くまで毎晩やつてゐた。毛布は五萬とあるし奇麗な爐もきつてある

が然し硝子窓から外を見ると黒部の流れは常に耳許にとゞき大南澤の奥には不動岳の一角が白銀の如くにさえ

てゐる。雪積量は來た時には十三尺であつたが歸りにはあの窓外にある示標は十二尺を示して正直に減つて來して温度のために一週間の間に一尺減じたわけになる。毎日夕方になつてスキーにもあき腹もると皆小屋に戻つて來る。スキーを脱いで夏ならば梯子によつて達せられる一寸したバルコニーも今では雪面よてゐる。ストーブの周圍にね轉ぶ。湯ら二階に直接入り手入れをしてから柵にあげて置く。どつかりといふおふろも用意頭が田中薫氏それから僕等宮本氏人夫衆の順である。黒部の清流を湯にわかして入つた人もまだ少ない事であらう。湯を出ると暫くは雑談、そして夕飯、時々宮本氏御自慢の手製の豆腐が出る。非常に旨いらしいが豆腐のきらひな自分には解らない。宮本氏の從事して居る仕事は水量水速を統計的に記入して行く事であつて一週間居る間に機械の名稱も作用も大部覺えた。半年捲きの水準機といふものは中々に精巧に出來てゐるものである。

要するに自分等は雑用は人夫衆が皆やつて呉れたのでまるで大名生活の様に暮して行く事が出來た。全くこんな呑氣な生活は里のものには了解出來無いであらふと思ふ。一番當然でしかも珍しく感じた事は宮本氏等が年號の變つたのを知らなかつた事であつた。宮津の地震も勿論知らない。光次郎の如きは自分の子供が男である事もはじめて知つた様なわけで全く別天地と云ふ感を深くしたのである。

十月二十七日　ヌクイ谷

さして上天氣と云ふ程でもなかつたけれど今日は伊太郎を殘して全部がヌクイ谷へ入る事にしたのである。夜

明け頃降つた新雪がクラストの上にフンワリと乘つて居て氣持ちがいゝ。八時半頃宮本氏を先頭に出發した。小屋を出てすぐ小さな尾根を越しヌクイ谷の左岸に出る。谷も此の邊は少し割れてゐるがもの〻一町も行かぬ間に一面に雪を以つて被はれた谷となる。雪崩の出た跡も可なりあるが天候は非常に良くなつて仲々むして厚着では歩けない。

後を見ると案外の高さの所に雲に捲かれた針ノ木岳が顏を出す。ふと自分の頭に浮んだのはいつもお馴染のマッターホルンの寫眞であつた。全くあのシュピッツエの感じは其の儘今の針ノ木岳に移されてゐる樣であつた。

ヌクイ谷は階段的に奥へ奥へとせり上つてゐる。越中澤岳に續く尾根は殆ど皆北側に雪庇を造り今し盛に雪煙をあげてゐる樣であつた。底無しの晴空にたはむれる美しき雪煙を見るのは冬季山に入るもの〻、他に又となき憧憬の一つでなくて何であらう。ヌクイ谷の今頃は大した危險な雪崩の心配はない樣に思へる。事によれば刈安峠から落ちるのは可なりもすごいものであるかも知れない。途中休み〳〵であつたが小屋を出てより約三時間のアールバイトの後僕等はヌクイ谷の奥、木挽山の三角點より北にをろした尾根の西側の澤(ヌクイ谷の大澤假稱)の落合の地點に達したのであつた。地圖に依つては實際の感じは少しも見出せない。此の澤は出口は別として(非常に狹い)一體の感じが籠川谷の大澤に似た所が多い。彌三は此の澤は夏には餘り水はないと云つてゐるが積雪期に於ては北斜面であるし雪質は非常に良好であつた。ブーンと直滑降を飛ばしてクリスチャニアをやると僕等の使ふ言葉で表現すればまるでものすごく氣持ちがいゝ、其れ自身である。自分がやつて居る時はわからないけれども友のを見て居ると廻轉後暫くにして雪煙の中から直黑な顏が浮び出て來る。自分は頭に乘つて分に過ぎ

た直滑降をやつた爲右足を遂に坐折して了つた。可なりひどく眞倒樣に三四度廻轉したけれど雪が良かつた爲スキーは何んともなかつた。山へ入つての直滑降それも亂暴過ぎる程度のものは實に禁物である。人には誡めてゐる自分であつたが故にあまりこんな事は自慢にもならぬ樣である。此の澤の出口の對岸即ち岩壁の記號の間から出る澤は其の下部に於て非常に大きな手頃なゲレンデと思ふ。但し南面する爲雪質は餘り良好でなかつた。此處から奥は入つて見なかつたが平の小屋を根據として半日のプロムナードを行ふ爲の所としては推奬するに足るゲレンデである事は確心を以つて云ひ切る事が出來る。殊に歸りは三十分もかゝらずに平まで一本のシュプールを殘してくる事が出來るのはスキー登山家のみの味ひ得らるゝ快感では無からうか。

三月二十八日　五色ケ原

四時頃起きる。今日は光次郎と重吉が半年振りに芦峅へ出る日である。彼等は今日中に中ノ谷からザラ峠を越し、温泉を經て芦峅へ歸るのだ。自分等が芦峅へ出た日にきいたのであるが平を六時頃出て九時頃着いたと云ふから十五時間ばかり要した事になる。山の男でなければ出來ない仕事であらう。五色行きは彌三太郎が案内役。八時頃小屋を後にしてヌクイ谷に向ふ。殆んど夏道を通つて尾根の南側は木立を縫つて登る。所々に急峻な箇所あり。天候及び其の及ぼせる影響に依りスキーにての通過は可なり煩はしく刈安峠直下の谷に南面した所は樹木も少なく日光の直射の爲に思はぬ時間を費して峠に着いたのは十一時頃であつた。其の間登るに從ひ木挽の尾根を經て遠く三ツ岳赤牛等が姿を表はして來た。

峠の眺望は一片の雲もなく針ノ木は其の全容を表はし雄山の山稜が黒部に落ちて行くのがはつきりとする。小憩の後尾根を五色へと辿る。此處は去年の秋には既に夏道が出來てゐるのである。幾つかの突起の登りも大した苦勞もなく雪はゆるみであつてアザラシの後に入りスキーは可なり重くなる。

途中雪庇を二、三ケ所過ぎる。主としてヌクイ谷に面するものゝみであつた。第一の雪庇をよけてほんの少し北側をまいて通つた。昨日遊んだヌクイ谷の大澤を眞下に見る雪庇の下邊りで中食をとる。尾根より五色ケ原に入る附近は雪質カンバリと成つてゐるたが左程困難なものではない。五色の小屋が原の右手の窪みに小さく見える。原に入ると雪は風により波を打つては居るがしまつて居て氣持ちのいゝものであつた。

鳶の方へ少し向つたが時間もない故い、加減の所から降つてしまひ小屋に向ふ。此の附近にて遠く白山、富山灣を望む。

笠は最も立派に見えた。小屋は二階は殆んど出て居たが中はすつかり雪であつた。風も強く且寒氣も增して來たので三時半頃降りにかゝる。

立山温泉に向つた二人のスキーの跡が遠く見える。ザラ峠の附近は雪が固く少し東よりに中ノ谷に降つて行つた。所々に結氷面がある爲多少の苦心をする谷に降り着いてからは痛快なるボーゲンと直滑降を味ひ得た。然し之も瀧の上部までゞあり瀧を無理にスキーで降つた時にはもう日中とけた雪がカン〳〵に凍つてエッヂはまるできかず不愉快なる滑降を續けて平まで來てしまつた。

時に先着の松木は四時半であつた。宮本氏と彌三太郎が小舎についたのは其れから二時間位であつた。
之を要するに色五ヶ原行きは前記のコースよりも中ノ谷より五色ヶ原へ登り越中澤乘越よりヌクイ谷に降り平へ歸着する方がいゝ樣である。
（五色行は同行村尾氏の說明に依る。自分は右足の痛手の爲に三日間ねて居た。）

立山越へ

三月三十一日　弘法茶屋へ

今日は少しばかりの强行である。心配してゐた空模樣も二時頃にふと毛布から出て硝子窓から空一面の星の夜であつた。又今日も自分等は惠まれた樣だ。宮本氏も既に起きられて何かと自合意に手傳つて下さる。自分はヌクイ谷での足痛の爲に彌三太郎が板屋峠まで來てくれる事になつた。宮本氏の御好意である。六時の出發が少し遲れて七時となる。思ひ出深き黑部に別れを告げる時が來たのだ。僕等一行の出發用一人を小屋に殘して小屋を出た。不動の一角が南澤の奥に光る。刈安峠の小尾根をスキーを肩に見あげた時には谷にて再びスキーをつけ、一面に雪に埋れてゐる谷を少し左岸寄りに登り行く。進路が西北に向ひ、一ふと去年の五月自分と光次郎と田中氏が降つたヒラが存外急に見える。

其の時其れが爲に通れなかつた瀧の地點には今はすつかり雪がかぶさつて居て多少急傾斜であるぬいで直ちに容易に瀧上に達する事が出來た。高さは五六間位のものであつたが兩岸が狹く且つ急な爲四五月の

融雪期には危險な事であらうと思ふ。瀦の部分を無事通過し得又澤は右へ少し曲つてゐる。右岸からレが一本落ちて居た。やがて又左に曲つたと思ふとものすごい雪崩の跡があつた。之は左岸の急峻な斜面からたもので谷一面を埋め尚其の上に右岸の斜面にまでのし上げてゐる。雪崩の出には極めて狹いものであるが其の上が扇狀に廣がつて居て谷の中央では高さにして自分等の丈の二倍はあつた。スキーのまゝでは通れぬ爲に肩にして渡るひきしまつて居て宛然岩石の上を歩いてゐる樣であつた。濕潤表層雪崩の一種と見られる。少憩の後再び前進を續ける。やがて廣い扇狀の板屋峠（宛字御山谷乘越の事）の登りにかゝる。八時頃であつたがもう陽は高くそれに南斜面である爲餘計雪は重くなつて居た。南澤岳、烏帽子方面が南方に並立する。氣味惡い雪崩の動きが前後左右に見られる。一度一段上手の澤に非常な騷音が起つた。勿論雪崩であるがザーザーと云ふ音は餘り氣持ちのいゝものではない。峠の頂は下から見える所ではなく一度段となつて少しゆるい傾斜を登るとそこは遂に峠の頂上であつた。去年は光次郎と三人で此處から尾根を東に行つたのであつたが其の時とは隨分雪量が違ふ。龍王が馬鹿に立派に見える。一越の所の空と雪の接觸線を見て居ると實に何とも云えない。心の奥までが靑々と澄んでしまふ樣な氣持ちになる。一同記念撮影の後彌三太郎は再びもと來た道を平へと戻つて行く。僕の爲に心配して來てくれた彌三太郎に厚くお禮をのべる。九時にこゝへ着いて約三十分位の憩ひの後それ〴〵スキーをつけて御山谷に降つて行く。雪質惡く滑るには誠に具合が惡い。彌三さんは僕等の見えなくなるまで峠の頂に立つて手を振つてゐた。

さて御山谷の谷底まで降つてしまふと登りに可なりの損をするので約百米突位上の右岸の斜面を一越へと向ふ

事にした。

可なりに急な斜面もある。それに雪は益々融ける一方であるから頗る氣持が悪い。いつ雪崩を起して一緒に落ちて行かないものとも限らない。現に先頭のものはよくスキー巾の雪崩を落してゐた。足下から約三百米突下龍王の東下で御山谷は段をなして居て其の上に大きな岩が黒々と一つポツンと雪の上に浮き出て居る。自分等は其の直ぐ近くの龍王寄りの斜面で晝飯を取る事にした。十一時頃であつたらう。板屋峠からこゝへ出るコースは眞晝の前後近くにあつては可なりの危險性を含むと云つていゝであろう。今日の樣に晴れた日には尚更である。從つて谷底を遡るのも餘程の注意を必要とする龍王の岩壁直下よりも時々小さな雪崩を見る。約一時間の呑氣な晝飯の後一越に向ふ。廣大な斜面、何度も云ふ樣であるが去年の滑降を思ひ出す。板屋峠の登りで自分はアザラシを切つてしまつたがまだ使いものになるので殆んどまつすぐに登つて行つた。淨土と雄山の間には一つ眞白な隆起がある。

一越は其の右手だ。右足が具合の悪い爲皆に荷を分擔してもらつて居るので樂に一越へ着いてしまつた。一時頃であつた。何はともあれ室堂はと見れば薄氣味悪い程大きな雪波のうねりの一點に小屋は屋根の横木のみを見せて居る。はじめての人には一寸何んだかわかり悪い事と思ふ。帝大の岡部氏の一行が多分來て居るだろうと田中さんが云つた通り暫く見て居ると屋根の上の棒の樣なものが四つ五つ動き出した。さてもう來て居るんだなと思ひ乍らオーイとどなるとたしかに返事が聞える。一寸ボーゲンをやつて見る。今日の行程の中では最もいゝ雪質であつた。外の連中は雄山まで登る豫定であつたが愚圖〳〵して居ると弘法まで骨が折れるので皆一せいに

室堂まで降つてしまふ事にした。大日の雪ひだを眼前にし乍らドン〳〵ボーゲンをする玉ころがしの如く。浄土川に降つてしまふと室堂まで一寸登らなければならないので注意して浄土の北斜面を斜滑降して一度一寸降つて登るともう室堂である。一越から見えた一行の人々は帝大の入澤氏波多野氏外人夫が七八人であつた。岡部氏は都合で遅れたらしい。一行は今しがた弘法から着いたばかりで人夫衆は盛に小屋の堀出しに忙しい。田中氏と一行とは學習院時代に同じであつた爲め話がはづみ暫くの休憩の後再び弘法に向つて滑りはじめる。天狗ビラ附近を呑氣に滑つて居る時遙かに下の彌陀原を瞰おろすと原のつきる邊り雲の海がせまつて居て何んとはなしに日本の山を歩いてる様な氣がしなかつた。雪量に於ても五月とは大部異り點綴する梅もはるかに少いものであつた。大日の南面は殊に其れが著しい。岩壁の露出もあまり見えなかつた。鏡石あたりの上部で懐しい劍に見入つて居るとピッケルを振つて鶴ケ御前の南壁をよじた時の氷との闘ひが眼前にちらついて來る。

追分附近を瞰下す所から急な降りとなつた。入澤氏一行のジグザグの跡を見る。ずつと南に高度を利用して追分小屋附近に出た。今は屋根も見えない。自分等は小屋を横切つた事に成る。松尾を見る度に板倉氏の遭難や横三田氏なぞの悲壮な奮闘を思ひ出す。此の廣い彌陀原と吹雪との闘ひでは到底人間はかなわぬ事を泌々感ずる。自分等は何と恵まれた事であらう。

一點の雲もない青天井の下で暑い〳〵と文句を云ひ乍ら蠟のとれてしまつたスキーの滑りの悪いのをかこちつゝ弘法さして降つて居るのである。やがて一寸した疎林を過ぎると行手にあたつて長い一本の棒が雪原の上に突き出て居るのを發見した。小屋だ。もう五時に近い頃であつた。彌陀原に於ける三月は海に於ける大うねりに

も等しいものだ。實際冬の山を知らぬものには海とより外思えない。部員ですらも寫眞を見て居た程である。弘法茶屋は今は下へ入る事は出來ず屋根裏に窓から這い込まなければならないのであつた。今日は三月に水をのみ、汗のものはすつかりぬいでしまつて皆で小屋の外に出る。やはり藥師は立派であつた。も終りの日、其して明日はいよ〳〵暫く別れて居た里へ歸る日である。最後の山小屋、自分等根裏に寢そべつて人夫衆の飯の仕度を見入りながら呑氣に山の讃美歌を口づさんで居た。

後記

弘法茶屋より芦峠まではあまり長くなるから省略する。材木板の舊道はスキーを擔いで降つカシアナとか云つた樣に記憶する）がある爲困つた。藤橋で一ぷくして芦峠まで二度ばかり道あつた爲河原に下りて無事今度のスキーの旅は終りを告げられつて居てくれた。声：では先に下つた光次郎や重吉君なぞが待

（昭和二年九月一日脫稿）

鹽見岳より赤石岳まで

芋川稔一

中央線での寢不足のため、始終ウト〳〵してゐた。其の中に伊那大島の驛に下される。リユツクサツクの持主は一人もゐない、多分赤穗あたりで下りたのであらふ。驛の腰掛で身仕度をしてゐる中に、一所に下りた數人の土地の人達も、今迄自分を乘せて來てくれた伊那電車も、皆姿を消してしまつた。今電車が出たばかりの驛とは思はれない。リユツクサツクに押し潰されさうになつて、片手には大きな風呂敷包みを持ち、片手で汗を拭ひ〳〵、いともあはれな山男は大河原に向ふ。

大河原まで

驛の前の路を右に折れて坂を下れば、立派な郵便局のある四ツ角へ來る。此處からは地圖にある神社の社が見えるので、其を目あてに無鐵砲に進んでも迷ふ事はない。次に此の神社の前まで來れば天龍川に架つてゐるコンクリートの立派な釣橋が見える。又此を見ながらドンドン下つて行く。橋を渡れば、其處から直接部奈に通じてゐる小道があるが、氣附かずに通り過ぎてしまつた。此の小道は歸途に通つてみたが可なり急であり、殆んど藪の中を通つてゐるので、此の道に氣附かなかつた事は却つて幸だつたらふ。重いリユツクサツクを背負ひ、風呂

數包みを持つて、藪の中で蒸し殺されさうになつてゐる自分の姿が目に附く。

此の小道に氣附かずに本道を部奈に向ふ。道はよいが長いのでたまらない。驛から部奈まで一里以上あるので あるから此の道が如何に迂遠なものであるか分らふ。此の道は部奈を通過して、下峠、中峠、上峠を徑て大河原に至るのである。部奈の部落に入つてすぐ本道から左に折れて部奈の久原事務所に行つた。此處からはトロッコに便乘して大河原に行くつもりであつた。部奈からはトロッコから見える小澁川の景色等を心の中に描いてゐたのに、事務所でのの話に依れば最近道が悪くなつたのでトロッコには人は乘せないとの事である。止むなく荷物だけ賴み、歩いて大河原まで行く事にし事務所を出たのは十一時過であつた。

地圖に出てゐる道を取らず、トロッコ道に寄つて大河原に向つた。部奈の事務所から二三町も來ると、道は小澁川の左岸に出る。小澁川は遙か下を大きなメアンダーを作りながら、赤石の源から灰色の水——數日前まで山が荒れてゐたので水は物凄い灰色をしてゐる——を、後から後から流して來る。左右の小さな澤からも、其の灰色の水のため直に濁らされてしまふ。此の樣な透徹る谷川の水がいくら持ち込んでも、小澁川は其の神秘な水の色を少しも變へず、下へ〳〵と流れて行き、遂には天龍川の水色をも變へてしまふのであろふ。此のトロッコ道は地圖大河原にある瀧澤の南の方にある大きなメアンダーをしてゐる地點で小澁川を左岸から右岸に渡つてゐる。此處に可なり大きな釣橋が掛つてゐる。部奈から此處まで約三里の間途中トロッコの交換する所に五六軒の家があるだけで、其の外には人家とては一軒もない。荷物を皆トロッコに預けてしまつたので

食物は一つもない。部奈であまりゆつくりしてしまつたので、太陽は自分の影を餘程長く地に引いてゐる。小澁川を右岸に渡り、三十分程で桶谷のはづれにある一寸した茶屋の様な家に上り込み、鑵詰づくしの晝食をする事が出來た。此の家の後手に橋があり、北條坂を通つてゐる道は此の橋を渡つて、トロッコ道を合し大河原に向ふのである。一時間ばかりの無駄話の後、大河原に向つて家を出た。此處から、鹿鹽大河原の分岐點落合までの間は可なり面白い所である。小澁の流にも色々變化があり、灰色の渦巻く上を朽ちた板に神經を尖らせながら渡る棧橋もあり、又雫の落ちる大きな岩の下を道が潜つてゐる様な所もある。

間もなく落合に來る。鹿鹽川と小澁川との合流點である。此處には新らしい宿屋が三四軒ある。右に折れて鹽川を渡り、又小澁川に沿つて進む。もう小澁川も此の頃になるとあきて來る。其の小澁川とも分れて大河原の田の中の道を進めば、大河原の對岸にある大きなガレが目に入る。大河原の人家は段々間近くなつて來る。三時頃の大河原はまるで晝寢でもしてゐる様である。大河原を貫く唯一の大通にも人影は殆ど見えない。宿るべき丸川屋は市場の一番はづれにあり、二三軒先にある赤岳會の事務所に寄り、再び戻つて丸川に足を投げ出したのは四時頃であつた。

三 伏峠へ

十一日に大河原に着き、十二日は一日後れて東京を立つた友を待合すため滯在した。一日中宿屋に閉籠つてゐたので十三日大河原を出發する時には自分にも、元氣が體中に充ちてゐるのが感じられる程であつた。併し此の

元氣がどの位長持するかと思へば、いとゞ心細くなつて來る。

地圖には大河原から上藏を經て。此處で釜澤への道と分れ、鳥倉山の南方にある澤（シヨ澤）の水源を通過して、殆ど一六〇〇米の等高線に沿つて走つてゐる道がある。三伏峠へ行くには此の道が最も樂に思はれるが、今では途中道が破損して居て、通る事は出來ないとの事である。五吾々は、テラ澤（釜澤の澤の字の西の方に落ち込む澤）の少し先で、小日影銅山への道と分れ、豐口の南方のガレの下で地圖上の道と分するものを取る事にする。

大河原から二十分もすれば上藏に達する。道は上藏の部落の下の方を通過して居り、山の中腹に多くの人家を眺めながら進む。上藏の人口にある神社（醫王山福德寺）で一息入れる。案內者の話に依れば左甚五郎の作つ社そうである。上藏から四十分許り進めばひなた休みと呼ばれる所に達する。此處はちよいとした峠の樣になつてゐる所の內側になつて居り、風は當らず日當りがよくて、冬はひなたぼつこをするのによいのだそうである。前茶臼、奧茶臼が並んで見える。高さは低いが其の美事なガレのため、前茶臼の方が遙に吾々の目を喜ばしてくれる。猶ほよい道は小澁川に沿つて先へ〳〵と吾々を導く。釜澤の手前に小澁湯への分岐點がある。此のあたりは米山と云ふのである。古は釜澤には米が出來なかつたため、豆を作り大河原の方面に出來る米と交換したのである。其の時の交換した場所が今の米山なのである。氣持よく下つて行く小澁湯への道を右に見下しながら釜澤の人家の方へ進む。道は部落の最上部を通つてゐるので二三軒の家の前を通つただけで、もう釜澤を通過してしまつてゐる。道は部落の幅が廣く、傾斜はゆるやかである。テラ澤に至るまで以前として幅が廣く、傾斜はゆるやかである。テラ澤に着い

たのは九時半。少し早すぎるが第一回の晝食を開く。

此處から漸く道は上り始める。テラ澤を横切る地點から十分も進めば小日影銅山へ行く道とのの分岐點に至る。此の邊は山火事のあつた所で大きな木は殆んどなく、眺望がよくきいて登つて行くのも氣持がいい。一七六〇と一七六〇との二つの突起の間を經て豐口山のガレの下へ出るのである。道は最初の中は一七〇〇米の突起に向つてグン〳〵上つて行く。そして地圖に出てゐる岩の下を左に卷いてテラ澤の支流を渡る。此から先は水がないと云ふので、充分水を蓄へてゆつくり休憩する。此の澤に沿つて、かなり上の方からサデがテラ澤との落合で出來てゐる此のサデの上を皮をむかれた材木がすべつて行くのは壯觀であらふと、崖の上から遙か下まで續いてゐるサデを見ながら考へる。

一時間も休んでから又歩きだす。ガレの下まで澤を登つて行くのだがサデがあるので大抵はサデの上を歩いて行く。立派な材木で出來てゐるのでビクともしない。ガレ下に着いたのは一時少し前であつた。これから道は森林帶に入つて行く。暗い針葉樹林に入つた上に、天氣も少し惡くなつたので餘計あたりは暗い感がする。此の頃から重い荷を負つた案内者は可なり後れてしまひ、吾々は道を違へはせぬかと、輕い不安にかられながら、心地よいジメ〳〵した苔の上を進んで行く。豐口山の東の鞍部に着いたのは二時過ぎである。此の頃から霧が掛つて來た。そして鹽川の谷を神秘の中に埋めてしまつた。三伏峠への上りにかゝつた時分には霧の雫も雨と變つてしまひ、咽喉の乾きも止まつた。顏に落ちる雨を拭ひ〳〵三伏峠へと進んで行く。

忽ち霧の中に廣々とした草地が現れる。ぼんやりした白く塗つてある柱に近寄つてみれば三伏峠頂上としてあ

る。此處より約二町としてある三伏の小屋へとひた走りに雨の中を下つて行く。隨分長い二町を下つて、小屋の形が見えたときには、其と同時に其處から上つてゐる焚火の煙が目に附く。人が居るなと云ふ懷しさと、後から小屋に入る時の氣持とが重り合つて胸に起つて來る。そんな事を考へてゐる中に小屋に着いてしまつた。案内者の來るまで、濡れた物を焚火で乾してゐる間も、何となく落ち附かぬ。後から來る案内者がまるで自分の親身の者でゞもあるかの樣に、懷しみが生じ待ち遠しくてならない。

鹽見澤より鹽見岳へ

昨夜から大した降りはないが、始終霧が立ちこめてゐる。目の前の富士見岳も姿を現したかと思ふと、又すぐ雲にかくされてしまふ。昨日下つて來た三伏峠の頂上すらはつきり見えぬ位である。とても此んな具合では鹽見へ登つても眺望もきかぬから一日滯在ときめる。併し屋根も完全でない此の山小屋に一日滯在するのかと思ふと情無くなつてしまふ。其の中に雲が切れて日が出て來る、出發しやうか、止め樣かと迷つたあげくいよ〳〵出發ときめ、何も持たずに小屋を後に澤を下り始めたのは、九時半過であつた。

一時間足らずでゴンエモン澤との合流點に達する。此より少し前から、鹽見岳は目の前に其の姿を現し始めた。嚴めしい、そゝり立つた其の輪廓に見とれながら行けば、危く岩から足を滑らしさうになる。

なほ十分も進めば鹽見澤が左手から流れ込んでゐる其處には何處かの青年團の立てた、鹽見岳登山口と云ふ杭

が立つてゐた。此處からはしばらくの間鹽見の姿は見えないが、グン〳〵つて行くので氣持がよい。赤石山系北方の盟主鹽見岳の頂上に身を置く事が出來るかと思へば、心も浮き立つて來る。其の中に左右に分れる。左手の澤を登り水の無くなる少し手前で晝食にする。此の邊から眺望は段々によくなつて來る。ふりかへれば、三伏峠、富士見岳、小河内岳、大河内岳、板屋岳はずらりと並んでゐる。此の方面から見た此等の山々は、傾斜もゆるやかであり、奇麗にハヒ松に覆れてゐるので、何となく優美に思はれる。併し其の左手には、荒川岳と惡澤岳とが嚴然と控へてゐる。

眺望がよくなるに從ひ、灌木は次第に低くなり、可憐なクロユリの花さへ目に附く樣になつて來た。そしてあたりは何時の間にか一面のハヒ松である。今迄は一列に並んで道を進んで來た連中も、互に思ひ〳〵の道を上り始めた。頂上に近づけば近づく程元氣は出て來る。併し後をふり返つて見れば、明日通る三伏峠とか荒川岳への尾根が、吾々の足を止めてしまふ。

鹽見岳の頂上に腰を下したのは二時少し前であつた。頂上に着いても、暫時は晝寢の暇もない。此の頂上を取り卷く山々を眺めるので忙しい。三峯を經て仙丈岳に至る尾根は三峯の所で一時雲に隱され、其の先は再び現れて、最後には仙丈岳が雄大な山容を横たへてゐる。仙丈岳のガールに殘つてゐる雪は、何とも云へぬ心地よさを自分に與へてくれる。頂上のすぐ下で此の尾根と分れる蝙蝠岳への尾根は、ハヒ松に其の上を覆れたゆるやかなものであり、蝙蝠岳は其の先端に靜かに控へてゐる。其の中に雲が晴れて間の岳、農鳥岳、廣河内岳、大籠岳日河内岳などが現れた。併し間の岳だけは直に雲に包まれてしまふ。

日に輝らされて暑くし弱つてゐたが、其の中に段々涼しくなつて來た。ふり返れば後の方雲に包まれてしまつてゐる。

此の時仙丈岳の右手に眞白な姿を現して來た駒ケ岳が最后に吾々の目を喜ばしてくれた。はなく、唯ひや〳〵する霧の走るのを見るばかりである。一時間程此の頂上に滯在し、思ふまゝの眺望と、第二回目の晝食の後、歸途に就く可くゴンエモン岳への尾根を下り始めた。岩のゴロ〳〵した急な斜面は上りよりも下りの方がかへつて體にこたへる。ゴンエモン岳と鹽見岳とのと間にある突起の邊で、此度鳥に會つた。子供を連れてゐる雷鳥の可憐さは、お花畠に咲き亂れる高山植物と共に、吾々の心を慰めてくれる、そして又吾々が山嶺のそゞろ歩きを思ふ時、直に頭に浮んで來るものである。山に入つて最初に見た雷鳥からは仲々離れる事は出來ない、雛を手に取つてみたり、親鳥をカメヲに入れるため苦心して近づけたりした後、思ひ出した樣に又今迄の道を進み始めた。

ゴンエモン岳への登りから道は森林帶に入つてしまふ。日光に晒されながら暑いハヒ松の尾根から、ジメ〳〵した森林帶に入つた心地よさは何とも云へない。併し天候の思はしくない此の時の森林帶は何となく陰氣であつた。下つては上り、上つては下る眺望きかぬ尾根道にはすつかりまいつてしまふ。ゴンエモン岳をうまく卷いたのに味をしめて、上りにかゝればすぐ卷いてしまふ。併し卷いたゝめに節約出來た時間は、引き返したりするために造作もなく費されてしまふ。本谷山に着いたは五時二分でつた。此處はかなりな眺望がきゝさうであるが、一面の霧ではどうにもならぬ。先へ〳〵と三伏の小舍に向つて進むのである。

小舍へ行くには二六一五米の突起まで行かずに、中俣に下る道をとるのである。其の道を思はず通り過ぎてしまつた吾々は、二六一五米の突起に向つてかなり登つた後、澤に向つて急傾斜を轉る様に下つた。漸く澤に下り着いた時、三伏の小舍は二町ばかり下に焚火の煙を上げてゐた。

高山裏までの尾根傳ひ

小屋から三伏峠への道を七八分も上れば富士見岳への道が分れる。此の邊からあたりは灌木帶となる。少し進めば餘程氣を附けねば分らぬ様な小徑が、富士見岳への道と交叉してゐる。此が地圖に出てゐる點線の道である。昔は、甲州街道の間道で人も割合に通つたそうだが、でではあるかないかの小徑である。

一面に灌帶なので、目的の尾根は目の前に其の姿を横たへてゐる。尾根の上に登り着けば視界はパッと急に開ける。眺めたいのを我慢して富士見岳への頂上まで行く。此處までは三伏小屋から一時間もあれば樂に來られる。

鹽見岳は中俣を間に挾んで富士見岳と相對してゐる。雪は無いが何となく威嚴のある嶺である蝙蝠岳は其の右手に見えるが、餘り見ばえがしない。鹽見岳の頂上から見た形が一番よい様である。ふり返れば、今日足跡を殘して行く可き尾根が、大きな曲線を描いてゐる。

しばらくして小河内岳に向ひ尾根を下り始める。一面のハヒ松であるが、道はよいし、一點の雲も無い快晴であり、心地よい風は汗だらけのシャツを、ヒラ〳〵なびかせてくれるので、唯愉快でたまらなくなつて來る。疲勞

も忘れて進みに進む。併し目の前に見えてゐる小河内岳は、仲々近づいては來ない。一時間の後、其の頂上に着いた。此の小河内岳と云ふのは、地圖の小河内岳の北にある突起である。案内者は此を小河内岳、地圖上の小河内岳を大河内岳と云つてゐる。

今日は昨日と違つて、雪が豐富にあるのでコップに一杯つめ、口の中へはドロップを入れて、ボートラップか何かのつもりでガリガリかじる。そして周圍の山々を眺めてゐる。實に天下泰平の形である。一時間近くも此の頂上で休んでしまひ、又高山裏への道を進む。

十時二十分大河内岳へ着く。三角點のある所は風がひどくてゐられない。東側に平な所があるので此處で晝食をする。食後、ゴロリとなつて青空を飛ぶ雲を見てゐる中に、昨夜の寒さのための寢不足のため、何時しか淺い眠に落ちてしまふ。風は當らず、太陽は照りつけるので、體から汗がにじみ出る樣な氣がする。それでも、日影へうつる氣にもならぬ。皆汗だらけになつて日向でねてゐる。又横になつてしまふ。此も山旅の中の一つの樂である。皆が一度に起き上つたのは二時間半も後の事である。仲々睡氣がさめぬ。岩に躓いて危く倒れさうになる度に、睡氣は一枚一枚薄らいでゆく。そして目の前の景色も段々はつきりして來る。此から先は森林帶ばかりである。小日影山も板屋岳も、此の方面からみては一寸もはえない。

ハヒ松の上を飛んでゐる中に、何時しか吾々は森林の中にうづまつてゐる。

二時少し前に小日影三角點への分岐點へ來る。此處から板屋の手前までは割合に面白い所である。案内者は此

の邊を屏風と云つてゐた。大河内岳の方から見ては、こんな崖があらふとは夢にも思はれない屏風の上を歩いたり、或は灌木の中を左に巻く。屏風のかげで第二回の晝食をすませて、三時發する。

雪のため、どの木も地上から一間位の所までは枝も生えて居らず、幹の色も變つてゐる。雪に覆はれた冬の景色を心に描きつゝ進む。道は板屋岳の頂上を通らず其の少し下を通つてゐる。

高山裏までは始終此の様な森林帶である。同じ様な尾根道にいゝかげん厭きた頃、左に向つて今宵の宿たる高山裏へ下る。

此の高山裏の小舍は三伏峠の小舍から丁度よい巨離にあるが、時によると水の無い事があるので、其ほ小西俣水源の野營地まで行かねばならぬのである。

幸なる哉。行手には、快晴の空の色を映してゐる眞青な水が湛へてゐる。

此の小舍は、あたりが晴れ晴れしてゐて、三伏の小舍よりも遙に氣持がいゝ。小舍の前も廣々として居り、其の先には、水が池の様に一杯湛へてゐる。今宵こそ、山小屋の一夜を享樂出來ると思ひ、一人ほゝえむ。焚火も昨日よりは燃えがいゝ。

惡澤岳往復

昨夜はゆつくり眠られたので今朝は早く出發するつもりで仕度をしたが、後の始末をして忘物のないのを慥め

たのは、七時を二十分も過ぎた頃であつた。直に左の斜面を登り、二五〇〇米の邊からは左へ巻き始める。間もなく小西俣水源の野營地へ出た。此處は水は豐富であるが、傾斜も比較的急であるし、木もかなり茂つてゐるので、野營してゐる氣持は餘りよくないであろふ。道は平であり、且つ幅も廣いので歩きいゝ。

今日荒川岳に向つて登るべき、ガレの下へ出たのは一時間の後であつた。此處には二ケ所に大きな殘雪があるで雪も食べたくないため、素通りをしてしまふ。

いよ〳〵此處から一直線に登るのである。途中までは灌木もあるので、岩があまり動かず樂に登れる。此の灌木の無くなる頃には後方の景色も、段々に廣がつてくる。鹽見は依然として吾々を見つめて居る。屏風も此の方面からはよく見える。仲々立派である。

これから上は道がいくつにも分れて居るが、なる可く左の方をとつた方がよい樣である。右の方をとれば早く尾根の上が歩き難い樣である。其の上に立てば、荒川岳、惡澤岳、大聖寺平、赤石岳などがどんなにかよく見えるであらふ所の尾根は、吾々の目の前にありながら、仲々吾々を近づけ樣とはしない。

荒川岳、惡澤岳への道と、大聖寺平への道との分れる所に着いたのは、十時を過ぎた頃であつた。此處で晝食をする。此の地點に就き特筆したいのは、雪の美味い事である。荒川岳への道を少し下つた所にあるのだが、細かくて、口に入れるとすぐにとけてしまふ。つまらぬ事だが馬鹿に美味かつた事は事實である。

一時間休憩の後、水筒だけぶらさげて出發する。十分足らずして荒川岳の頂上に達する。行く手に惡澤岳が控えて居ては、荒川岳の頂上で腰を下す氣にならない。直に惡澤に向つて岩尾根を下る。所々雪が

残つて居る。悪澤岳と荒川岳との間の最低部に近づくに縦ひ、あの斜面が登れるかしらと不安にかられる位悪澤の上りは急であ る。併し距離が短いので、體は大して疲れずに頂上まで行く事が出來る。荒川岳からは一時間ばかりの努力であ る。

悪澤岳の頂上に立つて、干枚澤岳に至る尾根を見下した者は、先づ第一に驚いて言葉もないでらふ。まるで、地獄の針の山とでも言はふか。到底吾々の筆では書き現せない光景である。皆、凄い〳〵と云つて眺めて居るばかりである。此處から悪澤の池と云ふのが、青く水を湛て居るのが見える。何んでも此の池には主が居て、時々、池の中から水を噴き出すとの事である。不幸にして水の噴き上るのを見ずに、荒川岳への歸途についた。歸りも往きと殆ど同じ時間を費して、大聖寺平への分岐點に着いた。

大聖寺平へ

再び再びリュックを肩に、大聖寺平の石室に向つて下る。此處も亦、地圖には書いてないが可なりのガレである。神經を尖らせながら、尖つた岩の上を飛んでゆく。第一の鞍部に着いた頃から霧が、小澁川の方から吹きよせて來た。そのため、小澁川の方面は少しも見えぬが、東方の斜面にあるハヒ松の綠は、濃くなり、薄くなり、吾々の目を喜ばせ足を霧の中に止める。先を歩いて居た友の姿が見えなくなつたので、周章てて追ひ掛ければ、友は霧の中から、目の前に姿を現す。

第二の鞍部（第一の鞍部と大聖寺平との間にあるもの）から、石室を目ざして斜に下る事が出來る。併し石室

が霧のため明瞭でなかつたので、吾々は次の突起まで登り、其處から一直線に下つた。

此の石室は柱、天井などには木材が使つてあるが、周圍を完全に石でつゝまれて居るので、荒川岳や惡澤岳の頂上からは、最初の者には見分ける事が出來ない。間の岳の石室などの比ではない。間の岳の石室の三倍の廣さは十分にあるであらふ。

明くる日はゆつくりなので、此の夜は爐邊の話が長くつゞく。小舍の中の燈を消した頃、煙出しの穴からは、いくつもの煌く星が見え、月は大聖寺平を照らしまるで日中の樣である。

赤石岳へ

拜み所で御來光を拜むと云つて三時頃出て行つた連中もある。其の騷もすんで又ウトウトしてゐると、五時頃に赤石岳に向ひ大抵の者は出發してしまつた。其の後に殘つたのは、吾々の一行のみであつた。朝食をすませ、晝食を作つて、石室に別れたのは八時近くであつた。

少し登つて水のある附近に荷物を置き、晝食の場所と定め、赤石岳に向つた。

大聖寺の平から塚を經て拜み所に向ふ道と、直接石室から拜み所に至るものと二つある。直接拜み所に行く道をとり、上り始める。此處から拜み所までの登りは、一番體にこたへ、又距離も長い。併し、岩間の高山植物は僅に吾々の疲を慰めてくれる。拜み所までは一時間近くかゝる。此處は別に高くなつてはゐないが、奥西河内の絡谷に面して居て、御來光を見るのに部合がよいだけの事である。今迄は窪を通つてゐたが此處からは赤石岳ま

で、すべて尾根道である。拜み所から五分も行けば劍ケ峯と云ふのに達する。社があり劍がさゝつてゐた。此處から下ると次は小赤石への上りである。此の尾根の東の方には可なりの殘雪があり、今朝百間洞を出發したらしい何處かの學生が、グリーセードで下つて來る。

九時過ぎに小赤石の頂上に達した。こゝからは赤石の頂上にゐる人がよく見える。さすがは南アルプスの盟主たる赤石岳である、今日石室からの途中、四五人の人と出會ひ、今も赤石の頂上に數人の登山者が動いてゐる。こゝから下れば、次はいよ〳〵赤石の頂上への上りである。此の上りは殆ど一直線であるが、道はよいし、傾斜も緩かなので、早すぎる立に頂上に達してしまふ。

地圖でも分る樣に、此の頂上の南方は平になつて居り、殘雪もかなりある。天候の惡い時は此の平で道を迷ふとの事である。現に百間洞から來る人達でも、直接に頂上に來れはよいのに、遠廻りをして來る者さへある。去年、大倉喜八郎氏が來た時の記念であらふ、二本の棒が立つて居り板に狂歌が書いてある。其の上、其の板には硝子がはまつてゐる。なほ此の事で思ひ出したが、小赤石から東方に出てゐる尾根に、立派な道がついて居る。幾日も幾日もあるかないか分らぬ樣な道を步いて居る吾々には、このはつきりした道がどんなに不思議に見えたであらふか。此もやはり大倉喜八郎氏か赤石岳へ登山の時の道との事。

頂上から南方を望めば、百間平は其の雄大な姿を眼下に横たへ、其より百間洞に下つた尾根は急に再び起き上り、大澤岳、丸山、兎岳と連り、其の先には聖岳が嚴然と、赤石岳と覇を爭はんとして居る。此の先、尾根はS字形を描いて上河内岳に至り、其の影に姿を隱して居る。ふり返つて北を眺めれば、其處にも亦、吾々を喜ばし

てくれるいくつもの峯々がある。目の前の小赤石岳を中央にして、右方に悪澤岳、左方に荒川岳が屏風の様に並んで居る。なほ此の二つの峰の間には、白峯三山の間の岳と農鳥岳とか見える。北岳が間の岳に隠れて見えぬのは如何にも惜しい氣がする。荒川岳の上には、鹽見岳が、僅に其の上端をのみ表して居る。其の右には甲斐駒や鹽見岳が、僅に上端をのみ表して居るに反し、仙丈岳は、荒川岳の左に其の雄大なアウトラインを青空に描き出して居る。

小澁の湯まで

一時間の後、此の山頂に惜しき別をつげて、大聖寺平まで同じ道を下つた。平で雪どけの水を沸し、晝食をする。正一時、いよ〳〵赤石の山々に別れを惜しみつゝ、小澁川に向つてガレを下り始めた。此のガレを下りるには樂である。高度の書いてある尾根に至るまで、此のガレを斜に下つてゆく。

尾根に着けば、こゝは一面の灌木である。道が急なため下りでも時間は仲々かゝる。

間もなく針葉樹林帶に入る。大聖寺平から三十分ばかりにして平になつて居り野營も出來る所であり、此處からは荒川岳から大聖寺平へかけての、立派なガレが、太い針葉樹の間から眺められる。なほ急な道を下り、廣河原の白い河原が見えだしてからも、仲々河原には着かない。谿流の音も、早くから聞えて居るが、何時になつたら清らかな水を見る事が出來るか分らない。道は森林の間を先へ〳〵と縫つてゆく。舟窪から一時間半も下つて漸く廣河原に出た。河原に出る手前に小舍がある。こゝへは最近縣で立派な小舍を作る

との事である。

こゝから小澁湯まではいくつかの徒渉をしなければならない。普通ならば膝位の樂なものであるが、數日前までの荒れの影響で、まだ水は多い。下から來た者の話によれば、下半身は大低濡れるとの事で、夫れを覺悟して小澁湯に向つたのは三時過であつた。夕日は吾吾の前から輝り附けるが、水はつめたく足はいたくなる。

四十分の後、高山澤が小澁川と落合ふ所まで來た。高山瀧はかなりの高さから落ち込んでゐるが、水は少ないがさすがは地圖に乘つてゐるだけあつて立派な瀧である。黒ベイサ、赤ベイサなどの澤を右に見つゝ下つてゆく。初の十回程は面白かつた徒渉も、終には厭きてくる。そして左右から落ち込む澤は、益益水をふやすばかりである。四時二十五分板屋谷を右にみる。

かくて二十一回の徒渉の後、小澁の湯の宿に着いた。湯は右岸にあり、宿の下で小澁川を左岸から右岸へ渡るのである。

宿は二棟になつて居り、一方は帳場と客の部屋、他は風呂場と客の部屋とである。宿を經營してゐるのが、八十を越した耳の遠い、、足の惡い爺さんである。しかも彼一人であるから驚いてしまふ。帳場もやれば、風呂もわかし、掃除もする。其の上、氣むづかしいため他人が手を出すと怒るとの事である。無論自炊であるから、山小屋と同じ夕食をすまして、夜は久し振りに蒲團にくるまり夢を結ぶ。

大河原に出づ

隣の部屋にゐた田舎の青年團の七八人連れは朝早く、赤石に向つて出發した。煩い出發眞際の騒もすんで再び寢込んでしまひ、九時頃に漸く起き出して、ぬるい湯に入つた。

朝食をしてゐる時、下へは赤石行の七八人の登山者が來て、晝食をしてゐる。十時二十五分、お爺さんに別れて宿を出た。此の爺さんは「地球が廻ると云ふ事が分らない。どうして地球の下へ來た時、人間が下へ落ちないのか」と云つて案内者と爐邊で、昨夜不思議さうに話したさうである。

宿の後を一二町も登れば道は下り一方となる。丁度、釜澤からテラ澤までの道と同じ樣なものである。一時間の後、三正坊大權現の社（釜澤を渡る手前の鳥居）の木影で汗を拭ふ。

暑い下界の日に輝されながら、汗をかき〳〵釜澤の部落まで登り、數日前、希望に醉ひつゝ歩いた道に出で、上藏を經て大河原の市場に入つたのは、暑い〳〵一時近くであつた。

北海道の旅

近藤恒雄

七月の初頃今夏登山計畫のビラが食堂に出たか其の一番最後に十二班北海道の山山として誰も參加しないだらうと豫期しながら而も參加者の無い事を希ひながら、出さんでもよい事を掲示してしまつた上は何か書かなくてはならぬ樣な氣がする。

實は避暑のつもりで出掛けたので上野驛を立つ時は餘り登山には氣乘りして居なかつたがあの裾野を飽迄引いた北地の山を見た時然して熊が各所に出る事を聞いた時、色色な意味で一時に登りたくなつたのである。勿論是等の山々は澤山の人々が登るので大きな道が頂上迄ついて居る。登るには少しの困難も感じないに受けながら土地の案内人と熊狩りの事やそれに連らなる色々な話を聞きながらポツリ〳〵と山路をたどる時其處に限りなき人生の喜悦を感ずる。道端の赤い實を採つて口に入れる。やがて形容の出來ないうまい味が口全體に擴がる。然してやがて『パチ』と音がして少さなものを口からはき出す。今食べたのは『山イチゴ』を採りに出掛けて歸りを忘れて母を心配させたものである。小學校に通つた時代には、よく此の『山イチゴ』である。深い懷しき實である。ほんとに親みの深い味である。こんな穩かな平和な處で時時人間樣が熊に殺され

るとは思ひもよらぬ事である。そろ〳〵熊の時期だが山葡萄の實がまだ青い、從つてあの恐ろしな熊公の出るのも少し早い事になる。あゝ長閑な事である。

十勝岳に遊ぶ

下富良野驛に下車したのは八日の午前一時過ぎである。朝の五時迄驛前の旅館に寢る事にする車や連絡船の疲れを直そうと云ふ頗る蟲の好い考である。宿の若いおかみさんが眠い目をこすりながら六疊間へ案内してすぐ床をのべてくれた。然して十疊間用の大きな蚊屋を釣つてくれた。一寸面白い。『トランク』の中には登山の七道具が『キチン』と這入つて居る。それ等を出して制服や帽子を代りに入れて翌朝に備へる。無暗に寒い。

夜具等も内地の何處でも見られぬ樣な厚いものである。こんな寒いのに蚊が居るとは扨て〳〵北海道の蚊は寒さに強い事である。夜は更ける。旅の淡い淋しさが身に浸みる。

× × ×

流石宿である。頼んで置いた時間に起しに來てくれた。女中が頭元に沸したての牛乳を置いて行つた。此の地方は牧場が澤山あるのだらう。とても美味い。今日は好運にも日本晴である。登山の姿と早變りをして『トランク』を上富良野驛に預け役場に出掛けて村長さんに面會を求めた。是は兼ねて在京中に此處の村長さんに手紙を出して打合はしてあつたからである。村長さんはまだ出勤してないので助役が代つて心よく人夫の世話等してく

れた。『リユックサック』の中には殆んど何もない。汽車辨當と二三點位で頗る形が悪い。案内人が來たので『リユックサック』は彼に押付けてしまう。此の人夫は山加事務所手前の茶屋迄行つてくれるとの事である。『おら若けえ時分よく熊打ちに出掛けてよ』とそろ〳〵若い時分の熊狩りの話をする。然し此の『オッさん』どう見ても三十を越したとは見えないから不思議だ。而も話し振りでは大分老人臭い事を云ふ。然し一言〳〵が實に面白い珍らしい話である。ボツリ〳〵と話をしては又時時目を下ろして若い時分の追憶に耽けつて居る。然して其の思出が斷片となつて彼の口から滑り出るのである。『若え時分には樺太にも働きに出掛けたねえー。……水が悪いで。あつちで働く者は大低脚氣にさなるで、……シビレ脚氣ちうで、今でもよ、息が切れるでよ』。そう云へば微かにフウ〳〵云つて居る、俺は何となく可愛想になつたので『リユックサック』は俺が背負ふからと云つても彼はきかない。然して又熊捕りの思出でに耽けつて居る。然して打損んぢて足や尻を噛まれた事を話してくれた。俺は心から嬉しくなつた。こんな僻地にも過去つた若い時代を瞑想してしんみりと話してくれる人が居るかと思ふと嬉しい。彼は全く幸福な人間の樣に見える茶屋に着いたのは午前十一時である。此處で先着の人が三人僕を待つて居てくれた。何でも下の役場から電話がかゝつて待つて一諸に乘る樣にとの事であつたからだそうだ。一人は營林區署の役人(高山植物監督官)一人は十勝岳爆發當時山頂近くで硫黄の採鑛に從事して居て九死に一生を得た人夫で今一人は僕の連れて來た人夫の父である。年の頃七十近くであるが彼の子供の老ひたる姿と父の元氣な姿を見た時僕は驚いた。氣のよい爺である。是から吹上温泉迄一里半の山路である。此處からは熊笹が繁つて而も大木の密林である。熊も此邊からは出る所になつて居るそうだ。馬一頭に人間が四人是が一行である。案内

者の父は馬のすぐ後に續いて盛んに鈴を鳴らして行く。愈愈本物の熊公が出る豫防だなあと思ふと心中一寸穩かで無いが周圍の景色が餘りに明くて穩かであるので鈴の音が耳に馴れて來ると熊の事なんか忘れてしまつた。一行が多くなつたので話もはずむ。話が自然と爆發の事に及ぶ。色色と遭難しかけた人夫が當時の事を聞かしてくれた。其の人夫が『田中館さんは成程偉いが矢張り偉くない』と仲仲面白い事を云ふ。田中館さんとは北大の地震の方の研究に關する先生である『おら一つ今でも合點出來ねえ事があるでえ。田中館さんはよく爆發當時の洪水はよ、山頂近くの雪が溶けて出來たのだとおつしやる……がおらどうもおかしいでえ、第一泥流が流れて夫れから山頂の雪が後から溶けて流れただとよ。行つて見たら分るだが、後でさよ水が流れたため水の流れた處だけ奇麗になつて居るだ。だから山の頂の雪はよ、後から溶けたに決つて居るだ。第一考へたゞけでも分るだが一升位の雪だつて仲々溶けないに山の頂にある雪が俺が四十間も馳けねえ内に溶けておらの側を流れるつて法はない。あれはよ、おらさに云はせればよ、爆發の時土の下にあつた水がよ、飛出したゞと思ふだ』と仲仲攻撃の論鋒が鋭い。『東京の學生さん、どう思ふ』、とでた。俺は何と返事し樣かと思つて居ると『近頃地震計とか何とか云ふものが出來たちうがあんな物何になるだ』『地震が起る事は一寸とも分りやしねえ、一體あれは何を計んだね、學生さん』で地震が起きた後で地震計が何うだこうだと云つたつて追付きやしねえ、そら又質問だ。こうなると東京の學生さん豫科で佐藤さんの時間を『サボ』つたのがうらめしい。がそれこそ追付かない。『地震計と云ふのはね、地震の時土地がどの位動いたかを計る機械で夫れが地震を研究する學者に參考になるのだよ』と一寸知つたか振りをする。

『へえ、夫んなものだか』と云つたが餘り分らないらしい顔付をする。『第一田中館さんもよ、もう少し氣を附けてくれたら二人だけ死なずに助かつたに』と又攻撃を初める。『どうしてだね』と聞くと『第一回の爆發でも、爆發は絶對にない、どし〳〵登つて見學する可しと云つたゞから二人登つたが二度目の爆發で行方不明だ。然したらばよ、今度は絶對に登る可からずだとよ、あきれてしまうで』と旺に田中館さんに攻撃する。話も此邊になると其の人夫の言も餘り信用出來ない樣な氣もする。其の話が何の程度迄確實性があるかは僕には差當り問題でない。兎角こんな話を聞き乍らのそり〳〵と登る事が當面の問題であるのだ。話は一寸途切れる。

く續いて居る。赤蜻蛉が群をなして附近の熊笹の葉を赤く染める。太陽は高い。笹の間から陽炎でも上りそうである。さつき田中館さんを攻撃した人夫が又喋る『おら先だつて薬草で五十錢とう〳〵とられてしまつたで』と云ふと馬の後で鈴を鳴らして居る爺さんが『おらもやられたで』と殘念そうに云ふ。夫れから又藥草の話の花が咲く。實に賑かである。然し熊の出る處は賑やかにして行くに限るらしい。『學生さん』と遭難しかけた人夫が云ふ。『盲腸つて、どんな病氣だねえ、おら、あいつ（藥草賣の事らしい）が藥草で盲腸がよ治るつて云つたゞが本當だかよ、何しろおらもよく知つてるが「モー」と云ふ言葉の附いて居るものは、恐ろしいでえ、。。モー獸だつて。。モーだろよ』事此處に至つて到底俺は吹出してしまつた。然して其の人夫を始め一行が續いて笑ふ。實に此の邊の人人は粗撲で小供の樣に無邪氣である。賑かだので熊の事なんか忘れて居る。鈴は不相變チリン〳〵鳴る。人夫が澤山、『山イチゴ』、『クレップ』等を採つてくれた。

二時頃である吹上温泉前に一行が出て來た。

今日は登れるか何うか分らぬ。體の工合がとても悪い五時間の今朝の睡眠は疲勞を直すには餘りに短かつた。宿に上つて寛ぐ。是れから頂上迄二時間半泥流の跡を登らねばならぬ。旅館の主人が人夫を雇ふかどうかと聞きに來たので雇つて出て見て驚いた。さつき一緒に登つて來た高山植物監督官である。然して暫くして玄關に居るとの事で出て見て驚いた。旅館の主人が人夫を雇ふかどうかと聞きが無かつたので默して居たのだが俺の人夫に志願した彼の途中高山植物を採りに來たに違ひないと疑つて居る樣子が明きり分つたが何も辯明する必要て見れば一擧兩得であらう。が然し俺も亦一種の皮肉な愉魂膽が見え透いて分る。案内料を採るのだから彼にし四時過ぎには二人で達した。是から噴火口迄二時間は眞水一滴もない。快を感じた。が此頃は噴火口頭に立つて居た。全く底知れぬ地獄である。夫れから前十勝岳迄三十分もかゝつた位おろか一間先も見えない。人夫は是ではとても奥十勝岳へは行かれぬと主張するし主人公たる僕も而も噴火口より硫黄の煙が旺に出て來て奥十勝岳は て殘念ながら斷念になると猛烈な霧が下から上つて來た。恐れを抱いが上の方にあるのは駄目である。が其の駄目な事は一口飲んで見て分つた水が流れて居た下の方のは量も多く酸ぱいが飲めたまつたので宿迄走り續けた。五時である。全身が形容し難い疲勞に襲れて居る。一時間位温泉に浸つて『マッサーヂ』の眞似をして見た。此頃は此の吹上温泉はお客が少いので十二疊間に案内してくれた。眺望は全く素敵である。遠く富良野の平原を限る山山には夕陽が段々傾いて來て然して其の線の平原である。

沒して行つた。何んて素晴らしい景色だらう。

居る。然して見て居る内にあの山陰に夕日は靜かに

眞紅の夕燒が綠の平原に反映して五彩の世界を現出して居る。何んて神神しい景色だらう。其の眞紅の夕燒が蜵の聲の細くなると共に段段薄くなつて紫色に變つて行く。自分は只ぼんやりと緣に立つて此の景色に見とれて居るばかりである。あゝ彼にも此の景色を見せたらどんなにか喜こびに胸を震はす事であらうと。

默默として暮れ行く北海の天地に限りなき崇高と愛着の念に馳られつゝ、何時迄も立つて居た。其内に女中が「ランプ」を持つて來る。次に夕食の膳が運ばれる。給仕に出た女中が少しも女中らしくない。此の旅館の親戚の者で札幌の女學校生との事だつた。今日の一日はほんとに文字通りの惠まれたる一日であつた。其の晩は附き物の熊の話や爆發の話で暮れた。奇麗な大座敷の眞中に床を延べてむらつて飛込む。昨夜の事や今夏烏帽子岳の小屋の夜等を追憶した迄は知つて居るが後は知らない。

× × ×

温泉場の側の筧の水で顏を洗ひ口を濯ぐ。一晩完全に熟睡したせいか今日は馬鹿に元氣がある。が然し、歸り途の事を思ふと一寸いやになる。夫れは連れが誰もないからである。一里半の危險地帶は緊張裡に下山した。考へて見るとあの歸途、索道の所で途を踏み違へて十町程下つて途が消えて居るのに氣が附いた時位恐ろしい目に合つた事はない。普通人のよく通る所でさえ鈴等を鳴らして通るのにあんな所に迷ひ込んでと考へると今でも餘りよい氣持はしない。

（二一—八—二五）

阿寒の七日

戸外は早や釧路特有の「ガス」が見舞つて何となく陰慘で肌寒い。どうしても是が八月の事が次から次へと階下では早や姉の子の寢息さへ聞えて來た。私も寢やうと床に這入つたが今日の登山準備會頭に浮んで寢つかれない。幹事らしい人々の顏が目先にちらつく。私は是等の人々の名を知るまつた。夫れ程彼等は外形的に特長があつた。團長と紹介された人は大兵肥滿の人物である隆々たる好〻顏の紳士である。彼には『顏シャン』他の一人には『鷹の目』と附けた。團長は『腹樽』である。腹樽は我れながら不出來だなあ、なんかと考へる。最も『顏シャン』は後で分つたのだが『呑んべ長』の尊稱がある』と感じが出で而も懷しみ覺えてよいと思ふ。釧路新聞には紅二點が加はると書いてあつたので、どんな紅二點かと好奇心が出る。釧路の女學生だそうだ。

先ず登山する位だから體格も相當だらうし足も大分太いだらうと、しなくてもよい想像を廻らす。僕の知つて居る同行者は義兄の弟さん（弟さんと云つたとて立派な紳士である。此の人は京都のお叔父さんと私が以後云ふ處の人である。實はお叔父さんと二人で登るつもりであつたが餘り金が無かつたので躊躇して居たが會費四圓に誘惑され熊の心配も大勢だのでないので同行する事にしたのである。

八月二十一日

朝五時折からの『ガス』をついて京都のお叔父さんと停車場に出掛ける。お叔父さんが途中過日準備會で腹樽殿に注意された通り飴豆を買つた。いくら買ふかと見て居ると店に出て居た飴豆を全部クレと

云つて飴豆の買占めを して居るには驚いた。店の婆さん『五十錢になります』と云つて大きな紙袋に一杯入れて くれた。

お叔父さんの甘黨に 恐れを抱く。總勢三拾有數人、腹樽君も顏シャンも鷹目氏も見へる。紅二點も來て居るが 少しも紅い二點の感じがしない。紺色の洋眼に緣の長い麥藁帽である。如何にも質撲な少しも誇張のない有りの儘の少女姿で感じがよい。見渡す所高校の生徒や東京の學生らしいのやら商人風の人やら樣々な人が集つて居る。

釧路驛を箱列車がガタ〳〵と滑り(?)出ると早や雌雄兩阿寒岳が見え初める。明晩でなくては、あの頂に行けぬかと思ふとつまらない。舌辛驛で汽車を棄て、炎天の下約七里の道を步かねばならぬ、新造の道なので至る所直線道路が續く。一番行が弱つたのは一里十町の直線道路である。此の直線道路が終る頃幹事の『顏シャン』君遂に炎天下に倒れる騷ぎ。聞けば彼舌辛驛で『呑んべ長』の渾名に恥ぢず一杯やつて來た其の祟りだそうである。ゲー〳〵やつて胃袋の中のものを全部出して、けろりとして遲れてのそり〳〵とやつて來た時にはお可笑しいやら氣の毒やら。一貫目近くある金剛杖をドシン〳〵と突いて步いて行く姿は全く滑稽味たつぷりである。怪力で無邪氣で而も堂々たる好紳士『顏シャン』君が第一に好きになつた。午后四時過ぎ上徹別の小學校に到着、此處が僕等の最初の宿屋である。教室に藁蓙をひいて其處が食堂となり寢室となるのである。大きな鍋で米を焚いて三班に分けて少さい者から食べる事にする、校長さんの好意で乳色した御風呂の御馳走に預る。早や夕陽は落ちた。發電所の電燈がちらつく。晝間の賑かな氣持が妙に落付いて獨り何處へか行つて何かとつくり考へて見度い樣な

氣がする。横になつたが色々な事が頭に浮んで寢られぬ。其晩はほんとに苦しい一夜であつた體が極端に疲れて居て頭が冴えて居るのだから始末が惡い。こんな事で阿寒登山の一日は終つた。

八月二十二日

『ガス』が深くおりて居る。昨夜は腹樽氏の雷の如き鼾きで目が醒めたと云つて團長を恨む聲諸方に起る。『ピリカネップ』より途は愈々林道となつて居る。午后三時頃には阿寒岳特有の密林に這入る。殆んど椴松と「シンコ樹」とである。此の邊りから熊笹が密生して居る。午后五時營林區署の番小屋に着いた。夫れで頂上近くの石室に着いたのが七時頃だが後から來る可き米や薪炭がいくら待つても來ない。小供連は疲勞と苦腹とに弱り込んで居る。其處で義勇隊を作つて二十一町下の番小屋迄迎ひに行く事に決めた。僕も義勇隊員となるの光榮に浴する事になつた。八丁下ると清水谷である。此處から水も運ばねばならぬ。番小屋に着いた時は全く眞暗である。此處で僕等一行中の五名だけは番小屋の主人の好意に依り米と焚木とを借りて再び山頂に向つた。僕は大阪辯のお叔父さんと石油鑵を持つて水を汲んで行く役目である。大阪のお叔父さんは極端に熊の來襲を恐れて少しでも僕が先に離れるとすぐ呼び止める。然して云ひ草がよい「君は獨り者で熊に殺されたつて大した事はないが僕には妻が釧路にあるから、そう容易に熊公に命は渡されない」と眞顔で云ひ出した。眞顔の口からこんな言葉が出るのが不思議だ。然しこう云はれると獨り者の俺は一寸あわてたね。然し幸(?)ひなるかな清水谷が熊の通路である事をお叔父さんは知らなかつた爲め、また清水谷の上に來る迄はそうでもなかつた。處が此の谷の上に來た時其

のお叔父さんに此の谷が熊の通路なる事を番小屋の主人から聞いた處を受賣りすると大阪のお叔父さん氣の毒な位「ショゲ」る。米や薪を背負つた連中は谷の上で待つて居る。愈々谷に下るのである。前にならうか後にならうかと迷ふ大阪辯のお叔父さんを後にして手探りで此の谷を下りた。勿論「ランプ」はおろか蠟燭一本すらもない。眞暗な谷の細途を夕方一度下つた記憶をたどつて下るのである。不思議な事には僕にはどうしても熊の出る樣な氣がしない。だから案外水汲みに平氣で下りられたのだらう、と思ふ。谷の間で杓で一杯二杯と石油鑵を滿して行く。八分目になる。其處でお叔父さんを今度は先にして登る。途が狹く傾斜急な爲めともすると後の俺は水を被りそうである。流石義勇隊の面々も空腹のためフラ〳〵である。時既に八時を餘程過ぎて居る。石室近くになると應援隊が下りて來て代つてくれた。地獄の佛と云ふ所である。山小屋は外觀はとても立派で一寸山小屋としては內地でも見られぬ位のものであるが中は出鱈目に汚して無い。奇麗な板壁は木炭の樣なもので一面に樂書してあつて寄り掛る事さえ出來ない。

教養の足りない背德の登山家が故里の北海道に澤山居るかと思ふと一寸淋しい感じがする。僕は此の小屋の中で秩父の小屋を聯想した。どの小屋も粗末なものであるが山小屋らしい美しさに滿ちて居る彼の山小舍を！　無自覺な無批判な「山荒し」は登山家の敵、いや一般社會の敵であらねばならぬ。こんな輩は何處でも無自覺であり無批判であるからだ。夜十一時園長は熊の出る密林を侵して小屋に着いた。然して詳しく今日の手違ひの話をする。何でも驛遞（貨物運搬業者）の主人が一度米や焚木の運搬を引受けて置き乍ら餘り金にならぬので當日になつて言を左右にして運搬する馬も出さなかつたそうである。園長は腰に辨當を下げて居る。晝食を食へなかつ

たらしい。此の晩園長の天地も破れんばかりの鼾を聞いた。全くあんな猛烈な音響を出す鼾は生れて初めてゞある。一眠りして目を覺ます。午前二時である。外に出ると肌を刺す様な風が吹いて居る。遠く天と地との交はる邊に釧路の電燈がちら〳〵見える。明滅するのは海岸の燈臺であらう。

空は銀河でうづまつて居る。どの山も〳〵皆んな暗黒に塗られて死の様な靜寂の内に眠つて居る。何物とも知れぬ氣味惡い或る者がひし〳〵と胸に迫るを感ず。

八月二十三日

小屋から雌阿寒岳の頂上迄一時間もあれば充分である。此の頂に立つて吃驚りしたのは眺望の廣い事である。日本八景の狩勝峠等の騒ぎでない。こんな遠く迄見る事の出來たのは生れて初めてゞある。北東網走附近から北見の山々殊に十勝岳、旭岳、石狩岳が一所に集つて揃んで聳えて居る。振り返ると厚岸の海岸、釧路の港、等が雲煙中に霞んで居る。こんな雄大な景色が北海道の此の山を除いて外に見られ様か。飽迄裾を長く引いて一望千里遮ぎるものがない。目を伏せれば鏡の様な阿寒湖が少し霞んで密林に抱かれて居る。一足飛びに行けそうだが三里あるとの事だ。清水谷を少し下ると天然の硫黄風呂がある。風流な京都のお叔父が一諸だので、こんな風呂は見逃さない。早速裸になつて飛込む。屋根は青天井である。午后三時頃湖畔井上温泉旅館に到着、一風呂浴して湖畔に出る。然して我ながらあきれて物が云えない。ぼんやりと湖畔を見つめて居ると「ハッ」と氣が付いた。今日は東京では母を初め家族一同が多摩の境地に集つて亡父の冥福を祈つて居る父が此の世を去つた日である。

事だらう。譬へ一人北海の地に離れて居ても亡き父を憶ふ念に變りない。父の命日にこんなのが濟まぬ樣な氣がしてならない。夕闇が湖面を蔽ふて僕を闇の內に食ひ込む。

八月二十四日　終日雨

休養の一日である。

八月二十五日

雄阿寒岳に登る。途中熊の通つた跡を見た。道端の木の根を引掻いて其の土に大きな足跡をうろつい　居る離れてあつた。一同急に緊張して登る。此日も珍らしく晴れて雌阿寒岳の全景を「フィルム」に收めた。頂上で猛者連だけで盆踊りをする。是も心に刻み込まれた一つの繪である。屈斜路湖が上の湖、下の湖を隔てゝよく見える。聞けば此の湖では赤味がかつた毬藻が出るそうだ。

今日は樂しい湖水巡りの日である。一同元氣で下山、瀧ノ口から「モーター」と二隻の艫舟に分乘して毬藻の見學である。此の藻は產地が少きため保護植物で採取が出來ない。監視が嚴重であつて若し是を盜み取る者があつたら三十圓以上の罰金だそうだ。恐ろしい代物である。

採取禁止で思ひ出したが阿寒岳は有名な高山植物の產地で三百何十種と云ふ種類に達して居るそうだ。「阿寒駒草」「ミヤマリンドウ」「阿寒姫楠木」「キンバイ」等旅館に居る高山植物監督の役人から敎はつたが中學時代に植

物の試驗の成績が悪かつて以來一寸とも植物と云ふものに學術的興味を覺えない。只大自然を飾る衣として心からの愛らしさ美しさは感ずるだけである。

八月二十六日

午前中湖で櫨押して遊ぶ。舟の上で「ビール」を飲んだので一寸とも力が出ず逆風を食らつて慘い目に會ふ。午后下山の自動車來らず一泊。

八月二十七日

今日は斷然午前中に七里を歩いて上徹別より自動車で歸る。

往路暑さと酒が祟つて幹事が倒れた處や、水にありつて蘇生の思ひをした處等見て居る間に過ぎ去つてしまう。思出多い阿寒の七日も驚ろきに始まつて驚ろきの內に終つてしまつた。

（二一―九―二二）

霧ケ峰、蓼科山と横岳

手塚晴雄

南は諏訪、北は佐久、其間に八ケ岳から延びて來た尾根が、横岳となり、立科となり、霧ケ峰「ハイランド」を現出して居る。八ケ岳からの尾根つゞきの中の雄は立科山である。廣漠として居る、麓の廣いこと、八ケ岳にも劣らない位、急斜面は密林、大木で蔽はれて居るが、十數里は灌木、草叢となつて、牛などが放飼されて居る。

山又山、谷は千仞の深さに穿つて居る、深山溪谷と違つて、立科山が中空に悠然として聳へ立つてる外、あとは小さい起伏の山々となり、霧ケ峰の方に來ると全くの高原となつてしまつて、其の嶺らしいものは殆んど高低のない草地に化して居る。樹木などは殆んど一本も見付からず、小川はチヨロ〳〵と音も立てずに此の草原から流れ出て、やがては急な流れとなつて此の草原を去つて行く。

一霧ケ峰

上諏訪の驛を朝學校へ行く中學生、女學生の後から續いて居りた。六月らしい空模様、厚く雲は日を閉して、道傍には水溜さへ出來て居る。聞けば、もう夜明頃に一雨あつたさうだ。諏訪の町を東南に二三丁行つて角間澤入

の道をきいた。狭い道を登つて行く。小川は勢良く道の傍を流れてる、之が角間澤だらう。地藏寺を東に見て、もの、五分も行つたと思ふと、もうあの嫌やな雨が降つて來た。尾瀬沼で雨にはコリ〳〵してるのに、もう出發さう〳〵雨男と云ふのも無理ではないかも知れない。尾瀬沼の鳩待峠下で一晩漸くの思ひで、明かした苦しかつた昨年の思ひ出が、マザ〳〵と浮かんで來る。今日もあの樣な雨の中でテントを張らなくてはならないのか。こう思ふと、心も暗くなる。默つて、あきらめて、苦しみを覺悟してゆるい昇りを行く。右唐澤七丁左角間新田十五丁などと、道の脇きに正方形な盛り上つた一間四方の小高い所がある、キチンと柵が、書いてある棒杭を見ながら行くと、氣になるので尋ねて見ると水道だと云ふ。成る程、諏訪の町へ行く水道は此の澤から行つてるのだ。諏訪の町をはづれてから、角町新田迄は一軒も家がない。百姓達が雨の中を畠や田で働いてる。これを見ると幾分か心強い。左手には大見山（一三六二）、三角點一五四六の山などの草山が左に低く連らなつて居る。右側と左側の尾根が一緒になつた所は、丁度賽の河原坂あたりで、霧ケ峰の西の部分だらう。道から正面に見えるのが其れで、平で全く卓子（テーブル）山と云ひたい位。

長い角間新田の部落を過ぎて、後ろを振返つて見ると、南アルプスかも知れない、灰色の漠々たる中に、僅に頭だけボカシテ未午の方に姿を見せてる、郭公がなく。雨も幾らか小降りになり、やがて晴間が見える。それも少し青くなつたと思ふと、又薄雲の中に隱されてしまふ。科の木平と角間新田の中頃あたりで、左に山を越して行く大きな道が分れて、蓼ノ海と棒杭に書いてある。これは多分諏訪の訪の字と大見山の大との間に底地で、チヨ

ポッと水溜り位の沼の符號がある、其れかも知れないのは九時半頃、あとは五分ばかりで、科の木平に出る。完全な針葉樹の植林が右方の尾根に見える。道は此處から三方に通じて居るが其の眞中を取つて進んで行くと。最右を取つても霧ケ峰へ行けるが鎌ケ池へは遠廻りとなる。變つた格好をした岩壁を正面に見て、いよ〳〵登りだ。一六〇〇の等高線の地點へ來ると賽の河原坂は終つた、此處には石の地藏が安置されて、左の方に小さな尾根模様のものが飛出してるので、リユツクサツクを投出して飛んで行つた。漸く山にかゝつた雲も上がつて鷲ケ峰、和田峠、三峰山の起伏が見える、つた雲も上がつて鷲ケ峰、和田峠、三峰山の起伏が見える。角間澤が流れてる。

賽の河原から道は緩く、砂利交りとなつて、霧ケ峰の西の方を北へと廻つて行く。すると霧ケ峰の高原が次第に眼前に展開して、其の姿態を表はして來る。眼をさへぎるものもない起伏した丘が灰色の空と接してる。一溪を渡つた。水は北に流れて急傾斜を下つて東股川と合して居るらしい。小川のふちの小石に腰かけて今更ながら此の濶々と大きい眺めに見入つた。夏から秋にかけて、草がすつかり黄色く枯れて、其の黄色が風に靡いてゆれてる時、麓の村から馬を引いて草刈に群をなして登つて來るのださうだ。水もあり、乾燥もしてる、此の大高原に、テニスのコートを造つて、深く冴えた靜けさに浸つて、一日中大地を相手にテニスでもしたらどんな良いだらうかなどと考へて見た。

巨岩が累々と散在してる三角點一六九八の低い丘を右に見て行くと男女倉越の方から、鷲ケ峯迄見渡せる。驚いたことには、霧ケ峯の主體とも見える所が眞黒に焦げて、今迄の草地はかけもない。

金田と二人で考へた。不思議な事があるものだ。火事のあとの事は事實らしい。すると出掛ける前に讀んだ新聞が思ひ出された。「八ケ岳山麓の大山火事」と出て居たが其の時は少しは心配したが結局暖くなつてからいと話した(初め八ケ岳迄縦走する積なので)が、八ケ岳山麓とは霧ケ峰を云ふて居たのだつた。此の草原では何處迄燃えて行くのか、何の抵抗もなく、風のまに〳〵火が恐ろしい勢で移つて行くのだろう。「木賊の秋」にも立科の中腹の木賊刈を怠つた事から火を發して、悲劇を平和な山村に起したことを書いてあつたが之も何か悲劇の種でなければ良いが。赤々と夜の空にお山が輝いた時皆などんなに恐れ心配したことだらう。

村界が右から廣い彫大なすゝきや雜草の原を一直線に横切つて合してる。村界は二三間もある防火線を作つて居る。此處から道は幾筋にも別れて東股川の方へ下つて行つてる。

二　鎌ケ池、八嶋ケ池

東股川を渡つて小丘の上に立つと鎌ケ池が銀色に光つて見える。右はやはり丘陵で樹木は見えないが、左の東股川の右岸は東股御料地で青々として立派な植株が出來てる。男女倉越から來る東股川に沿つて二三人、人が下つて來る。此の人達と話する爲めに道を外れて川へ下りて行つた、川は狹く自由に飛越せる。

三人とも腰には籠をつるして居る。ワラビ取りに來たらしい。別段僕達をいぶかしくも考へてない。此れも高原だからだらう。火事の事をきくと矢張り四五日前に燒けたのださうで、原因は分らないと云ふ話しだ。此れから川に沿つて北進すると、廣い湖の乾上つた様な湯原へ出た。ジク〳〵して足がヅブ〳〵入つてしまう、尾瀬ケ原

見たいだ、鷲ケ峯の麓迄廣がつてる、中には草が生へて居るが何處に底無し沼があるか分らないので濕原を退却して東の傾斜地の方へ出て、リユックサックを置いて池を見に出かけた、さつきの人から底無しの沼と云ふのがあつて一旦入つたら中々出られないと、おどかされたので、此の濕原を横切つて近廻りして八嶋ケ池へ行くことは出來ない。

東股川の細流を渡つて鎌ケ池へ出た。鎌の樣に曲つて居て岩石が池の中に散らばつて居る。六月なので雪どけの水で、水量は豐富だ。又々空は曇つて池は陰うつに淋しさうに見える。鎌ケ池から八嶋ケ池迄は二ッの道があつて一は曲はり曲はつて行くスヽキの中の小路、他は村界の防火線である。廣く草を刈つてあつて土が三尺位眞中に盛上つて居る。此れを西に進むと八嶋ケ池へ出る。池は鷲ケ峯の麓にくつついて居て、南は濕原に連つてる。魚は居ないさうだが「キモリ」が居た。矢張り浮嶋式に草の生えた島がある。水はかなりきれいだ。

鷲ケ峯はきちんと整つて小じんまりした山、こちらから見ると可成登つてるが防火線が一直線に背中を走つて居る。折々雲間からもれる光線にてらされて、明滅する樣な氣がする。草山であるから勿論和田峠から來る事も可能十分だ、此のが「ピーターパン」の活動を見てる樣な氣がする。池がある。水は半分しかない。

三、車山

リユックサックを投け出した所へ歸つて來た。流石に持つて行く人は誰も來なかつたのだ。此の眞夏の晝の樣

な音のするものとては何もない、静かな高原に、リュックサックは歸りを待つて居た。

西南から恐ろしい眞黒い雲がモタ〳〵湧いて此方へ飛んで來た。刻一刻近づいて來る。そして頭の上をザワ〳〵と風が渡る。今迄靜寂其のものだつた天地に葛藤が生じた。文々自然の變化と爭はなければならない。

音がする。雷だ。大きなツブが落ち初めた。大急ぎで油紙、御座を出して着た、何しろ一刻も早く目的地へ行かなければならない。せき立てる雲は走り、雨は落ちる。道などどうでも良い　夢我夢中で東へ、東へ緩かな傾斜草地を登り出した。道を歩く程容易ではない。

自然の中に卷込まれた小さい二人の人間が先へ先へと道を急いでもがいて居る時、此の黒雲は二人に味方するに歸したのだらう。黒雲は四散し始めた。雨は止んだ。青空が廣がつて行く。東北から勝利を誇るが如く、輝いた白い夏雲がユル〳〵嶺の峯の上に現は　來た。萬歳！萬歳！何と美しい雲の色だらう、希望を持つて喜びを持つて。美しい油繪でも見る樣。

さう濡れてない草地の中を進んで行くと、右から東股川を渡つて來た一徑に出會ふた。之は幸ひと、之に從つて登る。右手に見える霧ケ峯の黒い燒跡の上からはもう日の光を浴びて、今の雨が蒸發して白い、雲となつて昇り出した。霧ケ峯の黒くなつた山腹には白い雪が見える。忽ち山全體を席卷した火事にも溶けなかつたのか、可憐な谷間の姫百合の如く、又勇ましくも感ぜられ、。霧ケ峯はもう見返る程後ろになつた。車山から北に派出し

てる尾根へ近づいた。尾根の向ふはどうなつてるのだらう、色々景色を想像しながら尾根の上に出た。さつき鎌ケ池の所で東に見上げた凸の並列の様な、丁度南極のペンギン鳥が三四羽ならんでる様な恰好をして岩が今度は北に見える。尾根の東北の側は急に落ちて、今迄の緩傾斜の高原には似もつかない、深い谷がのぞいて、緑の木が一面に其れを被つて居る。

又もう一つ東へ小山を越した。可笑しいことには此の細い一尺にも足らない道を境として、左側は黄い草地、右側は黒い燒跡となつてる。

× × × ×

車山（一六二五米）の低地をへだてゝ南に見る、一丘の上に立つた。車山もすつかり黒くなつてしまつた。低地も燒けて居る。此の黒低地の中を一本の白い筋が貫いて居て、此れをドン〳〵下つて行くと大門街道へ出て、湯川の方へ行つてしまう。此の小丘に立つて、四方を見渡してると寒い、長く立止つて居られない。何時の間にか、強い東風が吹いて來て、つき當る。此の丘の東側の樹木の陰には雪だまりさへある。

寒いので、大門峠めがけて、ぐつと低くなつて行くカヤトの尾根をズン〳〵走り降りた。（二時三十分）。尾根の上には二間も三間もある防火線が延びて居るので心配した程の事は少しもなく、樂に歩ける。登つたり、下つたりする、小山が三つもあるので、皆んな中腹をまいて、かやとの中を歩いたので 大門峠下に來た時は四時前だつた。

此處は又見晴しの好い、テントを張るには持つてこいだ。立科山は東北に長い裾を引いて淋しさうに微笑んで

居る。肩には雪が未だ消えず白く光つてる。もう空はすつかり晴れて六月の西日が強く顔を射る。大門峠は此處から一二丁登れば良い。赤沼平へ行く道は眞直ぐ北へ延びて立科の裾の高臺の中に入つてしまふ。池の平と云ふ此處は平であつて、僕達は此の南の端の梨の木の下にテントを張つた。池の平はジメ〳〵した草地で、白樺などある。

夕日がダン〳〵西山に傾いて行く頃北の方から人が下つて來た。二三人何か話しながら通る女の人も居る。聲高く牧歌を唱つて呑氣さうに過ぎて行く、〇〇牧場の印半纏の若者も通る。自然と人間と調和した、如何にも高原的の感じがする。テントを張つてからは薪取りと、炊事、日の長い六月の夜が來るまでには未だ時間あるので分擔して、愉快に仕事をかたづけて行く。

立科の南には八子ケ峯の馬の背の樣に圓々と肥つて、木は澤山ない、殆んど滑かな山膚を見せて居る。八子ケ峯と立科の間は南平となつて、池の平迄迫つて來て、一寸した崖となつてる。さつきから其處から炭燒の煙が二三絶へず昇つて居る。寒いので其處へ行つて泊めて貰ふとも思つたが、餘り氣持ちが好い景色なので遂去ることが出來ず一夜を明すことになつた。

バタ〳〵、カツコウ〳〵と「カツコウ」が鳴きながら空を渡つて塒を荒されたのに困つてる樣だ。澤山此の鳥が居る。又カツコウ〳〵と澄んだ空に鳴く。

人聲がする。とノソ〳〵三頭の牛が山を下つて僕達のテントの周りに集つた。可愛い眼をして僕達をめづらしさうに見詰めてる。おとなしい動物だが此の大きな圖體をして、傍へ寄つて來ると氣味惡るくもある。

承前

金田一郎

又ノソ〳〵道草食ひ〳〵向ふの方に行つてしまつた。

其の夜は馬鹿に寒くて翌朝は早くから眼が覺めてしまつた。(時候が時候だし、高さも高いし、「池の平と云へば此のあたりでも名代の寒い所でサアー」と聞いた時は驚いた)

四立科へ

曉の寒さに夢破られたのは五時であつた。今日も晴天であるらしい。寒さを怺へてテントを這い出し急ぎ焚火して食事を濟し出發したのは七時三十分であつた。すぐ上の林の中の炭燒小屋で話し込んだ、それに依ると昨夜の野營地は最も北風のあたる寒い池の平と言ふ所ださうだ。蓼科の登り道を正して八時過再び歩き出した。暫くは雜木林と草地との交互になつた所を行く、色々道が別れてゐるらしいが、眞直に蓼科を見てだら〳〵登りを行けばよい。約一時間歩いて左の笹の中を四五十間下り小さな流れ(樽ケ澤)に出て休む。此の先は水がない。九時過出發、間もなく役場の人らしいのに會ひ鞍部の手前から左へ登れと教へられた。

左へ明らかに登る道があるので其處を行く此の小さな尾根（ノダの尾根）を登りつめて道を失つたが尚進むと地圖の瀧の湯の方から登る道に出會つた。これからが眞の登りである。登山口の立札がある、道はよく踏めてるが可なり急である。寺小場の坂と云ふ小島烏水氏に依れば傾斜二十八度であるそうだ。そろ〳〵雲が出て曇り始めたし、林の中を進むので暑さは感じない。十一時小憩の後又登る。一寸たるみへ出た中段と云ふ、所々に雪が殘つてゐた。次第に這松が多くなり、時々横岳、縞枯、茶臼から八ヶ嶽まで一續きにくつきりと見える。火山の特長として裾野の美が遺憾無く現はれてゐる。最後の這松帶を拔けて大きな岩の推積を登れば其處は頂上であつた。時に十二時十五分である。殘念ながら雲の爲に淺間の方面も勇大なるべき南アルプスの眺めもなかつた。

頂上はかなり廣く中央はや、低く北面して小な祠があり、その鞍部に建てられた小屋も少しも見えない。雪の上を下つてゐる。大河原峠へ下る道も二三五三m（頭布山？）との風を避けて食事をしたがかなり寒かつた。一時出發して北側に周ると驚いた。はるか下まで全部雪で眞白になつ道を發見するにも多少苦心した。上から見ると這松の爲に道が全然隱されてゐるから注意を要する。頂上を二時りかけたが急であるし荷が重いので遂に斷念し再び元の道を下り、新湯に出る事にした。所が岩石を下つて元の道に出て登り口まで一時間半を要した。今度はノダの尾根と反對のハンダの尾根についた地圖にある道を下る。途中野營の途を見ながら四時半無事新湯に着いた。宿が一軒ある丈けで野營地を尋ねたら親切に此の上を少し上れば よい所があると教へて呉れた。前夜にこりて今度は林の中に張つた。日が暮れてから宿屋に行き湯に入り主人の話を聞き、明日の横岳から縞枯、茶臼と縱走する道を尋ねたが誰も知らず、横岳へ今頃行つたら死んでしまふ等

と言つてゐたが、結局明朝横岳の下まで行く木樵に麓まで案内して貰ふ事とした。

五　横岳

朝五時に起きて急いで支度する。六時には約束通り木樵が來た。今日はリュックへ必要品だけ入れテントも張つたまゝ置いて行くので樂だ。六時廿分出發、ゆつくり歩く、地圖の水濠（大川泉井？）を渡り道の二つに分れるまでは御室平の平地を行く、此の道の分岐點から地圖の二つの道の丁度眞中の樵道を行き、石薄葉の池（宛字）は見なかつた。七時三十分シシの頭（地圖に有る横岳と縞枯山との鞍部に出る道の右の方（南）の道の一八〇〇米の所に有る岩）に出た、小さな岩が數個有るだけであるが附近は氣持のよい針葉樹（からまつ）の粗林で、其の下には櫻、甘露梅、檀檀（ダヅマと木樵は呼んでゐた）等が密生して靜かな山の氣分を味はせる。眺望もかなりよい。此處で地圖の右の道と合して平らな所（ダヅマ平）を進む事廿分程で道が二つに分れた、右の道は地圖に途中まであるが縞枯と茶臼との鞍部へ行かれるらしい。左の道を尚進み硫黄（宛字）と稱する所へ出た。一面四五尺の笹である。そして愈々笹尾根（地圖の二つの道を合する小さな尾根）にかゝつた、こゝで休んで第一回の晝食をする。笹の中を少し南に下ると水が僅か流れてゐる。併し此の水はこれより上にも又下にも流れてゐない。地から湧いて地の中へ流れてゐる。躑躅の登りにある樽ケ澤も途中でなくなつてゐる。木樵は此處で仕事をして行くと言つてゐたが、段々話しをしてゐる内に、彼も登つた事がないから半日つぶして横岳へ行かうと言ひ出した。後になつて非常な幸とならうとは思はなかつたが何となく心強く感じた。八時半出發、間もなく左か

ら踏跡らしいものが合した。多分地圖にある左の道と思ふ。此處から約十分程行くと立札があり左ツボニハに至るとあつた。ツボニハは横岳の東南にある露岩の印の有る平な所である。右の道は縞枯山と二三二〇米の突起との鞍部（ヒヨウタン坂）に出る道で木樵の言に依ればかなりよい道らしい。左の道をとつて進むと間もなく道は全く笹の爲に無くなり笹をかきわけて登つた。枯木をけづつて登山道と書いてあるのに出會つたので元氣を出して進む。木樵が一人で「道つぼい」と數回言つて先に進んだ。餘り笹がひどいので左に少しづゝ卷いて行き林の中に入つて進んだら雪があつた。しばらくして又踏跡に出會つたので注意して進むと九時半遂にツボニハに達するを得た。ツボニハは苔なす岩と這松とが調和よく配合された箱庭式の景色で自然の技巧の美しさには驚くの外ない。所が此處まで有つた踏跡は此の先はどうしても發見出來ないので今度はツボニハから眞直横岳を目標にして進む。ツボニハも眺めた時はよいがこれを横切つて進むとなると這松の縱横に技を廣げた上を辿るのはかなり時間を要した。加之、這松の下には雪があり。小さな這松を分ける時は足が凡んど感覺を失つてしまつた。約三十分程でツボニハを抜けて凹地に出た。此處から横岳へ眞直上る事は岩の爲不可能なる事を知り少しづゝ左へ卷いて上る事にした。これからの一時間は林の中では雪に足が凍え、急傾斜の所は這松に腦まされ、實に惡戰苦鬪であつた。しかも天候は次第に險惡になつて來た。こゝに於て木樵は鎌を出して枝を切拂つては進み身輕に岩の上へ上つては引擧げて吳れたりしたので大いに助かつた。十一時幾度か凹地を上下の後遂に横岳から西に出た尾根に攀ぢ登つた。すぐ下に（北へ出た尾根との間の凹地）小さな池があつた。尾根を行つて十一時十五分二四七三米の三角點に達した。實際の頂上は三角點から更に北へ一丁程行つた所にある。此の間は切開きがあつた。頂

上には一小祠があつた。此處から大嶽の方へは切開きがあり、大河原峠まで樂に行かれるらしいが、一度見えたのみであつた。寒いので急ぎ食事を濟まして再び三角點に戻り十二時意を決して今度は僅かに跡のある郡界の切開を下る。所が五分程で雪の爲切開を失ひやむを得ず雪の中を下り約二十分で右にきれて少し上り其處で木樵が上手な木登りでツボニハの見當をつけ急斜面を無二無三に下りツボニハとの間の凹地に出た。後は案外簡單に一時ツボニハの雪の多い所を拔けて前の踏跡に合する事が出來た。此の踏跡はやはり途中で見失つてしまひ笹の中を一散に下つてヒヨウタン坂よりの道に出會つた。木樵は此の附近で尚仕事をして行くと言ふので禮を言つて別れ笹尾根の水の有る所で小憩して二時再び走る樣に急いで三時にはキヤムプへ着する事が出來た。

四日(雨)、橫岳の經驗によつて未だ雪が多く、しかも郡界の切開は不明である事を知つて遂に八ケ嶽までの縱走を斷念し加ふるに雨の爲溢の湯行をもやめて一散に茅野へ向けて下つた。

附記　新湯は好い感じのする温泉で湯は微温湯であるが、大きな瀧をなして落ちてをり別に湧し湯もある。宿の人は皆親切で湯錢と菓子代に二人で五十錢やつたら手拭を一木づゝ呉れたには恐縮した。四五丁離れた所にかなり大きな温泉プールも出來てゐた。八ケ嶽から立科までの縱走は去年信濃山岳會とかの人がやつたと言ふ話を聞いたが判然としない。夏澤峠から高見石までは樂に出來、景色も良いらしい。此の部分は平賀文男氏著「日本南アルプスと甲斐の山脈」に出てゐる。九月に八ケ嶽に行き稻子牧場で登山者名簿を見たら八ケ嶽立科と書いたのが幾組か有つたが、何れも麓を廻つて立科へ行つたらしい。

別れに送る言葉

高木英二

『この一文は、我が一橋山岳部の實質的な建設者であり、常に我が山岳部の核心であつた來春卒業される諸兄への送別の辭であると同時に、私の拙ない山岳觀の一端をも現はし、併せて我が山岳部の意義とした風な事をも述べた積りです。そうして、是に就て、先輩や部員諸兄の教示を待つと同時に、他の世間一般の人々に對して、我々を理解するの資料ともしていたゞけばと、思つて書いたのです。』

二

冬來れば、深山の雪を慕ふて野澤に集る私達、毛無山の平原で、雪煙りをあげて踊り狂ふ私達、純白の雪線が碧空を劃する處に、若い憧れに滿ちた心が踊り、雪の誘惑が私達を限りもない喜びにまで導いて行かずにはゐませんでした。其處に私達は多くの忘れ難い思ひ出を共に持ち、その日々の生活に離れ難い親しさを感ぜずには居られなかつたのです。人の世の定めに從つて、その嬉しい集ひもやがては解かるべき運命の下にありました。そうして更に、その別れの日の淡い哀愁故にありし日の樂しさを感ぜしめずには居られない私達でした。

かくて何時か、冬來れば、雪に憧がれ、野澤の集ひを思はずにはゐられない私達になつたのです。

やがて春ともなれば、殘雪を追つて上州や信州の山々に思ひを寄せる私達、二人三人の、つゝましやかなグル

ッペがその樂しい行路を心行くばかり味ひしめる事が出來たのでした。二人三人の少さいグルッペ……實際、私達の多くは何時も山での行動を侶にする少さい幾つかのグルッペに分れて居りました。そしてその少さいグルッペの中で、私達は本當に幸福な山旅の侶伴を見出す事が出來たのです。二人三人の少さいグルッペの獨立故に、決して全體としての統一を破られる事のない私達でした。否破らるべき筈の私達ではないのです。この少さいグルッペの人達が山に居る間、山での天候と東京の天候の差を十分に知つてゐる私達ではありましたけれど、荒れた日には、矢張りその人々の旅路を心配せずには居られない私達ではなかつたのでせうか？そうして又或る時は、絶えて一處に山に行く機會を持たなかつた人と、共に山に入る事を嬉しい期待を持つて望まずには居られない、私達ではなかつたのでせうか？

かくて、春から夏へかけて、燃える樣な緣に包まれた山々は、絶えず私達を呼び續けてゐるのでした。そうです私達のこの少さいグルッペが峯から峯へ、谷から谷へと、他の何人にも亂される事なく流浪ひ續けるのに、これ程よい季節は無いのでした。

光り輝く、若緣の高原、それが雪を頂いた高峯にまで高まる所まで、どうして若い私達の憧れが高められずに居られませう。五月の陽の下では、輝くものゝすべてが緣りであり、光りあるものゝすべてが若さなのです。其處では、そよ吹く風にゆらぐ若葉と共にときめく私達の心を、聞く事が出來たのではなかつたのでせうか。

それから夏！

梅雨晴れの空に入道雲がクッキリと浮んで、木の間を洩れる光りが、まぶしく輝めく夏！

それは私達のすべてに取つて、最も待たれる時なのでした。その時程、あらゆる意味に於て、その以前から、夏の登山計畫は近く置かれる事は又となかつたからです。夏の休暇の一ケ月も夜の夢となり、部室での話題を賑はした事でしよう。かくて、大町から、島々から、さては芦岾から、この時はストレンジャーの幾人かをも加へた私達の群は幾班かに分れて、思ひ思ひの路をたどつたのです。互に他の班の山路の幸福を祈りながら。何時もの自分のグルッペとは離れて一處に山を歩いた者のみが、山の友の懐しさを知つてゐるのです。山に居て人を思ふ、その思ひは山の友の上へ延び擴がるものでなくてなんでせう。別れて私達が山に入つた時程、別れた人達の懐しさを泌々と味ふ事はなかつた様でした。山での會合、ゆくりなくも一夜を共に過した人々にすら山旅故に、時にては解きがたい愛着を感ずる事のある私達、ましてや親しい私達自身が、あの憧れの山邊で、お互に逅り會ふ事の嬉しさを、思はずには居られない私達ではなかつたのでせうか。

一本の山路を侶に歩むと云ふ事すらが、とりもなほさず、何等かの絆となり得るでありませう。その意味に於て、一度山路を共にした私達のストレンジャーも亦私達に取つて何等かの繼絆を持たずには居りませんでした。しかし私達を結んで居る絆はそんな淡い繼(つなが)り以上の何物でもないのでせうか？そうではなつた筈です。現に、私達は現にその單なる繼り以上に出て來た人を最早ストレンジャーとしてゞはなく、私達の親しい仲間の一人として、新しい仲間を持つ事を喜んだのではなかつたのでせうか、其處で私達は、そうです。冬のスキーと夏山、

何時も、私達の善き新しい仲間の一人二人を、ストレンジャーの中から見出す事が出來たのでした。

それから、秋、

その名は直ちに秩父を思ひ出させます。「御坂越へて來りやあけびの口に」と誰かの愛誦される歌が思ひ出されずには居られない秋です。

今年も秋になりました。靜かな澄み切つた秋が、何處からともなく、入り込んで來ます。キラビヤカな束の間なうら若い私達の胸にも、靜かな澄み切つた秋が、何處からともなく、入り込んで來ます。キラビヤカな束の間なりし夏の日の喜びの思ひ出が、遠い昔に思ひかへされる頃。高まり行く喜びではなくして深奥底を靜かに清く思ひ澄ませるのにふさはしい頃になつたのです。

澄み切つた心の深い〳〵奥底にまで沈み込まずには居られない秋。綠の木の葉が色褪せてやがて紅葉する頃。

又も私達は靜かな谷の流れを戀ひ、高き峰々の靜寂に憧れずには居られないのです。風景の中に歩み入る人、その文字通り私達は靜寂な秋そのもの、中に消えて行つてしまひたくなるのです。

もしも私達が、夏の山を樂しむべきものとすれば、秋の山は味ふべきものでもあるのです。

澄み切つた濁りのない。だけど、何故とは知れず物淋しい私達の心の底にまで紅の木葉が淋しく星が瞬き、木の葉がゆれ、谷の流れがさゝやき、野分が響くのです。其處に冴かに月が照り、清く淋しく病葉が散るのです。

落葉を踏んでは、さゝやかな小徑を辿り、紅葉を浮かべる溪流を縫ひ、冷たい黑い岩壁を攀じては、寂しくこ

だまし、やがて無から無へ消えて行く私達の足音を聴き。時の流れを感じ、心の秋を感じるのです。一枚の枯葉ですらが私達の思ひを借り、一本の木立すらが私達の心を捉へます。

其處にはあらゆる色彩の波があり、線の交錯があり、無限の空間があり、淋しく靜かにうつろひ行く時の流れがあるのです。それはこの世の喜びの表現でもあり又悲しい憂ひの表現です。其處には愛のさゝやきがあり、永遠の憧憬と、寂寥とが宿り、祈りがあり、思ひ出があり、未來の暗示があるのです。さうです其處に私達の豐かな心の擴がりがあるのです。私達の人生があるのです。

風景の中に歩み入る人、それは、とりもなほさず自らの心の中に歩み入る事の出來る人ではないでせうか？

私達は、彼の流れ行く時を感じ、更け行く秋を感じ、高い峰々の清澄を、谷間の靜寂を見るのでもなく、只感ずるのです。私達の前には果てしもない山々の連りがあり、底知れぬ谷が靜かに眠つてゐます。

其處では只マッチを取つてパイプに火を點ずればいゝのです。音もなく山々が、蒼空が、木立が、果ては一枚の病葉迄が私達の純な心を見る事が出來るではないでせうか？

その夢の香を心の底まで吸ひ込めばいゝのです。音もなく紫煙の行くへに憧れの瞳を寄せながらの心に迫つて來るのを感じるでせう。其處に私達は私達の神祕が湛へられて居るのではないでせうか？

秋山！

其處に、深い人生の流れの極限、それは深夜、只一人高原のアルペンテントを脫け出て、輝く仰天の星と只二人達し得べからざる無限の悟りではないでせうか？

ある瞬間を體驗した人々の

自然への歸趨、山への回歸、そうした言葉が理解されるのも矢張り秋ではないでせうか？

夏山、其處では若き靈の光輝に對する不斷の憧憬が空高く勇躍し。

秋山、此處には透徹に達せんとする深き自己沈潜があるのではないでせうか。彼處には高さを求め、光りを求め、永遠なるイデヤの世界を把握せんとする勇躍があり、生命の歡喜があり、限りもない高さがある。彼處には澄澈た一點の濁りも止まない限りもない深みがある。彼處には澄澈た一點の濁りも止まない澄明があり、人生の根底に到達せずんば止まない深みがある。此處には深い悟りがある。

此處に於ては、最早、その言葉の普通の意味に於ての享樂はその影を止めはしないのです。私達と、私達の居る境遇との融合。其處に最も純な姿の私達自身が立つて居るのではないでせうか？かくて私達の自我の最も深い根底のさゝやきに耳傾ける貴い瞬間を持つ事が出來るのです。此處に於てこそ、私達の山への憧憬が滿され、斷ちがたい山への歸依が生ずるのではないでせうか。登山の眞實な味ひは只獨り山へ入る者のみの味ひ得るものであると誰かの云はれたのもかゝる貴い瞬間を持つ可能性の豐富さに就てではなかつたでせうか。そうした意味に於てしか云ふ事は出來ますまい。私達の殆どすべてが、私達の無理解な同伴者が徒らに私達の靜かな境涯を亂す事の悲しさを體驗して來て居りはしないでせうか。お互がお互の靜かな心境を亂し合ふ事のない理解の深い友なればこそ、私達は眞の意味に於て共に山を樂しむ事が出來るのではないでせうか。よしや夫が如何に稀れであらうとも私達は確かに私達の各々が只自らの心の中にのみ沈潜し切る事によつて、私達自身のお互ひの心がその最も奥深い根底に於て、一つに溶けて流れる貴い瞬間を體驗しま

した。そうしてそれは、私達の侶伴が極めて少人数である場合に最も多い様に思はれます。私達が山を「ミットレーベン」すると云ふ事の間に生ずる矛盾です。時とし、大きな「ルーゾ」な結合よりも、より小さな、けれどより固い結合を慾する者ではなかつたでせうか。

此處で私は、私達の爲めに小さい矛盾に出逢はねばならない事を感じます。それは、山ると云ふ事と、私達が越ゆべからざる淵であるかの様に思はれる事も少くはなかつた様です。

然し私達は、彼の最も特殊的なるが故に最も普遍的なりと云ふヘーゲルの論理を信じてか。純粋なる自我の根底への深き沈潜は、その言葉の正しき意味に於て先に私の云つた様な利己的な、功利的な個人的なものではなくして、それは個性的な特殊的な然も、特殊の中に普遍を含むものです。我もない彼もす其處にはすでに彼我の區別を脱して超個人的な自我の本質への沈潜がなければならないのです。

私達山岳部の人達を結ぶ一本の絆はこの超個人的な山への歸依の深い理解によるのでは只それを通じてのみ、互に信じ敬愛する事の出來る深い友愛に生きる事が出來るのではない達の心と心とが相寄るに從ひ、私達の親しみが增すに從ひ私達が互に理解し合ひ信賴し合ふに從つて、私達の友友の根底に横はるこの一つの根底を理解する事が出來るのではないでせうか。そうした深ければ私達の集まりは内容のない空虚な外面的な形式に墮さねばならないでせう。

山への歸依、夫が一種の悟りであると云ふなれば夫れは云ふまでもなく、靜止する一點ではなくし、その内に無限の自己發展進行を意味して居るでせう、然もその内容は、各人によつて多種多様でなければなりますまい。私達の人生觀が異なる様に私達の山岳觀も亦多様でなければなりますまい。しかもその主觀的な雜多にも不拘ず、等しく山を對象として居ると云ふ點に於て、何等かの超主觀的なものが存在して居るのででもあるのでせう。そうして其處に私達のお互ひの心から心への通路が開かれて居ていいのではないでせうか。そうです。そうした通路を歩む事によつて、私達がより深く結合され、前に述べた私達の悟りにより豐かな進展が與へられる喜びを感ずる事が出來るのではないでせうか。

今や達はこう云はうとして居るのです。私達は私達の仲間の中で純な自分達の姿を深く理解しあふ事を願つてゐるのですと。もしも、愛の本質が他を知るの理解に透徹し切る事にあるとするなれば、私達はこの愛の絆によつて、斷ちがたい結合の中に私達自身の純な姿を掩はれる所なく見出す事の喜びを持ち合はねばならないのではないでせうか。そうした喜びこそ、誰かのよく云はれる「趣味の集り」の本質を形成するものではないでせうか。

そうした愛を通じて私達は山の經驗の未熟な人達を導き、貧しい私達の所有品を共に利用し合つて居るのではないでせうか。この内的な結合こそ、私達山岳部の永遠の「グルンド」に他ならないのです。私達の中にありながら純な赤裸々な心を以つて、私達と交らうとはなさらないでやる様な方々は、冷やかな目で、批判的な目で私達を眺めていらつしゃる私達の仲間以外の人達にも、貧しい私達の山に對する智識や、用具の利用をお分ちする事を拒む私達は決して私達にとつて、悲しい存在です。暗い陰影です。

様な者ではありません。否むしろ喜んで一般の人達のお役に立つ事は喜んで致したいと思つて居ります。私達は如何なる人達とでも共に山を語るの喜びを持つものです。けれど私達山岳部の本質は、決して單なるそうした利益の利用や、山を通じての私達の心と心との直接の結合、山を機縁としての私達の心と心との直接の結合です。其處には、暖かい私達の友情の絶へざる流れがあり、友の憂ひに悲しむ涙があり、共にする美しい喜びがあるのです。私達は離れる事の出來ないいとしい兄弟達です。そうしてあの山々は私達の永遠の慈母なのです。私達の結合の眞の最初の動機は山の好きな親友達を集めて、次第に大きな圓を描いて行きつゝあるに他ならないのです。山の取り持つ御縁からの、親しい友達を中心にして、

今年もやがて終りが近付いて參りました。そうして來春は、こうした私達の固い結合の地盤を築いて下さつた多くの諸兄と、袂を分つ悲しい日を迎へねばならなくなりました。

やがて來春、私達を學校に殘して去り行く人達よ！後に殘つた私達が、幸ひ住むと云ふ山の國へ導かれて行つたのは、全く美しいあなた達の情からでした。そうして私達が、あの靜寂な奥深い神祕の美を湛へて居る、限りもない深みに、安らかな私達の靈の安息所を見出す事の出來たのも、あなた達故でした。然し私達が共に山を歩るき、あのさゝやかな部室で、心から面白いお話しを交し合ふ樂しみが、私達から失なはれて行くのを淋しく見送らねばならない時が參りました。朝に夕に、微笑し合つたあの多くの顏が、再び恵まれた稀な機會を待つ事以

外には見る事が出來なくならうとして居るのです。然しこうした悲しい別れの後に私達何が殘されるでせう。心、そうです。私達の美しい情けのみが殘るのです。否殘らねばならないのです。あのさゝやかな部室は私達の暖かな友情の住居であり、それは、何時も變る事なく、掩はれる所のない心と心とが、相ひ觸れ合ふ幸福な聲に充されて居ることでせう。それは變る事のない私達の仲間の掟であります、その信賴を措いては成立つ事の出來ない私達の集りだからです。私達は山の友であると同時に心の友であるからです。そうして時が如何に移らうとも、あの山の幸ひが淋しい人の心に何等かの慰みを與へ、人々が心と心との結合のもたらす何等かの喜びを忘れない間は例へその外觀は如何に貧しくとも、その内容は豐かな幸福に滿ちたこの山の集ひが、確固たる存在の地盤の上に、絶える事なく、美しく尊く、輝き續けて行く事でせう。

やがては、悲しい別れの日に出會はさねばならない私達。そして二度とは歸らない樂しい若い日を永遠の過古に奪ひ去られて了はねばならない私達ではありますけれど、私達はあの靜かな谷間の流れに、あの美しい高原に、あの高い山頂に、限りもない豐かな思ひ出の世界を共に持つて居るのです。其處では、私達のすべてが一人殘らず皆離れる事なく一つに結合され、美しい詩が織られ、豐かな夢が結ばれるのです。私達は其處に、私達の心と心とを貫いて流れる超時空的な一つの流れを感ずるでせう。

では皆樣よ！さようなら。

月澄む夜半、朗らかな朝、淋しい夕人氣のない深山の木立の影にも、或は又交錯した都會の雜閙の中にも、その私達の樂しい思ひ出が何時も私達に微笑みかけて來る日のために、靜かに別れの杯を共に汲みませう。

何時か、私達が又再び相會ふ機會が恵まれる時私達は昔の儘の、親しい私達の友であり、嘗つての日の集ひを愛する、あの暖かい心を失なはないあなた達で居て下さる事を信じます。

そうして更にこうした私達自身の爲にお互の幸福を祈りながら、私はこの拙しい私の言葉を結びませう。

（一九二七、秋）



上高地の一夜の夢

強力塚田主人

六十餘の老人

江口定條氏が烏帽子槍縦走

昭和二年十月十五日の信濃毎日に左の記事が出た。

（松本電話）去る六日燕山荘主人赤沼千尋氏の案内で中房より初冬の烏帽子槍縦走の途についた、菱の江口定條氏の一行は、燕岳より槍、傳兵衛小屋より濁澤を烏帽子に上り更に三岳に上り、傳兵衛小屋より濁澤を烏帽子に下り、十三日大吹雪の中を西鎌尾根より槍ヶ岳に出で、十四日夕刻上野口五郎岳、鷲羽岳、双六岳等の大縦走に美事成功し、十三日大吹雪の中を西鎌尾根より槍ヶ岳に出で、十四日夕刻上高地へ無事下つた。六十餘歳の老人が十月上旬烏帽子槍大縦走に成功したことは珍しいと言はれて居る。

同日の東京日日には

吹雪の中を

アルプス大縦走

三菱重役江口氏と

信濃山岳會員、掉尾の壯擧

（松本電話）東京三菱の重役江口定條氏は、信濃山岳會の赤沼氏と共に燕岳から槇恵谷を湯股に下つたが、十一日以來寒氣甚しく吹雪の中を烏帽子に強行、それより蓮華、双六、槍の大縦走をなし十四日上高地に下り十五日夕方松本に下る筈、恐らく本年掉尾の大縦走の成功者であらう。

と麗々敷吹聽せられた。何のそんなに吹聽せらるゝ程のことではないが、十月初旬より中旬へかけての小春日和を利用して、都合よくば、穂高縦走をも試みる積りの處、相憎天候不良となり烈風と吹雪に大分惱まされ、山小舍にも七晩を過ごし、可也えらくもあり、つらくもあつた。もう山登りもやめか、如水會山岳會脫會かと思つた事も、一度や二度ではなかつたが、あとからになると又一段と愉快な思出になり、果ては性懲りもなく、又來年の計畫を夢に夢みる樣になつた。木上り木ではてる。「山上り山で見たくなつたがこう聽かされてはやれ〳〵困つたものぢや。江口はどうかして居るぜと心配してくれる方もあるならん。仕方がないから其方々には、又寒山子を呼起して與君心不レ同、君心若似レ我、還得レ到二其中一と御挨拶せん而已。

遽莫あれ、平素懸け離れ居る我が敬愛する如水會の諸君に御無沙汰の御詫旁〳〵老生が過般の山登りの有の儘の



野澤峠附近より毛無山

様子を御耳に入れ度、貴重なる紙上を借用するのも、こうすれば又諸君の中より其身邊の面白き消息が聽けるかと思ふ老婆心、先乞ふ隗より初めよの積り也。

旅は道連れ世は情、山上りには最も大切なのがよき案内者を同伴すること。老生も永年山登りをしますが幸に此道連れ案内者には恵まれて居ります。否よき手引き案内なくては、老生の如きものの山上りは、とても今日迄繼續出來ませんでした。上記の烏帽子槍縦走には山の主とも申すべき、恬淡にして、壯快なる國士的の面影ある赤沼千尋氏の外に、案内者として信州安曇の有明村に其人ありと知られたる、塚田清治と、共に老生とは多年の知合にて御互に氣分氣心も飲込み居、またなきよき道連れでした。赤沼氏や塚田杯より頻々と呼出狀も來り、遊心勃々禁ずる能はず、遂に十月初旬も去り秋も過ぎんとせしが、東京を離れる事が出來ず、如水會連中の木曾駒行にも同行出來ず、其の内早や夏思切つて都を去る事とせり。平生徒歩散策の暇尠なき身にして急に峻嶺高嶽を攀づる事は多少の準備なくては無理なれば、出發前三四日は毎朝五時より七時迄或は明治神宮内外苑或は府中國分寺間に約二時間足を練り、愈々十月五日夜半、國分寺驛出發。六日朝松本着、有明を經中房温泉に投宿一泊。翌七日燕岳に上り此處にて赤沼氏等と評議をこらし、天候兎角に不定なる爲、燕より槍に出で槍に於て天候を見定め、天候よくば先づ穂高縦走を濟ませ、更に上高地より槍に返り、槍より烏帽子に向ふか、又は天候次第にて穂高を見合せ槍より烏帽子縦走にかかるか、二者何れかを槍に於て決することとし、兎に角燕には一泊、翌朝出發の事とせしが午後より天候急に變

じ風雨となり、夜に入りては更に甚しく翌朝に到るも更に晴模様なく止むなく其日も燕籠城と極めた。其翌八日は朝來好晴となり、朝日に映ずる槍ケ岳が初雪の薄化粧せる姿を仰いだが、猶天候の案ぜらる、爲遂に槍行を見合せ、燕より烏帽子に向ひ蓮華を經、槍に出で天候次第穗高に向ふ事とし、其より高瀨川に添ふて濁澤に下る、其日は絶好の秋晴にて、大空は紺碧、溪谷は眞紅の楓、七竈、淡黃の山毛欅、白樺、青綠の檜、杉等の交錯せる此邊にて所謂三段紅葉の風色又なく佳也。夕方濁澤着一泊、翌朝八時出發ブナ立の難路を喘ぎ〳〵登攀す。沿道には赤い色の實を帶びたる御橘、處在に點綴して可憐の兒不覺いくたびか足を停めしたり。午後一時半烏帽子小舍に達せし頃より、時雨模樣となり、夕方より夜に入り暴風雨と變じ、終夜ゴウ〳〵小舍も吹飛されんかと思ひし事一再ならず。翌朝に到るも風雨更に熄まず、午後に至り少しく晴模樣なりしが、夜に入りては雨なきも烈風吹荒み凄慘の狀昨夜に異らず。小春日和を利せんとせし吾等の計畫水泡となれり。されど今は、唯天候の少しにても回復するを待ち前進の外なし。翌十二日は午前二時半起床、五時朝食を了り何時にても出發の用意を整へしも、風猶熄まず雪さへ加はり、天候依然不良八時頃に至り風少しく止む。即ち急に旅裝を整へて出發せしが、三岳の尾根にかゝりし頃より又々猛烈なる狂風吹きまくり砂礫に等しき霰は脚下より疾風に卷上げられて吾等の目を射る。所謂目も當てられぬ苦しさ。風は益強くなる。十貫以上の荷を背負ひたる二人の强力の足許さへ幾度となく蹣めく。仰見れば野口五郎も鷲羽も、吾等の眼前にありながら、吾等の苦しむを知らぬ顏して泰然自若、幾度か燕から見て憧れた此山々も、近くに來て見れば此素氣無さ、身の苦みと心の恨遣る瀨なし。時刻の移るに從ひ追々雪と

なり、夕方蓮華の小舍に辿り着きし時分は、全く雪中の强行軍、暮るゝに從ひ氣もめいる樣であつた。不相變の空き小舍を外よりたゝき明け、火を焚くやら薄圍を下すやら、濡れた衣類や足袋を乾かす杯する內、御飯も出來たが、餘り氣苦勞した爲か、何時ものやうにうまくもない。此夜終夜雪、翌朝滿山滿地白皚々、されど朝來好晴、吾等は勇み立つて八時半出發。過般秩父宮御一泊の双六小屋にて晝食を愉快に濟まし、神ならぬ身の前途に如何なる艱難の橫はるゝかも知らで、元氣よく樅澤を越え、拔、西鎌尾根にとつかゝりし頃より、霧深くなると共に、又もや烈風加はり、飛雪紛々遂には大吹雪となり、行けども行けども槍の肩には取付けず、追々に暗くなると共に、寒氣も加はり足の感覺はなく、息は切れる。苦しくて苦しくて、氣分はポーッとして腸は九回する思をなす。塚田等より度々身體が冷へはせぬやと聽かるゝも、幸に鞣皮のウインドブレーカーを着用せし爲、上身は寒さを感ぜず、唯一間步みては休み匐ふ樣にし、轉ぶ樣にして、漸くの事に槍の肩に出でし時はやれ〳〵助かつたと思つた。自分の體驗では此の時の苦しさは、ボートレースに出て決勝線に入る前、デッドヒートの競爭をせし場合の如き感をなしたり。併も、此苦しみが相當に永き間繼續せし爲、弓折れ矢盡きて萬事休す矣の思をした。

槍の肩の小舍にて藁火を焚いて、暫時暖をとりしも、此處には今時薪木もなく水もなく、其上滿山雪と氷にて張詰め居る事故、明日穗高行は到底望なく即ち勇を鼓して、暮靄を衝いて大槍小舍に下りしは午後六時。疲勞の爲食慾なく、暖かきコ、ァ一杯を力に、力なく床に就く。終宵降雪翌十四日は愈の大雪、槍澤の三四尺もある雪を踏んで蹌踉として下り午後四時上高地着。此行豫想に反し、天候兎角に不良、或は烈風强雨に出會ひ、或は此時節に稀なる吹雪の襲來抔、豫期せざりし艱苦の思をなせしも、幸に何事もなかりしは、同伴者の其道の達人なり

しにより、途中何等の無理をも爲さざりし爲なり。翌十五日はこれは又今迄になき好晴にて、吾等は歸途を梓川の沿岸にとり、ゆくりなく再び晩秋の渓谷美を稱しつゝ、とある茶店に憩ひし時、赤沼氏等の且笑ひ且語らひ興ずるを何事なるかと尋ぬれば、赤沼氏の曰く「唯今塚田より聽きたるが、昨夜は、上高地に於て、一行の無事なりしを祝し、心安く寢に就きしに、何時の間にか、彼は己の村の有明に歸り居るのみならず、有明村登山案内者總會に呼出されて居た。見渡せば總員五六十名、其の中より嚴めしき長老進み出でて曰く、此初冬の何人も登山せざる時節に、あの年とりたる人を烏帽子槍縱走抔に連れ出し、あの困難に遭はせたるは塚田等の不心得也。將來の爲彼を組合より除名すべしと。之を聽くや塚田は憤然として立上り、あの方は體驗深き老山岳家也。天下の江口さんなり。此の邊の五十六十にて腰の曲れる輩抔とは較べものにならず。彼の人を案内せしとて吾に於て何の不心得かあらん。除名抔とはもつての外なりと。傍に大庭なる案内者あり。彼、塚田に同情して辯護して曰く、時節不可と云ふも、吾等登山案内者の書入時は冬の十二月一月にあらずや。何の理由あつて今頃を時節不可と云ふやと。言はせもあへず、一同は大に激昂し、忽ちにして鐵拳は二人の頭上にあり、見る〳〵修羅場を演出せんとせし時、何れの新聞社よりか二名の記者突如として顯はれ、諸君靜かにせよ。吾等は今外にありて事の始終を打聽けり。江口翁は塚田の云ふ如く、吾等もよく知る天下の老山岳家也。彼自身に體驗と自信あり。塚田抔が好んで彼を無理に導きしが如く責むるは强ふるも甚だし。諸君何すれば爾く亂暴狼籍なる。塚田君よ、君等も亦强いて抗辯するの要なし如かず塚田君、これより君と吾等三人にて江口翁を誘ひ、遠く臺灣の新高山に出懸けずや。君以而如何となすと。

即四人相携へて曾て見知らぬ常夏の國の高山跋渉の途に就けり。草枕慣れぬ旅路を遙々と、山又山を打越へて、行けども行けども目指す處に行き着かず、力は盡き體は綿の如く、流汗淋漓たりしが、フト、夢覺れば身は上高地の旅舍にありて、梓川の流は淙々たり。これは、これ彼塚田のいつはらざる昨夜の夢也。』と赤沼氏語り了つて更に語を繼いで云ふ。眞情流露の餘に出でたる彼一流の夢物語、此行の最後を飾る美しきエピソードに非ずやと、顧れば、濛々たる噴煙を飽くまで吐き盡くさずんば已まざる燒岳の勇姿は天の一半にありり、其戴ける雪は旭光に映じて、紅黄紫白の色さまざまに、鉛色の噴煙と、紺碧の大空と相和して、五彩七色の美觀言語に絶す。眼を轉ずれば蒼穹高く聯れる雄偉壯嚴なる穗高の連峰は恒久の沈默を守りつゝ悠揚として迫らず。其の清くして聖なる面影は眞に天と地との楔子ともたゝゆべし。之を仰いで吾等は森嚴靜寂の氣に打たるゝのみ。これだから山行きはまだ〳〵止められぬと覺悟した。

完全な自由とは自然と共にある時のみ

——ラスキン——

錄　　雜

山に入る佛心からぶれか
知らず淋しき人の心か

針の木を越へて薬師岳へ

七月十三日、小雨。

南へ行うか、北にしやうか七月へ這入つてもまだ迷つて居た。ふと針ノ木峠の名を思ひ出すと否應なしに引つけられてしまつて同行のあるまゝに憧れた峠の頂に立つ事が出來た。Y氏やK氏に送られて飯田町を出たのは三日前の夜だつた。薬師を越へて槍に出る迄の永い行程は殘つて居るけれど何だか、もう自分の目的が達した樣に感じた。

振り返つて見ると今來た急な雪渓を登山隊が登つて來る。空は一面に曇つて時々霧が襲つて來る。連華も針の木も頭は見えない南の方面は割合に明るかつたけれど七倉から不動に續く尾根と大きな烏帽子の胴體が見えるだけで期待した眺めは得られなかつた。午前十時二十分峠を下り始めた頃から天候は益々悪くなつて來た。針の木谷を岩から岩へ、岸から岸へと飛んで行く渡渉が可成り續いた頃到々降り出してしまつた。昨年架けられたさか云ふ丸木橋は一つも殘つて居らない。上からも下からも水に攻められ濡鼠となつて、焦れば焦る程濡れた。幾度か徑を踏み違つて黒部川の岸に出た時は一同ほつとする。此方側にも小屋がある。矢張り商賣をして居るらしい。今日宿を借る可き日電の小屋でない事を確めて吊橋を渡つて對岸に至る。橋は針金に一尺位づゝ距てゝ木が渡してある丈ですぐ下を黒部川の物凄い碧い水が奔流して居る。對岸に近い所は殊に深くて水の中に引込まれる樣な感じがして急傾斜になつて尾根をめがけて登つて居る。空身の宮本氏に案

七月十四日、曇。

山では殆んと味はへぬ樣な温かい眠りを貪つて今日は天氣がよさそうだ。昨夜藤橋一の山男の齋木福松さんに「スゴ乘越」迄は一日では無理だと聞いたので今日は五色ケ原迄にする。仁王さんの草鞋を少し縮めた位の大きな越中草鞋を一足づゝ貰らつて七時四十五分小屋の人々に別れを告げる。宮本氏は藤橋迄行かれるので峠迄同行する事になつた。五人の者は米が一升五合づゝ加つたので急に重い。徑は暫らく越中澤に沿ふて居るがやがて尾根をめがけて登つて居る。空身の宮本氏に案

制されて苦しい。荷は益々肩にこたえる。一度小憩して九時近く刈安峠につく。「刈安峠は一度休むに定まつて居ますよ」と宮本氏は濟して居られるが重荷にへたばつて居る僕等はそれ所ではなかつた。

刈安から中ノ谷に下つて直接ザラ峠に出る徑の外に昨年切開かれた尾根傳ひで五色ヶ原の東南端に出る徑がある。宮本氏に昨夜來の好意を謝し僕等は今朝「平ノ小屋」から一緒だつた松高の人達と新道を採る。今日は五色ヶ原迄なので呑氣にかまへて一度腰を下すと仲々立ち上らうとはしない。雲は案外低くて眺めは全くない。五色ヶ原の東端に出たのが午後の一時半である。原は深い霧が立ち込めて居て時々霽れた間に邊の樣子を窺ふのみだ大きな雪原がゆるく東に傾いて處々偃松が斷たれて居る。右も左も深い霧で小屋が見つからない。松高の人夫は遲れてしまつたので聞く理にも行かない。むやみに歩く。五色の霧は噂には聞いて居たが是では迷ふのも無理はない。「あゝ誰か聲がして居る」「あすこに人が見える」。

成程小さい窪を隔てゝ霧の中に五六人が立つて居る。今日霧で小屋に滯在して居た人が雷鳥を追つて來たのだ。親と子の二匹の雷鳥を四方から圍んで追かけたり寫眞を撮つたり大騷動だ。氣が付いた時にはすぐ足元に小屋がある所迄來て居た。此の小屋は原の東北端にあるので中ノ谷の雪渓を登つて來るのが一番近道らしい。可成大きな小屋も相當混雜して居た。物置きの樣な二階があるが煙が來るので餘り歡迎せられない。僕等一行は下の一角を占

七月十五日、晴。

深い霧だ。小屋を出るとすぐ徑を失つて磁石三分出鱈目七分に歩く。鷲も鳶も淡い影すら見せない。小屋を出る時大體見當をつけて置いたのだがどうした事かと氣がつくと五色ヶ原の北端の絶壁の上に立つて居た。引返すにも道はない。驚と鳶との鞍部に出ようと偃松の中を無暗に歩く。皆思ひ〳〵に潛り込んだのでやつと昨日登つて來た雪原の端の所に出た時は二組に分れて他の組は下の方に下つたらしい。Y君は此の下の方で幕營して居る松高の人々を探しに行つた。僕は雪の上に尻を下して又深い霧の原を見つめてさつきからの松澤りの事など考へて居た。Y君は仲々返つてこない。

上の方で「オーイ」「オーイ」と云ふ聲に氣付くと何時の間にやらY君と松高の連中が僕等より上に來て居た。雪渓を登り切つて鳶の腹をまく。多くの人達で賑かだ。鳶から越中澤岳に續く尾根傳

ひは短いけれど急傾斜で高低が多く偃松の根に邪魔されて歩きづらい。案外時間がかゝつた。越中澤岳から二目のピークの頭で晝食をとる。さつき一寸槍を見たが霧が襲つて來た。スゴ乘越の小屋迄は大した事はないと云ふので皆落付いて居る。まだ晝一寸すぎたばかりだ。松高の人夫知永さんの大町の人夫禮讃論は仲々つきない。「なんせ大町の人夫衆は北の端から南の端迄這入らない所はない。薬師縱走もやれは立山へも行く。烏帽子槍の縱走は勿論穗高もかける。それにくらべりや越中の衆は立山ばかりでたまに薬師に來る位のもので有明の衆さきたら燕ばかりで島々は上高地入りだけだ」話に名殘りは殘るが餘り霧が深くなつてはと立上る。前方に大きな山がぼんやり浮んで居るが夫れも時々見えなくなる。下りかゝつた尾根はすぐ急傾斜となつて前の山との間に落込んで居る。少し樣子が變だ。「前のはたしか薬師に違ひねえんだが、」と知永さんはあちこち徑を探して居る。スゴ乘越へ下るのは西へ行く筈だのに僕が磁石をふつて見たら南に向いて居る。大町人夫の自慢も餘りあてにならない。人夫の腹磁石は霧が卷いては役に立たぬらしい。さつき知永さんが薬師と思つたのは赤牛であのまゝ下つて居たら黑部川の上廊下の眞只中に飛込んで居たかも知れない。スゴ乘越迄は案外近かつたけれども小屋は乘越から薬師へかなり登つてからだつた。新しい丈夫そうな小屋である。水はすぐ近くの雪渓からチヨロ〳〵流れて居る。夕方は全く霧が舞れて立山、淨土、龍王等姿を現はし劍は小屋の屋根から頭だけ出して居る。僕等より少し遲れて五色ヶ原を出た四高の人達を加え

七月十六日、晴。

目を醒したらY君やM君の働きで飯盒に飯がたけて居た。今日はよいお天氣だ。六時御飯が終ると三組とも殆んど同時に出發する。赤牛、黑岳、雲の平は今日は明きり近くに見る事が出來た。薬師岳は隨分大きい。頂上かと思ふと又前に大きな瘤が現れる。ガラ〳〵の尾根になると三つ許りの瘤に祠の立つてゐるのが見へた。頂上だらう。薬師特有の見事な「カール」山腹を抉ぐつて白く光つて居る。三高の人達が薬師から下つて來た。幾個かの岩の「ピーク」を越えて午前十一時一寸過ぎ頂きに着く。何を置いても祠に一禮して山旅の幸福を祈る。祠の附近には有峰あたりの人達がお薬師樣に奉納した劍が眞赤にさびてそこらに散らばつて居る。Y君は手頃なのを一振り「リユツサツク」に收めた。以前は鏡も澤山あつたそうだが今は一つも殘つて居ない。雪に砂糖を振りかけて喉をうるほし乍ら話は佐々成政の話に進む。何でも成政がザラ峠を落のびる時の二萬兩とかの軍用金を此の薬師の何處かに埋めたそうだ。皆んな欲しそうな顏をして居る。目を上ぐれば乘鞍、穗高等餘程近づいて居る。雲の平から次第に高くなつて三股蓮華、鷲羽、黑岳、赤牛、遠くは後立山にかけて餘す所なく眺められた。五色ヶ原か

ら見た烏帽子は一寸槍の様に見えたのに此處からは全く貧弱に見える。遠く西方には加賀の白山が白く連らなつて北は黒部川が次第に廣くなつて日本海に注ぐ邊も微かに見える。薬師の下りは道がよいのでぐん〳〵進む。あまりの勢に二六五八米邊で道を失つてしまつた。ガラ〳〵の尾根は突然偃松で突然遮られてしまつた。すぐ下に平らな草原が見えて居るがどうにも仕様がない。誰か一人勇敢なものが偃松潜りを始めた。初めは眺めて居たが夫々見當をつけて後に續く。少し下ると偃松は背丈位になつて轉んだり躓いたりしてやつと草原に出たときはへと〳〵になつて居た。松高の人夫はそれでもどうやら徑を探して下りて來たらしい。すつと黒部川をからんで居るそうだ。もう一息で太郎山だ。立上ると又すぐ徑が分らなくなつた。今度は水堀があつたので案外樂だつた。此の二度の失敗で太郎山の緩かな登りでも足が上りかれた皆んなフラ〳〵して居る。太郎兵平の氣持は何とも云えない。こんな所で十日程野營して見たい。有峰からの道は平のつきる頃右手から登つて來てゐる上の岳の小屋ではすぐ前の山の頂に聳えて岐阜の金華山の城を見る様な感じがした。四時半上の岳の小屋に着く。名古屋の伊藤氏が建てたものだそうで小さいけれど可成完備し〳〵水も少し下ると大きな雪渓の下から豊富に得られる。今日も平和に山々は紫に煙つて行く。黒部川山側に腰をおろして薬師澤を下つて黒部川の源流を遡る筈だつた事など思ひ浮べて冥想に耽る。黒部川の谷は既に暗い。

七月十七日、晴。

未明から空には一點の雲もない。輕い足を踏み出せば朝の氣は身に浸みる。上の岳は大きな「ボーケン」をつて居る。五郎の下りは岩の「リッヂ」で時々偃松までが下りを妨げて進まない。小い高低が澤山續いて五郎乗越の小屋についた時には相當疲勞を覺えてゐた。水もあり、此の小屋は快よい夜を送る事が出來るだらう。

今日は双六の小屋迄強行する筈なので直ぐに三股蓮華にかゝる。東は一點の雲もない。昨日から皆疲れが眞直に切開きは登つて居るが物凄い。

頂上迄は永かつた。信越飛の國境に立つた云ふ感じでゆつたりした氣分になつた。落ちつけて又無駄話に花が咲く。霧が時々下かつたになると共通點が多いのでいよ〳〵興がのる。遂には活動の話に餘りも動かなかつたらう。やつと立上つてあ雪渓を「グリセード」して四時小屋につく。來て居た。番人は居ない。僕等は明日笠を往復するつもりだつた午然小屋に食料がなくては自分達はあと一日分しか持つて居ない。折角の計畫もあきらめなければならない。何だか涙が出る程殘念だつた。小屋は眺めてすき間が出來て居る。去年番人が居屋根から空には一點の雲もない。輕い足を踏み出せば朝の氣は身に浸みる。上の岳は大きな「ボーケン」をつて居る。五郎の下りは岩の「リッヂ」で時々偃松までが下りを妨げて進まない。小い高低が澤山續いて五郎乗越の小屋についた時には相當疲勞を覺えてゐた。水もあり、此の小屋は快よい夜を送る事が出來るだらう。

今日は双六の小屋迄強行する筈なので直ぐに三股蓮華にかゝる。東は一點の雲もない。昨日から皆疲れが眞直に切開きは登つて居るが物凄い。

頂上迄は永かつた。信越飛の國境に立つた云ふ感じでゆつたりした氣分になつた。落ちつけて又無駄話に花が咲く。霧が時々下かつたになると共通點が多いのでいよ〳〵興がのる。遂には活動の話に餘りも動かなかつたらう。やつと立上つてあ雪渓を「グリセード」して四時小屋につく。來て居た。番人は居ない。僕等は明日笠を往復するつもりだつた午然小屋に食料がなくては自分達はあと一日分しか持つて居ない。折角の計畫もあきらめなければならない。何だか涙が出る程殘念だつた。小屋は眺めてすき間が出來て居る。去年番人が居

らうと十分聞いて來なかつたのが失敗だつた。

今夜は赤牛を越して來た法政の連中と四高、松高と僕等で小屋は一杯だつた。上の岳で一緒だつた四高の人達は五郎の小屋で宿つた筈だ。

七月十八日、雨。

雨だと云ふ聲に皆ははね起きた。昨夕暮れて仕舞ふ迄快晴だつた空は今朝は早雨になつて居る。飛彈側より吹く風は相當に強いらしい。すぐ頭に浮んだのは食料問題だつた。

昨夕食べたので後二食分しかない。是が出發の日の朝食と晝食だから手がつけられない。堅パンで我慢してお茶で腹をこしらへる。他の連中も皆粥らしかつた。薄暗い小屋の中で腹の空かない意屈凌ぎに知永氏の知慧を絞つた「ナゾ」の問題で興が乘つた。晝は味噌汁だけで濟ませる。他人が粥を食べるのは羨しかつた。いやしい樣だが食べるものがないと思ふと尙一層腹がすく。水腹の一杯元氣で法政の人夫に安曇節を習ふ「槍で別れた高瀨と梓：」其の聲も何だか力がない。

夕食は始めて五人に飯盒一杯の粥を造る。飯の味はまた格別だ味噌汁の實には雨の隙間を見て「三葉セリ」を取つて來て入れたが青臭くて餘りうまくはなかつた。飛彈側から吹く風は不相變强い。風が變らなければ晴れる見込みはないそうだ。明日も此分ではおぼつかない。

七月十九日、雨。

やつぱり雨だ。食料は愈々心細い。池の水が昨日來めつきり減つた。ヒユーと例の飛彈側からの烈風が池の面をなぜて行く。朝は一杯だつた。上の岳で一緒だつた四高の人達は五郎の小屋で宿つた筈だ。

午後向ふの雪渓の上から人聲がする。多人數らしい。「ヲーイ」「ヲーイ」「そら誰か來た」ごつと小屋の戸に殺到する。兎角皆此の小屋以外の人間が戀しかつたのだ。一昨日五郎で宿つた四高の連中が食料缺乏のため嵐を侵してやつて來たのだ。文字通りの濡鼠で生きた色はない。皆んなの心は此の一行の到着で却つて沈んでしまつた。里に一番未練のありそうなM君は心細そうな顏をして居る。夕食は昨日よりももつと軟い粥を造つたけれど何も食べない四高の人達に比べればまだよい。彼等は一粒の米も持つて居ないそうだ。暮れる頃には霧は幾分晴れて風も時々だけれど信州側から吹く樣になつた。時々常念山脈が隱顯して何だか明日の晴天を暗示して居る樣だつた。明日の希望と多人數との心强さで不安を和げて毛布の中へもぐり込む。

七月二十日、晴。

「晴れた」「晴れた」やつと三日目に晴れた。殘つて居る米を焚いて腹に入る丈食べた。それでもまだ辨當が殘つた。二日間の滯在の後片附に忙がしい。

「サア〳〵出發だ〳〵」知永さんも今日は元氣がよい。一番婆婆を戀しがつて居たM君は一番嬉しそうだ。米も鑵詰もパンも砂糖

も皆食べ盡したので「リュックサック」は馬鹿に輕い。肩は蠅が止まつた程にも感じないものゝ、二日の減食で足元が定まらない。這松の根にすぐ足をさられて右へふらり左へふらりと夢を見ながら歩いて居る樣だ。槍は段々近づいて來る。穗高の物凄いリッヂも一角〳〵が明きり見える。

去年T氏とあの上を通つたんだなと考へながら南岳から北穗高につゞくあの痩せ尾根の恐しさを思出して居た。十時四十三分槍の肩に「リュックサック」をおろして一休みした時本當に自分の家に歸つた樣にゆつたりした心持ちになつて穗高を見上げた。

暖かい大槍小屋の夜に明日の穗高行の幸を祈つて五人は寢につく。

七月二十一月、小雨。

穗高は全く黑雲に蔽れて見るすべもない。最後の希望も駄目になつた。穗刈氏に別れを告げて槍澤を下れば雨は益々降りしきる。幾度か恨らめしそうに見上るけれど霧に罩んだ雪渓が續いて居るのみだつた。（以上）

——追記——

此一行は横倉、八木、水谷、品川、中島の五名で十一日夜飯田町を出發した。十二日大澤小屋まで後立山山脈へ行く高木氏の一行と同行し十三日は平日電小屋泊十四日は一氣にスゴ乘越まで強行する積りであつたが、宮本氏に藤橋の齋木福松を呼んで貰ひ、色々樣子を聞いたが無理らしいので五色ケ原迄にした。實際は一日では難かしい樣に思つたが、二日で行けば非常に樂だ。

又豫定では上ノ岳小屋から太郎山の方へ引返し、藥師澤を降つて黑部川を溯る筈だつた。早く行けば五郎澤を登つて黑部乘越の小屋（黑部五郎と三股蓮華との鞍部、五郎平の小屋）、或は時間の都合によつては五郎澤の落合にある岩魚釣の小屋泊の積りだつたが、不案內で心配だつたのと、一行の心が充分統一してなかつた樣に思つたので尾根位ひに變更した。後で考へて見ると、却つて止した方が好かつた樣に思つた。双六小屋の滯在が岩魚釣小屋あたりだつたら一層心細かつたに違ひない。天候や食料の都合で笠岳と穗高の駄目になつたのは殘念だつた。穗高は大槍小屋の直ぐ下の瀧の上から横尾の壁に沿つて南岳の手前のピークに取つく筈で、瀧の上迄は穗刈氏に案內して貰ふ事になつて居たのだつた。（二、十、十七）

此んな平凡な旅も好きである

或る和尚さんが小坊主を連れて遠山の里に泊つた。和尚様は大の栗好きだといふ噂が高かつたので三度々々の食膳に必ず栗が出る。如何なことにも此には和尚さんも閉口して小坊主に旨を含め或夜寢言の中に栗はもう飽きたと云はせたといふ、

こんな話は何處にでもあるが遠山もそういふ栗の名所ださうである。否栗の他に何も御馳走のない山家であるらしい。

赤石山系西側の衝上斷層線を高遠邊りから秋葉山へ出て見たい希望を年來持つてゐるが此を一度に果す樣な機會が中々ない。それで部分的に試みる事にしてゐる。今度は下伊那に用があつて出向いた序に此の方面に足を向けた。夏の終りで秋色には間がある が雨が多く何の川も何の瀧も水嵩が增して中々面白かつた。

神稻（クマシロ）村から天龍峽へ

中央線辰野驛から伊那電車で飯田に近づくと市田と云ふ小驛がある。其處から明神橋を天龍の對岸に渡つて緩やかな坂道を十町程登ると神稻村字山田といふ處に出る。所謂龍東線一帶に發達した二段の河岸段丘の上段で何處を見渡しても桑が艷々と伸びてゐる。

此の桑畑の中の或る舊家に生れたTさんは今、早大史學科に學ぶ篤學の女學生である。鄕土史研究の一助として地理の指導をして貰へまいと此の夏の初めに知人の紹介で訪れて來たのが緣で今

天龍川を挾んで兩側の山の根に發達する大きな段丘がどんな風に利用されてゐるか、これが私の調べたい事の一つであつた。こんな觀方で九月七日の朝遲く、殘暑を感じながら飯田に向つて歩き出した。Tさんもリュックサックを背負つてついて來る。

飯田高女のI先生に就いて史蹟に關する說明を聞き小學校に珍藏する德川初期脇坂時代の飯田城の圖といふ珍らしい物を見せて貰ふ。吉野屋と云ふに一泊。翌朝七時乘合自動車で天龍峽に向ふ。川船で天龍峽を見るには電車なら時又まで行つて其處から降る。舟運は遠山川の落合を稍下手に降つた平岡まで定期の荷物舟があるから便乘出來る。今日は朝から雨なのと連日の增水もあり。どうも駄目らしいので陸路を執る。南信も三河と駄科（ダシナ）、自動車なら一向面白くない。第一崖上は平で畑地になつてゐるのだから有名だつたが今度の八景騷ぎで東都のエハがき屋にも現れる樣になつた。自動車から大體の樣子は分るが黑部を見て來たばかりなので一向面白くない。第一崖上は平で畑地になつてゐるのだから幾ら水際が美しくとも始まらない。私は併し異つた眼で段丘の上ばかりを見て行くから面白い。南に降るに從つて天龍の峽谷は愈々深くなり浸蝕の跡が歷然として段丘は三四段に高く複雜に

重れられて來る。その間を曲り曲つて自動車が走る。時又を過ぎ將來伊那電車の終點となり三信鐵道の起點となる可き月ノ木を經て阿知川を渡る。此の邊樹木多くて、一寸佳い。陽皐（ヒサワ）から第三紀層に入つて段丘はなくなり斜面に棚田が發達してゐる。自動車が能く通れると思ふ惡路を飽きる程走る。途中二度のパンクで小一時間を費し正午頃大下條村字早稻田（ニヰノ）といふに着く。今の處此處が自動車の終點であるが。近い中新野まで通ずるといふ新野は此の邊での僻村で民族學者を喜ばせる古習が殘る處だと聞く。車を降り一笑亭といふに中食。ダラ〳〵と川に降る。御供といふ處で地圖にないが南宮橋といふ立派な吊橋を渡る。中ノ島があり吊橋は其處へかゝり更に小橋で對岸に移る。此の邊は崖は高くないが天龍峽（ガシナ）邊より趣があつて宜しい。此から激しい夕立の中を温田（ヌクダ）、我科を下り、万古川の落合から爲栗（ステグリ）に懸る。万古川に向合つて南から和知野川が入る。此處を爲栗の方から下手に眺めると中々佳い。爲栗の南西に四四〇米の小山があり河月は此の裾を洗つて矩形の三邊を成して激しく屈曲する。浸蝕がも少し進むと和知野川は此の小山の南で本流に流路を奪はれるかも知れない。此の邊から人家が絶え道には草が繁り、西岸の傾斜は急で濶葉の美林に包まれ、シツトリとした淋しい景趣である。天龍の長所はどうも奇岩縱橫の峠ではなくて平凡ではあるが寂寞な美しさにあるらしい。その對岸大町の邊に注ぐ支流も綠樹を縫つてゐて美しい。名古山の部落の手前の坂道にかゝらうとする左手に一寸大きな瀧がある。ミミといふ一寸珍らしい蝶が敏捷に雨の中を飛んでゐる。名古山を過ぎて坂を下ると又立派な瀧がある。地圖にも出てゐるものである。此の邊から畑には蒟蒻が現れる。蒟蒻は下仁

重れられて來る。その間を曲り曲つて自動車が走る。時又を過ぎ將來伊那電車の終點となり三信鐵道の起點となる可き月ノ木を經て阿知川を渡る。此の邊樹木多くて、一寸佳い。陽皐（ヒサワ）から第三紀層に入つて段丘はなくなり斜面に棚田が發達してゐる。自動車が能く通れると思ふ惡路を飽きる程走る。途中二度のパンクで小一時間を費し正午頃大下條村字早稻田（ニヰノ）といふに着く。今の處此處が自動車の終點であるが。近い中新野まで通ずるといふ新野は此の邊での僻村で民族學者を喜ばせる古習が殘る處だと聞く。車を降り一笑亭といふに中食。ダラ〳〵と川に降る。御供といふ處で地圖にないが南宮橋といふ立派な吊橋を渡る。中ノ島があり吊橋は其處へかゝり更に小橋で對岸に移る。此の邊は崖は高くないが天龍峽（ガシナ）邊より趣があつて宜しい。此から激しい夕立の中を温田（ヌクダ）、我科を下り、万古川の落合から爲栗（ステグリ）に懸る。万古川に向合つて南から和知野川が入る。此處を爲栗の方から下手に眺めると中々佳い。爲栗の南西に四四〇米の小山があり河月は此の裾を洗つて矩形の三邊を成して激しく屈曲する。浸蝕がも少し進むと和知野川は此の小山の南で本流に流路を奪はれるかも知れない。此の邊から人家が絶え道には草が繁り、西岸の傾斜は急で濶葉の美林に包まれ、シツトリとした淋しい景趣である。天龍の長所はどうも奇岩縱橫の峠ではなくて平凡ではあるが寂寞な美しさにあるらしい。その對岸大町の邊に注ぐ支流も綠樹を縫つてゐて美しい。名古山の部落の手前の坂道にかゝらうとする左手に一寸大きな瀧がある。ミミといふ一寸珍らしい蝶が敏捷に雨の中を飛んでゐる。名古山を過ぎて坂を下ると又立派な瀧がある。地圖にも出てゐるものである。此の邊から畑には蒟蒻が現れる。蒟蒻は下仁

雨の遠山川

翌日は朝から夕立風の急雨である。十一時頃一寸晴れ間をうかゞつて出掛ける。宿の上の小學校から小山を登り詰める。其處から顧ると天龍川は非常な增水で黄色い水が綠滴るばかりの岸の森をすれ〳〵に狂奔してゐる。一種の美しさがある。坂を降れば遠山川の溪で流石に今日は此處も凄まじい濁水である。此處に注ぐ支流の吊橋を渡ると本流の對岸から立派な瀧が落ちてゐる。雨の爲に水量が增したのに相異ない。中々立派である。連日の雨に餘程緩んでゐると見えて一層、崖が押出して道を川まで突き落してゐる處がある。昨夜の出來事であるらしい。その先に道までしぶき を飛ばせてゐる所も立派な瀧がある、

道は折立から右岸に移つて平凡なので中々氣持の良い谷の道を行く。中學時代なら大騒ぎをやつて捕へたであらう。ウラギンシ

田の谷にも澤山あるが餘程風土を選ぶものらしい。やがて秋葉街道に合して和田に入る。

王子製紙が遠山川の溪から盛に材木を出してゐた頃には俗に「日庸（ヒヨウ）」と稱する遠國の人夫が澤山入り込んで人氣の悪かつた處であるらしい。今でもそんな氣風の殘つてゐる處で茶屋風の家もあるが枝を交へて小闇い蔭を作つてゐる。大分登つて南西を顧ると、和田の町は既に黄色く色付いて狹い谷底を埋めてゐる。谷壁の山の傾斜は可成り雄大で南西側の山の緩かなのに對して北西側の傾斜の鋭いのが眼に就く。峠を降つて阿島で遠山川に別れ、上村川の谷に入る。此の邊にラヂオラリア板岩の露出があつて美しい。日暮に近づいたせいもあるが此谷にはいつて急に暗くなる。兩岸の山が高く森林が美しく斷層谷の特徴が良く現れてゐる。

上村（カドムラ）は油屋といふに泊る。町の中央に小流を引き入れて洗場としその水で生活が保たれてゐる、家々は黒く煤けて四圍の闇に塗り込められてゐる。やがて六時である。町に不幸があつたさかでその家に村中の者が集り何やら薄暗い中で混雑を極めてゐる。宿には因より何の口に合ふ食物もない。栗には未だ大分間がある。子供が河で捕つて來たカジカと云ふ小魚、これが唯一の美味である。小供の頃湘南地方で自ら捕へてよく食べた魚である。夜は月が美しく遲くまで川の畔で唄を唱つた。

小川路峠

東の山が高いので朝日のさすのが遲い。それだけ山の朝らしい清々しさがある。實に美しい朝で山頂の眺めが樂しみなことだ。今日越す峠は土地では五里峠と云ふ。その五里も五十町一里の計算だから本當は八里位ある。八時頃からポツ〳〵登りにかゝる。清水、押田と登つて千米突ばかりの高さになると對岸の山の裾が開けて來る。登る側の斜面の急峻なるに對して向ふ側の山は緩かで畑地は可成り高くまで開け、人の住居がポツ〳〵と見える冬等は快い日溜りを作る處である。押田から登りは樂になる。そして左に深く伊藤谷が切り込み、滿山の森林は美しい。花崗岩の間から湧き出す水が豊富である。小川澤の一軒家を過ぎ一寸急な登りがあつて頂上に立つ。頂上は樹木が高くて眺望は充分でない。殊に亂雲が東の山の頂を罩めてゐるので期待した聖や赤石の展望は全くない。峠を守る樣な位置に一軒の家があり、老婆が一人居て茶を飲まぬかと云ふ。傍に觀音堂があつて扉が鎖されてゐる。淋しい詰らぬ峠である。下り道は緩かに暫く尾根筋を傳ふ。そして曾山から來る道が合する邊りで北方の展望がある。これから道は西へ西へと尾根通り降りて行く。松虫草の亂れ吹く野である。クローバーの敷き詰めた原である。すつと遠くの伊那平まで何の見るものもなく次第に土地が傾いてゐる。飯田の町も松川の流も見える。木曾谷とを分つ木曾山脈南部の山の上には層積雲が純白にが美しく遲くまで川の畔で唄を唱つた。

肩に下駄穿きで登つて來る女もある。淋しいけれど、遠いけれど此が遠山に越す唯一の峠路なのである。此から毛賀を五時に出るぢんぐ〳〵と降つて行つた。（昭和二年十月五日）

二月の乘鞍岳失敗記

吉澤一郎

松本で降りて藤森へ入らうと思つたがまだ寢てゐるので六區町へ行かふかと考へてゐる時に法政の田中氏から電話がかゝつて來たので出て見ると「オイ乘鞍へ行かないか、尾瀨なんかよせ〳〵」といふ。尾瀨へ行かふかとも思つてゐたが部員が誰も行きさうもないので田中氏の誘ふがまゝに遂に乘鞍行きと決定してしまふ。

×　×　×　×

「二月の乘鞍はスゲーだらうな」

「うん、スゴさうだ、それにあの夏行つた時に見た天ぺんからの急傾斜を直滑つたらコテーられえと思ふ」

「うん、全くだ。何しろ相手は三千二十六米突だぜ、大いに氣分をあげて來るさ。」

見送りに來た近ちやん、そして法政の角田氏は新宿でをり、小栗は中野で別れる。汽車の中に殘された田中氏、土屋氏そして自分、ピツケル、ザイル、アイゼン、筒木小屋から山頂への山稜に防寒具に身をつゝみ、ザイルによつて結ばれた三人のパーチーの姿が、男らしい姿が、そして、御岳や穗高や槍の眞冬の姿が眼にちらつく、うつら〳〵とちらつく。

×　×　×　×

×

松本で降りて藤森へ入らうと思つたがまだ寢てゐるので六區町へ行かふかと考へてゐる時に法政の田中氏から電話がかゝつて來たので出て見ると「オイ乘鞍へ行かないか、尾瀨なんかよせ〳〵」といふ。尾瀨へ行かふかとも思つてゐたが部員が誰も行きさうもないので田中氏の誘ふがまゝに遂に乘鞍行きと決定してしまふ。

×　×　×　×

「二月の乘鞍はスゲーだらうな」

「うん、スゴさうだ、それにあの夏行つた時に見た天ぺんからの急傾斜を直滑つたらコテーられえと思ふ」

「うん、全くだ。何しろ相手は三千二十六米突だぜ、大いに氣分をあげて來るさ。」

見送りに來た近ちやん、そして法政の角田氏は新宿でをり、小栗は中野で別れる。汽車の中に殘された田中氏、土屋氏そして自分、ピツケル、ザイル、アイゼン、筒木小屋から山頂への山稜に防寒具に身をつゝみ、ザイルによつて結ばれた三人のパーチーの姿が、男らしい姿が、そして、御岳や穗高や槍の眞冬の姿が眼にちらつく、うつら〳〵とちらつく。

×　×　×　×

×

島々へ來た。夏とは異つて何となく淋しい。見覺えのある馬車屋の叔父さんに賴んでスキーやリユツクやピツケルを積み込み稻核へ行く。島々谷を渡る橋の手前で驛から乘つて來たおばあさんが大事に買つて來た水藥の壜を田中氏のピツケルにぶつけて皆こぼしてしまつたのは笑ひ事ぢやなかつた。稻核から奈川渡まで自動車の豫定であつたけど滿員で穗刈氏一人しか乘れなかつたには悲觀した。仕方がないので後の三人はスキーをつけて大きな道をちらつく、うつら〳〵とちらつく。之を稱して山スキーに對して街道スキーと云ふ。でも滑つて行く。

×

滑れる内がいゝ。いゝ加減行くと降りだ。降りだけは自動車より面白い。時々スケーチングなんかやり乍らペコ〳〵なお腹をかゝへて奈川渡の橋を渡つて變な所で飯、東電が入つてゐるので急に此の邊の奴は金まわりが眞くなつたと見えて嫌に横柄だ。家ばかり新しくてもがきの鼻の下の二本棒を見てはうんざりしてしまふ。

前川渡へ行く、一里ばかりの長かつた事、粉雪が降つて來る。所々に道の下に人夫の飯場が風通し良さ相に埋れてゐる、人の居る小屋もあつた。何しろシュラーフザックを擔がされてゐるので三尺位の積雪だらう。二箇所ばかり短い急斜面があつたが輪カンキの方がこんな時には早い。一々キックターンしてる事のもどかしさつたら無かつた。番所原から約二時間で目指す金山平の小屋へ達した。小屋はいくつも轉がつてゐるが中々旨いのへバる。前川渡についた時はもう歩く元氣もなかつた。又腹が減つて來る。それでも大野川まで案外近かつたので嬉しかつた。福屋のある所へ達した。仕方がなしに比較的上等な筒木小屋の老人の所有にかゝ島屋といふ木賃に近い所に泊り込む。定さかいふ人夫を傭ふ事に屋の中に居るのも詰らないので北側の斜面に行き直滑降をやる。して九時頃スキーに蠟をぬり、重い布團にもぐり込んだ。

× × × × ×

七時頃起きた。間誤〳〵し乍ら仕度をあはてゝやつてゐる内に時はざん〳〵過ぎて行く。然し用意も曲りなり出來て行く。人夫は荷が重いからとて弟を連れて行く事になつた。之に對して後で弟の人夫賃を請求して來たが隨分馬鹿にしてゐると思つた。向ふで引受ける様な顔をしてゐたから自分の方ぢや只さうかと返事をしたつきりなんだ。それだけで賃金を請求するんぢや詐欺に等しい、お役所へもち出せば默認といふ型で自分等の敗になるかも知れないが人情から云へば又別問題とならう。大野川の人夫には注意すべし。こういふ事になると有明の衆や芦峅の人達が懷しくなる。

大野川から約三十分の登りはいつも左手に前川を瞰乍ら行くのだ。これが終るとこんどは殆んど平が續く。行手乘鞍は雲に隱れてゐる。雪が又ちらついて來た様だ。小大野川を小さな橋によつて渡り番所の部落で人夫の知つてる家により少し早いが晝飯とする。正午に出た。大體夏道に沿つてる様に思へた。此の邊はまづ三尺位の積雪だらう。二箇所ばかり短い急斜面があつたが輪カンキの方がこんな時には早い。一々キックターンしてる事のもどかしさつたら無かつた。番所原から約二時間で目指す金山平の小屋のある所へ達した。小屋はいくつも轉がつてゐるが中々旨いのへバる。仕方がなしに比較的上等な筒木小屋の老人の所有にかゝつて來る。それでも大野川まで案外近かつたので嬉しかつた。福島屋といふ木賃に近い所に泊り込む。定さかいふ人夫を傭ふ事に屋の中に居るのも詰らないので北側の斜面に行き直滑降をやる。雪はあまり良くなかつた。ワサビ澤の奥の森林は深さうだ。往年部員たりしオシ、事淺原氏の遭難したのはワサビ澤だつたと聞いてゐる。そして此の金山平の小屋へ勇然と出て來たといふ武勇傳は氏の槍澤降りの一件と共に世にも勇かんなる物語りとして殘る事であらう。十二時頃寢に就いた。松木氏に借りて來たシュラーフザックのお陰でシャツ一枚でれても蒸し暑い位に感じたのであつたが他の人々は皆寒い〳〵とこぼしながらいつまでも寢られなかつた様だつた。今日は御大葬の日だ。謹んで東京の方に向ひお辭儀をする。更けるがまゝに外はしん〳〵として粉雪が降つてゐる。

× × × × ×

時々天氣を人夫に見させたが雪は尚降り續けてゐるので滯在と決めてしまふ。朝飯後は南側の斜面でスキーをやつたが藪が割にひどい。直滑降も出來るけれどそんな具合でやり悪い。晝飯はとてもまづかつた。いやしくも人間樣——熊樣ではない——の食ふ樣なものぢやない。田中氏と人夫は育ちが違ふ爲か之は又旨さうに味つてゐる。小生は仕方がないので持つて來たジヤガ芋をやいてリンコルンの眞似をした。一時半頃人夫と共に兎を捕へに出かける。澤を一つ越し、尾根を越して各自の部署を定めて追ひかけながら行つたが中々出て來ない。足跡は幾つもあつたが第一自分が間違ひのもとだ。一度見當違ひをして澤沿ひに歩いてゐたら可なりな瀧にぶつかつた。人夫の話ではゴサダルの瀧といふのださうで二段になつてゐた。歸つてから藪の中で直滑降をやつたら最後に下齒を木の枝にぶつけて唇の中側に穴をあけてしまつた。ペツと吐いたら雪の上はものすごく眞赤な血に染つてしまつた。さても痛む。今日は一日霧が深くて一體に暗い陰氣な日であつた。小屋に入つてから寢るまでオハラ節をならつたがどうしてもものにならない。

× × × ×

人夫は四時頃から起きて飯を焚いてゐたらしい。曇つてゐる。又滯在かと思ふとうんざりする。然し少し今日は我張つて置かふと思つて仕度をして出かける。下檢分の積りである。四尺位の積雪量の上に粉雪、——少し普通のとは異つて綿の樣な感じがした——である。金山平を終えて二〇四七米突に行く。尾根に登り小屋から一時間で大櫛現の鳥居につく、此處へ達する時少しの間細い急尾根になつてゐて厄介だつた。鳥居から少し行くともう森林帶である。此の森林帶を五百米突登れば白骨からの徑にぶつかるのであるが約一時間ばかり登つて其處から引返してしまつた。忽ちの內に小屋につく。鳥居から小屋までは全く廣々とした理想的なゲレンデだらうと思ふ。ボーゲンなんか實に氣持ちよく大きく出來る。小屋に歸つて見ると唇は痛むし。なんだかいつまでたつても此の天氣は續き相なので乘鞍岳はあきらめて歸へる事にした。ピツケルやザイル、アイゼンには氣の毒であつたが。大野川まで一時間半ばかり、又々吹雪いて來た。此處でも一度人夫に對する不平をもらして置かふ。彼一貫五百匁位擔がせたきりであつたがそれでも嫌な顏をしてゐて、おまけに人夫賃の外にテント生活料として外に一圓頂戴しますといふ。何處までふざけた野郎だかテンデ見當がつかない。テント生活料なんてとられたのは生れて以來はじめてだ。上高地邊りの林區のお役人がさるといふならまだしも此の慣慨してもはじまらない。まあいくら憤つてゐるのだ。何は聞えてゐる。まして何ぞや……。

人夫は四時頃から起きて飯を焚いてゐたらしい。曇つてゐる。又滯在かと思ふとうんざりする。然し少し今日は我張つて置かふと思つて仕度をして出かける。下檢分の積りである。四尺位の積雪量の上に粉雪、——少し普通のとは異つて綿の樣な感じがしたである。奈川渡まで一時間。それから登りはスキーをかつぎ降りは面白くすべつて稻核に入る。此處で慢じゆうをたらふく食ひ、日の暮れた道をスキーに乘つて島々の部落へ滑り込む。驛まで同じくスキーで行き七時十五分の電車で松本へ、而して二〇四七米突に行く。尾根に登り今度の旅は全然失敗に終らせてしまつた。

船津のキヤンプ場を後に御坂峠への道を行く。地圖には小田原町道としてある樣だ。淺川を過ぎて生ケ崎（ウブサキ）を曲つて東へ行くと云う河口村の領分に入る。河口は船津よりも古い相である。昔榮えた此處にある淺間神社は吉田のものよりも古い相である。昔榮えた此の部落も今や文明の波に取殘されてか新參者の船津の町に押されて昔の繁榮は只其の神社にのみ殘る。思へば有爲轉變の世ではある。部落の中程にある橋のたもとの茶屋に入つて少しの間其處の主人から村の樣子を聞く。近所の人がやつて來て御坂邊りの地名をば教えてくれたが地圖と照して腑に落ちない點もある。然し一應は此處に名稱だけでも知つて置いてもいゝと思ふから餘り當にしないで見て貰ひ度い。

部落の中央を流れる川は寺川で神社のすぐ東手には白瀧といふのがある相である。御坂から來るのは西川といひ、東、中、西の順にヲナ澤、ウスンド、イタドリの澤が一緒になつて流れると云つて居たが地圖の上ではこちつけれれば何とかなるが良くわからない。地圖に御坂峠とある御の字の所に岩壁の記號があり、其のすつと西南に同じ大きさの同樣な印があるがこれ等はホツチガ岩、釣子岩と云はれるが今はどつちがどつちだか忘れてしまつた。多分東のがホツチだと思ふ。部落を出端れると橋がある。これは疱瘡からは本當の登りとなる。それから峠の頂までヂグザグの道は可なり長い。峠から黒岳三角点までは八百間と云つてたが一寸さういはれると何里あるのかわからない。やはり氣分で登る山には間數や秩父や甲斐駒の方が澄んだ空によく見渡せた。只少し範圍が狹いと米突ちや向かない樣だ。何町だとか半道だとか云つて吳れないのが惜しい。山巓道路のお蔭で八百間は幸ひに短かかつた。途々三角点についたのは二時十分。一等三角点ではあるが河口湖の河の字も見えないのはどうした事か。三峠よりは高いのであるが實際の感じは三峠の方へ行かふかさも思つたが登り降りがはげしいらしいのでやめてしまつた。肝心の展望が雲の爲に邪魔されたので殘念乍ら降りかゝる。只今年は遂に夏の日本アルプスを味はなかつたがこゝから確か穗高の殘雪を見る事の出來たのはせめてもの腹いせであつた。

咽喉が乾いたので大急ぎで下山、清八峠の分れに來た時ポヤ〳〵した人間がこゝから上は自動車は通れませんか。甲府へ行きたく思ふのですが。自分は眼をパチクリさせた事と思ふ。ウヘ

ッ。御坂峠を自動車で越した様な話は聞いた事がない。「あゝさうですか、そんなに狭いのですか。ぢやフォードでも駄目ですれ。」いくら安つぽい自動車でもやはり落してしまふのは感心しないと見えて歸つて行つた。丁度幸ひとおあつらへ向きとばかりなつてしまつた。河口湖黒岳の記事はこれで終りとする。

愛鷹山

吉澤一郎

此の夏の暑い盛り、八月の半ば頃、自分は前後一週間ばかりを靜浦のある所に厄介になつた。二階の手摺から一寸首をのばして北を見ると、そこには沼津の市に遠くから君臨する富士がある。其の下に丁度典型的な前山とも云ふべき愛鷹の連嶺が横に屏風の様に控えてゐる。

一番右に一寸尖つて見へるのは位牌岳又の名を白ガレンの頭といふのだ。神社のあるべき愛鷹山はずつと左の端になつてゐる。こうして毎日海にばかり入つてゐるのも山男の自分としては一寸後めたい所があつたので一日同勢四人をひきつれて沼津の一つ西の驛である原から登つて見た。その時の事を一寸かひつまんで書いて見る。

原を出て東海道を少し戻り、いゝ加減の所で人に聞き根古屋へ行く眞直な道に出ると一面の田である。愛鷹の南麓をめぐる村々が一むれ一むれと續いてゐる。新川に架る三合橋を渡つて根古屋に入る。今愛鷹に登るにはすぐ東の青野からが本道らしいが戻るのも面倒なのでそのまゝ行けるといふので根古屋を通り過ぎてしまつた方へ移つてしまつたのであつた。不十の澤の兩側の尾根が合さる

所一本杉から約二百五十米突下までは徑はあつたけれどもそれ以上は只尾根筋を歩くより外はない。一本杉の下の所で一寸徑となつてバンバ平に續く。一本杉の下の所で一寸徑から東にそれて七ぐるとやがて兩尾根は合つして其處には一寸徑から東にそれて七五三繩のある水場になつてゐる。五時間ばかりの間水の出る所は一箇所もないのだ。あはてふためいて同勢の連中が水場にかけ降りて行くのも面白かつた。時は夏で風がなく水がなく草いきれで低い山と來ては全くなつてゐないのだ。此處でゆつくり一時間ばかり休み笹の中に切つてある徑を辿ると凡そ十分位で愛鷹山の神社に出る。小屋の有無を心配して來たのだが新しいのが建つてゐたので夜露にだけは濡れる事を免れた。一等三角点である。遠くは懐しい三保の松原、有渡の東麓駒越の迎山草庵も見えさうだ。東南には沼津市の先に靜浦附近の地形が手にとる樣である。天城から の長旅をして駿河灣に入る狩野川、牛臥山、雨にくるしめられた驚巢山、頂上に畠のある大平山等、淡島、瓜島も霞んでゐる。千本濱邊り白い波が續いて見える。愛鷹山は何さいつても海岸の山だ。

北望した景色もなか〳〵いゝ。三角点の直ぐ下は「千段の下り」となつてバンバ平に續く。位牌岳は前にも云つた樣に白ガレンの頭といふが須津川に面した所はものすごくガレヤキモチの頭といふがこれから西南に出てゐる尾根にかくれてゐるのだらう。越前は中々奥深かさうに霧の去來がはげしい。

晩夏の八ケ岳へ

矢澤太郎

半歳の間山に遠ざかつてゐたので、山へ出掛けることが憶却になつてゐたが、八月の中頃弟に迫られて遂に出掛けることになつた。豫定では韮崎から青木湯に出でドンドコ澤を溯行して北御室に一泊し、翌日地藏鳳凰を廻つて再び青木湯に出で歸京する筈であつた。然し例の夜行列車が韮崎に近附く頃になると、薄明の中に クツキリ現はれた赤權現の姿が僕の心を執へてしまつた、茲に豫定を變更して八ケ岳を縦走することになり、小淵澤まで乘越をしてしまつた。

米や干物を買込んで小淵澤を出たのが七時半。赤松の道をブラ〳〵やつて行くと火ノ見櫓に出た、やがて灌木が茂つて見通しの

よい原を編笠指して往く、編笠の裾に取付いたのが九時だつたらう。ジクザクの急な坂に一汗かいたが、それからは氣持よい緩やかな傾斜が續く、空合が至つて面白くなくなつた。岩壁の上で休憩したが地圖に印してあるものらしかつた。此處から再び林の中に入つてしまつた。水を用意して來なかつたので大分苦しんだ。十一時編笠への登口の水溜りに着いた。汚い水だが飯盒で飯をたき藥罐で茶をわかし、腹の虫を滿足させた。編笠への道は落葉が堆積してフカ〳〵してゐて氣持が惡い、可成り左へ卷いたと思ふと大きな石の堆積した所に出た。足跡は絶えてゐる。仕方なしに元の道を水場所まで戻つた。こんなことで時を過したので、權現編笠の鞍部に出たのは二時半となつてゐた。尾根通しに編笠へ行く道が判然としてゐた。此處には樹林の間に立派な小屋が出來てゐた。中には採集した高山植物が大部澤山あつたから泊つてゐる人が居たのであらう。狹い切明の歩き難い道を登ると一つのピークに出た。西岳に向つて徑が見えてゐた。これは山麓の立澤部落からの小徑に通じてゐるのであらう。冷い雨が吹いて來た。馬の背は斷念して、アザミに攻められながら下の道をへつつた。この道は權現の下をズツと卷いてゐるらしく見えたが、權現の近くに來ると、僕等はこの横通りから離れ權現目がけて登つた、刀利權現の石に辿りついたのが丁度四時だつた。擬寶珠岳は一寸よい。赤岳は雨に煙つてゐた。權現の幾つかの岩峯は追ひ迫らうとしてゐる樣に思はれた。冷いので早速出掛ける。一二丁尾根を東北へ傳ふとその先は切り取つた樣な絶壁になつた。例の難所であらう雨の爲に滑るのでモロキンといふ所だ。坊さんが墜落したことを思ひ出すと恐ろしくなる。雨がヤケに强くなつた。冷たさに身がふるへる。漸く底に立つてホツとした。これから小さなピークを五つ六つ越した。確かに最底鞍部に相違ないと思つたが、幾ら捜しても小舍はない。薄暮が迫つて來た。身體は雨でズブ濡れだ心細くなつて來たが先へ行つて見ることにする。一つ二つ三つ。新しいピークが幾つでも現はれて來る。最後のピークを過ぎて可成下つた。初めて「此の下一町避難小舍」の木札を發見することが出來た。小舍の附近には焚く枝は既になかつた。闇の中を尾根に出で岳樺を捜して斧で切つた。メタを焚附としたので濡れた生の木もやがて立派な焚火となつた。飯を焚き茶を煮、濡れ物を乾し且翌朝まで部屋を温め、吾等に安眠を與へて吳れた。雨が烈しいのでしばらく睡つた。

目醒めて再び焚火を盛にして午前四時までよく睡つた。

翌日は心好い日和だつた。五時半小屋を出る。亦四つ許りピークを越して初めて赤岳の腹に取付いた。ケンゝ登る。高山植物流石の縣設小舍も到る處から洩り初めた。立場川と川股川とが足元深く喰込んでゐる。

六時五十分中岳への分岐點を通過した。これから赤岳頂上までは矢張り五六のピークがあつて、徑は或はその頂上を通じ、或は西側を卷いてゐた。七時十分赤岳の頂上に出た。快晴なので眺望は恐ろしくよい。面倒だから玆に一々擧げることはやめよう。然し雲表に聳えた富岳の勇姿こそは特筆する必要がある。

こゝで目的の權現赤岳間を通過したので、あとは呑氣だ。今晩

は何處かの溫泉へ往くことに決めた。

赤岳小屋には番人が二人居た。此處で輕く晝食をとりユックリ休んだ。二十三夜岳の登りは可成あつたが道が段違によくなつたので樂なものだ。石尊岳横岳を傳ふて硫黄岳に出る。遊び〳〵だから大分時間がかゝつた。硫黄岳の西側から赤岳鑛泉に降る道が出たのが三時半だつた。坦々たる街道なので歩く元氣はない。乘合自動車で小海驛に出で、高級な電車で高原を小諸に走つた。

其夜二日間の汗は別所の奇麗な湯ですつかり流してしまつた。

大和連峰へ

中森長太郎

八月三日、晴

名張―初櫻―瀨井―多武峯、行程約九里

八月四日、晴後曇雨

多武峯―龍在峠―上市―吉野山―五十丁茶屋―百丁茶屋

行程約六里半

八月五日、雨、百丁茶屋―小篠の宿。

昨夜來の雨が小降りになつたので出發す。午前六時。吉野山から山上岳まで二百町あつて、此百丁の茶屋が恰度半分になつてゐる。何百人もの講中の中食所となつてゐるだけに、内部の廣いこと、又床几の多い事驚くばかり。

若い杉の林を谷間に眺めつゝ、殆んど尾根傳ひに緩い傾斜の路を歩いて行く。舊時は大天井・小天井の峻嶮を越えてゐたが、今は新道(巾が一間もある)が出來たので大變樂だ。百四十丁位で大きな岩塊にぶつつかつて梯で上下して之を越えた。漸く大峯山の近

ので今夜は此處で泊る事にした。一時過ぎである。一人の僧がついてゐて其の命令の下に動いてゐた彼等に、嬉しさに逆上んでゐて行人に茶を汲み、大藏經その他の難しい經書を十數册積んで勉強してゐる。雨は益々烈しく日が暮れて暴風雨と化した。大きな丸太を燃やして暖まり乍らその僧と色々話した。附近の名勝舊蹟の話を聞く。山上から來る途中、小篠の手前數丁の所で左に入る小徑があつて、それを十五丁進めば大きな瀧があるさうだ。秋になれば兎や猿が出て來る話、小篠の榮えてゐた時代三十六寺院が建つてゐた話などする際その男がエピソードさいふ言葉を使つたので、WとBの奴驚き乍らも感心して聞く。此の日の行程三里半。

八月六日、雨時々晴、小篠—彌山

枕許にポタ〳〵雨が漏つて來て幾度も眼を覺された。堪らなく寒い。雨と風の音が凄じい。起き上つて火をたく。時計を見ると二時半である。風はだん〳〵收まる模樣だが雨は相變らず降りしきる。火に當つてゐたら眠くなつて三人共ゴロリと寢て了つた。再び起きたのは六時。

案内人の無い縱走は危險だ。而も此の天候に於て。

縱走はあきらめて大臺ヶ原山に登らうと俺が提議した所、WとBは洞川へ下つて高野山へ行かうよとたわいもない。

極力頑張つて、BもWも大臺に行く事に同意した。

朝食を濟して出發の用意をしてゐる所へ、案内人を先にして十四五人の中學生らしい一隊がやつて來た。

聞けば縱走やるとの事に渡りに船と早速同行を賴む。二名の教師がついてゐて其の命令の下に動いてゐた彼等に、嬉しさに逆上んで勉強してゐる。雨は益々烈しく日が暮れて暴風雨と化した。大きな丸太を燃やして暖まり乍らその僧と色々話した。附近の名勝舊蹟の話を聞く。山上から來る途中、小篠の手前數丁の所で左に入る小徑があつて、それを十五丁進めば大きな瀧があるさうだ。秋になれば兎や猿が出て來る話、小篠の榮えてゐた時代三十六寺院が建つてゐた話などする際その男がエピソードさいふ言葉を使つたので、WとBの奴驚き乍らも感心して聞く。此の日の行程三里半。

八月六日、雨時々晴、小篠—彌山

枕許にポタ〳〵雨が漏つて來て幾度も眼を覺された。堪らなく寒い。雨と風の音が凄じい。起き上つて火をたく。時計を見ると二時半である。風はだん〳〵收まる模樣だが雨は相變らず降りしきる。火に當つてゐたら眠くなつて三人共ゴロリと寢て了つた。再び起きたのは六時。

案内人の無い縱走は危險だ。而も此の天候に於て。

經箱石さいふ行者の遺蹟や、大きな寺の趾を經て、九時二十分普賢岳（一七八〇）を通過した。直ぐ下に笙の窟さいふのがあるさうだが行かなかつた。更に十數丁進むと徑の右に窪部がある。七ツ池と云つて繁茂せる枝の爲底は見えなかつたが、上から下へと段々に七つあつて今は水がないさうだ。一番下の池は大分低い所にあるらしい。恐らく此の徑から二百米位下だらう。夏にも殘雪の見られる事があるといふが多分嘘だらう。然し彌山の附近に六月の末雪が降つた事があつたさうだ。石楠花の多い事は非常なものだ。太いのがゴロ〳〵徑の横に切り倒されてゐる。急な坂を上

つたり下つたり、而も雨で土が軟くなつてゐるので大變よく滑る
然しいくら急峻だと云つても、北アルプスに比すれば問題外。又
鉄くゞりもない。小篠から彌山までの間に水のある所は行者還岳
の東側だけ。植物採集の目的で來る人や、洞川から一氣にやつて
來る人々が此の水邊にキヤンプすると云ふ。

二泊三日で縱走し得る計畫を記して見るならば

第一日　洞川―山上岳―小篠―行者還岳(六里半)

第二日　行者還岳―彌山―釋迦山―深仙(六里半)

第三日　深仙―前鬼―前鬼口―浦向(又は河合)(七里半)

行者還岳の東側中腹を徑は通つてゐるがその傍に行者還岩があ
る。此處まで來れば此の日の行程の五分の三來たことになる。行
者還を出發したのが零時半で、三時には彌山の八丁手前、理源大
師の坐像のある所へ來た。僅かに八丁の登りだが平地の一里にも感
ずる程疲れもし、時間もかゝつた。三時半彌山參籠所に着いた。
八丁下から案内人が「風呂わかせ!」と怒鳴つてゐたが、チヤン
とわいてゐた。

參籠所は天川村が經營してゐて、山が開かれてゐる間（五月八
日―九月三十日）何時でも人がゐる。一九〇〇米の高さにあり乍
らも鬱蒼たる喬木の密林が家を圍んでゐる。

夕食後、名刺を持つて數師の所へ挨拶に行つた。大阪扇町商の
山岳部で、一人の數師は大正十二年に一橋を出た先輩で色々話し
をした。此の日の行程六里。

八月七日、雨時々霽る　彌山―前鬼

百丁と小篠の小屋でこりてゐるので、防寒具を厚く着込み手袋
まではめ、毛布を三枚被つたので寒い目をする必要はなかつた。
相變らず降つたり止んだりしてゐる。

七時四十分出發する時は止んでゐた。昨日に劣らざるひどい道
だ。八時佛經ヶ岳(一九一五)十時舟のたわ、十時十五分七面山遙
拜所を過ぐ。徑は尾根傳に續いて居て尾根を通らぬ場合は必ずそ
の右側を通る。天氣が惡くてよく判らなかつたが、左側は絶壁や
ガレが多いらしい。

岩のゴロ〳〵轉つてゐる所には丸木を渡して通り易い樣にして
ある。そんな丸木の橋が數十續いてゐる所もあり、尺餘の草が生
えてゐる斜面に上へも下へも人の踏んだ跡があつて、慣れた山先
達さへ迷つた事があつた。

十丁進めば遺蹟、五丁行けば名勝といふ風に、舊蹟の多い點か
ら云つても案内人を連れる必要があるとツク〳〵感じた。

昨日の樣に上り下りがないが、南するに隨ひ岩が漸く多くなつ
て、歩行に注意しなければならなくなつた。

晴れておれば朝鮮金剛山の樣な奇峰怪石が到る處に見られたに
殘念だつた。佛經岳からは富士山も見え、淡路島や四國の山々熊
野の浦々がよく見えるとの話だ。

然し此の連峰は何時も雨が降るのだから、僕達ばかり不運な譯
ではない。雨が降らなくとも霧や雲で、遠くを望み得る樣な天氣
は一月に三回位しかないと云ふ。

天氣が變り易く忽ち霧が襲來して一間先も見えなくなることの

此山脈程甚しいのはない。熊野川、紀ノ川の水源であるだけに、濕氣の多いことは尾瀬沼邊にも劣らぬ。

山上岳の雲海・彌山脚下の雷鳴・佛經岳の濃霧は名勝にさへなつてゐる。

「天然紀念物佛經岳原始林」の札の立つてゐる邊には珍草木が非常に多い。オホヤマレンゲは散つて了つてゐたがヤハズアジサイゴエウツ、ジ、種々の蘭が小さい花を開いてゐた。珍奇な動物も居るらしいが驚の聲を聞いたり多くの蛾蝶を見たのみで、ヤマイタもカモシカも岩燕もさては佛法僧も見られなかつた。アブやウンカは餘り居らぬ。プヨの大きいのがゐるが。

釋迦岳近くになると大岩石、大絶壁天然の大彫刻が多くなる。小尻返し・緣の鼻・アウンの狗犬・三日月岩・五百羅漢・テツパツ岩等々、枚擧にいとまがない程。

斷崖の緣の尖つた岩の上に名も知らぬ小さい花が、眞紅に咲いてゐるなどは實にいゝ。明星岳(一八三九)・佛生岳(一八〇五)・孔雀岳(一八二一)と、たやすく進まれるが、孔雀岳から釋迦岳までは此の縱走中最も急峻であり物凄い。孔雀から可成り下つて、又登るのである。この坂は杖捨坂といひ、昨日の彌山への登りよりはまだ急だ。その坂を登つても未だ頂上じやない、今度は危い双渡り。秩父古生層の岩が鋭く削られて薄い土の皮を被りその上を、つゝじなどの灌木が生えてゐる。その上を使つて攀ぢる行場があるが、行くのは止してその右を廻り大日の南側に出た。此點で東へ下つて前鬼に出るのと、眞直ぐに通じてゐる徑とに岐れてゐる。眞直ぐ南へ行けば縱走を續けて笠捨山か、たとへば屏風を立てゝその上を渡る樣な思ひで、進むのである。右も左も底の知れない樣な谷だ。百米の双渡りを濟し更に數十米喘ぎ登ると漸く絶頂に出た。頂上にはコンクリートの臺の上に丈餘の釋尊の青銅像が鎭座まします。洞川から運賃四千圓を費して運んださうな。七時四十分に彌山を出て二時十分此處に着くまで六時間かゝつた。然し途中辨當を食つたり休んだりしたから普通なら此の四里半を五時間で行く事は困難でない。天氣がよければ殊更。

釋迦から南は急な下りで、笹が一面に生え、人が二日も通らなきや、徑が隱れて了ふかも知れない。徑に横はる岩や木の根が笹で隱されてゐるのでつまづき易い。

十數町下れば左に「極樂の東門」なる行場がある。大きな岩の下の方に人が這つて通れる位の孔が明いてゐて、そこを通り抜けて戻る時はその岩の外側に沿つて土蜘蛛の樣に身をピツタリ寄せて岩を半周するのである。此の孔は人工でくり抜いたものらしい。この下二十町の所に深仙がある。萬病に利くてふお水が岩の間からポタリ〳〵と流れ出てゐる。十年保存して居ても腐らぬさいふのは天然に蒸溜されてゐるからであらう。木屋が二つありごちらにでも泊れる。風雨寒氣を凌ぐにより完全なる方に泊らうと思へば線香臭い金佛と一緒に寢なきやなるまい。大日岳の頂上には鎖を使つて攀ぢる行場があるが、行くのは止してその右を廻り大日岳の南側に出た。此點で東へ下つて前鬼に出るのと、眞直ぐに通じてゐる徑とに岐れてゐる。眞直ぐ南へ行けば縱走を續けて笠捨山玉置山に至るのであるが、大日以南は高い山もなく、平凡だから特別の目的のない限り、縱走を續けるのは愚である。此處から前

鬼迄急な下りばかり。

前鬼川を左にし、セイタカ・コンガラ 二童寸岩を過ぎ、五時半前鬼に着く。人家が二軒あり、二つとも天台宗の寺である。小仲坊といふのに泊る。小仲坊の方がきれいであり、主人は前鬼村の村長を務めてゐる。僅か二戸の村の村長にしては勿體ない程五里半。

では解かれてゐると見えて、若い女中が三四人居る。家の前に澤山稻田がある。米は自給自足だから彌山の様に一升七十錢もせず泊賃も彌山より五十錢安の二圓である。寺らしい所はちつともなく完全な宿屋である。生の肴としてはアメノウヲがあり、鑵詰も出した。鑵詰で思ひ出したが、山上岳で泊る際は鑵詰なんかリュックの底の方へ入れて置かないと、若し見附かれば追出される。ミルクキヤラメルさへ不可ないと聞いたがそれはどうだか。山上岳で宿泊を斷られた縱走者ははうぐ〳〵の態で此處の小屋迄來て泊ることがよくあると小篠の仙人が話してゐた。

數日振で疊の上に蒲團を被つて寢る。此の日六里半。

八月八日、晴、前鬼—浦向

苦しかつた山の旅も今日で終りかと思ふとガックリと身體がくづ折れる樣な感がする。昨夜遲くなつた故でもあるが、出發は八時半になつた。前鬼口までの三里は道が少し廣くなつて居るだけで、相當時間のかゝる道程である。宿の前で一回前鬼川を渡ればそこから前鬼口まで唯一度小さな谷川を横切るのみで日光の瀧不動の瀧等前鬼裏行場の名勝を遙か左方に眺め乍ら東へ行く。幾ゝ振りかに青い空が見えて、前方の峯と峯の間に、先日の山上岳が正午に前鬼口へ着き北山川の碧潭を前にして辨當を食べ、案内者は、河合に向つて北に行くのである。寺垣内泊り。此の日の行程五里半。

八月九日　曇、寺垣内—不動峠——瀞

八月十日　曇、瀞八丁—新宮—(プロペラ船で)—那智(汽車で)—天滿。

八月十一日晴、天滿那智瀧往復—勝浦(前八・三〇)—大阪(後八・〇〇)(汽船で)

大峯山脈は全山秩父古生層の水成岩で、地形學上のステージより云へば滿壯年期にあるものと思ふ。それ故にあの山の雄大壯嚴さがあり、且つ峭々たる巨岩、深い峽谷が見られるのである。吉野群山には一千米乃至二千米の比較的高嶺が約四〇座もあるといふ。

その深林美・岩石美・峽谷美は天下に誇り得よう。即ち太古その儘の原始林は鬱蒼と繁つて全山を美化し、神秘そのものゝ如き景觀を漾すと共に、その隨所には鬼手怪腕の造物主が神鑿を振つて彫刻の巧妙を極めた大巨岩が天地を貫いて連立しその端貌すべからざる大奇觀と數千萬年の間風雨に曝されて現出した暗灰色の蒼然たる色彩とは相俟つて、驚嘆すべき岩石美を呈してゐるのである。

此の深林を見、此の岩石を眺め、此の峽谷を望む者は誰でも、神秘境だ魔境だと叫ぶに違ひない。

のみならずこの大峽谷を形成する所の、清冽玉の如き流水、兩岸に創立する斷崖絶壁、晝尚暗き原始林の繁り。各所に懸かる數十數百の飛瀑。この原始林中には前に擧げたもの、外コマドリ、ナミエゲラ・ハコネサンセウウチ・ホシリアゲムシ等の動物や、他に餘り見られぬ珍植物に富んでゐて、學術研究上絶好の資料となつてゐる。

世界に誇るべき幾多の史蹟・名勝・天然紀念物を豊富に有する點に於て、又京阪神に近い等の關係から國立公園候補地として差支ないと思ふ。

附記

北山川に沿ふて下れば、瀞へ着かない中に、瀞八丁にも劣らぬ碧潭、むしろ黒潭と云つた方が適してゐるが、を隨所に發見する。

那智瀧は、その造瀑層岩石の節理を一見すれば華嚴の瀧の夫れと同じ瀞に於ても上瀞の方がいゝ。

著しく異なるを知る。秩父古生層の水成岩らしい。

清津峽

松木謙三

家の都合で折角の夏山も出かけることも出來ず、一寸白馬へ出かけたのみで燻つてゐたが、ついたまりかねて一泊の豫定で上越北線のお世話になつて清津見物にと出かける。湯澤に下車した時は既に暑い盛りも過ぎてゐる。飯士のなだらかな裾を魚野川を距てゝ左手に見ながら三國街道を芝原峠に向ひ始める。流石は昔の街道筋越後から江戸へ上るには必ず通つた所とて道幅も廣く急な坂もない。苗場山へでもお詣りに行つて來た大工さんか、それとも木でも切りに行つての歸りか、行李を背負ふた二三人連の若い人達が時々下つて來る。それもこれも申し合せた樣に石楠花が小松を道具の脇に背負つて居る。折角家まで持つて歸つて植付けると直き枯れるのだらう。小さいながらも皆國有林を荒して來たわけである。

ごうせ三俣まで行けばよいので呑氣に峠を下つて行く、八木澤は大した村ではない。勿論宿屋などはない。只店らしいものは一家、木工細具の仲次問屋と稱する大きな看板をぶらさげて、此の地の唯一の副業とも云ふべき、椀や杓子を買集める店があるばかりだ。此處まで來ると清津川はその裏手の方に見られる。併し此處では川幅は廣く、砂利原が二町もあつて水の流れてゐるのは殆ど十間位しかないであらう。谷の美しいのは此の下一里位の處に始るのだ。

八木澤から山の鼻を一廻りすると直ぐ三俣の村へ入る。村の入口は皆比較的新しい家が多い。何年位前かも覺えても居らぬが、

小供の時に三俣村で春先大雪崩があり、大變な人が死んだことや寄附金を學校へ持つて行つたことがあつたが、多分其の時造り替えたものだらう。

古い家は皆屋根が街道に向つて居る。そして屋根は高くなく、そして非常に暖かである。街道は此んな山の中にはめつたに見られぬ樣な廣さである。嘗て江戸へ上る大名が下に下にさふれて通つたのだらう。ほんとに昔の街道筋を憶はせられる處である。併し今は宿屋らしいのは一二戸しかない、昔の賑かさは夢にして見られない。子供の時分にはよく婆やが、こんなことを言つて聞かせたことがある。まだ汽車の無い時分に高崎や前橋へ機織りに世話人に連れられて行くと此の三俣が越後の國での最後の泊りで、そこに下り、法師の温泉に泊つたものださうだ。その當時も峠には權現堂もあつたし法師の湯槽は大變大きかつた。三俣の村はほんとに賑なものだつたさうだ。

宿屋の入口には官吏昇降口と此の家には不似合のでかい札がかけてある。入ると部屋は二段になつてゐるが、入口の間はお伴の者が泊り、一段高くなつた部屋には所謂官吏が泊つたものなのだらう。そして低い部屋の壁の少し高い所に一杯四尺位の札がかけてある。もう大分燻つてはつきりとは讀めぬが從三位柳澤某伯と云つた風に澤山ある。德川家達伯か柏崎縣令某伯とか、參事某と云ふ風なものもあつた樣である。明治の始めに官吏の威張つてゐた樣子が見える樣である。そして鐵道の出來ると共に全くさびれたのだつた。

やがてぶらんぐと上手の方に散歩に行く。村の はづれに發電所のある。水の取入口がある。なかくその道の者は甘く考へたもので。清津川の水を此處で堰留めて芝原峠を隧道で落してゐるのである。清津川と魚野川との高さを利用して極めて簡單に發電所が出來たのだ。併し電氣技師の得意の反面には恐しく自然は打壞されてしまつた。此の邊の河原は石原と變り、清津の溪流も水量の不足が感ぜられる樣になつてしまつた。

夕飯を濟せて緣側に出てゐると前の廣場で澤山の子供が遊んでゐたが、そろ〳〵歸り始める。皆が叮嚀に「お休みなさい〳〵」と言つて別れて行く。先生の教が良いのか、昔からの慣いか、山の人に連れられて行くと此の三俣が越後の國での最後の泊りで、そこに下り、法師の温泉に泊つたものださうだ。その當時も峠には權現堂もあつたし法師の湯槽は大變大きかつた。三俣の村はほんとに賑なものだつたさうだ。

宿屋の入口には官吏昇降口と此の家には不似合のでかい札がかけてある。入ると部屋は二段になつてゐるが、入口の間はお伴の者が泊り、一段高くなつた部屋には所謂官吏が泊つたものなのだらうかと自分では思つた。以前自分の家の前に大きい臺所では家内皆でやんやと騷いで薄の穗を拔いて居る。何がおもしろいのだらうと思つて尋ねて見ると、知らないと云ふのである。そして長く此方から材料が來た樣であつた。何にするのかも知らないで賣つてゐるのもんきな話である。

× × × × ×

雨後の晴れた氣分は又格別である。山の端を灰色の雲が段々開けながら足早に走つて行く。後にはコバルト色の空がはつきりと現れて來る。雨に濯はれた林は黑い程綠色が濃くなつてゐる。二

人は暫く川に沿つて畠の中を歩き始める。川は次第に狭くなり道はやがて濶葉樹の中を辿るこさゝなる。未だ九月の中旬ではあるが林の中はめつきり秋らしい。紅く染らぬにもせよ道は落葉で一杯になつてゐる。確か宿屋の佛前にはあけびが四つ五つあげてあつた、初物であらう。夏なら草いきれで大變なのであらうが、今は何と爽やかな氣分であらう。

やがて道は水際近く岩角を踏んで行くこさゝなる。水量こそ少なけれいやが上にも澄みわたつてゐる。此處から清津峽の眺めは佳くなるのである。併し此の邊は岩は壁の如く聳立つてゐるとは云へない、黒々としてがんとして動かぬ岩の恐ろしさは感じられる。谷としての清津は此の下半里位の釣橋から下二里の間である。其の釣橋は自然にふさはしいつるね造りである。黒部の釣橋などは全く味もそつけもない様に思はれる。この邊は川幅は近くて五間位ではあるがその谷の深さは知れない。目も遙かな下を渦巻き流るゝ水泡、谷は上下共に急に曲折して上手下手も見るこさが出來ない。さながら二双の屏風を並べ立たしたかの様である。これから下二里の間は到抵水際は歩くことは不可能である。兩岸は林も出來ぬ程の絶壁である。道はその腹か岩から岩へと一歩一歩踏みつけて出來てゐるのである。先年流木の爲に造つた道であるから今は段々崩れかゝつてゐる、特に數日の雨で一層痛みかけてゐる様に思はれた。下るに從つて兩岸の絶壁は益々佳くなる、鮮かな柱狀節理を爲して幾丈さも知れず一様に水際まで延びてゐる岩、その上を瀧となつて落つる幾條の澤、岩角にしがみついて曲りくれつてゐる針葉樹、何さも云へぬ美しさである。尾根の昧も佳いが谷の昧も亦捨て難いものである。特に清津川を谷さして

「もう山もこれまでだな。」

「併し秋には秩父詣に出かけ、此れで秋山も終りさ。お正月スキーに行くさほんとにお別れになるね。」

「仕様がないさ。あきらめると云ふより他に道はないね。」

「折角休暇を貰つても白粉つけて山行どや氣分が出ないわけだれ。」

十二峠に立つて二人は眺めつゞけてゐる。飯士山の裾がぼんやりと見える。遙か南の方には上州境の山々が波の様にうねつてゐる。心引かれながらぶら〳〵石打の驛へ下つて行く。夜の幕が下り初めて來る。星一つも見えない。

追憶

高木英二

山の思ひ出は
五月の白樺の綠。
山小屋の戸の隙間に
吹き込む野分。
それは
夜明け薄明の中に
目醒める未來への光り。
又は夕闇
雪線の彼方に
たそがれ行く淡い紅色
その仄かな光の中にすべてを溶かし
やがて
涯知れぬ彼方へすべてを運び去る
寂寥
あはれなような……永遠の。

小屋山



こゝには登山の漫言を最も短い筆で書かれたものを載せたい。山男にも辛味もあらうし甘味もあらう。硬苦しい事ばかり云つてるのが人間の能ではない。さゝやかな山小屋の爐傍からも れて來る山の讃美のはゞ聲んなに喜ばしい事だらう。

此の欄はこういふ意味で諸氏の自由の氣分に開放し度い。

「どつちがどつちか」

△

「今年の夏は何處かへ行つたかい？」
「あゝ。休み中、泳ぎ通してしまつたよ」
「なんだつて！それぢやあ、休み中、海岸にでも居たのかい？」
「勿論さ。海岸へ行つてゐると、さても東京へなど歸つちや來られないよ。東京では、お日樣が屋根から出て、屋根へ落ちるんだらふ。併し君、海岸の朝夕の景色を考へてごらん。太陽は遠い東の水平線のかなたから昇り、今迄れむつてゐた海岸は再び活動を始める譯さ。東京では暑い暑いと恨まれる太陽も、此處ではごんなにか喜ばれてゐる事だらふ。太陽がギラギラ照りつければ照りつける程、海岸は生き生きして來る。燃える樣なパラソルの浪は、碧い碧い自然の波を、今にも鎭めてしまうかの樣に、岸べに渦を卷いてゐる。これぱかりではない。夕日が松林の影に沈んでからは、又、別の世界が開かれるのだ。あたりが暗くなるにつれ、向側の岬の先にある漁村の燈火は段々と光を增してくる。月が銀色の姿を波に漂はせる時分には、日中はあれ程までに熱かつた砂が」
「分つたよ。もう其の先を云つて吳れなくともいゝよ。此から先がいゝんだらふ、夜の帳が下りてからが。」
「併し君もよくそんな所に一ケ月以上も居られたもんだれ。僕にはとては三日以上滯在は出來ないよ。第一に海岸の氣分がたまらないんだ。あんな、世紀末的な頽廢的氣分にはとても耐へられない。日中は、パラソルの浪だか何んだか知らないがセンセイショナルな物で、ごこもかしこも漲つて居り、夜は夜で、いづれ松林の陰で、戀の私語でも語り合ふと云ふんだらふ。さても海岸などには居られない。一ケ月以上海岸にゐた君が不思議でならないれ。」

△

「今年の夏は何處かへ行つたかい？」
「あゝ。相變らず山登りさ」
「君と云ふ人間は餘程山が好きと見えるね。山から歸つてきてから何處かへ行つたのかい？」
「山から歸つて又山さ。其の山から歸つて又山。と云ふ樣な譯で、休の半分以上山の中で過してしまつたつよ」
「あきれた者だ。折角の休を山の中で過してしまふとは」
「併し山の中に入つてゐると、さても東京へなどは歸つて來られないよ。東京では、お日樣は屋根から出て、屋根へ落ちるんだらふ。併し、君、山の中の朝夕の景色を考へてごらん。太陽は、時としては、所謂雲海のかなたから昇り、時としては、目の前のそゝり立つた尾根から急に姿を現す。そして、今迄寢つてゐたあたりの自然は再び活動を始め、吾々の山旅も先へ先へと續けられる。夕日であたりが眞紅になつたかと思つてゐる中

に、もう谷の中は暗い闇の世界とならうとしてゐる。さゝやかな、併し樂しい夕食が終る頃には、小田原提燈の光もだん〳〵明るくなつてくる」

「分つたよ。もう此の位聞けば澤山だ」

「まあ。そう云はないで皆聞いてごらんよ。此からが、一度味つたら忘れられない山小屋の味なんだよ」

「併し考へてみると、山旅なんて無味乾燥なもんだれ。何處をさがしたつて、吾々を元氣附けて呉れる刺戟物は見當らないし毎日毎日の生活には、まるで變化がないぢやあないか。何時も何時も、蝸牛の樣な恰好をして、テクテク歩いてゐる。わざ〳〵金を出して山の中へ入り、重い荷物を背負つて、道の惡い所、惡い所とよつて歩く。こんな馬鹿な話があるかい。わざ〳〵一萬尺の山へ登り、何千尺が下つて、又すぐ一萬尺の峯へたどりつく。そして一日を費してしまふ。其のくせ、二つの峯のさし渡しは、一時間もあれば行けるんだ。其の上、暴風雨にでもあへば、命さへ危くなると云ふんだらふ。一日か二日位なこんな事に費してしまつた君らいゝだらうが、休の半分以上もこんな事を云ふんだらふ。一日か二日位なの氣持が分らない。不思議でならない。」

△

海へ行つて樂しむ者と、山の寂しさの中に樂しむ者とを比較して、かれこれ云ふ事は自分には出來ない。

海で派手な生活をし、陽氣に其の日〳〵の日を送る者にとつては其が何よりの幸福なのだらう。こんな人間を山の中の靜寂に投げ込んでしまつたら、それこそ悲慘なものだ。同樣に、暗い小田原提燈の光をたよりに、鑵詰を皆でとり圍んで夕食をし、食事がすめば毛布にくるまつて橫になり、天井に映る焚火の赤い光を見つめながら、罪のない話に夜を過す者にとつては、此の生活が何よりの樂なのである。こんな男を、賑かな海水浴場などへつれて行つたらば、彼はきつと憂鬱症になつてしまふ事だらふ。

海と云ふ者に、自分は少しも引きつけられない。夏になれば毎日毎日汽車の中へ吸ひ込まれて行く海への人々の幸福を自分は味ふ事が出來ない。他人が現に味つてゐる樂しさを味へないのは不幸かも知れない　併し、一方に、山の中の靜寂に、眞の自分に對する幸福を認めたとき、後の幸福は、前の不幸に遙かまさつてゐる事を信じて、自分は今、自ら心の中に樂じんでゐる。（しんいち）

意外

△

硫黄岳の頂上から、遙か下に見える本澤温泉を眺めてゐた、なほ目を先に轉ずれば松原湖も見える。いつまでもかうやつて佐久の高原を眺めてゐたかつた。しかし霧は再び吾々を襲つて來た。キラキラする程に輝いてゐた佐久平も次第に霧のためさへぎられてしまひ、何時しか姿を消してしまつた。

霧は段々濃くなつてくる。風は益々強く吹きあたる。止むなく

夏澤峠へ向つて幕地に下り始めた。霧が薄くなる度に、夏澤峠を覆ふ針葉樹林が、目の前に時々現れて來る。いつしか吾々も其の林の中へ入りかけてゐる。

吾々の行手にあたり、白い一枚の板が見えるではないか。意外の感に打たれながら進んで行つた。——こんな所に路導のある筈はないが——

その白い板には「はひ松」としてあつた。そして下の方には横文字さへ書いてある。きつと、此のハヒ松は夏澤峠の方から來る人が、最初に見るものなのであらふ。

△

午前中は快晴であつたのに、天氣は段々悪くなつて來た。針葉樹林に入ると同時に空も曇つてしまつた。心地よく感じられてゐた霧も、次第に濃くなり、何時しか雨の雫となつてしまつた。汗が出なくなつたため乾くであらうと思はれたシヤツは、乾く暇もなく雨の雫で再び濡れ始めた。

併し濡れながらも何となく心は浮き立つ、山小屋に着いてから焚火を圍んで着物を乾かす時の事を考へれば、ジメ〳〵するシヤツも心地よく感じられる。其の上に、今宵の山小屋たる三伏の小屋は、赤岳會の立てた立派なものだもの。

併し濡れながらも何となく心は浮き立つ、山小屋に着いてからには、御來光を見に行つた連中はもう歸つて來た。針葉樹林に入ると同時に空も曇つてしまつた。心地よく感じられてゐた霧も、次第に濃くなり、何時しか雨の雫となつてしまつた。汗が出なくなつたため乾くであらうと思はれたシヤツは、乾く暇もなく雨の雫で再び濡れ始めた。

併し濡れながらも何となく心は浮き立つ、山小屋に着いてからには、御來光を見に行つた連中はもう歸つて來た。拜み所を過ぎて劍ヶ峯まで來て、一寸岩の間をみると、其處に青い桃が十五六轉がつてゐた。食べられさうにもない小さな桃である。

後から來た案內者は、此は信者が供へて行つたのだと云ひ、かじり始めた。別に腹が空いても居なかつたが別に食はぬのは恥だと云ふ樣な氣持になつたのではないが、兎に角友からナイフをかりて皮をむき始めた。友は傍で呆れ果てゝ、言葉もなく見てゐる。

皮をむき終り、大して美味くはないだらうと思ひながら口に入れた。併し其の美味かつた事は今だに忘れられない。立てつゞけに三つ食べてしまつた。此にはさすがの案內者も驚いてゐた。

そして赤石に向つて歩始める時、あとに殘つた十ばかりの桃の中から、よさうなのを二つ取つて、頂上へ着いた時の樂しみにして出發した。

此の時の桃の味が忘れられず、大河原に着いた時、早速よさ

うなのを持つて來てもらつてたべたが、劍ケ峯の青い桃には及ばなかつた。

△

そこには、晝も尙ほ暗い程に高い〳〵杉の木が茂つてゐた。一本の太い杉の木の本にある、朽ちた辻堂の緣に腰かけて、一人の町人風の老人が休んでゐる。此の有樣を見たゞけで、何人も何か惡い事の前兆ではないかと思ふであらふ。其の時辻堂の後から現れたのは、一人の覆面の武士であるに廻つたかと思へば、白刃の閃き。

そこには、青々とした芝が一面に布かれてゐる。東の方から登つて來たものは、此の峠の頂上に來て、美しい芝のゆるやかな傾斜をながめ、又遙かに甲府盆地の人家をみて小躍する事であらう。

前者は私が小說を讀んでから心の中に描いた大菩薩峠である。後者が即ち實際に見た大菩薩峠である。（しんいち）

△

吾々豫科生は、思ひ出深い二人の先生を石神井から送り出してしまつた。田中董先生と杉浦德次郎先生と。

丁度、今から一年半程前である。地理の時間に初めて田中先生にお目に掛つた。そして歸宅してから、「登山」の扉に載つてゐる先生の寫眞を見て、私はどんなに驚いた事であらふ。又、如何程喜んだ事であらふ。唯、あの先生に教へて頂けるかと思ふと嬉しくてならなかつた。かくして一年の間、色々な有用な事を教へて頂いた。（併し殘念な事に、今ではこれ程覺えてゐる事やら）。そして、今では、先生の教壇上の姿も、吾々の目が心の中に見出すだけである。あのいかにもアルピニスト然たる輕るさうな先生の姿も、再び石神井に見られぬかと思へば悲しい。併し一方、私は心から喜んでゐる、たとへ一年間でも先生から地理を教へて頂いた事を、山岳黨として。

杉浦先生の山の話は、豫科の名物であらふ。「好きこそ物の上手なれ」とでも云ふのか、先生の山の話は格別上手であつた。先生の山の話に刺戟されて山へ登り始めた私の友達も數人ゐる位である。夏の休の後は勿論、少しでも休の續いた後の數學の時間は必ず山の話である。山に對して餘り興味を持つてゐない者までが面白さうに其の話に聞きされてゐる。先生は勿論恍惚境に入つて物語つて居られる。チヨツキのポケツトからポケツトに渡した金の鎖をいぢりながら。こんな山の話で時間をつぶしながら、豫定の所までは必ず教科書が進むのであるから、講義の方法は推して知る可し。先生も吾々を最後の教へ子として、今は獨乙の月沈原とやらに。（しんいち）

△

烏帽子の屏風岩を登りかけて驚いた。下から見た時の感じとは

丸で違ふ。岩の上にまたがつて下を見渡した時は、思はづひやりとして魂遠く天外に飛ぶが如き壯烈な感慨に打たれた。

誰かゞ云ふ、「あの岩に立ち上れたら大したものだ。」と。

そう云つた御當人も、常日頃に似ず謹嚴な顏付で岩にかじり付く事屋守の如し。

別名キンツリ岩とは良く云つた。皆の度胸試しには持つてこいの處だ。この岩が引くり返つたら等と考へると念佛が口先迄こみ上げてくる。こんな連中も下山してしまへば、あゝ烏帽子かあの一枚岩は素敵だれ、位で納まつてゐる。何處かで烏が笑つてゐる樣だ。

× × × ×

烏帽子縱走に失敗して島々から松本へ歸る電車の內で感じた事其時の日記にこう書いてある。

電車の中で考へた。此度の山の旅は完全に失敗だつた。烏帽子から豪雨の中を下山した時は隨分辛かつた。

山へ苦しみに行つたのだと思つた。第三者から見たら何だ馬鹿々々しいと思へるかも知れない。然し今自分は、何か或る强い信念をつかみ得たと云ふ氣持でみちてゐる。唯それが無暗と嬉しかつた。外の人等もきつと僕に似た感じを持てゐる事と思つた。來年もその來年も自分は山へ行かうと心に誓つた。山へ登つた者が抱く考は皆同じであらう。

苦しければ苦しいにつけて一つの信念を體得する。尊い信念だ。

「山へ登らなくては居られないから登るのだ」誠に至言だと思はれる。(かなめ)

「狸が瞻をつぶした話」

過ぐる年秩父の山中で無慘にも寃罪のため狸の尊命を貰つて以來一年になる。そして狸並みに浮世の苦勞にもまれて來た、でもまだ餘り老巧になれない。「次の一幕を見てくれ」

第一幕

場所＝前面には十勝岳が煙の出る噴火口を抱いて控へて居る。一本の道が針葉樹と熊笹を縫つてついて居る。赤蜻蛉が道の兩側の笹の葉に止まつて時々蜂や虻が來ると一時にパツと飛上つて又すぐ止まる。そして段々と羽根を落付けて時々大きな目玉を動かして居る。ぼかん〳〵として靜かな午後である。

時＝八月中頃、そろ〳〵熊が出る頃。

登場人物＝高山植物監督官（帽子に赤いヂヤバラが卷いてあるシヤツ、ズボン、ゲートル、ゴム足袋と云ふ工合で下の方に行く貧弱である。）

狸（背廣姿とシヤレてピツケルを持つて居る）

狸の案內人　外數名

一番先に鈴の付いた馬、次に馬子、次に狸、次に官吏外數人がさ〳〵と下手から上つて來る。

官吏（後から狸の持つて居る「ツルハシ」をつく〳〵と見ながら）

狸　君は何んだれ、學校は何處だれ。

官吏　東京です。隨分物好きだな、ところで君の持つて居る「ツルハシ」は仲々よく出來て居るね。

（高山植物を採りに來たのはチヤント見拔いたと云はんばかりに）

狸　「ツルハシ」ではありません「ピッケル」です。

官吏　（一寸驚く、然し帽子の手前すぐ降參しない）矢張り舶來物はよいね。

狸　いや和製です。（後の方でクスヽ〳〵笑ふ）

官吏形勢不利と見て此道で熊に出會つた話をする。盛に君！君を連發して高飛車に押へる。やがて九合目の温泉到着。（第一幕終り）

× × × ×

第二幕

見晴のよい座敷にさつきの狸が居る。眼下には遙か富良野の平原がぼんやり霞んで居る。番頭が出て來る。

番頭「お客さん、是からすぐ頂上にお登りになりますか」

狸　（一寸胸をそらして）ウン！

番頭　案内人をお雇ひになりますか。

狸　ウン雇ふ！　俺は幾ら金をやればよいか分らない。

番頭　いや二圓もやればよろしいです。

狸　すぐ行くから玄關へ案内人を廻してくれ。

（茲いさゝか狸得意の光景）

玄關に現れた狸がさつきの赤帽しか居らぬので奥の方へ向いて

狸　案内人は何處だれ。（と怒鳴る）

赤帽事官吏　ヘイ私が案内人で

狸振り返つて「ギックリ」と生ツバを呑む。

狸　君が案内人か

赤帽事官吏　ヘイ私がその……いや、荷物は私が背負ひます。

ごうぞお先に。

狸　ウヘイ！

赤帽事官吏　遙か下手に見えますのが上富良野平原で、爆發當時泥流は御覽の如く二方に分れまして一方は美瑛に一方は上富良野市街地目がけて押寄せたもので御座います。當時私はあの温泉に居りましたが實に壯觀と申しませうかそれは〳〵！　ところであの下に見えて居る水しか上に登ると御座いませんごされ（と一聲殘して汲みに下る）

赤帽　さあごうぞ、是をお飲みなすつて

狸　（あわてゝ）ヘイごうも。（二幕終り）ーたぬきー

山と彼

先月此處へ引籠つてから彼はもう學校へも出ない。そして何にもしない。來年はもうぼんやり卒業だといふ。ぶら〳〵してゐる

時でない事もよく知つてゐる。然し後半年で自分の一生涯に再び歸つては來なくなる今迄の生活を思ふさき、彼にはこのぶら〳〵が、ゆつくり昔をふりかへるために造られた尊い時の樣に思はれてならなかつた。

此處は山もなく川もない平凡な田舍ではあつたけれども、何もかも分らない、くしや〳〵な頭を押へて脫れて來た彼にはそれでも隨分うれしかつた。秋の野と丘、澄み切つた空で彼はもう充分だつた。この平凡な自然が彼には物を其の儘受け入れる明るい若い心の未だ殘つてゐる事を敎へたもの。

× × × ×

鎭守の社の裏手から綠の小道はなだらかに登つて、氣持よく彼は丘の上に出た。暮れるに早い秋の日はもう薄すれづみにあたりを染め上げてゐたけれども丘の上からの眺めは案外にひろかつた。丘の名は六國見だつたつけ。

夕日を受けて銀色に輝く茅ヶ崎邊の海、灰色の富士はその右に立つて、黑くうづくまつた丹澤の右遙かにはなつかしい秩父の山が見える。うすぼんやりながら雲取も見える、白岩も。なつかしき秩父、山、山と自分。草の上に腰をおろした彼は考へるともなしに樂しかつたそしてもう終りの近い今迄の山の生活を思ひ出すのだつた。

× × × ×

秋の山。それは破風の眺めにもあつた。笛吹川が紅を拔けて霞む甲府の盆地に溶け込んで行く。信州側は一段と濃い秋の色に埋れてなつかしい十文字の峠道の盡きる處、入川谷の岸には點々たる栃本の村。あゝあの村に立つて聳え立つ破風や甲武信を仰いだのももう五年前の事になつた。

秋の山。それは又甲武信の眺めにもあつた。國師への尾根は延々とうして長く、その裾を秋の紅に切り落した釜澤は去りやらぬ雲にその幽玄の胸を秘めてゐる。たるんだ尾根は徐ろに高まつて國師の肩へと這ひ登る。がつしり踏ん張つた國師は黑金の尾根を左に長々と出して右は朝日岳に連る。朝日への尾根のたるむ處、北岳、間ノ岳、農鳥の三山はもう初雪をつけて彼方に、朝日の右には金峰の尖頭、その右肩にはなつかしき仙丈、續く甲斐駒と鋸山、遠くは紫の木曾駒まで。

× ×

春の山。それは猫坂からの眺めにもあつた。目の下に黑平の谷が打ち開けて金峰の尾根が行く手を遮る。雄大な金峰は五丈岩の左右に雪を一杯に戴き、朝日も、國師も、奥千丈も黑い森の中に雪を閃かしてゐた。春に目覺めた黑平の谷は萠黃に光つて彼の心までも明るくしたつけ。

春の山。それは又天城の谷にもあつた。朝が來ると鳥が囀る。綠の谷が朝の光に輝き出す。白い馬が主（ぬし）だと云はれる八丁池、青空の下にのどかなさゞなみ丸い草山の間から輝く春の海。大島は霞

に浮んでなつかしき三原山が白い煙を心地よげにくゆらしてゐる
夏の山。それは飯澤にあつた。長い長次郎の雪渓も終つて、兩側は目の覺める樣な綠。仰げば澄み切つた夏の青空に白い雲が靜かに動く。針ノ木岳が眞夏の陽をまともに受けて鐵色の山肌がキラ〳〵輝く。
夏の山。それは又戰場ヶ原にもあつた。若い白樺の林の中を行くと林の奥の方で白い幹が綠の中にちら〳〵馳せ違ふ。曲つた道が眞直ぐになると林が失せて前が開ける。戰場ヶ原。見渡す限りの廣い野。その末に立ち列ぶ唐松の林。眞夏の青空に陽は輝いて高い枯木に鷹がとまつてゐた。
× × × ×
あゝ山。なつかしき山。
丘を降りかけると道の左の杉の林に秋の陽が斜めに指し込んで來る。幹の半面が赤々と輝いて丘の下は之に黑い影が長い。彼は道をはなれても夢でその方へ走つて行く。(二、十、十三)(九郎)

半生

いよ〳〵僕も永い人生半ばを占領する學校生活を終えて來年三月には同校卒業の見込と履歷書の尻の方に書く身分となつてしまつた。——と僕も人間だ。人並みな事を云つて置かふ。
ムツターの手に引かれて江戸は麹町の小學校へ入學して二、三年の間は夢の樣に過ぎてしまつた。四年の時はまだよかつた。五年六年となるとそろ〳〵他人の心がわかる樣になつた。十三や十四の年頃を以て癪に觸はる事を覺えたのだ。誰に對して？　そんな事は今更云ふに足りない小さいものだ。一中を受けて落され、開成にふられ、やつと明中に入つて數ちやんと偶然に級を共にした。二年の間は僕には樂しいものだつた。それから明中の人々に別れを告げて僕は家の都合で大倉商業に入つた。卒業すれば直ぐ月給取りになれるからだつたのだ。小學校を卒業する頃から明中大倉と進む間、僕は父母の愛は充分知つてゐたが僕の家は多くの友達の樣に贅澤な眞似は出來なかつた。新い雜誌なんか勿論讀めなかつた。家へ歸つて後の仕事は出前持ちと出前さげだつた。雨の日にも雪の日にもお天氣の日も又夜遲い十一時頃でも宮内省へ持つて行かねばならなかつた。海上ビルにも箱車を引いて通つた事もあつた。いつか父さんと二人で行つた時歸りにあの一橋の傍によく出てゐる大福の大きい奴を燒いたのを柳の木の下で立食ひした事もあつたつけ。僕には旅行なんて事は勿論許されてゐなかつた。夏を何處、冬は何處と假令一週間でも二日でも行かれた身分ではなかつた。只僕は親のいゝつけ通り働いたんだ。夏の暑い日に海上ビルの裏口から入つて地下室の塵だらけの所に陣取つてお辨當を配つた事もある、淺野セメント、今でも覺えてゐる。そこに居る小使さんの親切だつた事、咽喉がかはくだろうと社員にやるべき冷し麥の水を度々くれた時だ僕も隨分嬉しかつた。何處の會社だか忘れたが嫌に威張りくさつた給仕の居る所もあつた。社員の所に行つて勘定をさらうとするといつも逃げを使つたり、ざなつたりする奴が居た。今考へればあんな奴は商大を出た奴ぢ

やないと思つてゐる。時は移つて行く。海上ビル、僕は辨當持ちから今やこゝの何處かの會社に務めやうとあせつてゐる。

こんな風で僕は商大へ入る前までは實際に學校から行く旅行以外には絶對に出た事もなかつた。然〻天を否父や母はいつまでも小さな元園町邊りには居なかつた。今の所に移つてから此の不景氣になるのまで僕の身は實に自由になる事が出來る樣になつた。

豫科に入つて其の年の夏に今は先輩の中川氏、金田氏に伴はれてはじめて日本アルプスといふ所へ行つて見た。それ以來僕には山さいふものが離れ難い代物となつてしまつたのだ。

以來僕は山男となつた。豫科三年の時、丁度一年間石祥井に通つた。中村橋、あすこの動物園と云へば誰も知らないものはない筈だ。ドロ狐、ペンギン、トンボ、チンパン公、クマ、ガマガヘル、乙蝶、こんな有難い名前の持ち主の集つた所、此處を稱して松籟園と云つたのだからあきれるだらう。けれどもいとも妙なるマンドリンの音が時々は洩れて來る事があるのだつた。春や、秋冬、暇さへあれば散歩して懷しい秩父の山々の夕陽に暮れ行く淋しくも男々しい姿に見入つてゐた。お偉い方々が黄色い聲をはりあげて、「一橋スピリツト」を叫んでゐる時に、僕等はせいつせと山へ通つた。多い時には月に二度、必ず信州や甲斐に入つたものだ。いつかポヤ〳〵と頭には四角な帽子が乘つてゐた。それでも同じだつた。今の豫科の人々は氣の毒だ。「オイ吉澤、此の前の體操は出て來かなつたな、又山か」教官殿が聞く。「ハイ、忘れました」とは云はずに正直に「八ヶ岳へ行つて參りました。」と云ふと先生もニコ〳〵笑ひ乍ら「相變はらず好きだなあ」で濟んでゐた。本科になつても恐いおぢさんも居なかつた。スキーに味を占めてから何處ともなしにアザラシをひつかけて歩いた。いつか人並な事も出來る樣になつた。そして僕はいよ〳〵來年此の山岳部を出なければならないのだ。學校を出るんぢやない。僕は學校へ入つて何も覺えない。只覺えたのは山登りとスキーだけ。謙遜して云つてるんぢやない事は誰れでもが認める事だろう。僕自身それでいゝと思つてゐるんだから他人樣から見れば仕末の惡い人間だ。學校へ入つて六年間に僕の爲し得た事は只僕の身を導いてもくれ、そして助けも心配もしてくれる數人の人を知り得た事である。僕は學校さいふものに感謝する前にこれ等の人々に感謝をしなければならない事を知る。山岳部の人々、人間らしい人間は山岳部にだけしか居ないさ思ふ僕の偏見は惡い事だろうか。

（いちろう）

友田勇氏

所は本鄕下宿屋町の附近、之等下宿屋に巢喰ふ有象無象により繁昌するオデン屋〇〇、所へある日部員某、彼も亦オデンより外の食るものを知らぬ人種、のれんを擧げてヒヨイと中へ入り込むさ常連らしい連中に交つて之も山岳部に其の人ありと知られたる友田勇氏、悠々とパツトの吸ひかけを袂の中から出して一生懸命火をつけてゐる。彼の前に橫たる皿には半かけの燒豆腐の煮込みがのつてゐる。部員某彼の側に腰下ろし例によつてコンニヤクの皿だ。俄然友田氏おやぢに注文するにがいモドキを以てす。某氏

叫びて曰く「オイ共食ひの傾向だな」と、友田氏首を縮めて凸凹の御面相を新聞紙にて隠し、「今日だけはやめてくれ、頼む」因みに友田氏の又の名をガンモドキ、約してガンモといふ事は誰も知らないものはない筈なり。之をしも知らすとは友田氏に對して人格否面格を無視する事となる。（いちろう）

野澤の子供

ある冬の事、夕暮近いスキー場のA斜面で僕等二三人は一生懸命クリスチヤニアの練習に餘念なかつたと思ひ給へ。ふと上の茶屋の方を見ると五つ位にしかならない子供が滑つて來る。見事なものだ。洋服の様なものを身につけてゐる。杖は二本あるがリングも何もない竹の棒、はじめは勢良かつたが僕等のスタートする所に來て、ステーンと投り出されたものだ。それでも元氣よく起きあがつたまではい、が起きるすぐに泣き出してしまつた。スキーはと見ればチヤンと足についてゐる。板を切つて火にあぶつた例の手作りスキーだ。繩でゴム靴とスキーは旨くついてゐる。杖が何處かへすつ飛んでしまつたのかと見ればこれもチヤンと持つてゐる。「オイどうしただい。泣くんぢやないよ。何處か痛いのかい」と聞くと「手がつめたいんだい。アーン〳〵」だつて。人を馬鹿にしてゐる。轉んだ拍子に夕方の凍つた雪の中に手をつゝ込んだもので冷めたいのだろう。その内に居ずまひをさゝのへ、泣き乍ら又旨い直滑降なやり、急スロープの所を鮮かにクリスチヤニアポーゲンでスイ〳〵と曲つて神社の坂へ姿を消してしまつた僕等の方で泣き度くなつたのも無理がない。猫の奴の顔を見た時僕は思はず吹出した。ものすごくきんちようした様な顔をしてうらめしげに自分のストツクを見つめてゐたから。（いちろう）

高崎驛のお巡さん

信越線高崎驛、奥上州へ入る人、赤城を訪れる人々の必ず三時間を待たなければならない驛、夏は蚊に攻められ、春秋冬は寒くて我慢にも眠られない三時間であるが上野を終列車で出た人は翌日の沼田行又は小山行きの一番まではどうしても此處に送らなければならないのだ。確か汽車は夜更の二時頃に着く。まづ何をししのいゝ木の腰かけで我慢し、外套かなんかをかぶりセツター出して眼を開じやうと試みるけれども一向効果は顯れ相もない。其は忽ちの内に先客により占領されてしまふ。仕方がないので風通の内に誰かゞワンタンを食ひに出かけやうといふ。驛の前には三時間の客を目當てに支那そばが一軒起きてゐるのだつた。一軒位の所が三角形になつてゐる。其の中にテーブルもあれば椅子もある。臺所もあり、料理場もあるといつな具合、こゝにも常連の先客と見えて五六人入つてチビリ〳〵安酒で三時間に當てやうとする人が居る。五六人、もう後は入れない。暫くは入口に立つて待つてなければならないのだ。氣の利く先客は營業妨害になるとか皆さんにお氣の毒だとか云つて出て行つて吳れた。其の後に腰かけ込んでやつとの事に有難いワンタンにありつく。そのワンタンたるやとてもすごいものである。食物だか何だかわからない。後で身體に異狀を起さなければ幸である。それも終る。と又寒い二

時間ばかりを驛ですごさなければならないのだ。

此處に一人のお巡りさんが居る。三時間の常連も澤山居ると見えてそれ等の人は慣れたもの。乙にすまして簡單に眠てゐる。僕等はやはり高等人種だけに横になる必要がある。登山靴のすごい所をお互にぶつけ合せて長々と眠るのだ。お巡りさんは何とも云はない。見て見ぬ振りをしてゐる。氣の毒なのはお巡りさんだ自分達が寢てゐる間一生懸命そこいらを歩き廻つて見張りをしてゐる。職業とは云へ同情に價する。四時も過ぎる。そろ〳〵明るくなつて來ると寒さに覺め勝ちだつた身體も温度の高まるにつれ、眠氣はぐつと押寄せて來て、とてもいゝ氣持ちにグッスり行つてしまふ。……

「オイ〳〵こんな所に長々と眠てゐちやいかんぢやないか、アーン」ごし〳〵自分の身體をゆすぶるものがあるのでふと眼をあけると劍をさげたお巡りさんなので襟を正して起き上る。長いものには捲かれろといふ事があるので構内にかゝる時計を見上ると一番が發車するに約十五分前、此の儘起されずにいゝ氣持ちで眠てゐれば又翌日の一番まで待たなければならなくなるかも知れない。親切なのは此處のお巡りさん。氣の利くのも此處のお巡りさんだ少し位「オイコラ」なんて云はれて人格を無視されても我慢して置くべきだろう。部員諸氏よ、安んじて三時間を眠られん事を。

（いちろう）

△

「光陰流るゝが如し」とは昔から言ひふるされた言葉だが、月日の經つことの早いのには今更ながら驚かされる。昨日今日と思つてゐる中に何時しか六年の月日が經つてしまつたのだ。順當に行けば來春三月には學窓を去つて實社會の荒浪逆巻く中へ飛び込んで行かねばならない。其處には鬼が居るか蛇が居るか、「渡る世間に鬼はない」といふ俚諺を信ずれば或は案外住みよい世界が待つてゐるかも知れたい。然し此の住み心地よい世界とて何處に陷穴が無いとも限らない。少くとも現在の如きフリーな氣特を以つて生活して行く事は不可能なことに思はれる。其の僞善に滿ちた、虚僞の支配する世界に住まねばならぬことは若人に取つては甚だしい苦痛だ。然し之が人間の運命である以上逃避するが如きは卑怯だ。敢然として社會苦と戰ふ可きである。如何なる暴風雨でも堪え忍ぶだけの修養は積まれてゐる筈である。「風よ吹け吹け笠吹き飛ばせ笠の紅緒の荒結び」、と唄ひ「雨よ降れ降れざんざかゝれ背の着ござはだてぢやない」と唄つた氣持は只單に享樂的に山に登る時、流行に追はれて山に登る時の氣持だつたろうかよく僕等山男の間で交される言葉として「山に登るのは好きだら登るので何等他の意味はない」と。然り少くとも僕等友達の間に於ける氣持は之で盡きてゐる。或ひは地質を研究するのでなければ登山の眞意義はない。草木の研究をするのでなければ登山の意義は半ば失はれると說く人もある。僕は必ずしも之を否定せんとする者ではない、否自己の考を以て他人を强制せんとするが如き大それた考は毛頭持つて居らぬ。それと同時に又他人が其の人自身の考を以て吾人を强制する事はまつぴら御免を蒙りたい。然

しながら此の好きだから登るといふことゝ享樂的に登るといふことゝは同一の内容であううか。言葉其のものゝ意味としては或は同一であるかも知れない。文字の智識に乏しい僕には何とも判斷がつかないが其の響から受ける感には自ら差異がある様に思はれる。享樂的と言ふ言葉を聞くと如何にも華かな輕妙な直に夜の銀座を思はしめる様な響がある。然し其處には薄つぺらな感じはないであらうか、話が理に落ちた様だ元來山男には理屈は禁物である。

實社會へ出れば山もあり河もあらう、急奔する溪流を徒渉せれの離れ技をせねばならぬこともあらう、森に道を失ひ籔に道を絶たれる事もあらう。雨に風に霧に困難は素より覺悟の前だ。足を地から離さず、一歩は一歩より高く。晴れた山嶺の喜び。僕等には安息所がある。（數馬）

△

近頃は餘り山へも登らなくなつてしまつた。山に飽きたのかそれとも山登りの苦勞が煩はしくなつたのか、否斷じて然らずと答へ得る自信はある。只然し登山に對する氣持に幾分の變化を來たしたことは否めない。最早昔の如く山嶺を極めればどうしても滿足せぬといふ氣分はなくなつた。また記錄のない未知のコースを求め探した時代の氣持も次第に薄らいで行く。然し山に對する憧れは決して變らぬ。否爲に其の度を强めて行くのが意識される。

（數馬）

山に對する心

私が山を愛して意識的に山登りを始たのは、中學二年の秋、杉浦德次郎先生に導かれて多摩川のほとりにある城山といふ三百數十米の小山に遊んでからである。八王子で汽車を捨て、秋の武藏野を小春日和の日に散策し、多摩を渡船して、城山の域趾を攀ぢ廣い武藏野を一目に見渡した時の氣分は、今になつても忘れられないものゝ一つである。それまでは遠足と云へば必ず神社佛閣其他人工的なあるものを求めてゐたのであるが、此の時は求むるものは唯丘に立つことであつた。その爲か何だか物足らない感がしないでもなかつた。然しその歩いてゐた時の氣分、高い丘に立つた時の喜びは、私にとつて大いなる發見であつた。それからは私の遠足は所謂ペデストリアンの趣味となつて二年程過ぎた。

その間に所謂山に對する經驗が多少加はつて來た。妙義山、木曾御岳山、赤城山、武州御岳山其他手近の山々に大部足跡を殘すに至つた。苦闘の後に初めて得られる山頂の大觀、それが味のないものになつて仕舞つて、私の心は高原から山頂への轉化を來すに至つた。苦闘の後に初めて得られる山頂の大觀、それが求むる唯一のものと考へられた。山其物に對する色々な感想は求むるものではなかつた。否全く無意識と云ふことが出來やう。淺間山、富士山、槍岳等に登つた時、即ち中學の終りから豫科の一年頃の氣持がこれである。やがて大學にも山岳部が出來た。世間には所謂山黨が發生して、熊公も八公も山の熱に浮かされる様になつた。斯様の有様となれば、山の好きな仲間の間には自然登山

の競争、少しでも多くの山に足跡を印したいといふ慾望が起つて來る。少しでも困難な山を征服したいといふ希望が湧いて來る。かくして私はピークハンターの一人となつた。ピークハンターは慾張りである。一つの縦走をするにしてもそのコースの如何に小さなピークでも立寄らなければ承知出來ない。此の氣持は豫科を通じて私の懐いてゐた所である。

然し單なるピークハンターは永續するものではなかつた。私の山に對する心は無味乾燥なピークハンターから當然變化した心である。無意識に汗を流して只管に山頂へ急ぐ登山は既に登山ではなくなつてしまつた。私はより靜かに山の心に溶る、山の懐に抱かれる氣持を欲する樣になつた。本科になつてからの登山は大體この心である。私にとつては唯一人の山旅も決して寂しいといふ氣にならなくなつた。全く山の喜びが私をつゝんでしまつた樣な氣分になる。秋の初め登山者の途絶えてしまつた木曾の駒ヶ岳に一人登つて行つた時の氣分、それは宗教等の法悦に近いものであつた。山の黒い岩、太い木、頂上の神社、それからは私の漠然とした山の喜びを構成する一要素であるが、私はその一つ一つを細かく意識して喜びを發見するものでは決しなかつた。谷や、樹木や、草等の名を究明する氣持は勿論なかつた。星月夜の十時頃獨り木曾駒寶劍岳の頂上に坐つて、岩に鳴る冷い風に當りながら約二時間を過したことがあつた。こみあげて來る何とも云へぬ喜びそれは茲に說明する力をもたない。この心これが私の山に對する最高のものであつた。

それから一年許り山を遠ざかつてゐた。

この夏の末に薦められて八ヶ岳に登つた。然し悲しいことのみ感じられた。そしてあの氣持には成れなかつた。唯苦しかつたことを知つたのである。

私は冬のスキー登山の經驗は殆んどない。從つて冬の山に對しては何も心にないと云ふて良からう。（平面）

河口湖カモられ話

重い樣な輕い樣な足を引づゝて遠路遙々富士の西麓を經て本栖湖、進西湖を辿り、トンネルをくゞつて長濱に來た。

河口湖を舟で渡り、船津に着いたのは三時頃であつたらうか。此處でキヤンプをするのは初めてなので樣子が解らないが兎に角淺川の方へ向つて歩く。

水力電氣の取入口の橋を渡つて、直ぐ道を離れ、湖岸を辿り、淺川に曲る小さな岬の手前にある大きな岩蔭にテントを張る事にした。

キヤンプするには薪がゐるのだ。來る途中岸邊に一度使つた事のある樣な半分こげた板片を二三板拾つて來た。傍に腐つた使ひものにならない舟があつた。これがそも〳〵問題の種となるものであつたのだ。例に依つて例の如く仕事は早い。忽らの内に夕飯の仕度は出來上つてしまつた。

仲良く飯盒からの上等の御飯を分け乍らたべてゐると淺川へ行

き、又船津へ行く人々が羨しげに通り過ぎて行く。子供は圖々しい、おかすまでも吟味しに來る。

二人して最後のデザートコースに罐詰の果物に舌鼓を打つてゐる時であつた。もうそろ〳〵日も暮れやうとする六時少し前、何處からあらはれたか一人の中年の鬼婆の様な女が來て何やら譯のわからぬ事を喋り出した。全く藪から棒とはこんな事だらう。

「おめえさん方、あすこにある舟をこはしてもやしたろう。今時舟は高けえ、此の不景氣にあんな舟でも造へるとなりや百兩が上は出るんだよ。さつき子供が通つた時にそれを見たさいふから見に來たんだか、今淺川の網元は酒を呑んで騒いでゐるが、とても恐ろしい見幕でおこつてゐるよ。俺が何んとか云つてなだめてやるから少しでいゝから酒代を出さないか、此の前もあの舟をこはして使つて警察につき出され、俺が中に入つて旨くしてやつた事があるんだよ」とこふ抜かすのだ。

寢耳に水、キャンプに火だ。使ひものにもならない殆んど全部に水が入つて腐つてる舟の板なんかはがしてもやす奴があるもんか。

「何を云つてるんだい。僕はそんな事をした覺えはないよ、あの舟のある事は承知だがそんな所から此の薪は取つて來たんぢやない。前にテント生活した人でも使つた様な奴を拾つて來て文句を云はれる筋はないれ。こつちが悪けりや警察へでも何處へでも行くぜ、いゝ様にして吳れ。」

とまあこんな風にごなり返してやつた。此の時巡査が自轉車に乗つて淺川に向つて通つて行つたので婆さん聲を低めて

「そんな大きな聲を出すとお巡りさんにわかるよ」

と僕を抑へつける様にいふのだ。わかつて困るのは一體どつちなんだとは思つたがそんな事は云はなかつた。

僕が餘り強硬なので形勢危しと見た同行のHは妥協を申込んで

「面倒臭いからお金をやつて追拂つた方がいゝ」

といふ。小生も五月蠅くなつたので

「ぢやいくらやればいゝんだい」

短刀直入に手つ取り早く聞いたもんだつた。

「たんとぢやないが酒の一升も振舞へば收まるよ。そうだれ。一圓と七十錢位なもんだ」

と段々調子が變つて來たので

「ぢや二圓やるとしやう、其の代り、お釣りの分は薪をもつて來て吳れ」

とどうせそんなものを持つて來る筈もなく、あてにもしてゐなかつたのだが癪に觸るから付けたしてやつた。

まあそれで一段落はついて婆さん歸つてしまつたのは翌日の事だつた。

特つて來はしまひと思つた例の婆々が氣持悪くも桑の枝の薪一束とれぎとヂヤガ芋數個をまだテントも片づいて居ない頃僕等の前に持參して來たもんだ。

事此處に至つては小生實に解らなくなつた。ゆすりに來てお釣りをもつて來る奴があるのかと、實は感心してしまつたのであ

る。

然し寃罪は何處までも寃罪だ。うつかりあゝいふ人氣の悪い所でものを拾つたりして利用する事のない樣後遊の士の爲に警告して置かふ。（いちろう）

感想斷片

同人諸兄の悪評を書く心算で取つた筆は思ひ掛けない、感想に飛んだ。日頃の道化役者、其の儘を現はしたかつたが、筆をさつたら凡人なる悲みが急に押寄せて來た。

(1)社會、道德、法律、義理……さいふ樣な難しい事を考へず宇宙に唯ひとり居ると自覺して自己に生きる人生がある又人間はごちやゞくとよつて生きて居るとの意識で暮すものがある。案外呑氣で大なる波瀾重疊もない生活かも知れない。

長い間の學校生活で人格とかいふものを養成させてもらひ、趣味を作つてその圓滿にあてる、社會に出ては、とにかく煩といふものに挑戰し、時によつては机に向つて靜けさを考へる。これも一つの人生だ。

あけてもくれても笑談ばかりで暮す人生もある。何時でも澁面で暮すものもある。

(2)自覺、大變難しい事だ實際これをなしうるものは殆ど千人に一人位だらう。これを持つ人はどんな事をしても闕はないと思ふ。助平根性と人がいつても、眞に何かしたいのか、心からしたいことをするならば實際どんな事でもいゝ。する事があやふやだつたり、したがる度合が弱かつたりする場合に平氣でなんかする位、いけない事はないと思ふ。しかし凡例令それが法律にふれ樣と、人は大抵そうだ僕もその中の一人だ殘念に思ふ。

先日鹽原へセミナールの懇親旅行で行つた。紅葉が青葉の間に見えて大變よかつた。騒しい都會を離れて山に入る氣持程（こんなちよつとした所でも這入つた氣僕でも）僕を愉快否清淨にする事はない。

宿に居て小雨の降るのを眺めるのも一興だ。如何にも人の心を清淨にする。（猫）

△

登山からスキーに入つた連中は大抵スキーは甘くない。そして其の言方が面白い。俺は畠スキーなんてやらない山スキーなんだと。後滑りしながらへら〳〵になつて小高い所に登つて赤く青く色ざられた地圖を出して眺めてばかり居る。大抵は朝寢をしてゲレンデに出ても餘り滑らない。大馬鹿と言ひ度い。スキーでほんとに山に入れば朝早く出かけて早く先に着かればならぬ。なるべく早く行くことも大切の要素である。畠スキーをうんさやつて山に入るべきだ。關温泉から關山の驛へ下るに制動でボーゲンしながら下つたと云ふアルピニストもある。

登山靴が大變流行り出してゐる。豆をうんと造つて、重さうに歩いて居るのはおかしいざこころか氣の毒になる。それ程靴で山へ行き度いのか。曰く草鞋は澤山持つて行かればならぬと。五足持つてその重さはざれ程異はうか、まして早さに於ても疲れ方に於

ても問題ではない。ロッククライミングには必要だと。靴の方がしつかり岩につくか、草鞋の方がしつかりつくか、何にも履かない程しつかりつくではないか。まだ岩や雪に上るに用ひるのは許す所があるとしても谷を上るにまで靴で行く奴がある。針ノ木谷や小黒部で徒渉毎にぬいで渡つてゐた者を見た。水中の岩に滑つて困るじやないか。日本人が靴を用ふるのは、立派なピツケルを床置にしてゐる登山家と大したたちがひもなささうだ。

昔はなるべく容易に頂上に登らんとし、今はなるべく苦しんで頂上に登らうとしてゐる。と言つて居る人もある様だ。ほんとに其の様に思はれる。岩登りは登山の最後の階段であると、何となれば人間は危險を求むるものであるからと言つてゐる哲學者もある。峰は凡て登り盡されても谷は自然のまゝ殘される。吾々登山家の喜ぶべきことであると言ふ者もある。等々云ふ者は登山の民衆家と云はうか澤山の人が山に登つて段々やることがなくなつたので逃道を作る亞流アルピニストの言ふことだ。彼處は人が登つてしまつたから俺は此方に登るとか、彼處は未だ誰も登つて居らぬから俺が行つて見ようかと云ふ連中も中々多い。全くおかしくなる。こうなると何で山へ行くのか一寸解らぬことになる。此頃では何々山紀行と云ふのは全く少くなつた。秋の何山とか霧の何山とか、雪の何山とか云つて形容詞を付ければ紀行として發表出來ぬ樣になつた。勿論色々の方面から山を研究し、後の者の參考となるのは悦しいが、他の目的の爲めの連中が大いのでいやになる。始めて槍へでも登つて山を知らぬ連中に吹くのと大した異もない。

一年增に相當の年輩の人や小供が山へ登る樣になつたのが大變目立つて來た。大變喜ぶべきことである。なるべく道も良くして誰でも登れる樣にしてやるべきだ。登山道位造つても決して山の自然美山の莊嚴さは汚されはしない、唯登る人の心がけ次第だと思はれる。登山の爲の登山でも何でもなくライフの爲に登山の意義があると思ふ。to the life, of the life, foy the life. だと思ふ。

(トライアングル)

△

親睦の爲に山登りをする。山は決して手段にされた事をおこりはしないだろう。斯して山岳部も山岳會もあつていゝ事になるのだ。

△

澤遡り、峰歩き、岩登り、雪の山、紅葉觀に、何でもいゝのだ古い所でも、新しい所でも、靜かに山を味ほふとガサ〳〵天氣に登らうとそれは各自の勝手ぢやないか知ら。他人の事までとやかく云つてそれで靜かな山もない。血にもえた若者よ、靜かに山に溺るには早いと思ふ若者よ、新しき境地を拓いてくれ。

△

プチブルの脛噛りよ、勝手にしてくれ。

△

山登りとスキーのみをば會得(?)して
われ大學を出づるなりけり。

△

大學は人格の養成所なり。
山岳部は友情の養成所なり。

△

遭難した時、銀座が戀しかつた。

△

死に直面した時程、人の情のわかる時はない。

△

「針葉樹」を思ふと新しい溪谷、處女の峰に行き度くなる。

△

確でもが槍の頂上に登つて、あの雄大な山波と空を見渡したらさぞ立派な文學が日本にもあらはれるだろう。日本の社會ももつと〳〵蝕和されたものになるだろう。

△

山を知らない人、知らうと思つても出來ない人々を氣の毒に思ふ。

△

僕の又の名を、熊、山男、雲、（雲助の略）孫（熊の孫の意）さいふ。一平とも云はれる。岡本一平氏には氣の毒だが。

（いちろう）

△

漫想二題

何か紀行を書いてくれと賴まれて安請合をしてをいた。が、考へて見れば紀行を書く程大した所へも行つてゐない。仕方がないから牢てした山旅の經驗を拾ひ上げて、何の統一も系統もなく並べ立てゝ見た。面白くもない。面白くない筈である。山は語るものでも、讀むものでもない。山は登るのが一番面白いのだ。

こんなもので紙面をふさぐのは、すまないことゝ思ふ。別に讀む必要もない閑文字を並べたに過ぎない。閑暇で閑暇で仕樣がなく、新聞の廣告も一字殘さず讀んで、それでまだ時間があつたら讀んで頂く位で結構である。編輯者と讀者に豫め御詫びをする。

一、小　舍

山へ登つてよくこんなことがある。それはその時は一生懸命だが、後で考へて見ると可笑しいものだ。

夕方になつて小鳥が塒に歸る。それが尾根の上を歩いてゐる時ならば、太陽が眞赤な光を投げて殘して、グルングルン廻りながら雲や海の向ふに沈んでしまふ。岩も偃松も淋しいうす暗さの中に赤く染められる。此の頃からである。若しそれが谷を行くのならば矢張り谷だけに暮るゝに早く、兩岸を限る長い尾根の上に照つてゐた日の影もなく、谷川沿ひの道は水音ばかり暮れ殘つた樣にすさまじい。川面に白い泡の噛むのは見えても踏む足もとの道は定かならぬ。この頃ほひである。行く先きが人のゐる小舍ならば心强い。チカ〳〵する灯を見れば、ざれ丈とても高が知れてゐる。温い夕御飯も十分に保證されてゐる。好い露營地を見つけて

テントを張るなら、もう此の頃は夜の用意万端整つてゐる。マドロスパイプをくわへて、ぬつとテントの中から浮き出して、一番星に明日の天氣幸を祈る。木の根であることもある。倒木が屋根に見えることがある。木の根であることもある。倒木が屋根に見えることがある。でつけた小屋の記號。其處には誰もゐない。今宵行つたもの丈けが今宵その小屋のあるじにならうと云ふ場合のことである。一行の中まだ誰もその小屋に行つたことはない。そして行けども行けども小舍らしい姿が見えぬ。榮えに榮えた暑い日中に比べての、肌寒むを覺える夜氣は迫らうとする。暮れなんとして未だ暮れず人哀愁を覺ゆ。小鳥も塒へ歸つた。されど人の子に枕する所なし足どりがたどゝしくなり、冗談も一寸かげをひそめる。思ひ思ひに「小舍はまだかな。一體どんな所に小舍があるのだらう？水に近ければ好いが。薪はあるかしら。」こんなことを考へて默々と行く。日暮れて道は遠いのである。

「小舍だ！小舍だ！」突然先きに立つ一人が叫ぶ。

「ウン、小舍だ。ヤレ〳〵。」續いで聞こえる。

その時三人ならば六つの眼、五人ならば十の眼が一樣に夕闇の中に、喜びに燃え、安堵に輝く。疲れが一時に拔け去つた樣でもあり、疲れが一時に出た樣でもある。疲れが去つたと思へば、輕く小舍に向つて足を早める。疲れが出たと思へば、路傍の石に腰を下す。

さあ、今晩は何にしようかな。大和煮か。コーンビーフか。

ハム！　味噌汁！

カレー！　ソーセーヂ！

活動寫眞のフラッシュバックの樣に浮ぶ。

欣々然と小舍に近づいて行く。神變不思議小舍は段々石の形となる。木の根であることもある。倒木が屋根に見えることがある。六つの眼が六つ共、十の眼が十共に、何を見誤つて小舍としたかゞハッキリ分るさまた失望の色に變る。

遠くから小舍だと思つて、それが餘程近くへ來て始めて小舍でないのを發見して失望する迄の心の變化を想像して見ると面白い。

小舍を小舍をと、眞劍に求めてゐれば居る程、こんな見誤りが多い。一日の中に（と云つても、日が暮れてしまつて、黑白を分かぬ闇にラテルネの光を賴りに行く時はこんなことはない）二度もこの錯誤を繰返すことがある。「これぢや、小舍を通り越してしまつたのではなからうか」こんな考が浮ぶ。地圖は何度も見直してもう見る氣もしなくなつた。

それでもやつと正眞正銘、眞違ひのない小舍を見付けた時は、何と云つていいか分らぬ程うれしい。

晩くなつた食事も終ると、諧謔まぢりに、互ひに今日の失敗が語り出される。「笑ひ事ぢや無かつたよ。」この言葉がピッタリその場合にあてはまるであらう。

山小舍の夜は更ける。

二、靴

登山案內書の終りに服裝の所に履物は草鞋又は靴とある。靴と草鞋とどちらが好いか。それは人の好きすきである。今はその可

否は問題外として、登山靴のことを書いて見たい。

始めて登山靴を見る時は、誰でも、いかついものだ、と云ふ感にうたれる。「恐ろしいものだなあ」位の嘆聲をもらす。よく「重いでせうね、一貫目もありますか」なんて尋ねられる。

秋、新雪の富士が見たくて、朝まだき、吉田で電車を下りて裾野を行けば、村の人が近くの山へ仕事に行くのに出遇ふ。靴を見て色々評定してゐた揚句に一人が呟いた。

「あんな靴で踏まれたら鰻の足の様になるずら。」

然し慣れた眼に見るとこの靴は、恐ろしいよりも、そのまるい先きや、コチ〳〵並んだクリンケル(釘)が堪らなく愛嬌のあるものに見える。

そのまるい頭の先きに獅噛みつく様に打ちつけられた釘を見て何を思ひ出そうか。しげ〴〵と登山靴を見てゐた小ちやな姪が云つた。

「これ小父ちやんの様れ。」

蓋し小父ちやんの歯は少し出つ歯なのであつた。

歯と云へばあの釘はどうしても歯の様な氣がしてならない。河原を急いだり、坂道を駈け下つたりした後で、よく釘の一本二本がグラ〳〵になることがある。底の革が切れもせず離れもせず、丁度歯が抜けてしまはない様なものだ。

抜けかゝつた歯を一寸觸つて動かして見ては大事にしてをく様にしてゐるのでも抜いてしまふのが恐かつた)靴の釘の抜けそうな所は成る可く踏まない様に氣をつけて歩く。しかしこんなにした歯が抜けてしまつた後は、時々舌の先で殘つてゐる歯齦に觸れては、圓い感觸を何度でも味つて見るが(小さい時は弱虫で歯の動いてゐるのでも抜いてしまふのが恐かはふことが出來ない。何しろ身體の中で一番感覺の鋭敏なのが舌で、足の裏ときたら遲鈍この上もない所だもの。

雨が降つて東京が泥田にかはる時、ジンタ建國の昔に歸つた様な形のゴム靴が濶歩する。その時に登山靴の若い人を見受けるこがある。銀座街頭の石疊みをゴチンゴチンと歩きまわるも愉快であらう。だがこんなことを山友達が云つてくれた。「登山靴で東京の街を歩くとすぐ減るれ」つて、コンクリートの堅い道だ。石と金屬とが打合ふ。釘の磨滅するのも案外早いだらう。石塊道や河原は別として。あの釘の跡を殘して行く柔い土や、落葉の山道ばかりだつたら思ふ程、釘もへるまい。石と金とが打合ふ。固いもの同志だ。激しければ火花が飛ぶ。夕方、石の多い坂道を駈け下る時よく火花が出る。まだ靴の物珍らしい頃、白山から下りて來た。

「火が出るよ。ホラれ。また出たよ。光るだらう。」

チカツチカツと暮れかゝる中に光るその火花を小供の様な氣持で見てゐたことがあつた。

おゝ、この童心!

忙しい社會生活を離れる。登山の中に見出す醍醐味の一つだらうと思ふ。小供らしい、甘いセンチメンタリズムだと笑ふ人は笑ふに任せてをいて。

——冬あの山に登る時、雪崩の心配もあるんで、朝とても早く小屋を出たんだそうだ。寒さは厳しく、雪は固く氷の様に凍つて、星の光が物凄い位うつるんだつて。そこをシタイグアイゼンをつけて氷を蹴つて行くと、その先からキラリ〳〵と青い火花が出たんだつてさ。——

Tさんが落着いた熱のこもつた口調でかう云つて笑つた。その笑ふ口許からほんとに青い火花が出た様な氣がした。うつかりつりこまれて、聞いてゐた皆もドツと笑つた。（村尾金二）

△

僕達に取つて永く山に籠もる時最もつらく感ずるのは外でもない。喰ひたい病だ。三日四日目にもう糖分の缺乏を訴へる。成るべく荷物の許す限りで持つて行つた菓子なども忽ちなくなり、後は砂糖をなめる始末、山でなければ此んな醜態は演ぜられない。尾瀬の時は、S君持參のミルク、コーヒーアをS君の隙を伺つて他の悪い四人共がすつかり鑞を空にしました。人の好いS君も流石に殘念さう。

K君に取つての最大の障害は甘いものではないらしい。登山を計畫しても急に行かないと云ひだしたり、スキーへ來ても早く歸へりたがるのは home-sick だ。此の患者の特色として病氣の事は云はないで、他の理由をこじつける。ふだん此れを見せつけられて僕達は同情して其のまゝ彼を解放してやる。

×　×　×

K君が野澤へ來た時長岡から電報がとゞいた。文面には歸へりに此方へも是非お立寄下さいと。すると宿の女中が此の名前を見て、「此のお名前の方、今年の夏、二人の美しいお嬢さんを連れて行らつしやいましたよ、其れは〳〵美しいお嬢さんでした」と女中の奴大變な事を喋り出したぞ。

早速K君を捕へて其の晩菓子をおごらせる事にした。彼はニヤ〳〵笑つて炬燵にあたつて居た。

×　×　×

秩父の歸へり、雁坂峠下の河原の夜營をたゝんで、其の翌日は猛烈な元氣、出るは〳〵秩父往還街道を一散に下つた。第一日金峰山の登りで一寸苦かつたらしいN君、此の日は先頭を切つて進む、何處から此んな「エネルギー」を仕入れたか不思議な位、此れも皆んな、甘いもの食ひたい慾からだ、餅菓子を賣つてる所はないかと一寸した部落に入ると兩側をにらみ〳〵通る。廣瀬では何も賣つてない。

此の時N君のズボンは股から上の方に破れて居て、一歩歩るく毎に偉大なる筋肉が姿を現はす。N君はキヤラメルを買ふた店の娘さんが丁度針仕事をして居たのを見て、縫つて下さいと賴んだりしたが平氣で、娘さんが顔を赤くしたか、或は其の反對だつたか忘れてしまつたが、兎に角、N君はズボンをぬがないで、つくろいの榮を給はつた。

×　×　×

廣瀬を出ると又々全速力、漸く見付けて飛込んだのが藤原君と云ふ川浦溫泉の上の圓川の饅頭屋、喰べた〳〵、店の商品全部を

平らげて代金を拂ふたら翁さん喜んでしまつただろうが、其れ程の時間も、金も、大きな腹も持ち合せなかつたのは殘念だつた。

此のお翁さんの言ひ分が面白い、何でも自分の娘二人が勉強のために東京へ逃げ出してしまつた。

「〇〇〇〇と云ふ名前ですが御存知ありませんか」廣い東京で、二〇〇萬の人口の東京を彼處一軒此處に二軒と云ふ田舍と同じだと考へてるお翁さんの言ひ分が面白い。此んな事だから娘さんに逃げられてしまふのだと思ふと可哀さうだ。

△

六月の發火演習の際、一部のものに富士登山を許して臭れた。歸へりは猛烈な勢で砂走して、夕方五時近く太郎坊についた、富士は山開き前の事なので太郎坊では麓の人が集つて、道路の修繕やら色々とお山の準備をして居た。

「水がありましたら少し戴けませんか」と何の考へもなく水を請求した。

「水か、水なら此處から一里西にあるよ」と云ふたきりすまして仕事を續けて居る。此んな答を聞いたのは山登り五年してから始めてだ。ガクンと頭をドヤサレた様だ。

「此處にもある事はあるが、一杯十錢だよ」と又答へた。初めのショックで茫然と氣が拔けたが、此の一語を聞いて漸く噴然と怒つた、得意のたんかを切つてドン〳〵下りて來ようと思つた。然し頂上で雪を喰べすぎたか喉が渴いて、此の儘行くのも殘念だからうんと飲んでやらうと思つて、馬穴の柄杓に手をかけた。

すると今度は馬穴の傍に居た他の一組の人が

「何故默つて飲むのだ」とどなつた。

又ひやつとした。が先に飲んで良いと云ふて臭れた比較的親切さうの人が

「オイ飲ましてやれよ」と云つて臭れたので助かつた。直ぐ僕の後から沼倉先生が下りて來た。そして、同じ樣に水を乞ふた。先生は大人だから何と村の人が答へるかと僕も今度は第三者の位置に立つて苦笑して眺めた。

流石の沼倉先生も、ごう樣「西に一里」をやられてあつけに取られて再びグズ〳〵歩るきだした。（徹香舞緒）

沼津にて

夏雲や富士の頭をおごしけり。

悲哀

神戸高商の山岳部及び先輩の人々の共同出版にかゝる「やま」を先日柳澤氏より戴いた。新し味の溢れてゐる中々立派な年報である。附近にロックガーデンを有するあの人々だから岩登りの記事が大部分である事は爭はれない。自分は羨しいと思つた。僕もう二、三年學校に殘れるならばまあ充分とまでは行かずさも可なりのクライミングを試みられるのであらうにと考へると來年出るのが詰まらない樣な氣がする。

高柳氏の小槍の研究、三好氏の烏帽子岩附近の悉しい報等皆非常に有益である。われ〳〵の部員も大いに之を參考して新地を開拓して行く事を望む。

卒業して會社へでも行く樣になれば山へ行く暇も中々得られない樣だ。でも今の奥野氏の樣にチョイ〳〵出やうと思ふ。

若々しい山登も全く學校殊に本二までだろう。嫌に老人ぶる樣であるがつく〴〵さう思ふ。（いちろう）

年　報



’26.11—’27.10

（自大正十五年十一月一日
至昭和二年十月三十一日）

係　吉澤一郎
近藤恒雄
中島嘉一郎
横倉吟三郎

▲山岳部懇親會（本學部室開催）

十一月二十日　出席者左の如し。

奥野綱重　五十嵐數馬　渡邊九郎　松木謙三
三富福之助　吉澤一郎　村尾金二　森竹春雄
近藤恒雄　冠木敬藏　高木英二　中島燦
高橋要二　曾田莊太郎

△如水會山岳會一橋山岳部大懇親會

十一月二十九日（於如水會館）
都合により前號に詳細あり。

△針葉樹第二號發行

十二月十一日　編輯委員左の如し。
松倉榮司　吉澤一郎　五十嵐數馬　松木謙三　渡邊九郎

▲スキー合宿日記

（一二、二〇）

1吉澤一郎　2近藤恒雄　3高木英二
4松木謙三
例年になき積雪量なり。第一スキー場にて晝をやる。今日は自分等は冬期スキー合宿の先頭だが疲れたので早くれる。

（一二、二一）

Y、K、T、の三人が辨當持參で野澤峠へ行き歸つた所に松木が長岡高工の人々十二人を案內して來た。

（一二、二二）

5渡邊九郎　6三富福之助　7曾田莊太郎　8森竹春雄
9中森長太郎　10野村治信　11園山德三郎　12赤城鈴太郎
第一スキー場とシャンツエ組さに別れて練習す。近藤進歩速し。雪が降り出して來た。夜は甘酒の御馳走。

（一二、二三）

12小林靜至　14湯原岩夫　15小栗吉雄　16澤柳儀三郎
17森山秀夫
夜來より雪は吹雪となり朝となれば既に五寸以上の新雪。吉澤、三富は新來の客を迎へに上境へ。シルコ屋本日より開店ピリケンの親父がコーヒー屋開店に及ぼうさして第一スキー場の上まで來たが餘り吹雪くのでスゴ〳〵歸つて行く。赤倉より小栗と澤柳來る。森山はへばつて遲れた。夜は長岡の連中が遊びに來て又甘酒の御馳走。

（一二、二四）

18五十嵐數馬　19松倉榮司　20宇佐美敏夫　21宇佐美二郎
22佐藤　亨
午前中は第一スキー場にて皆やる。午後はシャンツエへ行く夜はシルコの馳走。松倉大將は三杯呑んで靑くなつた。吉澤は四杯呑んで胃散の御厄介。

（一二、二五）本日より昭和元年
23村尾金二　24赤堀太郎　25森田重信
午前中はAとBにて午後はAとCとシャンツエへ行く。頗る豪遊なる菓子出づ。曾田御大川に落ちる。近藤でも風邪をひいて一日寝る事がある。夜八時より長岡高工の人と茶話會を開く。
（一二、二六）
今日は誰も新來なし。六時頃一齊に起床、七時半朝食終り十七名と外に長岡の人九人と共に野澤峠に約一時間半にて達し、これより尾根傳ひに上の平に出で鐵索を降り一本杉にて休憩、思ひ〳〵の方法にて滑降す。十一時半宿に歸へる。午後はAにて尻振りボーゲン。これはクリスチヤニヤとステムの間の子なり。
（一二、二七）
高木はどうもさぼつていかん。有志は野澤道より水尾の西南に出で俗稱スキスに至り寫眞をとつて歸へる。今日からそろ〳〵歸へる奴が居る。
（一二、二八）
松倉、五十嵐、吉澤、村尾、渡邊、三富、松木、近藤外に長岡の皆川氏の大勢で奥毛無へ行く。村尾はストックを失ふ松倉はスキーを一本折る。吉澤は再びくぢく。渡邊はBBをこはす。タイム左の如し。
出發（九、二〇）—野澤峠（一〇、四〇）—上の平晝食（一一、五〇）—奥毛無（一二、一〇）—前毛無の南鞍部（一、〇〇）—野澤峠（三、〇〇）—野澤（三、三〇）
天氣は上乘。眺望絶佳。日本アルプス全部。奥上州、越後の山々、四阿、岩菅、烏甲、苗場。
（一二、二九）
今日は十四人歸つた。
26中島福三郎　27都崎　仁
午前中大部さぼり。夜はシルコ。城南山岳會の連中が二十人ばかり來た。
（一二、三〇）
28手塚晴雄、本日歸京者七名
午前中も練習少なし。皆は四時半頃歸へる。今日からそろ〳〵歸へる奴が居る。吉澤、高木は見送りに行き歸りに三度臀骨を打つ。下駄では歩けない。皆はそれ〳〵スキーをつけて玉ころがしの樣に滑つて行く。槍と穗高が斑尾の左に眞黑く怪物の樣にそゝり立つ。妙高と火打の頭は今しアーベント、ロートに輝いてゐた。夜は夕べとはまるで反對にしめやかに炬燵に入り靜かにスキーの話でふけて行つた。
（一二、三一）
29鈴木敏雄　30奥野綱重（如）
もう雪が悪くて閉口である。最初から居た高木哲學博士歸へ

るので吉澤上境まで見送る。夜の飯はもろに豪遊であつた。一圓五十錢のお客樣とは思はれない。天氣が嫌に續く。雪を俟つや甚だし。

昭和二年（一、一）

31片岡辰夫(如)　32中野益三郎(如)　33及川一(外)
34西片幸之助(如)　35兵藤竹雄(如)　36平井眞澄(外)
37中島嘉一郎

午前中は離れ〳〵に練習せり。午後雪來る。今日よりそろ〳〵如水會山岳會の方が優勢になつて來た。知事だか警察署長だか知らないがそんなたぐひが狐を連れて來たので宿がこんで困るあんなのは全く氣分を害する。

（一、二）

38矢作太郎　39矢作二郎　40原秀熊(如)　41森田市松(如)
42鵜飼新一郎(如)　43田畠幸三(如)

夜は甘酒が出る。奥野氏の屁は獨自性を有す。エッヘ……？今日は二十人寢た。

（一、三）

44長谷川丈助(如)　45山田清太郎(如)　46同　英二　47鐘江榮行(如)　48鐘江三郎　49金田一郎

此日吉澤、矢作の二名は再び奥毛無に登る。佐渡、米山の遠望よし、ゲレンデの雪さは格段の相違なり。一時間半に亘り山頂附近のプルファーを味ふ、歸りは野澤峠より第二スキー場へ行く。水尾山はプッシュひざし。

（一、四）

50平井貞一　51神谷肇(如)

かくして一月八日頃まで如水會の人々及び部員は野澤にをり十日には殆ど全部歸京し事實上合宿を終了せる事となりたり此の間近藤恒雄氏の會計係としての勞力には充分の感謝を爲すものなり。(合宿日記終・吉澤)

△熊野湯附近及澁峠より白根越え

矢作太郎　吉澤一郎

一、六

野澤の合宿を引上げて澁溫泉。

一、七

安南平スキー場視察。熊野湯主人の家に泊る。

一、八

沓野(一〇、二五)—沓打茶屋(一二、一〇)—一、〇〇)—琵琶池水番小屋(一、二〇—三、二五)—天狗岩(四、一五)—澤尻(四、三五)—熊野湯(五、一五)

一、九

附近を歩く。

一、一〇　赤石山へ

熊野湯(一〇、二五)—草津峠(一一、一五)—赤石山頂(一二、四五—一、二〇)—鉢ノ山(二、三五)—澁池(三、〇五)—熊野湯(三、一五)

一、一一　笠へ

湯(一一、〇〇)—笠頂上(一二、四五—一、〇〇)—湯(一、五〇)
一、一二　吹雪なりしも横手山の松尾根雪庇まで行く、歸りの湯坂よし。
一、一三　草津へ
湯(八、〇〇)—松尾根(九、〇五)—澁峠(九、四五)—横手頂上(一〇、〇四)—澁峠發(一一、三五)—山田峠(一二、一五)—白根地藏岳(一二、四五)—弓池(一、〇〇)—草津大坂屋(四、三〇)
一、一四　草津より輕井澤まで變な電車、之より汽車にて歸京。

▲**松倉榮司氏送別會**　(於櫻田本鄉町元園軒)

出席者左の如し。

松倉榮司、奥野綱重、中川孫一、五十嵐數馬、松木謙三
村尾金二、渡邊九郎、矢作太郎、小栗吉雄、三富福之助、
吉澤一郎、近藤恒雄、高木英二、森竹春雄、高橋要二、
中島嘉一郎、宇佐美敏夫、横倉吟三郎、芋川稔一、野村
治信、中森長太郎、高瀨進三

會半ばにして顧問にして親愛なる田中薫先生來たり一場の感想を述べられた。

因みに松倉氏は今郵船會社に通勤せらる。

△**五色溫泉行**

五十嵐數馬　渡邊九郎　松木謙三

一、二九—二、三

△**乘鞍岳スキー行**

吉澤一郎　外三名

一、二、五　飯田町發
一、二、六　松本(七、〇三—九、二〇)—島々(一〇、四五)—稻核(一二、四〇)—奈川渡(二、〇〇—三、〇〇)—前川渡(四、二〇)—大野川(五、一五)
一、二、七　大野川(九、二五)—番所(一一、〇〇—一二、〇〇)—金山平小屋(二〇、〇)
一、二、八　滯在
一、二、九　小屋(七、五〇)—鳥井(九、〇〇)—二、二〇〇米突邊(一〇、一〇)—小屋(一〇、五〇—一二、四〇)—番所(一、二〇)—大野川(一、五五—三、一〇)—奈川渡(四、一〇)—稻核(五、二〇—五四、〇)—島々(七、〇〇)—淺間溫泉へ

△**杉浦德次郎教授送別會**　(於如水會館)

出席者左の如し。

淺原丈平、山田清太郎、奥野綱重、中川孫一、五十嵐數馬、松木謙三、渡邊九郎

一、二、一四　午後七時二十分　杉浦教授東京驛發

同教教現住所　bei Bruhne, Kirchweg 6
Güthlingen, Deutschland.

尙最近の通信を左に掲ぐ（一橋山岳部宛）

拝啓先達ては登山の爲スイスに入り先づ Jungfrau(4166)の頂上を極め、次で Zermatt から Monte Rosa(4638)に登り、更に佛蘭西に入り Chamonix から Monte Blanc(4810)に登山致候、何れも其の雄大に驚き申候。

八月八日　フランスシヤモニーに於て　杉浦德次郎

▲春季スキー合宿日記

三、一七

○當日温泉着人名次の如し。五十嵐數馬、吉澤一郎、村尾金二、村瀬和四郎、柴崎慶二郎、川村勝巳、大坪三郎、近藤恒雄、先着者と合し總數三十名となる。

○午後畑スキー

○夜スキーマン大懇親會を開く。酒屋の婆さん席上雄辯を振ふ。

三、一八

○午前八時半旅館出發毛無山遠征。

參加者、吉澤一郎、村尾金二、五十嵐數馬、高木英二、赤城鈴太郎、大坪三郎、大高利作、柴崎慶二郎、近藤恒雄、

○正午頂上着、熊さん奮闘スキーを折る。

○歸途、柴崎疲勞のため悪戰苦闘全身白皓々として雪中を泳げるが如し。野澤峠よりスキーを橇の代りに尻の下にあて下山、顔色なし。

三、一九

○早朝歸京氏名次の如し。

橫倉吟三郎、宇佐美敏夫、中島嘉一、園山德三郎、大高錦蛇、都崎三吉、內藤一平、芋川稔、大野多古吉、關根利作

○午前中 Paradise で滑る。雪質頗る悪し。

○午後（オハギ）を（ゲレンデ）で御馳走になる。

○晚、明日出發する立山スキー登山者の爲め送別會を開く。

三、二〇

○吉澤一郎、五十嵐數馬、村尾金二、三名立山に向く。

○有志上境驛迄送る。雪降る。

午後Aでスベル。急に靜かになり淋し

○久保田禮治、高橋正二歸京。

三、二一

○松井須磨吉、小卷圓太、村瀨和四郎、岡村榮太郎歸京。

晴天、雪溶け甚し。

○午後 Paradise で紀念寫眞を撮る。

○夜更けに Beer に干盃をあぐ。

○三、二二午後、吉澤、五十嵐兩氏より大町付けの葉書をもらう。

○歸京明日に迫る。殘片付けに忙殺。
○殘留組午後シャンツエの尾根で奮闘す。
○スキー場人影稀なり。

三、二三

午前中滑りたれど雪質悪しき事甚し。
而も万象寂として(スキー場)人影を見ず。
正午名殘を惜みつゝ思出の温泉旅館を後にし歸京の途につく。(近藤恒雄)

△三月の針木谷と立山越え

田中薫氏、村尾金二、五十嵐數馬、松木謙三、吉澤一郎、人夫志鷹龜之助、佐伯伊太郎

三、二一

大町對山館(八、五〇)—野口(九、三五)—大出(一〇、一〇—一〇、三〇)—スキーをつける(一〇、五〇)—休(一一、五〇—一二、〇〇)—晝食(一二、三〇—一、一〇)—黒澤の手前(二、一五)—黒澤出合(二、四〇)—白澤(三、三〇—三、五〇)—畠山(四、三〇)

三、二二

畠山小屋(八、五〇)—扇澤(一〇、一〇—一一、一〇)—大澤小屋(一一、四五)

三、二三

滯在、田中氏直吉を連れて來る。

三、二四

大澤小屋 八、〇〇)—針ノ木峠(一一、二〇—二、一〇)—南澤(三、一〇—四五)

三、二五

滯在、

三、二六

滯在、

三、二七

滯在、

三、二八 五色ヶ原へ

小屋(八、〇〇)—刈安峠(一一、〇〇)—屋根を傳ひ—五色ヶ原(二、〇〇)—平(四、三〇)

三、二九

滯在、

三、三〇

滯在、

三、三一

小屋(六、四五)—板屋峠(九、四五—一〇、〇〇)—食事(一二、二〇—一、〇〇)—一ノ越(二、一〇—二、三五)—室堂(三、〇〇—三、三〇)—弘法茶屋(四、五〇)

四、一

小屋(九、〇〇)—撫(一〇、〇〇)—藤橋(一一、一〇)—千垣驛(五、二〇)

△ヒメツギ登行　久保田禮治他一名

四、九

根小屋(五、三五)—烏屋(六、五〇)—尾根(一〇、一五)—ヒメツギ(正午)—蛭岳下(一、三〇)—積雪多く時間少々引かへす。袖平(二、〇〇)—燒山(四、〇〇)—根小屋(六、二〇)

烏屋よりの道は地圖と大に違つてゐる要注意。

△新入部員懇親會（於石神井）

四、一九

出席者左の如し。

五十嵐數馬、松木謙三、村尾金二、渡邊九郎、吉澤一郎、高木英二、近藤恒雄、赤城鈴太郎、中森長太郎、野村治信白井次郎、中島嘉一郎、園山德三郎、高瀨進三、芋川稔一太田幸人、明　信一、池田正治郎、久保田禮治、金田一郎宇佐美敏夫、佐久間幸夫、横倉吟三郎

手塚晴雄

△小檜山

四月十日と二十日の二回登つた。之は第一回の時大金を持參して途中に紛失してしまつたので、第二回にはそれを探す意味を含めて登山、從つて時間は早くなつてゐます。

四、二〇

日下部發(五、〇〇)—(頂上へ後三十分さいふ所に水が湧いてゐる)—小檜山(九、四五)—燒山峠(一一、〇〇)—金峰泉(一一、三〇)—大烏山入口（琴川の川の字のある澤、大烏澤）一二、三〇)—大烏山(二、三〇)—杣口(四、三〇)—日下部(六、〇〇)

四、二五

猪谷(八、二〇)—黑檜山(九、三〇)—猪谷(一一、三五—一二、二五)—姥子峠(一、三五)—六道辻(二、一〇—二、四〇)—敷島驛(五、四〇)

△三峠登山記　金田一郎、坂口忠良、久保田禮治

四、二八

新宿(十一、五二)

四、二九　晴

小沼(四、二〇)—三峠小屋(七、四〇)—三角点(八、四〇)—八丁峠(一〇、一五—一〇、五〇)—笹子(一、〇〇)

△丹澤山へ　中森長太郎　鈴木陽太郎

四、二九

國分寺(六、〇六)—與瀬(七、二五)—青野原(一一、三〇—一二三〇)—燒山(二、二五)—井戸澤小屋(三、三〇)

四、三〇

井戸澤(七、〇〇)—蛭岳(九、〇〇—一一五〇)—塔ヶ岳(一二、三〇)—丹澤山(一〇、四〇—一宿(一〇、一五)

△武州御岳、大岳山へ

六、一二

石神井—吉神寺—二俣尾—御岳—大岳山—神戸岩—元郷—五日市—東京

▲八ヶ岳

五、二七

飯田町發(一一、三〇)

五、二八

茅野(七、三四)—カドコバ(一一、〇〇—一二、〇〇)—鐵泉(三、〇〇)

五、二九

鐵泉(七、三〇)—中岳ノ麓(八、四〇—九、二〇)—本沢(八、三〇)—八那池(一〇、五〇)小海(一一、五八)

△入梅期の立科山、横岳へ

手塚晴雄、金田一郎　(本文參照)

六、一

飯田町(一一、三〇)

六、二

上諏訪(七、五〇)—角間新田(八、五〇)—科ノ木平(一〇、〇〇)—△一六九九の西窪地(一一、〇〇)—此の所小川が流れて居る。—八島池(一二、三〇)—車山の北の山嶺(二、三〇)—大門峠下(四、〇〇)露營

六、三

大門峠下幕營地(七、三〇)—南平(九、〇〇)—立科の背梁にかゝる(ノダノ尾根)(九、五〇)—中段(一一、〇〇)—立科山頂(一二、一五)—頂上を下る(二、〇〇)—ノダノ尾根(三、四〇)—新湯(五、三〇)露營

六、四

猪岩ノ頭(七、三〇)—笹尾根(八、三〇)—ツボニハ(九、三〇一)

横岳（一一、一五）—ツボニワ（一、〇〇）—新湯露營地（三、〇〇）—井戸澤（六、〇五）—蛾岳（八、五〇—九、五〇）—丹澤山（一一、十五—一一、四五）—塔岳（二、〇五）—澁澤（四、三五）—青野原（二、五〇）—焼山（五、一〇）—井戸澤（六、〇五）—蛾岳（八、五〇—九、五〇）—丹澤山（一一、十五—一一、四五）—塔岳（二、〇五）—澁澤（四、三五）—青野原居住屋（六、〇〇）

いよ〳〵梅雨の正體を現はして來た。遂に下山の途につく。

露營地發（一〇、〇〇）

久保田禮治他一名

△丹澤縱走記

六、一一　曇

新宿（一二、二二）—與瀬（二、三〇）—青野原居住屋（六、〇〇）

六、一二　曇

青野原（二、五〇）—焼山（五、一〇）—井戸澤（六、〇五）—蛾岳（八、五〇—九、五〇）—丹澤山（一一、十五—一一、四五）—塔岳（二、〇五）—澁澤（四、三五）

（丹澤山塊は此の時節は春の植物が滿開になつて實に美しい、殊に蛭と塔の間は五葉躑躅と東國三葉躑躅が花のトンネルを作り樹下にはシロバナエンレイサウ、ノビネケドリ、マイズルサウ、カモメラン等亞高山植物が咲いてゐる。尊佛石は地震で落ちたらしい見當らず塔の下りは左に良い路あるもゆかざる事。）

△大菩薩嶺へ

六、二四

新宿發（一一、五二）

園山德三郎、芋川稔一

六、二五

鹽山驛（四、二〇—四、二五）—番屋（六、一〇—七、四五）—柳澤峠（八、三七—九、〇〇）—天庭峠（一一、〇〇—一一、四五）—寺尾峠（〇、一〇）—丸川峠（〇、三五）—一のタル（一、四一）—大菩薩嶺（一、五二—二、三〇）—大菩薩峠（三、一四）—上日川峠（四、二〇）—砥山峠（四、二八）—中日川峠（五、〇〇—五、一五）—奥牛山峠（六、五五）—嶝峨鹽鑛泉（七、一五）

六、二六

嶝峨鹽鑛泉發（八、一〇）—大藏澤落合（九、四五—一〇、三〇）—初鹿野驛—猿橋驛下車—岩殿山—猿橋驛（五、五二）—新宿（八、二四）（解散）

二六日には小金澤山に登り、佐野峠へ出るつもりであつたが一日の行程としては無理なので中止し、直接初鹿野に出で、途中岩殿山に登つてみた。仲々面白い山である。大月と猿橋とを左右に見ながら一直線に登つて行く。頂上は一面の芝原で目をさへぎるものは何もない。此處からあたりを眺めると一寸面白い。

△尾瀨から銀山平

六、二七

上野發（一一、〇五）

村尾金二

六、三　曇小雨

沼田（七、〇六）—自動車—須賀川（九、五〇）—鳩待峠（六、〇〇）—山鼻小屋（七、二〇）

六、四　雨

小屋（七、四五）—燧岳（二、三〇）—長藏小屋（五、一〇）

六、五　雨

小屋(八、一〇)—七入(一〇、一五)—檜枝岐(一二、〇〇)泊

七、六

檜枝岐(六、四〇)—大津岐峠(九、〇五)—トヨ橋(一、二〇)—村杉、佐藤方(七、一〇)

七、七

村杉(七、〇〇)—大湯(一二、三〇)—小出町(四、一〇)—長岡(六、一二)

△赤石山系北部縦走

高瀬進三、芋川稔一、案内者　堀田英美

七、一〇

飯田町發(一〇、〇〇)

七、一一

辰野—伊那大島—部奈久原事務所(九、五〇—一一、一五)—落合(三、三五)—大河原市場(四、一五)

七、一二

一日後から東京を立つた高瀬を待合すため一日大河原に滞在する。

七、一三

大河原發(六、三〇)—上藏(六、五五)—ひなた休み(七、四〇—七、五五)—小赤石岳(九、一〇—一一、一五)—赤石岳(八、二五—八、三五)—シヨ澤(八、五五)—米山(八、一〇)—釜澤(一〇、〇八)—小日影銅山、三)大聖寺平(一二、〇〇—一、〇〇)—舟窪(一、三〇)—廣河原(三、〇五—三、一五)—高山瀧(三、四〇)—板屋澤(四、二五)—三伏峠分岐點(一〇、二〇)—三伏峠頂上(四、二五)—三伏小舍(四、三五)

七、一四

小舍發(九、三五)—鹽見澤、中俣本流合流点(一〇、三八)—小舍着　(六、三〇)

七、一五

小舍發(六、三〇)—三伏峠宮士見岳分岐点(六、三八)—富士見岳(七、三〇—七、四五)—小河内岳(八、四五—九、三〇)—大河内岳(一〇、二〇—〇、四五)—板屋岳(三、三〇—三、三五)—高山裏小舍跡(四、二〇)

七、一六

小舍跡發(七、二〇)—荒川岳ガレ下(八、二五)—ガレ上の鞍部(一〇、一〇—一一、一〇)—荒川岳(一一、一八)—惡澤岳(〇、二五—〇、四〇)—荒川岳(一、四五)—ガレ上の鞍部　(一、五五—二、二〇)—大聖寺平石室着(三、五五)

七、一七

石室發(七、西五)—拜み所(八、四〇—八、五〇)—剣ケ峰(八、五五)—小赤石岳(九、一〇—九、二五)—赤石岳　(九、四五—一〇、〇五)小赤石岳(一一、一二—一一、二〇)—剣ケ峰(一一、三三)大聖寺平(一二、〇〇—一、〇〇)—舟窪(一、三〇)—廣河原(三、〇五—三、一五)—高山瀧(三、四〇)—板屋澤(四、二五)—小瀧湯(五、〇五)

七、一八

小瀧湯發　(一〇、二五)—三正坊大權現　(一一、二〇—一一、三

〇)—ひなた休み(〇、一〇)—大河原市場丸川旅館着(〇、五〇)七、一九

大河原發(一〇、五〇)—部奈—伊奈大島—辰野—上諏訪(解散)

一行　高木英二

△後立山縦走

七、一二

大町(一〇、三〇)—大澤小屋(五、〇)

七、一三

雨、滞在

七、一四

大澤小屋(七、〇〇)—マナクボと針ノ木の雪渓の分岐點(七、四〇)—針ノ木の鞍部(一〇、〇〇)—小スバリの鞍部(二、〇〇)—赤澤岳(一、〇〇)—鳴澤岳(二、〇〇)—新乗越(三、〇〇)—岩小屋澤岳(四、五〇)—岩小屋澤岳鞍部幕營(五、〇〇)

七、一五

幕營地(八、三〇)—棒小屋跡(二、〇〇)—冷池幕營地(一二、〇〇)

七、一六

幕營地(七、〇〇)—鹿島鎗(九、〇〇)—八峰キレット南方(一〇、三〇)—八峰キレットの澤の最低地點(二、〇〇)—八峰幕營地(四、〇〇)—五龍岳幕營地(五、〇〇)

七、一七

幕營地(七、三〇)—五龍岳(九、三〇)—大黒鑛山に至る奮道の岐路(一〇、〇〇)—大黒岳(一、三〇)—八方日電小屋(一、四〇)八—方小屋(九、〇〇)—四ツ谷(二、〇〇)

△針ノ木峠薬師岳槍方面

中島嘉一郎、横倉吟三郎、八木洋太郎、水谷俊雄、品川彌吉

七、一一

飯田町發(一〇、〇〇)

七、一二

大町(八、三〇—一〇、〇五)—大出西正院(一一、〇〇)—籠川流域(一二、一〇—一二、五〇)—大澤小屋(五、〇〇)

七、一三

小屋(八、四〇)—針木峠(一〇、一〇—一〇、二〇)—紫町場(一一、五〇)—日電小屋(四、〇〇)

七、一四

日電小屋—(七、四五)—刈安峠(八、五五—九、五五)—五色ヶ原(一、三〇)—五色小屋(二、三〇)

七、一五

五色ヶ原小舍(五、三〇)—鳶岳(七、〇〇)—越中澤岳(八、三〇—九、三〇)—數河乗越小屋(一、二〇)

七、一六

小屋(七、五〇)—薬師岳(一一、一〇)—上ヶ岳小屋(四、三〇)

七、一七

小屋(六、五〇)—上ノ岳(七、一五)—黒部五郎岳(九、三〇)—黒部乗越小屋(一一、三〇)—三ツ俣蓮華頂上(二、一〇)—双六池小屋(四、〇〇)

七、一八

双六池小屋泊り

七、一九

双六池小屋泊り

七、二〇

小屋(七、一〇)—硫黄澤乗越(八、〇〇)—鎗ケ岳肩(一〇、四五)—頂上(一一、〇〇)—大槍小屋(一二、三〇)

七、二一

大槍小屋(七、三五)—槍澤小屋(八、四〇)—一ノ俣小屋(九、五〇)—明神池前(一二、四〇)—上高地清水屋(二、三〇)

七、二二

清水屋(八、一五)—徳本峠(一〇、四〇)—鍋止小屋(一二、三五)—冷澤(一、三五)—長命水(二、四五)—島々驛(四三、〇)

△白馬黒部方面

リーダー、松木謙三、金田一郎、平井貞一、黒田長一、石川清、坂田喜好、高橋啓次郎、太田幸治郎、勝田一郎、増山清太郎

七、一四　晴後曇

四谷發(六、三〇)—二股着(七、三〇)—猿倉(九、二〇)—白馬尻小屋中食(一〇、二五—一一、一五)—離山小屋(二、四〇)—頂上小屋(三、〇〇)

八方小屋は未だ開いて居らないと云ふので直ぐ白馬岳へ向つたが離山小屋は鐵筋の温かさうなのが出來てゐるが未だ開いては居らなつた。此の附近の雪田で夏スキーをやつてゐる二人の學生が居た。が反對の越中側の朝日岳の脇でやつた方が眞さうだつた。今年は大分雪も多い樣だから面白からう。

七、一五　雨風後晴

頂上小屋發(一二、四〇)—小蓮華岳(二、〇〇)—大池着(二、五〇)—大池發(三、一〇)—頂上小屋着(四、五〇)

雨の中を金田君は雪渓を下つて行く。大池は未だ大分雪があ る。途中高山植物もそろ〳〵咲き初めてゐる。朝の嵐は何處へやら、靜かな夕空には槍から劔に渉る連山がくつきりと眺められた。

七、一六　晴

頂上小屋發(四、三五)—清水平(六、〇〇)—不歸小屋(七、三五)—祖母ケ谷落合中食(一一、一〇—一二、一五)—祖母谷温泉(一二、四〇—一〇〇)—新鐘釣温泉(四、〇〇)—猫又終點着(四、四五)—同地發(五、三〇)—宇奈月温泉(六、三〇—七、一〇)—三日市着(八、〇〇)

天候は上々思ふ存分山を味ふことが出來た。清水平の少し東には駒草がそろ〳〵咲き初めてゐる。此處の駒草だけは永久に殘したかつた。清水平から百貫山の手前の鞍部まで尾根を傳ひ、此處から下り始めるのであるが、途中澤を少し下る所

は草の倒れぬ時は一時解り難い様である。急な長い下りには驚いた。これを登るとなるとなか〳〵骨が折れるであらう。如何しても不歸小屋に一泊せねば白馬までは六ヶ敷しからう。祖母谷温泉で姉の危篤の電報を受取つて一人忙ぎ先きに下り始めた。猿飛あたりまで水電の水夫が澤山入つてゐるに驚いた。數年前に比べると隨分賑やかになつてゐる。

▲烏帽子、槍・上高地へ

リーダー　近藤恒雄　高橋要二　加賀行三　金田一郎　河相薫　大嶽遼

七、一五　飯田町發

七、一六　大町着(九、〇〇)—大町發（十一時）電車にて、葛湯着(午後十二時半)

七、一七　葛湯(五、三〇)—濁澤小屋(七、三〇)—ブナ立三角点(一二、四〇—一、三〇)—烏帽子小屋(二、三〇)—烏帽子往復(四、二〇)

七、一八　雨天滯在

七、一九　烏帽子小屋(八、〇〇)—濁(一〇、二〇)—葛(一二、〇〇—一二、三〇)—大町着(二、〇〇—三、五〇)—烏々着(五、一五)

七、二〇　島々發(八、四〇)—徳本峠頂上（二、一五—三、一〇)—上高地着(五、〇〇)—徳本峠（一一、〇〇—一二、〇〇)—島々着(四、〇〇)—松本着(五、三〇)

七、二一　上高地發（八、〇〇—一〇、〇〇)—松本着(五、三〇)

七、二二　今回の縦走は天氣都合悪く完全に果せなかつた事は殘念、烏帽子下山の日は難澁な道の爲大分無理をする。

△八ケ嶽へ

園山德三郎　芋川稔一

七、二〇

上諏訪發(八、三三)—茅野驛（八、四八—九、一〇)—柳澤（一一、一〇)—穴山郵便局(一〇、三五—一〇、五〇)—柳澤のはづれにて晝食のため一時間休憩す。—赤岳温泉、御小屋御料林分岐點(二、三七)—カドコバ（三、〇〇—三、二〇)—赤岳温泉、御小屋事務所(三、五三)—赤岳温泉(五、一二)

七、二一

赤岳温泉(六、四五)—中山の尾根(七、二三)—奥の小舍(七、二八—七、三五)—中岳阿彌陀岳鞍部(八、四五—九、〇八)—阿彌陀岳(九、二三—九、三六)—鞍部(九、四九)—中岳(、九、五九—一〇、四〇)—赤岳(一一、二二—一一、四〇)—赤岳石室(一一、四六)—横岳(〇、五〇)—大ダルミ(一、一五)—硫黄岳（一、三四—一、三七)—夏澤峠(二、〇六)—本澤温泉(二、三五)

七、二二

本澤温泉（一〇、三五)—途中、一六〇〇米の等高線の附近で二時間許り晝寢をする。)—稻子（三、〇〇)—松原湖(三、一五—四、一三)—坂下(四、三五—四、四一)—乘合自働車—小海着四、五二)—小諸

七、二三　小諸—池袋(解散)

△大峰山脈縦走　中森長太郎外二名

八、三　晴夕立あり　上野(六　〇六)—名張(七、〇〇)—榛原(一、三〇)—初瀬(二、五〇)—櫻井(三、二〇)—多武峰(六、〇〇)　約八里

八、四　晴後雨　多武峰(七、〇〇)—龍在峰(八、三五)—上市(一一、〇〇)—吉野町(一二、三〇—一、三五)—奥ノ千本(二、四〇—三、二〇)—五十丁(五、二〇)—百丁茶屋(六、三〇)六里半

八、五　雨　百丁(六、四〇)—百四十丁(七、四〇)—洞辻(八、四〇)—龍泉寺(一一、〇〇)—龍泉寺(一〇、一〇)—山上岳三角點(一一、〇〇)—龍泉寺(一二、寶塚觀劇、八、一三、甲子園野球見物、歸宅)

八、六　雨　〇—一一、三五)—小篠ノ茶屋(一二、二〇)　三里半

△五湖キヤンピング　吉澤一郎外一名

八、五　曇　早朝瀧を見て勝浦へ。勝浦(八、三〇)—大阪(八、〇〇)

江尻(九、四〇)—富士(一〇、二三)—自動車—大宮(一〇、五〇—一一、一五)—自動車—上井出(一一、五〇—一二、四五)—人穴(一、四五)—根原(四、一五)—本栖湖畔(六、三〇)

八、六　雨　小篠(八、〇〇)—大普賢岳(九、二〇)—行者還岩(〇、一〇—〇三〇)—彌山ノ一五〇米下(三、〇〇)—參籠所(三、三〇)　六里

八、七　雨　彌山(七、四〇)—佛經岳(八、〇〇)—舟のたわ(一〇、〇〇)—峰中亡靈一切廻向塔(一〇、三〇)—行者ノカネマキ岩(一二、四五)—緣ノ鼻(一、〇六)—杖捨坂(一、五〇)—釋迦岳(二、一〇—二、五〇)—深仙(三、四〇)—大日岳の南の岐路(四、一〇—セイタカ、コンガラ岩(四、三〇)—前鬼山小仲坊(五、四五)

八、八　晴　前鬼(八、三〇)—不動瀧(一〇、一五—三〇)—材木を運ぶ軌道(一一、〇五—一二、〇〇)—前鬼口(一二、一〇)—寺垣内(四、一五)

八、九　晴　寺垣内(六、五〇)—不動峠(七、四〇)—大沼(一〇、一一)—下尾井(一二、〇〇)—東野(三、〇〇)—瀞(三、〇〇)　七里

八、一〇　晴　プロペラ船瀞發(七、三〇)—新宮(一〇、〇〇—一一、一〇)—那智(一、二〇)

八、一一　早朝瀧を見て勝浦へ。勝浦(八、三〇)—大阪(八、〇〇)

八、六　晴―雨
本栖(八、五〇)―郡内トノ分岐點(九、三〇)―精進(一一、三〇)―渡し―茶屋自動車(一二、一五)―富士崎展望臺發(一二、四五)―根場モーター(一、〇〇)―長濱(二、一五)―船津(三、一〇)
精進から河口湖までさても便利になつた。さても三年前の比ではない。船津附近では何處でもキヤンプ出來る。淺川にもいゝ所がある。
八、七　晴
滯在
八、八　晴
テント(七、五〇)―淺川(八、〇〇)―河口(八、五五―九、〇〇)
疱橋(九、二三)―右清八峠左御坂峠(九、三〇)―峠(一一、二三)―晝飯―黑岳(二、一〇―三、〇〇)―峠(三、二〇―三、四〇)―龍頭瀧(一一、五五―〇、〇九)―小田代原(一、〇〇―一、五〇)―泉門池畔野營地(二、三〇)
八、九　晴
テント(一〇、〇〇)―自動車―吉田發(一二、〇〇)―自動車―須走(一、〇〇)―御殿場(一、一五―二、三九)―沼津(三、一五)
吉田から御殿場までの自動車一圓九十錢は安いと思ふ。籠坂峠より愛鷹山は良かつた。山中湖は車上よりで失敬する。
近藤恒雄
▲十勝岳登山
八、六
上野驛發
上富良野驛(八、三〇)―三浦茶屋(二、三〇―二、〇〇)―前十勝岳頂上(四、一〇)―温泉(六、四五)―三浦茶屋(七、五〇)―上富良野驛(九、四〇)
八、九
温泉(六、四五)―三浦茶屋(七、五〇)―上富良野驛(九、四〇)
△日光白根山へ
芋川稔一、圓山德三郎、外一名　(予二、丸茂一雄)
八、一三
上野驛發(後、一一、四五)
八、一四
日光驛(四、三二―五、〇七)―馬返し(六、〇〇―六、〇五)―大平(七、四五―)華嚴瀧白雲瀧とを見に行つた。―九、二五)―古薙(一〇、二五―一〇、四〇)―菖蒲ヶ濱(一〇、五七―一一、五〇)―龍頭瀧(一一、五五―〇、〇九)―小田代原(一、〇〇―一、五〇)―泉門池畔野營地(二、三〇)
小田代原は實に氣持のよい原である。此處へテントを張らふと思つて水を探したが、一滴の水も得られず、止むなく泉門池まで行つてキヤンプをした。
八、一五
野營地發(一一、三〇)―中禪寺湖西の分岐點(〇、五八)―西の湖(一、一三―二、三〇)―泉門池畔野營地(三、〇〇)―湯元板屋(三、一六)
野營地發(二、二〇)―湯瀧(二、四〇―三、〇〇)―湯元板屋(三

八、一七

湯元發(六、二〇)—鳥居(六、四〇)—澤と分れる地點(七、〇五此處で水を用意する必要がある)—前白根(八、二五)—奥白根(九、三五—一〇、一五)—前白根(一一、〇〇—一一、一五)—湯元板屋着(〇、五〇)

八、一八

湯元發(九、〇〇)—光徳沼(一〇、一五—一一、五〇)—梵字ノ小屋(〇、三五)

光徳沼から梵字ノ小屋までは道をとつた。車が通るため幅の廣い立派な道がついてゐる。梵字ノ瀧を見に行つたが水がなかつた。併し屏風岩の壯觀には、少なからず驚かされてしまつた。

八、一九

梵字ノ小屋發(七、二〇)—梵字ノ瀧、太郎山分岐點(七、二五—小屋から水のある所まで遠いので行きがけに洗物をする—七、五〇)—志津小屋太郎山分岐點(八、二五—八、五五)—太郎山登山口(九、一〇)—太郎山(一〇、五五—一一、四五)—志津小屋太郎山分岐點(〇、五〇—一一、一〇)—志津小屋(二、三〇)

八、二〇

志津小屋發(〇、四〇)—うらみ停留場(二、四〇)—日光驛發(解散)

(三、四〇)—池袋(七、三〇)

志津小屋から男體山に登り、矢の日、大眞名子、小眞名子、女峰、赤薙の順に登り途中一日野營して、霧降の方面から日光へ出る計畫であつたが、東京へ歸りたくなつてしまつたので、又此の次の山旅にゆづつて歸京してしまつた。

△愛鷹山　吉澤一郎　外四名

八、一七

沼津(八、四〇)—原(八、五一)—三合橋(九、一三)—根小屋(九二〇)—一本杉水場(二、四五—三、五〇)—頂上小屋(四、〇〇)

八、一八

小屋(六、〇〇)—一本杉水場(六、〇五—八、〇〇)—青野(一一、〇〇)—原(一一、三〇—一二、三九)—沼津(一二、五〇)

▲阿寒岳登山　近藤恒雄

八、二一

釧路驛(六、三八)—舌辛驛(八、〇三)—土橋(九、三〇)—中徹別(二、〇〇—一二、〇〇)—上徹別小學校(三、三〇)

八、二二

上徹別小學校(八、〇〇)—留邊蘂(九、〇〇)—ピリカネップ(一〇、〇〇—一〇、三〇)—白水川第二分流點(一一、四〇—一二、三〇)—番小屋(五、一〇—五、三〇)—頂上石室(六、五五)

八、二三

石室(九、〇〇)—雌阿寒岳頂上(一〇、〇〇)—石室(一二、三〇)—野天風呂(一、三〇—二、〇〇)—番小屋(三、一〇)—阿寒湖畔井上旅館(五、〇〇)

八、二四　休養

八、二五
旅館(七、〇〇)—屈斜路湖分岐點(九、〇〇)—雄阿寒頂上(一一、五〇)—一、一〇)—山麓番小舍(二、四〇)—屈斜路道分岐點(二、五五)—阿寒湖畔瀧ノ口(三、二〇)—チウルイ島附近)四〇—五、〇〇)—湖畔旅館(六、三〇)

八、二六
旅館(八、〇〇)—尻駒別川口(九、三〇—一〇、三〇)—湖畔旅館(一、〇〇)

八、二七
旅館(七、〇〇)—ピリカネップ(九、三〇)—留邊蘂(一〇、三〇)—鮑別橋(一一、三〇)—富士發電所(一二、〇〇)—上徹別(一二、三〇)—舌辛驛(二、〇〇—四、五一)—釧路驛(六、一一)

△清津川行　松木謙三　五十嵐數馬

九、一五　晴
長岡驛發(十一時二十三分)—湯澤温泉着(二、三〇)—芝原峠—三俣村着(四、四五)

九、一六　晴後霧雨
三俣發(七、四〇)—清津川釣橋(八、三〇—九、〇〇)—小出温泉(二、三〇—三、〇〇)—葎澤—十二峠頂上(五、二〇)—石打驛着(六、二五)—長岡着—(九、三〇)

清津川は約三里位の間であるが、なか〳〵捨て難い溪の美しい處である。黒部川を少さくしたものと思へば大差はながらう。只近年三俣村の上手で大くの水量を隧道で湯澤の上に落す發電所が出來たため幾分水量の不足を感ぜられるのは遺感である。最も溪の立派なのは釣橋から少出温泉までであるが苗場山にでも登つたら必ず寄るべき處であるさ思ふ。特に紅葉の時季には絶好であらう。

△燕より乘鞍へ　村尾金二

九、一七
有明驛(九、五三)—自動車—有明温泉(一〇、五〇)—中房温泉(三、二五)—燕小屋(六、五〇)

九、一八　雨
在

九、一九
小屋(七、五〇)—西岳小屋(一二、二五)—天上澤乘越(一、二五)—一ノ俣小屋(二一、〇〇)

九、二〇
小屋(八、二五)—上高地(一二、四—一、五〇)—中湯(四、一五)

九、二一
湯(七、一五)—白骨(一一、二〇)—營林署小屋(四、一〇)

九、二二
小屋(七、三〇)—乘鞍頂上(九、一五)—小屋(一〇、四〇)—奈川渡(四、二〇)—島々(五、〇〇)

△八ケ嶽　中島嘉一郎　金田一郎

九、二一
新宿(一一、五二)

九、二二　曇

小淵澤(七、〇〇)—一、一四六米三角點（八、〇〇)—編笠と鞍部とへ登る別れの水場(一一、〇〇—一二、四〇—一、〇〇)—編笠と櫛現との鞍部の小屋（一二、〇〇）泊

九、二三　雨

小屋發(七、一〇)—櫛現頂上(八、一〇)—キレット小屋(九、一〇—九、三〇)—赤岳頂上(一一、三〇)—赤岳小屋（一二、〇〇）泊

九、二四　晴

小屋發(八、五〇)—横岳頂上(九、三〇)—硫黄岳頂上(一〇、一〇—一〇、三〇)—本澤温泉（一一、三〇—一、一〇)—稻子牧場(二、四〇—三、〇〇)—松原湖(四、〇〇—四、一五)—小海驛發（六、三五)—小諸(七、五〇)—小諸發(一一、四八)—上野着(五、〇五)

△岩菅と白根

九、二二　晴

萬座より白根往復

九、二四

萬座より白根、芳ヶ平、澁峠、熊野湯、發哺に至る。

△岩菅山往復

九、一四　尾瀬行

上野(三、一〇)—沼田(九、〇〇)泊

九、一五

沼田發自動車（七、〇七)—追貝乘換—須賀川—戸倉—三平峠—尾瀬沼長藏小屋(五、三〇)

九、一六　燧往復

九、一七

△編笠と櫛現との鞍部へ出る道と編笠へ直接登る道との分岐點には(約二〇〇〇米の所)水がなかつた。又櫛現との鞍部の小屋にも水が無い樣であつたが、僕等は降つたばかりの雪をとかして用ひた。小屋は皆人が居ないが此の小屋だけは米、ふさん、醬油、サイダー、菓子薪等總てが備へてあつた。夏だけ人が居るのだらう。夕方になつてやつと晴れて來て時々槍、穗高が見えた。二十四日は實に快晴で南北、アルプス、秩父日光、等皆見えた。富士は眞白になつてゐた。赤岳から本澤までは道もよく出來てゐる。

五十嵐數馬

森竹春雄

小屋—沼田
後伊香保、四萬等に遊ぶ。

▲陣馬行　　近藤恒雄　三井春雄

一〇、二三
新宿（六、五八）—淺川（八、三〇）—小佛（一〇、一〇）—景信（一一、三〇）—陣馬（二、〇〇）—與瀬（四、〇〇）—新宿

△八ヶ岳と淺間山確氷峠　　高橋要二　外二名

十月十五日（金）曇天、飯田町發（一〇、三〇）—茅野發（九、〇〇）—柳川渡（玉川村）（十二、三〇）—高組原製板小屋（二、三五）—赤岳鑛泉（四、〇〇）
十月十六日（土）雨天、茅野着（七、三〇）
十月十七日（快晴）　鑛泉發（八、〇〇）赤岳小屋（一〇、〇〇）—赤岳奥小屋（九、〇〇）赤岳小屋（一一、〇〇）—赤岳發（一二、三〇）—横岳（一、二〇）—硫黄岳（二、〇〇）—夏澤峠（二、三〇）—本澤温泉（三、〇〇）—牧場下ノ小屋（五、〇〇）—稻子（五三五）—八那池（六、三〇）—小海着（六、四五）
小海發（八、〇〇）—小諸着（一〇、三〇）—小諸松屋泊
（附、八那池小海間自動車一人分四十錢、小海小諸間佐久鐵道七十六錢）
十月十八日（月）晴、松屋發（八〇〇）—淺間館（一〇、〇〇）—淺間ホテル（一〇、一五）—氣象觀測所（一一、三〇）—湯平（一二、〇〇）—淺間頂上（一、〇〇）—頂上發（二、〇〇）—峠茶屋（三、三〇）—千ヶ瀧星ノ湯着（五、〇〇）星ノ湯泊り

△日川谷より大菩薩へ　　高橋要二　外二名

一〇、二九　飯田町發（一二、三〇）
一〇、三〇（雨天）
初鹿野驛着（午前七、一五）（但し故障の爲三時間遲延）—初鹿野出發（八、三五）—景德院（九、二五—九、四〇）—天日山麓（一一、三五）—峠茶屋（一、一〇）
一〇、三一
峠茶屋發（九、〇〇）—下日川峠（一〇、〇九）—上日川峠（一一、四〇—一二、〇〇）—砥山峠（一、二五—一、三〇）—上日川峠（一、四〇）—大菩薩頂上着（三、〇二）—砥山峠歸着（四、一五）—鹽山驛着（六、五〇）

▲如水會館にて部員懇親會

一〇、二八　出席者十二名
（先輩）奥野綱重、中川孫一、松倉榮司、
（部員）五十嵐數馬、松木謙三、村尾金二、吉澤一郎、近藤恒雄、赤城鈴太郎、高橋要二、手塚晴雄、金田一郎
年報第三號の前後策に就きても相談ありたり。

▲先輩部員懇親會（如水會欄參照）

一〇、三〇　參加者廿三名
（先輩）江口條定、力石元次郎、伊藤多兵衞、川喜多忠義、長谷川丈助、矢田潤次、鐘江榮行、青木均一、奥野綱重、室伏三男、森田市松、森田寅次郎、中川孫一
澤村秀、松倉榮司
（部員）五十嵐數馬、松木謙三、村尾金二、渡邊九郎、吉澤一郎、近藤恒雄、赤城鈴太郎、高木英二

如水會山岳會消息

△スキー練習（詳細は一橋山岳部年報にあり）

昭和二年十二月三十日ー翌一月六日

信州野澤溫泉にて

一橋山岳部揺籃時代の老猛者其他の老天狗中老天狗連、兎角スキーより口の方が先へ出る。コーチが多過ぎて困る。こゝは汽車の便が悪いので山田さんを除いては大正ッ兒許り。江口老公堀内さん達の顔が見えないのが淋しい。

△夏山行相談會

六月十三日正午、如水會館

出席者

江口定條　堀内明三郎　力石元次郎　伊藤多兵衞　山田濟太郎
淺原丈平　白石德三郎　中谷　芳邦　猪谷　善一　森田寅次郎
奥野綱重　中川　孫一　松倉　榮司

會の目的が山を機緣として如水會員の親睦をはかるのが第一義である以上總動員で出掛やうと木曾駒に決定、其他燕岳往復立山劔岳針ノ木越、烏帽子鎗穗高の三班をも作ること。

夏の山行（詳細は如水會々報第四十六號參照）

△木曾駒行

參加者

堀内明三郎（二七）（同令息）堀内博　力石元次郎（二九）　伊藤多兵衞（四〇）　岡部常太郎（四〇）　萩原駒藏（四二）
藏（四四）　長谷川丈助（5）　白石德三郎（7）　神谷肇（12）　奥野綱重（12）　森田寅次郎（13）　富谷泰一（14）　箕輪安（二）

八月十五日（晴）　飯田町ー伊那町

十六日（晴）　內ノ萱ー行者岩ー伊那小屋

十七日（晴）　濃池ー寶劔岳ー中岳ー本岳ー木曾小屋ー上松

木曾福島

十八日（朝）　歸京

○內ノ萱の人夫は所謂デモ人夫だ。四貫目を限度としこれ以上の場合には一貫目一日二十錢宛とる。荷を天秤ではかつて見てからつぐのだ。

△立山より針ノ木越

參加者

淺原丈平（四〇）　村田嘉久郎（6）　菊地　亨（9）　室伏三男（12）
岡野　昇（14）　同嚴父岡野金次郎翁　鵜飼新一郎（15）　中野勇
雄（15）　山崎久夫（15）

七月十二日夜上野發

十三日　千垣ー芦クラ寺ー藤橋

十四日　彌陀原ー宮堂

十五日　雄山ー雄中谷ー龍王ー中ノ谷ーザラ峠ー刈安峠ー平ノ小屋

十六日　針ノ木峠ー針ノ木岳ー大澤小屋

十七日　大町―木曾福島（懇親會）

○岡野翁は三十年前小島烏水氏と始めて鎗へ登られた方、布袋腹をかゝへられて氣焰萬丈、針葉樹二號山小屋欄に熊公が○氏と書けるは同氏の事である。

△夏の山行懇親會

八月十二日夜　如水會館にて

來會者

江口　定條　堀内明三郎　伊藤多兵衛　淺原丈平　萩原駒藏
川喜多忠藏　長谷川丈助　村田嘉久郎　菊池亨　白石德三郎
室伏　三男　奥野　綱重　岡野　昇　富谷泰一

△初雪の烏帽子縱走

江口定條

十月五日　國分寺發

六日　有明―中房温泉

七日　燕小屋

八日（雪）滯在

九日　槍嶽―大槍小屋

十日　濁小屋―烏帽子小屋―烏帽子岳往復

十一日（雪）滯在

十二日　三ツ岳―五郎岳―鷲羽岳―蓮華岳―蓮華小屋

十三日　双六岳―樅澤岳―槍―大槍小屋

十四日　槍澤―上高地

十五日　德木峠―島々―松本

△アイガー登攀

一昨年來外遊の浦松佐美太郎氏、八月八日松方氏と共に瑞西へルンリツチよりアイガー登攀を試みて成功した。

△初雪の八ツ岳行

參加者

堀越萬三郎（四五）　矢田　潤二（2）　長谷川丈助（5）
堀澤　尚中（5）　鐘江　榮行（5）　直井　恒雄（5）
貴島政藏（直井氏友人）　神谷肇（12）　室伏　三男（12）
奥野　綱重（12）　森田　市松（14）　田畑　孝三（14）
片岡　辰夫（14）　中田氏（片岡氏友人）　中川孫一（15）
力石氏令息

十月十五日夜十一時五分上野發

十月十六日（曇後雨）　小梅驛―松原湖―本澤温泉

休祭日の行樂者は上野驛へと黒山の如く押掛け十一時の列車は既に三十分前に滿員といふ始末、その爲に神谷、奥野、中川、力石令息は乘遲れ次の臨時列車にて行く、松原湖にて田畑氏突然發病森田氏看護の爲に殘る、松原湖を出て三時頃より雨となる。松原湖は一年增に料理屋と旅館が殖えて行く、牧場の入口に今年から牛番小屋が出來た、冬番をする本澤温泉の爺は死んで了つた。何でも今年の春村人が上つて行つたら死んでゐたんださうだ。

十七日　夏澤峠―硫黄岳―横岳―赤岳―中岳―南澤―製板小屋―中道―茅野

夜が明けると硫黄には白く雪がかゝつてゐる頂の方は大分荒れ

てゐるらしい。若人の血は躍つた。夏澤峠の上の針葉樹林が脫ける頃から雲が切れて鎗の尖頭が見え出したがそれも束の間で諏訪側より吹上ぐるガスの爲に遮られて了ふ。幸ひ雪は止んだ。吹溜りは一尺位ある。小さな雪庇が出來てゐる。横岳の足場の悪い所も難なく過ぎる。赤岳の小屋には焚木が大分殘つてゐた。時間がないので阿彌陀は斷念して鞍部より南澤へ下つた。俎原へ出てから一行バラバラになり槻木、中道、柳澤へと別れて了つた。然し一番近い中道へも今年から定期の自動車が通つてゐるから今後はこゝへ出た方がよいと思ふ。終發は七時東京行一番の夜行に間に合ふ

△八ツ岳行懇談會

十月二十九日

出席者

力石元次郎　淺原　丈平　森田寅次郎(13)　青木　均一(11)　澤村
長谷川丈助　堀澤　尙中　中川　孫一(15)　松倉　榮司(昭)
神谷　肇　奥野　綱重　一橋山岳部員
森田　市松　片岡　龍夫　吉澤　一郎　五十嵐數馬　松木　謙三　渡邊　九郎
中川　孫一　阿部　東吉　村尾　金二　近藤　恒雄　赤城鈴太郎　高木　英二

△懇話會高尾行

十月三十日　雨

江口　定條

如水會山岳會員

力石元次郎(二九)伊藤多兵衞(四〇)川喜多忠藏(四四)
矢田　潤二　長谷川丈助(5)　鐘江　榮行(5)
室伏　三男(12)　奥野　綱重(12)　森田　市松(14)

× × × × ×

（如水會山岳會記錄終り）

編輯後記

來年三月三十一日に卒業する見込みと書いた事が事實となつてしまつた。ばいよ〳〵此の山岳部とも別れなければならない。さうすれば此の針葉樹第三號の編輯は僕にとつては最後の思ひ出となるのである。悲しい事には共の思ひ出となるべき第三號が斯くも皆樣の御期待に叛いてこんな貧弱なものになつて出來あがらうとは思はなかつた。けれどそれも仕方がない。僕の樣な役にも立たない感なものが編輯のほんの一部とは云へ關係した以上どうせ結果

秀(14)

は解り過ぎてゐる。只僕として心強いのは第四號そして、第五號を編輯すべき人々に多くの信頼を置く事の出來る事である。

近來山は行き詰つてゐる、と世間では云つてゐる。僕も一時はさう思ふた。そして第四號、第五號と號を重れるに從つて載せるべき記事の減つて行く事をば心配しもした。けれども豫科の多くの熱心家を思ふ時そんな事は忽ち消えてしまふのであつた。必ず號を追ふに從つてより以上立派なものが出來るに違ひない事と思ふ。第四號は是非舊慣を打破して生れ變つた樣なものをつくりあげて戴き度い。世の中は矛盾があつてはじめて潤ひがある。人生の意義もある。登山家にとつて外部に出さるべき雜誌の如きものを編輯するといふ事は一つの矛盾の樣な氣もする。けれども仕方がないとあきらめてわが一橋山岳部の爲に働いて戴きたいと思ふ

今年も矢張先輩の方々からは澤山原稿をいたゞけなかつた非常に殘念ではあるが事情止むを得ない。も少し僕等が細かく動けば出來たであろうがこれも今さなつては後の人々に望みをかけるより外はない。然し肝心の江口定條氏が若者も及ばぬ御元氣を以て初雪の烏帽子、槍を征服された記文を下さつた事は有難い事であつた。

尙豫科の寄稿者諸君に試驗間際に原稿を無理にお賴みして實に濟まなかつた。其の爲に勉强の方に支障を來した事はよくわかつてゐる。催促の鬼は熊だと思つてまづあきらめて戴き度い。

最後に我等の親しき先生であり、指導者であり、友人である田中薰氏が留學前のお忙しい中であんなに澤山書いて下さつた事は何と云つていゝかわからない。茲に厚くお禮を申し上げます。

尙先生は來春四月歐洲に最愛の佳人御同伴で旅立たれる事になつてゐます。第四號には色々面白い御通信が出現する事と思つてゐます。佐藤弘先生も最近三年の留學を終へて歸朝なされる筈です。僕等は先生からも種々な新知識を得らるゝ事を期待してゐるのであります。甚だ詰らない、そして長い編輯後記も之で終りとしましよう。（吉澤）

昭和二年十二月廿五日納本
昭和二年十二月廿八日發行

【定價金壹圓五拾錢】
【送料八錢】

發行所　東京商科大學內　一橋山岳部
編輯兼發行者　東京市芝區櫻田本鄉町九番地　吉澤一郎
印刷者　東京市神田區三河町一丁目七番地　村守雄
印刷所　東京市神田區三河町一丁目七番地　東京旭印刷株式會社
發賣所　東京商科大學內　一橋會共益部

登山靴

弊店獨特ノ製品

スキー靴



優美堅牢
完全ナル防水

スキス製 {トリコニー / クリンケル}

東京市牛込區肴町六十番地（電車通）

津布久

（振替東京四一八八四番）

日本最高の温泉

(海抜六千呎)

眞に登山的氣分溢るゝ唯一の胃腦靈泉

群馬縣吾妻郡

萬座溫泉

開祖旅館　湯元日進館

館主　黒光河七……

弊館には万座の特色たるニガ湯ウバ湯は勿論効能無比の獨有内湯、ムシ風呂、砂風呂、鐵湯ラジウム泉も有す

親切、丁寧、滞在費低廉特に學生諸兄を歓迎す

特効

胃腸病、腦病、せんそく、蓄膿、神經痛其他萬病に効あり

交通

西口―信越線長野或は屋代驛より電車にて須坂町を經て

東口―信越線輕井澤より草津電車にて石津平驛下車、之より新道出來て途中二里まで自動車の便あり

針樹葉　第二號

御希望のお方にはお頒ち致します。

定價一圓三十錢

送料八錢

主要内容

寫眞八枚

●只見川を中心として

●東北朝日岳、野川遡行

●天神峠より三國峠まで

●北鎌尾根と前穗高北尾根

●晩春の劍岳

●秩父雜記

外に山小屋欄、年報、地圖、スケツチ約貳百頁　菊版

申込所　東京市神田區一橋

東京商科大學内

一橋山岳部

(御送金の場合は書留にて)

最新刊

携帶圖解用スキー

工學士 黒田正夫先生著

△三六判袋入
△カード十四貝　圖解十八個　解設書一冊附　金約五十錢

（送料四錢）

◉便利で重寶なる本邦唯一のスキーカード顯る!!!

ウインタースポーツの典型スキーヤーの福音

ヴイウイアン●コールフイル氏のスキー廻轉やその他全世界スキー權威者の名著を一部のインテリゲンチヤの獨占に委ねることは罪惡であるを慨する著者はそれ等の著者に更に進歩した凡ゆる方法を錬り加へて、之れをその實演の際ポケツト携帶出來るやう簡單なるカードとして便ならしめ更に又之れが明解なる解説をなせる別冊を附してある。本邦での最新唯一の寶典であるばかりでなく、スキーを愛好するあらゆる方々に貢献する事を信ずるものである。運動家の此の冬を！此の書で有意義ならしめて貰いたいものである。

理學士 五代正友先生著

スケーティング

四六判 △△定價一圓三十錢
全一册 △△送料 十 錢

笹川速雄先生著

スキーイング

四六判 △△定價金二圓也
洋布製 △△送料 二 錢

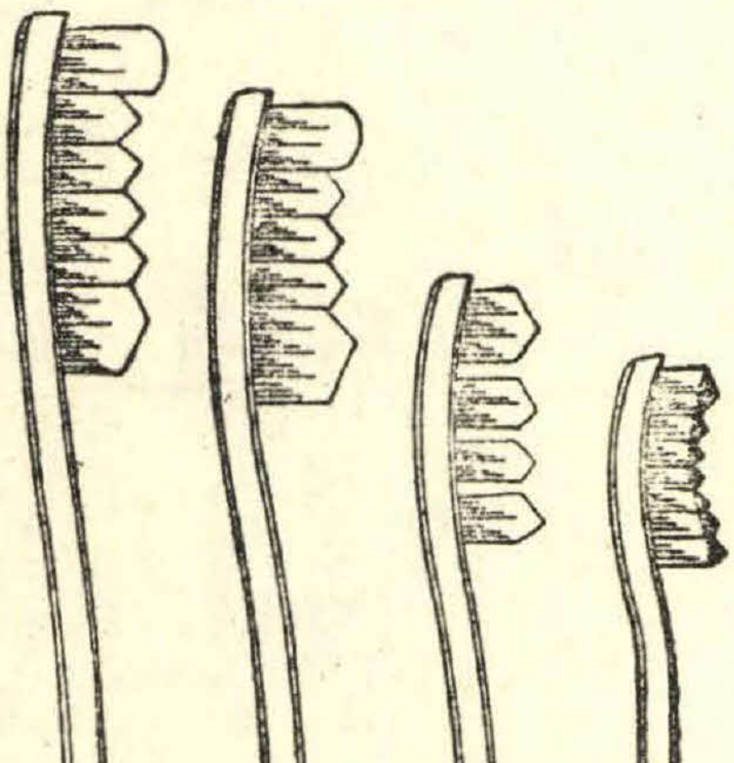
東京市京橋區南傳馬町二丁目 黒目書店發行

振替口座 東京第八二〇九番

資生堂ベルタ歯ブラシ

最新の歯刷子たれさ撰精に的學科

昭和三年一月新發賣



幼兒用（二〇錢）

學童用（二五錢）

婦人用（三五錢）

男子用（四五錢）

名地チエインストア及
セールスメンバーにあり

東京銀座

大阪高麗橋

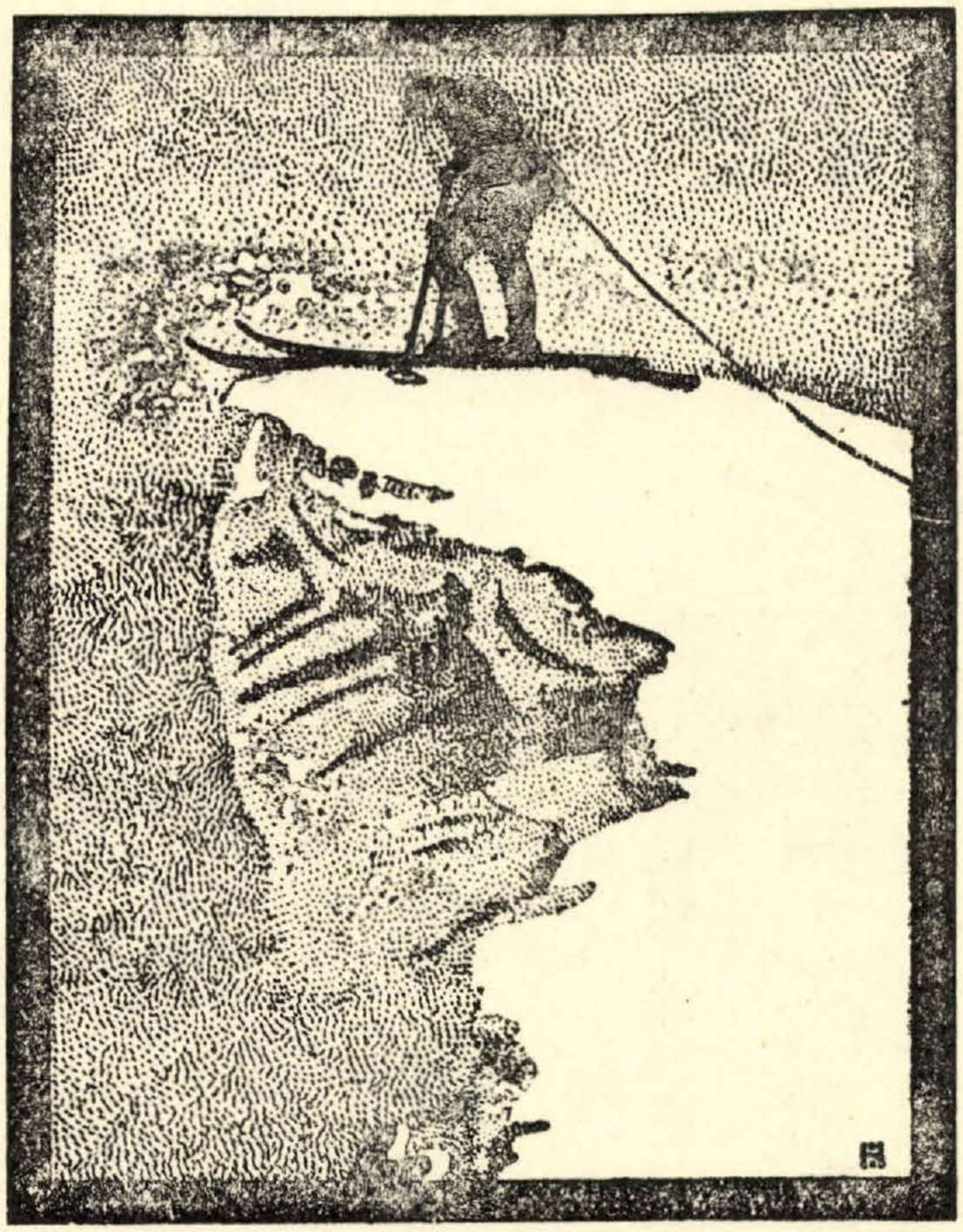
資生堂

美満津特製

スキー及び山の道具！

「へ夏より春」「へ冬より秋」型錄

進呈



合名會社

美満津商店

東京●本郷赤門前

電話(小石川)八四五、二〇七一

夏は避暑
冬はスキー

一度來た人は其の味を
忘れる事が出來ません

上州
谷川温泉
谷川館

上穂常燕烏薬
高帽
地高念子師
方面への中心

大槍ノ小屋

親切叮嚀は既に登山家の間に定評あり

小屋經營者
松本市六區町
穂刈三壽雄

すま合を劑腐防に對絶

特製月桂冠

大倉恒吉吟醸



壜詰

發賣 明治屋株式會社

G52

夏は絶好の避暑地
冬は痛快なスキー場

設備完全
湯量豊富

上野驛夜行に乘車信越線豐野驛
乘換飯山線上境驛下車徒歩一里



内湯

酒屋旅館

信州野澤温泉
（電話十八番）

未だ俗化せぬ山々は？

銀山平——尾瀬沼
駒ケ岳——八海山
大鳥岳
未丈ケ岳——朝日岳

之等への根據地として

最も便利な所は！

新潟縣北魚沼郡湯之谷村
大湯温泉

東榮館

宿料（壹圓六拾錢）
辨當（貳　拾　錢）
案内料（日當參圓）

寫眞

密着熱は單にスケッチに過ぎません引伸してこそ寫眞の面白味が出るものです
引伸は特に當店の得意とする所一度御試しを。親切叮嚀迅速に致します

——現象・燒付・復寫・引伸——

親切●丁寧●迅速に致します

神田　宏盛館

神田區通神保町二
電神　一三九六

最適の行楽と親睦

赤城山上州

春は若葉
夏はキャンプ　大小二個のシャンツエあり

大ー五十米突可能
小ー廿五米突可能

秋は紅葉
冬はスキー
スケート　雪は理想的プルファーなり

山上大沼は油氷
三月滑走可能

スキーは多數備付あり

群馬縣勢多郡（小暮局區内）
赤城山大沼湖畔
赤城旅館　猪谷

箱根底倉八千代橋畔

蔦屋旅館

（茶代謝絶）

日歸リ一泊ノ探勝ノ仙境

電話山ノ下
(6.54. 67. 137)



多年の熱心なる研究的製作の結果

輕快な競技用スキー——

健實な登山用スキー——

安價な練習用スキー——

總て外國品に劣らぬ確實なスキー
が出來る樣になりました。
是非一度は御試し下さい。

越後長岡市學校町

小島吾作スキー店

上野驛より草津温泉驛まで九時間

爽快なる緩急斜面豐富



草津温泉

大阪屋旅館

—低廉親切—

スキーメン、登山家を歡迎す

- 奥上州の未知の山々へ
- 野反池附近へ
- 澁峠を經て澁温泉へ
- 横手山は眺望無比
- 草津白根へは一日のコース
- 花敷を經て四萬へ



Die Hütte

AM

Tsubakurodake

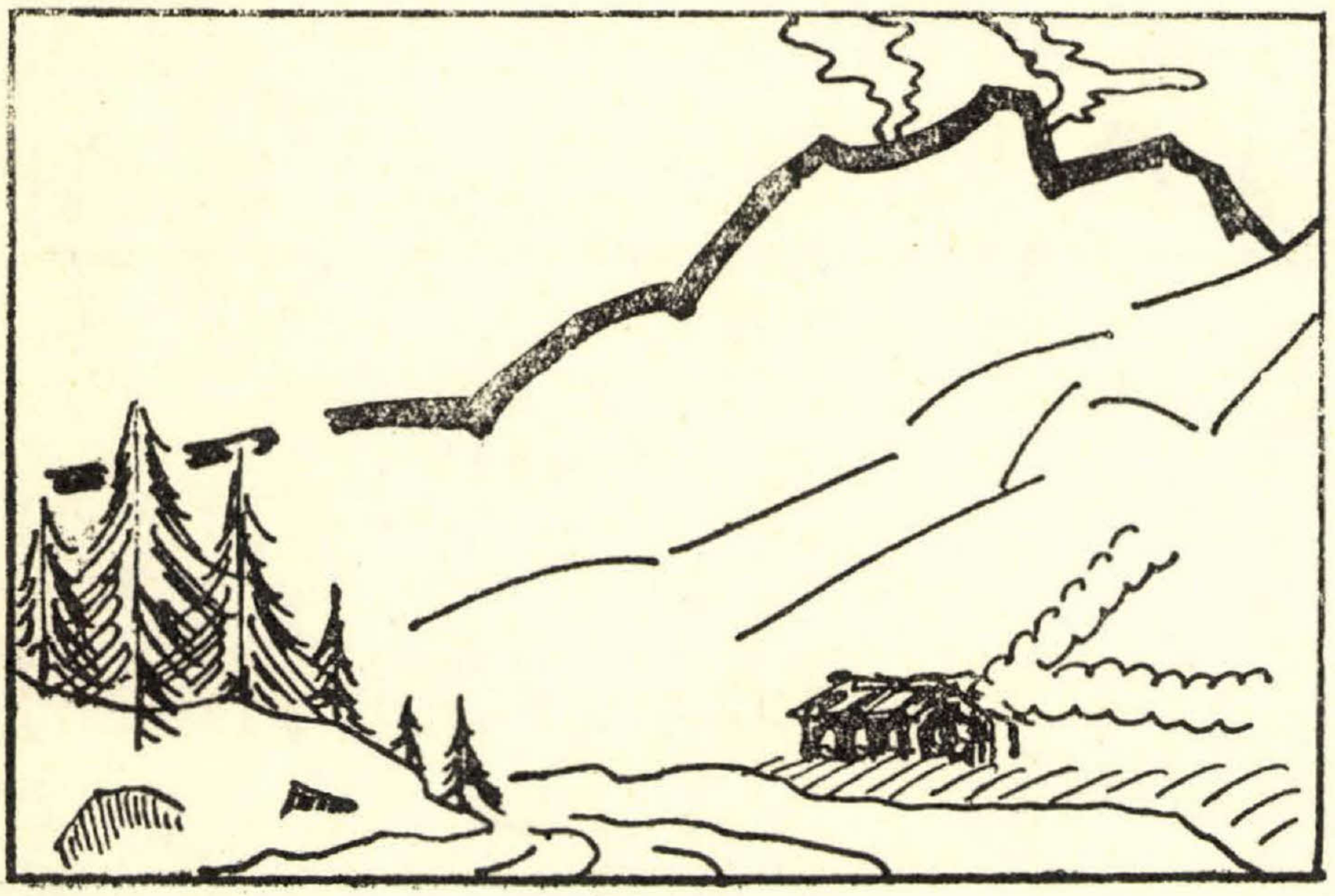
海抜二七五〇米突

燕の小屋

設備完全眺望絶佳

上高地温泉

清水屋



登山の民衆化

と

安慰低廉の温泉宿

前穂高岳一日で往復●霞澤岳燒岳は半日で往復



スキー靴と登山靴

比無　牢堅
全完　水防

東京市本郷區四丁目角

太田屋靴店

電話小石川四七一二

振替東京六一二七

バレーは登山家の必携品!!!

登山家諸彦が必携せられる安全剃刀はバレーが最適だと皆様おつしやいます。革砥をちよつと木の枝にかけて十秒も研げば立ち處に切味が出て剃るつるつる奇麗になる、それが僅か數分間で、一枚の刃が半年も使用出來るのですから經濟で輕便で登山家には持つて來いだと申されるのでムいます。（大百貨店著名洋物雜貨店等で御求め下さい）



B型　十三圓五十錢以上　C型　一圓八十錢以上

カタログ進呈

東京日本橋通

社會式株善丸

大阪　神戸　京都　名古屋

横濱　福岡　仙臺　札幌

東京—神田・三田・早稻田・丸ビル

1．本書は，東京商科大学・一橋大学一橋山岳部々報『針葉樹』第１号～第13号の復刻版（限定100部発行）である。
2．本書の第１号～第６号は近藤恒雄氏所蔵本に，第７号～第13号は一橋山岳部所蔵本にそれぞれ原本を求めた。
3．復刻版発行の経緯は第13号の巻末に附したのでこれを参照されたい。

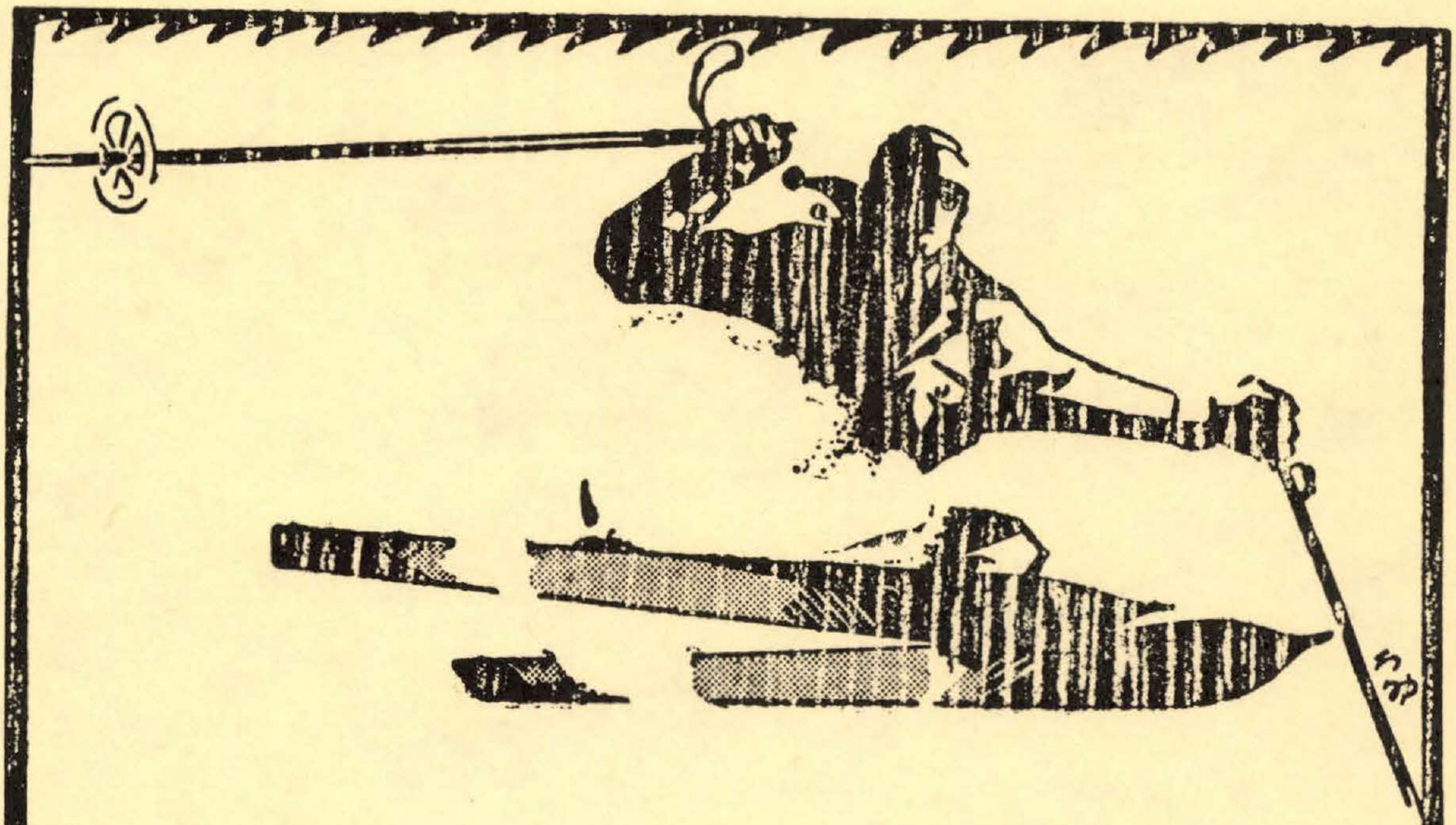
『針　葉　樹』第３号　復刻

昭和60年７月25日発行

復刻版発行者　針　葉　樹　会

編纂担当責任者　佐　藤　久　尚
世田谷区船橋５-30-10

印刷所　㈱　平　文　社
豊島区南大塚２-35-７



雪に勇む人々◆……

雪は山々に輝き、爽快なるスキーのシーズンとなりました。三越では瑞西（スヰス）芬蘭（フインランド）のスキー用具を初めスキー服裝品等、澤山に取揃へました。何卒御用命の程御願ひ申上げます

東京

三越呉服店

重なるスキー（二階東側に御座います）

◆スラッヘ型
瑞西製 二十一圓より
和製 八圓五十錢より

◆ルンデ型
瑞西製 二十五圓より
和製 十一圓五十錢より

◆ゲケールテ型
瑞西製 二十五圓より
芬蘭製 二十五圓より
和製 十七圓より

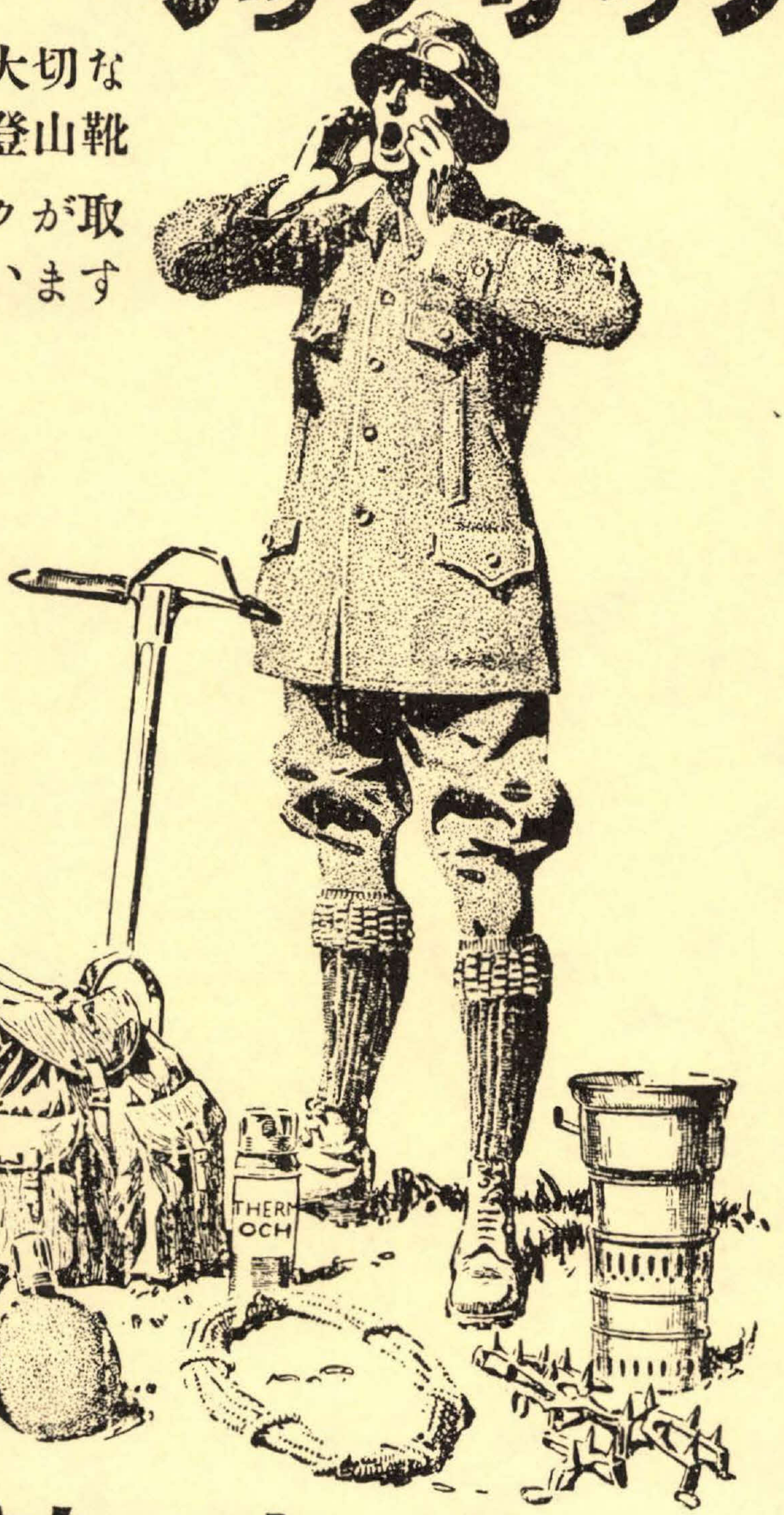
◆ジャンプ用
瑞西製 三十二圓
和製 二十三圓

◆レース用
和製 九圓五十錢より

其他ステッキ、ビンデング、トースストラップ、アイゼンパンゲン、防寒服類へて揃ひいまう

美津濃の登山靴と
リックサック

山行に最も大切な
完全無缺の登山靴
リックサックが取
揃へてございます



神田
小川町

美津濃

大阪 神戸
名古屋 京都